昭和八年八月十五日印刷
昭和八年八月二十日發行
昭和十三年一月五日再版

不許複製

國譯一切經 律部四

【改正定價壹圓廿五錢】

編輯兼發行者 岩野眞雄
東京市芝區芝公園地七號地十番

印刷者 長尾文雄
東京市芝區芝浦二丁目三番地

印刷所 日進舍
東京市芝區芝浦二丁目三番地

發行所 大東出版社
東京市芝區芝公園地七號地十番
振替東京一九四七一番
電話芝三九四四番

兩角製本所　製本所

せず、此の二十二種あり、是の平斷事人を知る』。佛說是くの如し。諸の比丘聞いて歡喜し、信樂し受持す。毘尼增一具足し竟る。

四分律 終

ふ邊罪を犯す、比丘尼を犯す、賊心受戒す、二道を破す、黄門、父を殺し、母を殺し、阿羅漢を殺し、僧を破し、惡心にて佛身より血を出す、非人、畜生、二根、是れを十三種人、未だ大戒を受けされば、受くべからず、若し受くれば、應さに滅擯すべしと爲す。爾の時佛、優波離に告げたまはく、『汝等數ば他の比丘の罪を擧すること莫れ。身不清淨なれば、則ち他の語を生ず、長老、先づ自ら身を淨うせよ』と。若し他の比丘の罪を擧し、身清淨なれば、他の語を生ぜず。是くの如く口不清淨、命不清淨、多聞せず、毘尼を誦せず、修多羅を見ず、言辯了ならざること、喩へば白羊のごとし、善比丘の身業に於て、慈なきこと亦是くの如し。復次ぎに優波離、若し比丘、他の罪を出さんと欲すれば罪ならしめず、罪あれば便ち擧す、不犯は擧せず、彼の比丘の自言を取り、與めに自言を作し、言說辯了なれば利益あり。復次ぎに優波離、他の比丘を擧するに、復五法あるべし、時を以てし、非時を以てせず』。是くの如きの五法、上に說くが如し。

優波離、若し比丘に此の十七法あり、應さに他の罪を擧すべし。二十二法あり、人に大戒を授くべからず。法を知らず、非法を知らず、乃至說不說を知らず、可懺罪を知らず、不可懺罪を知らず、懺悔を知らず、懺悔清淨を知らず、是の二十二法あり、人に大戒を授くべからず。二十二法あり、人に大戒を授くべし。』上の句に反する是なり。

爾の時佛、諸の比丘に告げたまく、『二十二種行を以て、是の平斷事人を知る。具さに二百五十戒を持ち、多聞、善く阿毘曇毘尼を解す、人と諍はず、亦此の事に堅住せず、呵すべきは呵し、然る後に住す、數ふべきは敎へ、然る後に住す、滅擯すべきは滅擯し、然る後に住す、愛せず、恚らず、怖れず、癡ならず、此の部の飲食を受けず、亦彼の部の飲食を受けず、此の部の衣鉢坐具針筒を受けず、亦彼の部の衣鉢坐具針筒を受けず、此の部に供給せず、亦彼の部に供給せず、此の部と共に村に入らず、亦彼の部と共に村に入らず、與めに期要を作さず、彼れ至つて後に來り、後に坐

ず」。復更に餘の比丘あり、人の言を信用する所の者、亦應さに是くの如きの法を語るべし。復是の言を作す、「長老、所說の文異に義同じ、此れは是れ小事のみ、共に鬪諍すること莫れ」。復更に多人の言を信用する者あり、亦應さに是くの如きの言を語るべし。復是の言を作す、「長老、所說の文同じく、義異なるも亦是くの如し」。復是くの如きの語を作す、「長老、所說の文義倶に異なり、共に鬪諍すること莫れ」。多人の言を信用する者あれば、應さに是くの如きの言を語るべし。復更に言を信用する者あれば、亦應さに是くの如きの言を語るべし。若し作すこと是くの如く和合の衆僧に諍事の起ることあれば、應さに和合して共に集まるべし、共に集する已りて、應さに是くの如き觀察を作すべし。「若し共に鬪諍すれば、沙門の法に於て留難を作すや不や」。汝謂ふ云何。餘の比丘の正理を見る者は、應さに是の言を作すべし、「鬪諍法は、沙門の法に於ては、卽ち是れ留難なり」。復問うて言はく、「若し見るあらば、是れ呵すべきや不や」。彼れ言はく、「我が意に謂へらく、沙門の法に於て、留難を作さば、卽ち是れ呵すべし」。復問うて言はく、「若し沙門法に於て、留難を作さば、是れ可呵法なり、能く善根を進めて、沙門の果を得るや不や」。正理を見る比丘ありて言はく、「我が意に謂へらく、呵すべし、善根を進むること能はず、沙門果を得ること能はず、若し是くの如き諍事の滅を作さば、應さに彼の比丘に語りて言ふべし、汝、我等が爲めに、此の諍事を滅す」と。彼の比丘應さに答へて言ふべし、「我れは他の心を知らず、但佛所に於て信樂あり、世尊時を以て我が爲めに說法したまふ、最上勝妙にして善惡を開示したまふ。我が如きは、世尊の所に從ひ、是くの如きの法を聞き、今汝が爲めに說く、若し彼の比丘聞き已りて、便ち諍事を捨つ」。比丘是くの如き說を作す時、自ら已れを高せず、亦人に下らず。是くの如く餘の比丘、能く呵するものあることなし』。佛說是くの如く。餘の比丘聞いて歡喜し、信樂し、受持す。

十三種の人あり、未だ大戒を受けざれば受くべからず、若し受くれば、減損を作すべし。自ら言

爾の時世尊、跋闍國池水邊に在し、諸の比丘に告げたまはく、『汝等は我れ衣服飲食疾病の醫藥、床、臥具の爲めに、而も說法すと謂へりや』。諸の比丘、佛に白して言さく、『大德、我等敢て是くの如きの意を生ぜず、世尊は、衣服乃至臥具の爲めの故に、而も說法したまふと謂はんや』。佛言はく、『若し是れを以てせずんば、何の心を作すとや爲ん』。諸の比丘答へて言はく、『我等是くの如きの意を作す、世尊は衆生を慈念したまふが故に、而も爲めに說法したまふ』と。佛言はく、『汝等若し實に是くの如きの心あらば、我が覺悟證知する所の法、四念處、四正勤、四神足、四禪、五根、五力、七覺意、八聖道、應さに歡喜和合して修學すべし。若し歡喜和合して修學せんに、餘の比丘の犯戒あるも、疾々に擧すべからず、應さに自ら觀察すべし、自ら惱ましめず、亦人を害せしめず、彼の犯罪の者、若し瞋恚を憙ばず、怨嫌を結ばず、覺悟を難んぜず、自ら能く除罪し、能く不善を捨て、善法に住す、若し作すこと、是くの如くなれば、復應さに宜しきを量るべし、若し自ら惱み已り、然も彼の人を害せず、彼の罪あるもの、瞋恚を喜び、悟りを難くせず、疾かに能く罪を除き、能く不善を捨て、善法に住す。彼の比丘、應さに是の念を作すべし、「我れ少惱を得、彼れに於て害なし、愛利益あり、能く不善を捨て、善法に住せしむ、則ち應さに罪を擧すべし」。比丘是の念を作す、「我れ他の罪を擧す、當さに自惱を得べし、然も彼れを害せず、彼の罪ある者、瞋恚を喜び、解悟を得易し、能く疾かに罪を捨つ、餘は上に說くが如し」。比丘復是の念を作す、「若し他の罪を擧すれば、我れに於て惱害を得彼の罪ある者、瞋恚を喜び、解悟すべきこと難し、疾かに罪を捨てず、若し我れ罪を擧すれば、爲めに憶念を作し、當さに餘外の語を以て我れに答へ、而も瞋恚を生ず、是くの如き人は、復擧することを須ひず」。是くの如く、比丘和合歡喜し、阿毘曇中に於ける種々の諍語は、應さに語りて言ふべし、「諸の長老、所說の文義相應す、共に諍ふべからず」と。餘の比丘あり、人の其の言を信用する所の者、應さに語りて言ふべし、「長老、所說の文義相應す、共に諍ふべから

長老、先きに自ら其の命を清淨にし、修多羅を誦せると。若し優波離、他の比丘を擧し、命清淨、多聞、修多羅を誦すれば、他の語を生ぜず。復次ぎに優波離、他の比丘を擧し、多聞せず、毘尼を知らず、言辯了ならず、喩へば白羊の如し、若し他の罪を擧すれば、則ち他の語を生ず。「長老、先づ毘尼學の語を學べ」と。若し優波離、他の比丘を擧し、多聞にして毘尼を誦し、語言了々なれば、他の語を生ぜず。是の故に優波離、比丘應さに是の知を作すべし。若し此の比丘、愛ありて我れを恭敬せば、則ち應さに罪を擧すべし、愛なくして恭敬あらば、應さに擧すべし、恭敬なくして愛あらば、應さに擧すべし、若し愛なく、恭敬なければ、能く惡を捨て、善に戻かしめ、應さに擧すべし、若し愛なく、恭敬なくば、亦惡を捨て善を行ぜしむること能はず、而も彼れに所重の比丘あり、尊敬信樂せば、能く惡を捨し、善を行ぜしめて、應さに擧すべし、若し愛なく恭敬なく、惡を捨て善を行ぜしむる能はず、復所重の比丘の、尊敬信樂する者なし、惡を捨て、善を行ぜしむること能はず。優波離、僧卽ち應さに都べて捨置驅棄すべし。語りて言へ、「長老、汝の所去の處に隨へ」と。彼れ當さに汝が爲めに擧を作し、憶念をなし、自言を作し、阿㝹婆陀を作し、說戒を遮し、自恣を遮すべし。譬へば調馬師の如し、惡馬は調し難し、卽ち韁材を合せて驅棄す、此の比丘も亦復是くの如し。是くの如きの人は、先づ其の求聽に從ふべかず、此れ卽ち是れ聽なり』。佛說是くの如し。優波離聞いて歡喜し、信樂し、受持す。

優波離、佛に問うて言はく、『大德、比丘、事を起すが爲めに、幾法を以てする』。佛答へて言はく、『比丘、事を起すが爲めに三事を以てす、破戒、破見。破威儀なり』。優波離復問ふ、『此の三事を以て事を起す、復幾法を以て爲めに擧を作す』。佛言はく、『三事を以て、見聞疑を擧す』。優波離復問ふ、『三事を以て事を起す、三法を以て擧を作す、應さに內に幾法ありて、然る後に擧する』。佛言はく、『內に五法あり、應さに擧を作すべし。』上に說くが如し、時を以てして非時を以てせず、是くの如きの五法なり。

欲念、瞋恚念、嫉妬念、是れ三法增長す。是の故に所在の處、若し闘諍して共に相罵詈し、口に刀劍を出し、互に長短を求むれば、之を憶して樂まず、況んや能く彼れに住するをや。是の故に汝等、決定して應さに三法損滅、三法增長を知るべし。若し比丘所在の處、共に闘諍せず。（上の句に反する是れなり。）其れ闘諍あれば、二倶に忍びず、心に垢穢を懐き、互に相憎害し、瞋恚を增長し、善く調伏せず、相受教せず、亦恭敬を失ふ。當さに知るべし、此の諍轉增堅固にして、如法、如律、如佛所教にして滅することを得ず。若し比丘闘諍して、彼此倶に忍び、心に垢穢を懐かず、相憎害せず、瞋恚を增長せず、而も善く調伏し、更る相受教し、恭敬を失はされば、當さに知るべし、此の諍ひは而も堅固ならず、如法、如律、如佛所教にして滅することを得。若し比丘共に諍ひ、二倶に忍びず、心に垢穢を懐き、互に相憎害し、瞋恚を增長し、而も善く調伏ぜず、相受教せず、亦恭敬を失ふ。若し諍事起る時は、七滅諍の一々の法を以て諍事を滅せざれば、當さに知るべし、此の諍ひは轉たまた增長して堅固に、如法、如律、如佛所教にして滅することを得ず。若しは諍ひ如法に滅することを得、（上の句に反する是れなり。）若し比丘闘諍して、上中下座と其の事を平宜せざれば、則ち修妬路、毘尼、法律に入らず、與に相應せず。若し諍事起る時は、七滅諍法の一々を以て滅せざれば、當さに知るべし、此の諍は、而も增長堅固を致し、如法、如律、如佛所教にして滅することを得ず。若し諍事如法に滅することを得るは、（上の句に反する是れなり。）若し持法、持律、持摩夷の者と、諍事を平宜せざれば、諍事增長す、亦上の句に說くが如し。若しは諍事如法に滅す』。（亦上の句の如き是なり。）

爾の時世尊、優波離に告げたまはく、『汝等數ば他の比丘の罪を擧すること莫れ、何を以ての故に。若し他の罪を擧すれば、身不清淨、口不清淨なれば、卽ち他の語を生ず、「長老、先づ自ら身口の威儀を淨めよ」と。優波離、若し比丘、身口清淨なれば、他の語を生せず。復次ぎに優波離、他の比丘を擧し、命不清淨にして、寡聞に、修多羅を誦せず、若し他の罪を擧すれば、卽ち他の語を生ず、

事すべし』。上の句に反する是れなり。 時に阿難、坐より起つて偏へに右の肩を露はし、右膝地に着け、合掌して佛に白して言さく、『大德、何の因緣を以て、僧未だ諍事あらざるに、而も諍事を生じ、已に諍事あるも、而も除滅せざらしむる』。佛、阿難に告げたまはく、『他の比丘を擧して、不犯を犯と言ひ、犯を不犯と言ひ、輕を重と言ひ、重を輕と言ひ、非法を法と言ひ、法を非法と言ひ、非毘尼を毘尼と言ひ、是毘尼を非毘尼と說き、非制にして制し、是制にして斷ず、此の因緣を以て、僧未だ諍事を生ぜざらるに、而も諍事を生じ、已に諍事あれば、而も除滅するせざらしむ』。阿難復佛に問ひたてまつりて言はく、『大德、何の因緣を以て、僧未だ諍事あらずして、而も諍を生ぜしむ、已に諍事ありて除滅することを得しむ』。佛、阿難に答へたまふ。上の句に反する是れなり。 佛、阿難に告げたまはく、『十種の諍根あり、應さに之を知りて、善く方便を作し、除滅することを得せしむべし。何等か十』。上の句に反する是れなり。 時に優波離、坐より起つて、偏へに右の肩を露はし、右膝地に着け、合掌して佛に白して言さく、『大德、說いて破僧と言ふは、幾名を齊りて破僧と爲す、誰か和合僧を破る』。佛答ふ『十事は上の句の如し。此の十事を以て伴黨とす。若し他を敎へて、別部の說戒、布薩羯磨を求むれば、是れを齊りて破僧と爲す、名づけて破和合僧と爲す』。優波離和合僧を問ふ。上の句に反する是れなり。『十一語の捨戒あり、佛を捨て、法を捨て、僧を捨て、和尙を捨て、同和尙を捨て、阿闍梨を捨て、同阿闍梨を捨て、淨行比丘を捨て、波羅木叉を捨て、毘尼を捨て、學事を捨つ、是れを十一と爲す。是くの如き十一を句と爲す、乃至沙門釋子に非ず亦是くの如し。

爾の時世尊、不尸城林中に在し、諸の比丘に告げて言はく、『若し比丘所在の處は、鬪諍して共に相罵詈し、口に刀劍を出し、互に長短を求むること莫れ、之を憶して樂まず、況んや能く彼れに住するをや、汝決定して、應さに六法疾滅を知るべく、應さに三法增長を知るべし。何等か三なる。出離を念じ、無瞋恚を念じ、無嫉妬を念ず、此の三事は疾斷滅なり。何等か三法遂に增長する。貪

失なり。復次ぎに無事の因緣、時に非ざるに、王四部の兵を集む、其の喜ばざる者是の言を作す、「比丘、宮に入る、是れ其の所作なり」と、是れを第八の過失を爲す。復次ぎに王或は兵を集め、中路にして還る、其の喜ばざる者是の言を作す「比丘、宮に入る。是れ其の所作なり」と、是れを第九の過失と爲す。復次ぎに、王若し宮婇女の間に在り、好象女、瑞政の女人を出す、是れは則ち心に愛着を生ず、比丘の法に非ず、是れを第十の過失と爲す。十法あり、人に大戒を授しべからず、弟子に增戒、增心、增慧學、增威儀、增淨行、增波羅提木叉學を教ふること能はず、教へて惡見を捨て、善見に住せしむること能はず、弟子住處を樂まざるも、至樂處に移ること能はず、若しは疑悔の生ずるあるも、法の如く毘尼の如く、開解し決斷すること能はず、若しは十臘に滿たず、是れを十と爲す。十法あり、人に大戒を授くべし。（上の句に反する是れなり。）十法あり、人に大戒を授くべからず、具さに二百五十戒を持たず、多聞せず、弟子に阿毘曇、毘尼を教ふること能はず、教へて惡見を捨て、善見に住せしむること能はず、波羅提木叉を知らず、波羅提木叉の說を知らず、布薩を知らず、布薩羯磨を知らず、若しは十臘に滿たず、是れを十と爲す。十法あり、人に大戒を授くべし。（上の句に反する是れなり。）十法あり、差して別處に斷事すべからず。具さに二百五十戒を持たず、多聞せず、廣く二部の戒を誦せず、善巧の語言にて、人をして開解せしめず、問答教呵して如法に滅擯し、歡喜を得しむること能はず、設し諍の起るあるも、善く滅すること能はず、波羅提木叉を知らず、波羅提木叉の說を知らず、布薩を知らず、布薩羯磨を知らず、是れを十と爲す。十法あり、應さに差して別處斷事すべし。（上の句に反する是れなり。）十法あり、若し別處斷事すべからず、六句は上の如し。鬪諍を斷了するの事を解せず、諍の起るを知らず、諍の滅するを知らず、滅諍の道に趣くを知らず、是れを十と爲す。十法あり、差して別處斷事すべし。（上の句に反する是れなり。）十法あり、差して別處斷事すべからず、六句は上の如し、愛あり、恚あり、怖あり、癡あり、是れを十と爲す。十法あり、應して別處に斷

是れを十と爲す。十如法受籌あり。（上の句に反する是れなり。）如來世に出でたまひ、過失あるを見るが故に、十義を以て、諸の比丘の爲めに制戒し、僧を攝取してより、乃至正法久住す、是れを十と爲す。十種の人ありて禮すべからず、自ら言ふ邊罪を犯すと、比丘尼を犯す、賊心受戒す、二道を破す、黄門、父を殺し、母を殺し、阿羅漢を殺し、僧を破し、惡心にて佛身の血を出す、是れを十と爲す。比丘に十種の威儀あり、禮すべからず、大行の時、小行の時、若しは裸身、若しは剃髮、若しは說法、若しは楊枝を嚼む、若しは口を洗ひ、若しは飲み、若しは食ひ、若しは菓を噉ふ、是れを十と爲す。飲酒に十の過失あり、色惡しく、力少し、眼明ならず、喜んで瞋りを現ず、財を失ふ、病を增す、鬪諍を起す、惡名の流布するあり、智慧なし、死して地獄に墮つ、是れを十と爲す。王家人の王室に入り、婇女の間に至るに、十の過失あり、若しは王の夫人と和合の時、比丘の宮に入り、婇女の間に至れば、夫人は比丘を見て笑ひ、比丘も夫人を見て失ふ、王是の意を作して言はく、「比丘も若し已に是の事を作すや、若しは此れを作すべし」と。是れ出家人の王宮の婇女の間に入る初過失なり。復次ぎに、若し王醉ふ時、夫人と和合して憶せず、後に夫人娠むあり、王是の意を作して言はく、「比丘來りて宮に入る、是れ比丘の所爲なり」と、是れを第二過失と爲す。復次ぎに、王の太人反して王を殺さんと欲す、王是の意を作す、「比丘來りて我が宮內に入る、是れ其の敎ふる所」と、是れ第三過失なり。復次ぎに、王內に在り、祕密の言以て外に聞こゆ、王是の念を作す、「比丘來りて我が宮內に入る、是れ其の傳ふる所と、是れ第四の過失なり。復次ぎに、王若し寶若しは似寶を失はんに、王是の意を作す、「比丘來りて我が宮內に入る、是れ其の取り去れるなり」と、是れ第五の過失なり。復次ぎに、王或は賤人を以て高位の處に在く、外の喜ばざるもの其の言を作す、「比丘、宮に入る、是れ其の所作なり」と、是れを第六の過失と爲す。復次ぎに、王或は高位の者を以て下職に處在す、外喜ばざる者是の言を作す、「比丘、宮に入る、是れ其の所作なり」と、是れ第七の過

あり、糞掃衣、牛嚼衣、鼠嚙衣、燒衣、月水衣、初産衣、神廟衣、塚間衣、願衣、立王衣、往還衣、是れを十と爲す。十非法遮說戒あり、波羅夷に非ず、波羅夷說中に入らず、捨戒に非ず、捨戒說中に入らず、如法僧要に隨ふ、如法僧要呵せず、如法僧要呵說中に隨はず、不見不聞疑破戒、不見不聞疑破見、不見不聞疑破威儀、是れを十と爲す。十如法遮說戒あり。（上の句に反する是れなり。）復十非法遮說あり、邊罪を犯さず、邊罪說中に入らず、比丘尼を犯さず、犯比丘尼說中に入らず、賊心受戒せず、賊心受戒說中に入らず、二道を破せず、破二道說中に入らず、黃門に非ず、黃門說中に入らず、是れを十と爲す。十如法遮說戒あり。（上の句に反する是れなり。）十法あり、應さに差して比丘尼を敎授すべし。具さに二百五十戒を持ち、多聞、廣く二部の戒毘尼を誦し、善巧の語言辯說了々、大姓の出家にして刹利婆羅門居士、形貌端正、比丘尼恭敬す、比丘尼の爲めに說法を爲すに堪任し、歡喜を得しむ、佛の爲めの故に出家し、袈裟を著けて重罪を犯さず、若しは二十臘、若しは二十臘を過ぐ、是れを十と爲す』。爾の時佛、優波離に告げたまはく、『汝等數ば他の比丘の罪を擧すること莫れ、何を以ての故に。若し身威儀不清淨にして、他の比丘の罪を擧すれば、卽ち彼の語言を生ず、長老、先づ自ら身威儀を淨めよと。優波離、若し比丘、身威儀清淨なれば、他の語を生ぜず。若しは言不清淨、命不清淨、廣く二部毘尼を誦せず、亦是くの如し。（上の五五法中に說くが如し。）復次ぎに優波離、他の比丘を擧する、復應さに五法を修習すべし、時を以てして非時を以てせず、實を以てして不實を以てせず、利益にして、損減を以てせず、柔軟にして、麁獷を以てせず、慈心にして瞋恚を以てせず。優波離、他の比丘を擧するに此の十法あり、然る後に應さに擧すべし。十非法受籌あり、事を解せずして受籌す。共に妙法者に與みせずして受籌す、非法者を多からしめんと欲して受籌す、多くの非法者あるを知りて受籌す、僧を破せしめんと欲して受籌す、僧の破を欲するを知りて受籌す、小罪を以て受籌す、所見の如くならずして受籌す、非法受籌す、別衆受籌す、

舍を受け、中に在りて止宿すべきや、是くの如きの二事、何者か善と爲す』。諸の比丘、佛に白さく、『寧ろ彼の房舍を受けて止宿せん。何を以ての故に。彼の熱鐵房中に在りては、大苦痛を受くるが故に。我れ今汝に告ぐ、寧ろ彼の彼の熱鐵房中に在りて、身を燒きて爛盡せん。何を以ての故に。此の因緣を以て三惡道に墮せず、除は上の句に說くが如し。爾の時世尊此の語を說く時、六十の比丘沸血面孔より出で、六十の比丘は、戒を捨てゝ休道し、六十の比丘は、無漏心解脫を得、衆多の比丘あり、遠塵離垢して法眼淨を得たり。白衣家に九法あり、未だ檀越と作らず、應すべからず、若し其の家に至らば坐すべからず。何等か九。比丘を見て起立することを憙ばず、憙んで禮を作さず、憙んで比丘の坐に請ぜず、比丘の坐するを憙ばず、設し所說あるも、而も受けず、若し衣服飲食所須の具あらんに、比丘を輕慢して與へず、若し多有るれば、而も少しく與ふ、若し精細あるも、而も麁惡を與ふ、或は恭敬を與へず、是れを九法と爲す、白衣の家に往くべからず。復九法あり、未だ檀越と作らず、應さに檀越と爲すべし、已に作さんには、應さに往いて坐すべし。（上の句に反する是れなり。）九不如法遮說戒あり、無根破戒作を遮す、不作を遮す、作不作破見破威儀を遮するも亦是くの如し、是れを九と爲す。九如法遮說戒あり。（上の句に反する是れなり。）九語捨戒あり、佛を捨て、法を捨て、僧を捨て、和尙を捨て、同和尙を捨て、阿闍梨を捨て、同阿闍梨を捨て、諸の梵行を捨て、戒を捨つ、是れを九と爲す。是くの如く九九を句と爲し、乃至沙門釋種子に非ず、亦是くの如し。如來世に出で給ひ、過失あるを見るが故に、九利義を以て、諸の比丘の爲めに制戒し、僧を攝取し、乃至未來の有漏を斷ず、是れを九と爲す。如來世に出でたまひ、過失あるを見るが故に、九利義を以て、諸の比丘の爲めに呵責羯磨を制し、僧を攝取してより、乃至未來の有漏を斷ず、是れを九と爲す、乃至九滅諍も亦是くの如し。十種衣あり、拘奢衣、劫貝衣、欽跋羅衣、芻麻衣、叉摩衣、舍㝹衣、麻衣、翅夷羅衣、拘遮羅衣、差羅波尼衣、是れを十種衣と爲す、應さに染めて袈裟色と作すべし。衣持に十種

亦成就することを得。汝等比丘、寧ろ熱斧を以て自ら其の身首を斬るや、當さに信樂の善男子善女人の手にて、身を捫摸するを受くべきや、是くの如きの二事、何者か善と爲す』。諸の比丘、佛に白して言さく『大德、寧ろ信樂の善男子善女人の手に、身を捫摸せん。何を以ての故に。熱斧にて身首を斬るは、大苦痛を受くるが故に』。『我れ今汝に告ぐ、寧ろ熱斧を以て、自ら其の身首を斬らん、此の事を善しと爲す。何を以ての故に。此の因を以て三惡道に墮せず、餘は上の句に說くが如し。比丘、汝等寧ろ熱鐵を以て衣と爲し、身を燒爛し盡きんや、當さに信樂の善男子善女人の種々の好衣を受著すべきや、是くの如きの二事、何者か善と爲す』。諸の比丘、佛に白して言さく『大德、寧ろ彼の種々の好衣を受けん。何を以ての故に。熱鐵衣は身を燒き、大苦痛を受くるが故に』。佛、諸の比丘に告ぐ『我れ今汝に語る、寧ろ熱鐵を以て衣と爲し身を燒かん。何を以ての故に。此の因を以て三惡道に墮せず、餘は上の句に說くが如し。比丘、汝等寧ろ熱鐵丸を呑み、五藏を燒爛して下より出でんや、當さに信樂の善男子善女人の飮食供養を受くべきや、是くの如き二事、何等か善しと爲す』。諸の比丘言さく『寧ろ彼の飮食供養を受けん。何を以ての故に。熱鐵丸を呑むは、大苦痛を受くるが故に』。佛、諸の比丘に告げたまはく『我れ今汝に告ぐ、寧ろ熱鐵丸を呑まん。何を以ての故に。此の因を以て三惡道に墮せず、餘は上の句に說くが如し。種々の粥を受くるも、亦是くの如し。汝等比丘、寧ろ熱鐵床上に在りて坐し、自ら身を燒いて燋爛せんや、當さに信樂の善男子善女人の、種々の好床臥具を受けて、上に在るべきや、是くの如きの二事、何者か善と爲す』。諸の比丘、佛に白して言さく『寧ろ彼の種々の好床臥具を受けん。何を以ての故に。熱鐵床上に、自ら身を燒いて燋爛せんは、大苦痛を受くるが故に』。佛、諸の比丘に告げたまはく『我れ今汝に語る、寧ろ熱鐵床上の坐臥燒身を受けん。何を以ての故に。此の因を以て三惡道に墮せず、餘は上の句に說くが如し。汝等比丘、寧ろ熱鐵屋中に在りて住し、身を燒かんや、當さに信樂の善男子善女人の房

諸の比丘に告げたまはく『汝等彼の大聚火の熾然たるを見るや不や。若し人あり、彼の火を捉りて、捫摸して之を鳴せしむれば、卽ち其の皮肉を燒き、筋骨消盡せん。若し復人あり、刹利女、婆羅門女、毘舍女、首陀羅女を捉へ、捫摸して之に鳴せんに、是くの如きの二事、何者をか善と爲す』。諸の比丘、佛に白す『大德、若し彼の刹利女等の女を捉へて、捫摸して之に鳴するは、此の事は善しと爲す。何を以ての故に、若し火を捉れば、卽ち皮肉を燒爛し、骨消盡し、大苦痛を得、堪耐すべからず』。佛、諸の比丘に告げたまはく『我れ今汝に告ぐ、寧ろ此の火を捉りて、捫摸して之に鳴し、其の皮肉を燒き、筋骨消盡せんも、此の事を善しと爲す。何を以ての故に。此の因を以て三惡道に墮せず。若し沙門にあらずして、自ら沙門と言ひ、淨行にあらずして、自ら是れ淨行ら言ひ、戒を破り惡を行じ、都べて持戒威儀なく、邪見にして覆處に罪を作し、內空腐爛して、外に完淨を現じ、人の信施を食ひ、信施を消せざるを以ての故に、三惡道に墮し、長夜に苦を受く。是の故に應さに淨戒を持ちて、人の信施を食ふべし、飮食衣服臥具醫藥一切の所須、能く施主をして大果報を得しむ。爲す所出家して沙門と作れば、亦成就することを得。汝等比丘、寧ろ熱戟を以て脚を刺さんや、當さに信樂の善男子善女人の接足作禮を受くべきや。是くの如きの二事、何者か善と爲す』。諸の比丘、佛に白して言さく『寧ろ信樂の善男子善女人の接足作禮を受くべし。何を以ての故に。熱戟にて脚を刺さば、大苦痛を受くるが故に』。佛諸の比丘に告げたまはく『我れ今汝に告ぐ、寧ろ熱戟を以て脚を刺さん。何を以ての故に。此の因を以て三惡道に墮せず。若し沙門に非ずして、自ら是れ沙門なりと言ひ、淨行に非ずして、自ら是れ淨行なりと言ひ、破戒行惡、都べて持戒の威儀なし、邪見にして覆處に罪を作し、內空脚爛して、外に定淨を現じ、人の信施を食ひ、信施を消せざるを以ての故に、三惡道に墮して、長夜に苦を受く、是の故に當さに淨戒を持ちて、人の信施を食ふべし、乃至一切の所須は上に說くが如し、施者をして大果報を得しむ。所爲出家して沙門と作れば、

と欲す」と。猶ほ惡馬の勒を、授け鞭を與へて、其れをして去らしめんと欲するも、而も更に却行するが如し、我れ此の人を說くも、亦復是くの如し。或は比丘あり、彼の見聞疑罪を擧す。而も彼れ便ち餘事を說いて答へ、反つて瞋恚を生ず。猶ほ惡馬の、勒を授け鞭を與へて、其れをして去らしめんと欲するも、而も非道に趣き、軸を折り輪を破るが如し、我れ此の人を說くこと、亦復是くの如し。或は比丘あり、彼の見聞疑罪を擧す。而も彼の比丘衆僧を畏れず、亦犯を畏れず、而も擧罪者の語を受けず、便ち坐具を捉りて、肩に置いて去る、呵制すべからず、猶ほ惡馬の、勒を授け鞭を與へて、其れをして去らしめんと欲す、而も御者を畏れず、亦鞭を畏れず、銜を嚙ましむるに、騁突して禁制すべからざるが如し、我れ此の人を說くも、亦復是くの如し。或は比丘あり、彼の見聞疑罪を擧す。而も彼の比丘、左に欝多羅僧を抄し、僧中に在りて手を擧げて大語すらく、「乃ち汝等をして、我れに敎授せしむるや」と、猶ほ惡馬の、勒を授け鞭を與へて、其れをして去らしめんと欲するも、而も更に雙脚人立して、沫を吐くが如し、我れ此の人を說くも、亦復是くの如し。或は比丘あり、彼の見聞疑罪を擧す。彼の比丘言はく、「長老も亦我れに衣鉢臥具醫藥を與へず、何が故に我れに敎ふる」。彼れ卽ち戒を捨て、下道を取り、諸比丘の所に至り、是の言を作す、「大德、我れ已に休道す、意に於て快ならんや。猶ほ惡馬の、勒を授け鞭を與へ、其れをして去らしめんと欲するも、而も更に蹲臥するが如し、我れ此の人を說くも、亦復是くの如し」。是れを八種の惡人と爲す。我れ已に八種の惡馬、八種の惡人を說く、世尊の所應、諸弟子を慈愍す、我れ已に具さに說く、汝今當さに空處の樹下に住在し、禪定を修習すべし、放逸を爲して、後に悔恨を致すこと莫れ、此れは是れ我が敎誡なり』。佛說是くの如し。諸の比丘聞いて歡喜し、信樂し、受持す。

爾の時世尊、拘薩羅國に在し、千二百五十の比丘と倶に、人間に遊行したまふ。中道に大聚火の熾然たるあるを見たまひ、見已りて卽ち下道したまひ、一樹下に在りて、座を敷いて坐したまひ、

爾の時佛、諸の比丘に告げたまはく、「我れ今汝等が爲めに、八種の惡馬、及び八種の惡人を說かん、汝曹諦かに聽け。何等か八。或は惡馬あり、勒を授け、鞭を與へ、其れをして去らしめんと欲す、而かも更に觝蹪して去らず。或は惡馬あり、勒を授け、鞭を與へ、其れをして去らしめんと欲す、而も反つて傍らの兩轅に倚りて前進せず。或は惡馬あり、勒を授け鞭を與へ、其れをして去らしめんと欲す、而も顚蹶して地に倒れ、既に其の膝を傷け、又轅槅を折る。或は惡馬あり、勒を授け、鞭を授へ、其れをして去らしめんと欲す、而も更に却行して進まず。或は惡馬あり、勒を授け、鞭を與へ、其れをして去らしめんと欲す、而も更に非道に趣き、輪を破り軸を折る、或は惡馬あり、勒を授け、鞭を與へ、其れをして去らしめんと欲す、御者を畏れず、亦鞭を恐れず、方便して銜を嚙ましむるに、駢突して禁制すべからず、或は惡馬あり、勒を授け、鞭を與へ、其れをして去らしめんと欲す、而も雙脚人立して沫を吐く。或は惡馬あり、勒を授け、鞭を與へ、其れをして去らしめんと欲す、或は躃し、或は臥す、是れを八と爲す。何等か是れ八種の惡人、或は比丘あり、彼の見聞疑罪を擧す、而も彼の比丘便ち言はく、我れ憶せず、我れ憶せずと。猶ほ惡馬の勒を授け鞭を與へて、其れをして去らしめんと欲するも、而も更に觝蹪して去らざるが如し、我れ此の人を說く、亦復是くの如し。或は比丘あり、彼の見聞疑罪を擧す。而も彼の比丘、犯すと言はず、犯さずと言はず、默然として住す、猶ほ惡馬の、勒を授け鞭を與へ、其れをして去らしめんと欲するに、傍らの兩轅に倚りて前進せざるが如し、我れ此の人を說くも亦復是くの如し。或は比丘あり、彼の見聞疑罪を擧す。彼れ是の言を作す、「長老も亦自ら是の罪を犯す、云何ぞ能く他の罪を除かん」と。猶ほ惡馬の、勒を授け鞭を與へ、其れをして去らしめんと欲するも、而も更に顚蹶して地に倒れ、既に其の膝を傷け、又轅槅を折るが如し、我れ此の人を說くも亦復是くの如し。或は比丘あり、彼の見聞疑罪を擧す、彼の比丘是の言を作す、「長老自ら癡なり、猶ほ人の敎を須つ、而も我れを敎へん

來坐起に衣鉢を攝持す、善比丘の如く別ならず、乃至罪を出さず、時に既に其の罪を出し、方さに比丘中の稊稗の異なるを知る、既に其の異なるを知らば、應さに和合して、爲めに滅擯を作して之を除くべし。何を以ての故に。善比丘を妨ぐることを恐るゝが故に。譬へば農夫の穀を治するに、風に當りて縦揚すれば、好穀は留まりて其の下に聚まり、秕苫は風に隨つて之を除くが如し。何を以ての故に。好穀を汚さんことを恐るゝが故に。是くの如く惡比丘、行來入出して、善比丘の如く別ならず、乃至罪を出さず、時に既に其の罪を出して、方さに比丘中の秕苫の穢惡を知る。既に知り已らば、應さに和合して爲めに滅擯を作して之を除くべし。譬へば人あり、木を須ひて井欄を作るが如し、城中より出でゝ、手に利斧を捉り、彼の林中に往き、遍く諸樹を扣き、若し是れ實中の者は、其の聲貞實なり、若し是れ空中の者は、其の聲虛にして甕なり、而も彼の空樹の根莖枝葉は、貞實の者の如く異ならず、扣く時に至りて、方さに內空なることを知る、既に內空なることを知らば、便ち斬伐して枝葉を截落し、先づ麁朴を去り、然る後斫剗細治して、內外俱に淨し、以て井欄を作る。是くの如く惡比丘、行來出入に衣鉢を攝持し、威儀善比丘の如く異ならず、乃至罪を出さず、時に既に其の罪を出して、方さに沙門中の垢穢稊稗空樹なることを知る。若し知り已らば、卽ち應さに和合しに滅擯を作すべし。何を以ての故に、善比丘を妨害することを恐るゝが故に』。而も偈を說いて言はく、

同住して性行を知る　嫉妬して瞋恚を憙ぶ　人中に善語を說き　屛處に非法を造す　方便して妄語を作すも　明者は能く覺知す　稊稗は應さに除棄すべし　及び空中の樹なり　自ら是れ沙門と說く　虛空は應さに滅擯すべし　已に滅擯を作し竟る　行惡非法の者を　清淨の者は共住す　當さに知るべし是れ光顯　和合して共に滅擯す　和合して苦際を盡くす

佛說是くの如し。諸の比丘聞いて歡喜し、受持す。

と爲し、乃至正法久住も亦是くの如し。七義を以ての故に。如來出世したまひ、諸の比丘の爲めに、呵責羯磨を制したまひ、僧を攝取してより、七七を句となし　乃至正法久住も亦是くの如し、乃至七滅諍も亦是くの如し、呵責羯磨を句と爲すが如し。八非法遮說戒あり、無根破戒の作不作、破見の作不作、破威儀の作不作、破正命の作不作を遮す、是れを八と爲す。八如法遮說戒ある。上の句に反する是れなり。八法あり、應さに差して比丘尼を教授すべし、具さに二百五十戒を持ち、多聞にして二部の戒毘尼を誦し、善く言語を能くし、義句字を辯ずること了々、大姓の出家にして、刹利、婆羅門、居士、若しは形顏端正、佛の爲めの故に出家して重罪を犯さず、若しは二十臘、若しは二十臘を過ぐ、是れを八と爲す。八不可過法あり、比丘尼犍度の中に說くが如し。白衣に八法あり、應さに與めに覆鉢を作すべし、比丘を罵謗し、損減を作し、利益なし、無住處を作し、比丘を鬪亂せしめ、比丘の前に在りて佛法僧を毀る、是れを八と爲す。比丘に八法あり、白衣をして信ぜざらしむ。白衣を罵謗し、損減を作し、利益なし、無住處を作し、白衣を鬪亂せしめ、白衣の前に在りて佛法僧を毀る、是れを八と爲す。應さに與めに遮不至白衣家羯磨を作すべし、上に說くが如し。八法あり、應さに差して使伴と作すべし、能く聞き、能く說き、自ら解し、他をして解せしめ、能く受け、能く持ちて失ふなく、好惡を知り、義趣を說く、是れを八と爲す。』

爾の時世尊、瞻波城伽伽池邊に在しき。白月十五日說戒の時、露地に於て坐し、衆僧と倶に前後圍遶す。時に比丘あり、彼の比丘の見聞疑罪を擧す。罪を擧する時に當り、彼の比丘乃ち餘語答を作し、便ち瞋恚を起す。佛諸の比丘に告げたまふ『應さに審定に彼の人に問ふべし、彼の人、佛法の中に於て所住なく、增長する所なし、譬へば農夫の如し、田苗稊稗參り生じ、苗葉相類して別たず、而も妨害を爲し、乃至莠實なり、方さに非穀の知る。既に非穀の異を知れば、即ち根本を耘除す、何を以ての故に、善苗を害せんことを恐るゝが故に。比丘も亦復是くの如し。惡比丘あり、行

に起り、身心を以てせず、或は犯あり、身口より起り、心を以てせず、或は犯あり、身心より起り、口に非ず、或は犯あり、口心に起り、身に非ず、或は犯あり、身口心より起る、是れを六と爲す。鬪諍に六根本あり、中阿含に說くが如し。六處の盜あり、波羅夷を犯す。自取、若しは指授、若しは遣使、若しは重物、盜心を以てす、移して本處を離る、是れを六と爲す。復六あり、已有想に非ず、不暫取想、非親厚想、若しは重物、盜心を以てす、移して本處を離る、是れを六と爲す。七非法遮說戒あり。無根波羅夷、乃至無根惡說、是れを七と爲す。七犯聚あり、波羅夷乃至惡說なり、是れを七と爲す。七種の精あり、青色乃至酪漿色なり、是れを七と爲す。七滅諍あり、上の戒文の中に說くが如し。七法あり、名づけて持律と爲す。犯を知り、不犯を知り、輕を知り、重を知り、有餘を知り、無餘を知り、廣く二部の戒毘尼を誦す、是れを七と爲す。復七あり、六句は前に同じ、第七句は、毘尼に住し、移らず動かずを以て一句と爲す、是れを七と爲す。復七あり、六句は前に同じ、第七句は、善能滅諍事を以て一句と爲す、是れを七と爲す。復七あり、六句は前に同じ、第七句は、自ら宿命の種々の所使を識るを以て一句と爲す、是れを七と爲す。復七あり、六句は前に同じ、第七句は、天眼を以て、衆生の此に死し、彼に生るゝを見るを一句と爲す、是れを七と爲す。復七あり、六句は前に同じ、第七句は、漏盡きて無漏心解脫、慧解脫を得、現世に果證を得、我が生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じ、終に還らずを以て、此れを一句と爲す、是れを七と爲す。七不恭敬あり、佛法僧戒定父母善法を敬せず、是れを七と爲す。七恭敬あり。（上の句に反する是れなり。）七語の捨戒あり、佛法僧を捨て、和尙を捨て、同和尙を捨て、阿闍梨を捨て、同阿闍梨を捨つ。是れを七と爲す、乃至沙門釋子に非ずと亦是くの如し。七義を以ての故に、如來出世して、諸の比丘の爲めに戒を制し、僧を攝取し、僧をして歡喜せしめ、僧をして安樂ならしめ、不信者をして信ぜしめ、信者增長し、難調をして調せしめ、慚愧の者安樂を得、是れを七と爲す。是くの如く七七を句

に他の罪を擧すべし。他の罪を擧せんと欲せば、五法あるべし、上の遮犍度の中に説くが如し。五の非法擧あり、非時にして時を以てせず、不實にして實を以てせず、損減にして利益なし、麁獷にして柔和ならず、瞋恚にして慈心を以てせず、是れを五と爲す。五の如法擧あり。上の句に反する是れなり。不善、善、非毘尼、毘尼、世間、出世間、損減利益を作す、亦是くの如く説く。五句語あり、第三句なし、時と非時と、此の句に第三なし、實と不實と、此の句に第三なし、損減にして利益あり、此の句に第三なし、麁獷柔和、此の句に第三なし、瞋恚慈心、此の句に第三なし、是れを五句に第三なしと爲す。五語捨戒を説く、佛を捨て、法を捨て、僧を捨て、和上を捨て、同和上を捨つ、是くの如き、五五を句と爲し、乃至沙門釋子に非ず。如來出世したまひ、過失あるを見るが故に、五利義を以て、諸の比丘の爲めに戒を制し、僧を攝取し、僧をして歡喜せしめ、僧をして安樂ならしめ、不信者をして信ぜしめ、信者増長す、是れを五と爲す、乃至正法久住すること亦是くの如し。如來出世したまひ、諸の比丘の過失あるを見たまふが故に、五利義を以て、諸の比丘の爲めに、呵責羯磨を制し、僧を攝取し、僧をして歡喜せしめ、僧をして安樂ならしめ、不信者をして信ぜしめ、信者増長す、是れを五と爲す、乃至正法久住す。五五を句と爲す。亦是くの如し、乃至七滅諍も亦是くの如し。亦六非法遮説戒あり、無根の破戒の作不作を遮す、破見、破威儀も亦是くの如し、是れを六と爲す。六如法遮説戒あり。上の句に反する是れなり。六法あり、應さに差して比丘尼を教授すべし。具さに二百五十戒を持ち、多聞にして、廣く二部の戒毘尼を誦し、善く語言辨説、義句了々たり、佛の爲めの故に出家して、重罪を犯さず、若しは二十臘、若しは二十を過ぐ、是の六法あれば、應さに差して比丘尼を教授すべし。比丘、比丘の爲めに疑を作すに六法あり、若しは所生の年を以てし、若しは臘數を以てし、若しは大戒を受くるを以てし、或は羯磨を以てし、若しは犯、若しは法を以てす。是れを六と爲す。六犯所起の處あり、或は犯あり、身に由りて心口に非ず、或は犯あり、口

卷の第六十（第四分の十一）

毘尼增一の四

爾の時佛、諸の比丘に告げたまはく、若し我が聽す所の『波陀舍、阿㝹波陀舍、便闍那阿㝹、便闍那惡叉羅、阿㝹惡叉羅、應さに是くの如く作すべし。我が聽さゞる所の如き、波陀舍、阿㝹波陀舍、便闍那阿㝹、便闍那惡叉羅、阿㝹惡叉羅、呵すべくして、隨順すべからず、應さに是くの如く作すべし。我が遮する所の如き、波陀舍、阿㝹波陀舍、便闍那阿㝹、便闍那惡叉羅、阿㝹惡叉羅は作すべからず。我が遮せざる所の如き、波陀舍、阿㝹波陀舍、便闍那阿㝹、便闍那惡叉羅、阿㝹惡叉羅は隨順すべく、呵すべからず』。爾の時舍利弗、五百の比丘となりき。摩訶波闍波提比丘尼、五百の比丘尼と倶なりき。阿難分坻五百の優婆塞と倶なりき。毘舍佉母、五百の優婆利と倶なりき、拘睒彌犍度の中に說くが如し。爾の時佛、諸の比丘に告げたまはく『比丘、僧中に至るに、先づ五法あり、應さに慈心を以てすべし、應さに自ら卑下して、拭塵中の如くなるべし、應さに善く坐起を知るべし、若し上座を見れば、安坐すべからず、若し下座を見れば、起立すべからず。彼れ僧中に至りて、雜說を爲して、世俗の事を論ずべからず。若しは自ら說法し、若しは人を請うて說法せしむ、若し僧中に、不可事あるを見れば、心に安忍せず、應さに默然を作すべし。何を以ての故に、僧の別異を恐るゝが故に、比丘、應さに先づ此の五法あるべし、然る後に僧中に至るべし。舍利弗、此の五法あり、比丘、僧中に在りて語るべからず。復五法あり、僧中に在りて語るべし。此の中に六あり、上の自ら損減の中の說の如し。他の罪を擧するに五法あり、具さに二百五十戒を保ち、多聞にして、語言を善くし、憶念あり、智慧あり、是れを五と爲す。五法あり、應さに他の罪を擧すべし。慈悲心あり、利益を欲するありて增長せしむ、懺悔して清淨ならしむ、是の五法あり、應さ

信樂し、出家して道を行ず、未だ久しからずして、現世に阿羅漢を證成することを得、我が生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辨じ、復此に還らず、彼の比丘自ら阿羅漢を得たることを知る。佛、是くの如きの法を說きたまふ。諸の比丘聞いて信樂し、歡喜し、受持す』。

爾の時異比丘あり、世尊の所に往き、頭面に禮足し、却いて一面に坐し、佛に言して白さく、『善い哉大德、我がために略して說法したふ、我れ當さに獨り靜處に在り、勤修精進して放逸ならざるべし』。佛、比丘にげたまはく、『若し汝有法を知らば、多欲ならしめ、少欲ならしめず、無厭ならしめ、知足ならず、難護ならしめ、易護ならず、難養ならしめ、易養ならず、愚癡ならしめ、智慧なし。比丘、汝應さに是くの如きの法を知るべし、非法なり、非毘尼なり、佛の所教に非ず。若し比丘、有法を知らば、少欲ならしめ、多欲ならず、知足ならしめ、無厭ならず、易護ならしめ、難護ならず、易養ならしめ、難養ならず、智慧あらしめ、愚癡ならず、比丘、汝應さに決定して是の法は是れ毘尼、是れ佛の所教と知るべし』。時に彼の比丘、佛の略說を聞き已り、即ち獨り靜處に在りて思惟す、上に說く所の如し。

四分律卷第五十九

さる、復何の因縁を以て、正法滅せずして久住することを得る』。佛、波摩那に告げて言はく『如來滅後、比丘、佛法僧及び戒定を敬せず、是の因縁を以て正法疾く滅して久住せず、波摩那・如來滅後、若し比丘、佛法僧及び戒定を敬せば、是の故を以て正法滅せずして久住することを得。』

爾の時世尊、金毘羅國王の園中に在しき。時に長老金毘羅、世尊の所に詣り、頭面に禮足して、却いて一面に坐し、世尊に白して言さく『何の因縁を以て、如來の滅後に正法疾く滅して久住せざる。』亦上の問答の如く異ならば 爾の時に異比丘あり、佛所に往き、頭面に禮足し、却いて一面に坐し、佛に白して言さく『大德、何の因縁を以て正法疾く滅し久住せざる』。佛、比丘に告げたまはく、『若し比丘、法律の中に在りて出家し、至心に人の爲めに說法せず、亦至心に聽法憶持せず、設し復堅持するも、義趣を思惟すること能はず、彼れ義を知らず、如法に修行すること能はず、自ら利すること能はず、亦人を利せず』。佛、比丘に告げたまはく、『是の因縁ありて法をして疾く滅して久住せしめず』。『大德、復何の因縁を以て、法をして久住して疾く滅せしめざる』。上の句に反する即ち是れなり。 時に異比丘あり、世尊の所に往き、頭面に禮足して、却いて一面に坐し、『善い哉大德、我がために略して說法したまふ、我れ當さに獨り靜處に在りて勤修精進して、放逸ならざるべし』。佛、比丘に告げたまはく『汝若し世法を知らば、出離すること能はず、若し有學を知らば、越度すること能はず、若し有欲を知らば、無欲を得ず、若し有結を知らば、無結を得ず、若し親近生死を知らば、無親近を得ず。汝比丘、決定して應さに知るべし、此れは非法なり、非毘尼なり、佛の所敎に非ずと。若し比丘、汝此の法を知らば、是れ出離にして世法にあらば、是れ越度にして受法に非ず、是れ離欲にして、有欲に非ず、是れ無結にして有結に非ず、是れ生死に近かず、親近に非ず。汝比丘、應さに決定して此の法を知るべし、是の法は是れ毘尼、是れ佛の所敎なり』。時に彼の比丘、世尊の略說教授を聞き、即ち獨り靜處に在り、勤行精進して放逸ならず、初夜後夜警意思惟し、一心に道品の法の所爲を修習し、

にして多く衆罪を作し、速に他の爲めに擧せられず、五非法ありて、説戒を遮す。無根の波羅夷・僧伽婆尸沙・波逸提・波羅提々舍尼・突吉羅を遮す、是れを五と爲す。五如法あり、説戒を遮す。上の句に反する是れなり。五の非法捉籌あり、若しは斷事を屛せずして籌を受く、若しは同意なくして籌を受く、若しは善比丘なくして籌を受く、若しは非法若しは別衆籌を受く、是れを五と爲す。五の如法受籌あり。上の句に反する是れなり。五の非法默然あり、五の如法默然あり、五の法和合あり。五の雜犍度の中に説くが如し。五の法捨棄あり。』拘睒彌犍度の中に説くが如し。

爾の時佛、優波離に告げたはまく『汝等數々他の比丘の罪を擧すること莫れ、何を以ての故に、他の罪を擧する者は、身威儀不淸淨にして、而も他の罪を擧すれば、即ち彼の語を生ず、「長老、先づ自ら淸淨ならしめよ」と。優波離、比丘若し身威儀淸淨にして、而も他の罪を擧すれば、彼の語を生ぜず、若し言不淸淨、命不淸淨も亦是くの如し。復次ぎに優波離、若し寡聞にして修多羅を知らず、而も他の罪を擧すれば、即ち彼の語を生ず、問うて言はく「長老、此の事云何、此れ何の義ある」と、便ち分別して彼れの問ひに答ふること能はず、即ち彼の語を生ず、長老、先きに修多羅を誦し、然る後に當さに知るべし。優波離、若し比丘、多聞にして修多羅を誦すれば、便ち彼の語を生ぜず。復次ぎに優波離、比丘寡聞にして毘尼を誦せず、而も彼の罪を擧すれば、彼の問ひの言を生ず、「長老、此れは何の所說ぞ、何に因りてか起る」。若し所起の處を說くこと能はざれば、復彼の語を生ず、言はく、「長老、且らく先づ自ら毘尼を誦習せよ」と。優波離、若し比丘、多聞にして毘尼を誦習し、而も彼の罪を擧すれば、彼の問ひを生ぜず。優波離、若し比丘、是の五法あり、應さに時を以て、如法に彼の罪を擧すべし』。時に優波離、信樂し、歡喜し、受持す。

爾の時世尊、迦陵迦國菴維林中に在しき。時に長老波摩那、世尊の所に詣り、頭面に禮足し、却いて一面に坐し、世尊に白して言さく『大德、何の因緣を以て、如來滅後、正法疾く滅して久住せ

客上座比丘を禮するも、亦是くの如し。五種の人あり、禮すべからず、自ら淺罪を犯すと言ふ、比丘尼を犯す、賊心受戒、二道を破す、黄門、是れを五と爲す。復五法あり、父を殺し、母を殺し、阿羅漢を殺し、僧を破し、惡心にて佛身の血を出す、是れを五と爲す。比丘に復五種の威儀の禮すべからざるあり、若しは大便、若しは小便、若しは露身、若しは剃髪の時、若しは說法の時、是れを五と爲す。復五あり、若しは楊枝を嚼み、若しは口を洗ひ、若しは食し、若しは飲み、若しは菓を食ふ、是れを五と爲す。上座若しは次座に五法あり、鬪諍比丘に於て利益なし。具さに二百五十戒を持たず、多聞せず、廣く二部戒を誦せず、問答すること能はず、如法に教呵し、及び滅擯を作し、歡喜を得しむること能はず、善く鬪諍を滅せず、是れを五と爲す。復五法あり、上座若しは次座、鬪諍比丘に於て利益あり。上の句に反する是れなり。五法あり、名づけて大賊と爲す、長壽にして大罪を作し、繫縛せられず。何等か五。若しは住するに定處なく、好伴あり、若しは刀杖多し、若し大富にして財寶あり、彼れ是の念を作す「若し我れを捉ふる者あれば、當さに多く財寶を與ふべし」、若しは大人の親友あり、若しは王若しは大臣に依止す、彼れ是の念を爲す、「若し我れを捉ふる者あれば、王及び大臣我れを佐助すべし、若しは遠處に於て、賊を作して還る、是れを五と爲す」。是くの如き比丘に五法あり、長壽にして多く衆罪を作り、速に他の爲めに擧せられず。若しは住するに定處なく伴黨あり、若しは多聞、若しは聞いて能く憶持す、是くの如きの多聞あり、初中下の言悉く善し、文あり義あり、具さに淨行を說く、是くの如き法の中に於て、能く憶持す、而も善心思惟して深く正見に入ること能はず、若しは能く衣服飲食臥具醫藥を得、彼れ是の念を作す、「若し我れを擧するものあれば、我れ當さに多く物を與ふべし」と、若しは大人ありて親厚たり、若しは上座若しは次座なり。彼れ是の念を作す、「若し我れを擧する者あれば、上座次座當さに我れを佐助すべし」と、若し空野の中に在りて住し、大家に來至し、利養を求覓す、是れを五法と爲す。破戒の比丘、長壽

治せず、言說を知らず、遠近損減す、是れを五と爲す。復五法あり、自ら損減せず。上の句に反する是れなり。復五法あり、自ら損減す、言ふべき所を辨せず、亦善く憶識せず、彼れ語りて難ずべきを難ぜず、若し彼れ難じ來るも解すること能はず。具さに波羅提木叉戒を持たず、是れを五と爲す。復五法あり、自ら損減せず。上の句に反する是れなり。復五法あり、自ら損減す、憙んで瞋恚して放捨せず、他の語を增益す、不善語を受く、善語を離る、是れを五と爲す。復五あり、自ら損減せず。上の句に反する是れなり。病人に五法あり、瞻視し難し、五法あり、瞻視し易し、五法あり、應さに病人の衣を受くべし。上の衣犍度の中に說くが如し。比丘に五法あり、人の疑惑を生ず、乃至阿羅漢なる何等か五。若し比丘、數ば婬女、婦人の家、大童女の家、黃門の家、比丘尼の家に往く、是れを五と爲す。比丘に五法あり、白衣の憙ばざる所と爲す、憙んで白衣に親しむ、憙んで白衣を瞋る、强えて白衣の家に至る、喜んで白衣と竊語す、喜んで乞求す、是れを五と爲す、白衣の見るを憙ばざる所なり。五法あり、白衣見るを憙ぶ』。上の句に反する是れな句。

爾の時世尊、王舍城に在しき。時に優波離、坐より起ちて、偏へに右の肩を露はし、右膝地に著け、合掌して佛に白して言さく、『年少の比丘、上座比丘の前に在りて懺悔するに幾法かある』。佛、優波離に告げたまはく、『五法あり、偏へに右の肩を露はす、革屣を脫す、足を禮す、右膝地に著け合掌す、應さに罪名の種性を說き、是くの如きの語を作すべし、「我れ某甲比丘、如是如是の罪を犯す、長老に從つて懺悔す」。上座應さに答へて言ふべし、「自ら汝の心を責め、厭離を生ぜよ。」彼の人答へて言はく、「爾り」。年少比丘、上座の前に在りて懺悔する、應さに是の五法を以てすべし。優波離復問ふ、年少の客比丘、上座舊比丘を禮する、應さに幾法を以てすべき。佛告げて言はく、「年少の客比丘、應さに五法を以て、上座舊比丘を禮すべし。應さに偏へに右の肩を露はし、革屣を脫し、右膝地に著け、上座の兩足を捉りて言ふべし、「大德我れ和南す、是れを五法と爲す」。年少舊比丘、

に與めに親厚を作すべし。上の句に反する是れなり。五法あり、應さに差して比丘尼に敎授すべし、若しは具さに波羅提木叉戒を持ち、多聞にして、善く語言に巧みに、慈心辯說了々として、聽者をして解を得せしむ、佛の爲めに出家して重罪を犯さず、二十臘、若しは二十を過ぐ、是れを五と爲す。五法あり、正法をして疾く滅せしむ。何等か五なる。比丘あり、諦に受誦せず、憙んで忘誤す、文具足して以て餘人に敎へず、文既に具せず、其の義闕くるあり、是れを第一疾滅正法と爲す。復次ぎに比丘あり、僧中の勝人上座たり、若しは一國の宗とする所、而も多く持戒をたず、但諸の不善法を修す、戒行を放捨し、勤めて精進せず、未だ得ずして得、未だ入らずして入り、未だ證せずして證す、後生の年少の比丘、其の行ひを倣習し、亦多く戒を破り、不善法を修し、戒行を放捨す、亦勤めて精進せず、未だ得ずして而も得、未だ入らずして而も入り、未だ證せずして而も證す、是れ第二の疾滅正法と爲す。復次ぎに比丘あり、多聞にして法を持ち、律を持ち、摩夷を持つ、所誦を以て、餘の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆私を敎へず、便ち命終す、彼れ既に命終して、法をして斷滅せしむ、是れを第三疾滅正法と爲す。復次ぎに比丘あり、敎授すべきこと難し、善言を受けず、忍辱すること能はず、餘の善比丘は卽ち捨遣す、是れを第四疾滅正法と爲す。復次ぎに比丘あり、憙んで鬪諍し、共に相罵詈す、彼此諍うて言はく、「口は刀劍の如く、互に長短を求む」、是れを第五の疾滅正法と爲す。復五法あり、正法をして久住せしむ。上の句に反する是れなり。比丘に正法あり、將つて伴行と作すべからず、憙んで大に前行に在り、憙んで大に後に在り、憙んで人の語次を抄斷す、善惡語を別たず、善語は讃せず、惡言を稱美す、如以に利を得、時を以て彼れが爲めに受けず。是の五法あり、將つて伴行もと作すべからず。五法あり、應さに將つて伴行と作すべし。上の句に反する是れなり。比丘に五法あり、而も自ら損減す、犯すあれば、有智者の爲めに呵せられて、罪を得ること無量なり、人を染汚して清淨ならしめず、彼れが爲めに犯を作して無犯を作さず、若し彼れの自言を受くるも、自言法の如く

已に戒序を說き、四波羅夷を說き竟らば、應さに僧に白して言ふべし、「餘は僧の常に聞くが如し」。序を說き、四波羅夷を說き、十三僧殘を說き已らば、應さに僧に白して言ふべし、「餘は僧の常に聞くが如し」。序・四波羅夷・僧殘・二不定を說き已らば、應に僧に白して言ふべし、「餘は僧の常に聞くが如し」。若しは廣く說く、是れを五と爲す。復五あり、若し序・四波羅夷・僧殘を說き竟らば、應さに僧に白して言ふべし、「餘は僧の常に聞くが如し」。若し序・四波羅夷・僧殘・二不定を說き竟らば、應さに僧に白して言ふべし、「餘は僧の常に聞くが如し」と。序・四波羅夷・僧殘・二不定・三十尼薩耆波逸提を說き竟らば、應さに僧に白して言ふべし、「餘は僧の常に聞くが如し」、若しは廣く說く、是れを五と爲す。復五あり、序・四波羅夷・僧殘を說き竟らば、應さに僧に白して言ふべし、「餘は僧の常に聞くが如し」。是くの如く、一一增し、乃至波逸提、若しは廣く說く、是れを五と爲す。五法あり、差して分粥人と爲すべからず、若し已に差せば、分つべからず。（上の房舍犍度の中に說くが如し。）五事の因緣を以て、功德衣を受けて畜ふることを得。長老・離衣宿・別衆食・展轉食・不囑入村、此の五事の因緣あり、功德衣を受く、功德衣を受け已りて五事を得、（即ち上の句に反する是れなり。）五事の因緣あり、僧伽梨を留む、若しは恐怖あり、若しは恐怖あるを疑ふ、若しは雨、若しは雨ふるべきを疑ふ、若しは經營して僧伽梨を作るに、若しは浣ひ、若しは染め、若しは深く藏擧す、是れを五事の因緣と爲し、僧伽梨を留む。五事の因緣を以て雨衣を留む。若しは界外の請食を受け、若しは水を渡る、若しは病す、若しは飽食已る、若しは經營して雨衣を作るに、若しは浣ひ、若しは染め、若しは深く藏擧す、此の五事の因緣を以て雨衣を留む。夏安竟らば、應さに五事を作すべし。自恣、應さに界を解くべし、應さに還た結界すべし、功德衣を受く、應さに臥具を分つべし、是れを五と爲す。比丘に五法あり、與めに親厚を作すべからず、若しは鬪諍を憙ぶ、若しは多く作業す、若しは衆中の勝比丘と共に諍ふ、若しは遊行を憙みて止まず、止だ人の爲めに說法するに、人の善惡を言示す、是れを五と爲す。五法あり、應さ

破戒の惡人、死して惡道に墮す、是れを五と爲す。持戒に五の功德あり、即ち上の句に反する是れなり。揚技を嚼まざるに五の過失をり、口氣臭し、善く味を別たず、熱癊消せず、食を引かず、眼明ならず、是れを五と爲す。楊枝を嚼むに五事の好きあり。即ち上の句に反する是れなり。粥を食ふに五事好し。飢を除く、渇を解く、宿食を消す、大小便通利す、風を除く、是れを五と爲す。經行に五事の好きあり、遠行に堪ゆ、能く思惟す、病少し、食飲を消す、定を得て久住す。五種の食あり、飯・乾飯・麨・肉・魚なり。五種の鹽あり、青鹽・黑鹽・毘茶鹽・嵐婆鹽・支都毘鹽、是れを五と爲す。復五種の鹽あり、土鹽・灰鹽・赤鹽・石鹽・海鹽、是れを五と爲す。佉闍尼食に五事あり、食すべからず。若しは非時、若しは不淨、若しは不與、若しは不受、若しは餘食法を作さず、是れを五と爲す。五事あり、應さに食すべし。即ち上の句に反する是れなり。五種の受食あり、身にし與へ身にて受く、衣にて與へ衣にて受く、肘を曲げて與へ肘を曲げて受く、器にて與へ器にて受く、時の因緣あり、地に置いて取る、是れを五と爲す。復五あり、身にて與へ身にて受く、或は身にて與へ物にて受く、或は物にて與へ身にて受く、或は物にて與へ物にて受く、或は遙に擲つて與へ得て手中に墮つ、是れを五と爲す。五種の淨菓あり、火淨・刀淨、若しは瘡淨、若しは鳥淨、若しは不任種淨、是れを五と爲す。復五あり、若しは少油を剝ぐ、若しは都べて剝ぐ、若しは腐爛す、若しは破る 若しは擲ゆ、是れを五と爲す。五種の脂あり、羆脂油・驢脂皮・猪脂油・首摩羅油、是れを五と爲す。五種の皮あり、用ふべからず、師子皮・虎皮・豹皮・獺皮・猫皮、是れを五と爲す。復五種の皮あり、人皮・毒蟲皮・狗皮・錦文蟲皮・野狐皮、是れを五と爲す。五種の皮あり、畜ふべからず、象皮・馬皮・駝皮・牛皮・驢皮、是れを五と爲す。復五あり、羖羊皮・白羊皮・鹿皮・熊皮・伊師皮、是れを五と爲す。五種の肉あり、食すべからず、象肉・馬肉・人肉・狗肉・毒蟲獸肉、是れを五と爲す。復五あり、師子肉・虎肉・豹肉・熊肉・羆肉、是れを五と爲す。五種の說戒あり、或は序を說き已る、應さに僧に白して言ふべし、「餘は僧の常に聞くが如し」。若し

の如き悪人を見んと、人の死屍を見て、恐畏を生じ、悪鬼をして便を得しむるが如し。我れ此の人説を説くこと、亦復是くの如し。身口意業不淨の者あり、不善人と共に住す、彼の死屍の處、悪獣非人の共に住するが如し、我れ此の人を説くこと、亦復是くの如し。是れを犯戒人の五事の過失は、彼の死屍の如しと爲す。不忍辱の人に、五の過失あり、一には凶悪にして忍びず、二には後に悔恨を生ず、三には多人愛せず、四には悪聲流布す、五には死して悪道に墮す、是れを五と爲す。能く忍辱する人に、五の功德あり。（即ち上の句に反する是れなり。）火に向ふに五の過失あり、一に人をして顏色なからしむ、二に力なし、三に人をして眼闇からしむ、四に人をして多鬧集せしむ、五に多く俗事を説く、是れを五と爲す。常に憙んで白衣の家に往反する比丘に、五の過失あり、一に比丘に囑せずして便ち村に入る、二に欲意ある男女の中に在り、三に獨り坐す、四には屛處覆處に在りて坐す、五に有知の男子あることなし、女人の與めに説法し、五六語を過ぐ、是れを五と爲す。復五あり、一に數ば女人を見る、二に既に相見れば、相附近す、三に轉た親厚なり、四に已に親厚にして欲意を生ず、五に已に欲意あり、或は死罪、若しは次死罪を犯す、是れを五と爲す。散亂心の眠りに五の過失あり、若しは悪夢を見る、諸天祐護せず、心に法を思はず、繫意して明に在らず、不淨を失す、是れを五と爲す。不散亂心の眠りに五の功德あり。（即ち上の句に反する是れなり。）飲酒に五の過失あり、顏色なし、體に力なし、眼闇し、憙んで瞋相を現ず、財物を失ふ、是れを五と爲す。復五事あり、病を生ず、鬪諍を益す、無名流布す、智慧轉た少し、死して悪道に墮す、是れを五と爲す。是れを五と爲す。破戒に五の過失あり、自ら害す、智者の爲めに呵せらる、悪名の流布するあり、臨終の時に悔恨を生ず、死して悪道に墮す、是れを五と爲す。持戒に五の功德あり。（即ろ上の句に反する是れなり。）復五事あり、先きに未だ得ざる所の物は得ること能はず、既に得て護らず、若しは所在の衆に隨ひ、若しは刹利衆・婆羅門衆、若しは居士衆、若しは比丘衆、中に於て愧耻あり、無數由旬内の沙門・婆羅門、其の悪を稱説し、

白衣をして信ぜざらしむ。上の闘諍白衣の句の如し。白衣に五法あり、僧與めに覆鉢を作すべからず。若し父母に孝ふらず、沙門婆羅門を敬せず、比丘に事へず、是れを五と爲す。白衣に五法あり、僧與めに覆鉢を作すべし。即ち上の句に反する是れなり。五法あり、僧應さに與めに覆鉢を作すべし。比丘を罵謗し、比丘の爲めに損減を作し、無利益を作し、無住處を作し、比丘を闘亂せしむ、是れを五と爲す。復五法あり、比丘の前に於て、佛法僧を毀り、無根不淨行を以て比丘を謗り、比丘尼を犯す、是れを五と爲す。五事の毀訾あり、波逸提罪を得。義を以てせざるが故に、法を以てせざるが故に、毘尼を以てせざるが故に、教授を以てせざるが故に、親を以てせざるが故に、是の五事の毀訾あり、波逸提を得。復毀訾あり、波逸提を得ず。即ち上の句に反する是れなり。若し比丘僧、差するに五事を以しせず、未受大戒人に向つて、他の犯を説かば波逸提を得、若しは名字、若しは種姓、若しは相、若しは衣、若しは房舍を説く、是れを五事と爲す。五處の行婬あり、波羅夷を犯す、婦人・童女・二根・黃門・男子、是れを五と爲す。五種の盜あり、波羅夷を犯す。若しは自ら取る、若しは指示して取る、若しは使を遣はして取る、若しは重物、若しは本處を移す、是れを五と爲す。復五事あり、若しは已有想にあらず、不暫取・不親厚取、若しは重物、本處を移す、是れを五と爲す。復五あり、是れ他有、他他想を作す、若しは重物、若しは盜心を作す、若しは本處を移す、是れを五と爲す。死人に五不好あり、一に不淨、二に臭、三に恐畏あり、四に人をして恐畏して惡見をして便を得せしむ、五に惡獸非人所住の處、是れを五と爲す。犯戒人に五の過失あり、身口意業の不淨あり、彼の死屍の不淨なるが如し、我れ是の人を説く、亦是くの如し。或は身口意業の不淨あり、惡聲流布するは、彼の死屍の臭氣の、從つて出づるが如し、我れ此の人を説く、亦復是くの如し。彼れに身口意業の不淨あり、諸の善比丘畏れ避く、彼の死屍の、人をして恐怖せしむるが如し、我れ此の人を説く、亦復是くの如し。身口意業の不淨あり、諸の善比丘をして、之を見て惡心の言を生ぜしむ、我れ云何が乃ち是く

戒・破見・破威儀、佛及び僧を毀る、是れを五と爲す。復五あり、破戒・破見・破威儀、法及び僧を毀る、是れを五法と爲す、應さに與めに呵責羯磨を作すべし。是くの如く擯羯磨・遮不至白衣家羯磨、若しは擧羯磨も亦是くの如し。五法あり、呵責羯磨を作す、非法非毘尼にして羯磨成ぜず、處所を得ず。何等か五。擧を作さず、憶念を作さず、自言を作さず、非法別衆、是れを五と爲す。復五法あり、若しは不犯、犯して懺すべからず、若しは犯し已りて懺す、非法別衆是れを五法と爲す、羯磨成ぜず、處所を得ず。復五ありて懺法なり、羯磨成就し、處所を得。即ち上の句に反する是れなり。被呵責羯磨人に、五事ありて作すべからず。呵責犍度の中に說くが如し 被擧人に五法あり、解を爲すべからず、若しは比丘を罵謗し、方便して比丘の爲めに損減無利を作し、無住處を作し、若し界內界外に在りて、善比丘の禮拜供養を受く、無比丘の處に在りて住す、是の五法あり、解擧羯磨を爲すべからず。復五法あり、解擧羯磨を作すべし。即ち上の句に反する是れなり。若し比丘、不見罪擧羯磨を被らば、應さに五事を以て自ら觀察すべし。若し我れ罪を見ざれば、諸の比丘、我れと共に羯磨・說戒・自恣・同一房に宿せず、共同一坐せず、小食大食上に大小の次第に隨はず、執手禮拜恭敬問訊せず、是れを不見罪羯磨を被る者の、此の五事を以て自ら觀察すと爲す。不懺悔羯磨惡見不捨擧羯磨を被る、亦是くの如し 他の爲めに不見罪羯磨を作す者、亦應さに此の五事を以て自ら觀察すべし。不懺悔不捨惡見擧羯磨亦是くの如し 比丘に五法あり、僧爲めに遮不至白衣家羯磨を作すべからず。父母に敎ならず、沙門婆羅門を敬せず、善く受語せず、是の五法あり、爲めに遮不至白衣家羯磨を爲すべからず。五法あり、爲めに遮不至白衣家羯磨を作すべし。即ち上の句に反する是れなり。復五法あり、與めに遮不至白衣家羯磨を作すべし。喜んで白衣を罵謗す、方便して白衣家の爲めに損減無利益を作し、無住處を作し、白衣を鬪亂せしむ、是れを五法と爲す。復五法あり、白衣の前に在りて佛法僧を毀り、白衣を下業を作すと罵り、若しは白衣を調誑す、是れを五法と爲す。比丘に五法あり、白衣をして信ぜざらしむ。上の鬪亂白衣の句の如し。比丘復五法あり、

れば、善く除滅す、是れを五と爲す。五種の持律あり、戒序・四事・十三事・二不定、廣く三十事を誦す、是れ初持律なり、若し戒序・四事・十三事・二不定・三十事を誦し、廣く九十事を誦す、是れ第二持律なり、若し廣く戒毘尼を誦するは、是れ第三持律なり、若し廣く二部の戒毘尼を誦するは、是れを第四持律と爲す、若し都べて毘尼を誦するは、是れ第五持律なり、是の中春秋冬は、應さに上の四種に依りて持律すべし、若し依住せざれば突吉羅なり、夏安居は、應さに第五に依りて持律すべし、若し依住せざれば波逸提なり。持律の人に五の功德あり、戒品堅牢、善く諸寃に勝つ、衆中に於て決斷して畏れなし、若し疑悔あれば能く開解す、善く毘尼を持ちて、正法をして久住せしむ、是れを五と爲す。五種の賊心あり、黑闇心・邪心・曲戾心・不善心にして、常に他物を盜むの心あり、是れを五と爲す。復五種の賊あり、決定して取る、恐怯して取る、物に寄せて取る、見て便ち取る、倚託して取る、是れを五と爲す。復五種あり、罪人と同業なり、若しは人に敎授して賊を作す、若しは復賊の爲めに、先きに看て財物の處所を知り、還りて處を示す、若しは賊の爲めに物を守る、若しは賊の爲めに道を邏む、是れを五と爲す。復五種の犯あり、波羅夷・僧伽婆尸沙・波逸提・波羅提提舍尼・突吉羅、是れを五と爲す、亦五種制戒と名づけ、亦五犯聚と名づく。若し五犯を知らず、見ざるものは、我れ此の人を愚癡と說く。波羅夷・僧伽婆尸沙・波逸提・波羅提提舍尼・突吉羅、是れを五種犯と爲す、五種制戒も亦是くの如く、五犯聚も亦是くの如し、若し五犯の波羅夷・僧伽婆尸沙・波逸提・波羅提提舍尼・突吉羅を、知らず見ざれば、僧應さに與めに呵責羯磨を作すべし、五種制戒も亦是くの如し、五犯聚も亦是くの如し。復五種犯あり、或は犯にありて自ら心念懺悔す。或は小罪を犯すありて他に從つて懺悔す、或は中罪を犯すあり、亦他に從つて懺悔す、或は重罪を犯すありて、他に從つて懺悔す、或は罪ありて懺悔すべからず。五法あり、僧應さに與めに呵責羯磨を作すべし、破戒・破見・破威儀、若しは佛及び法を毀る、是れを五と爲す。復五法あり、破

語りて言はく、「今汝を驅り去る、汝復我が房に入ること勿れ、復我れを營勞すべからず、我が住に依止すべからず、共に語らざれ」是を阿闍梨、五法にて弟子を遣ると爲す。弟子に五法あり、和尚阿闍梨の爲めに驅遣せらる。無慚、無愧にして教呵すべからず、威儀に非ず、恭敬せず、弟子に是の五法あり、和尚阿闍梨の爲めに驅遣せらる。復五法あり、無慚無愧にして教師すべからず、惡知識に親しむ、數ば婬女の家に往く、是の五法あり、和尚阿闍梨の爲めに遣らる。是くの如く、喜んで婦女・大童女の家・黃門め家、若しは比丘尼の間、若しは式叉摩那の間、若しは沙彌尼の間、捕獵魔人の間に往く。是くの如く、等しく上の四事を足し、五五を句と爲す、婬女の句の如し。五種の與欲あり、一には言與欲、二には我が爲めの故に欲を說く、三には身相を現ず、四には口語、五には身相口語、是れを五種の與欲と爲す。五種の失欲あり、若し受欲の比丘死し、若しは休道に至る、若しは外道に至る、若しは別部の僧中に往く、若しは戒場上に至りて明相出づ、是の五種ありて與欲を失ふ。五種の淸淨を與へ、自恣を與ふるあり。亦是くの如し、若し失ふも亦是くの如し。如來世に出でたまひ、諸の比丘の過失あるを見るが故に、五種の利義を以て護臥具法を制したまひ、風飄雨漬日曝塵坌せしめず、鳥汚せしめず、是れを五と爲す。和尚に五非法あり、第子應さに懺悔して去るべし。應さに和尚に語りて言ふべし、「我れ如法なるも和尚は知らず、我れ不如法なるも和尚は知らず、若し我れ戒を犯すも、捨てゝ教呵せず、若し犯すも亦知らず、若し犯して懺悔するも亦知らず」、和尚是くの如きの五法あり、第子應さに懺悔して去るべし。毘尼に五事の答あり、一に序、二に制、三に重制、四に修多羅、五に隨順修多羅なり、是れを五と爲す。五法あり、名けて持律と爲す。犯を知り、不犯を知り、輕を知り、重を知り、廣く二部の戒を誦す、是れを五と爲す。復五法あり、犯を知り、不犯を知り、輕を知り、重を知り、廣く毘尼を誦す、是れを五と爲す。復五法あり、犯を知り、不犯を知り、輕を知り、重を知り、廣く毘尼を誦す、是れを五と爲す。復五法あり、犯を知り、不犯を知り、輕を知り、重を知り、毘尼に住して動かず、是れを五と爲す。復五法あり、犯を知り、不犯を知り、輕を知り、重を知り、諍事起

こと能はず、淨行を増し、波羅提木叉戒を増すこと能はず、惡見あるも捨てゝ善見に住すること能はず、年五歳に滿たず、是の五法あり、依止なくして住すべからず。五法あり、依止なくして住すべし。即ち上の句に反する是れなり。復五法あり、依止なくして住すべからず、諍を知らず、諍の起るを知らず、諍の滅するを知らず、滅諍に向ふを知らず、五歳に滿たず、是の五法あり、依止なくして住すべからず、犯を知らず、懺悔を知らず、善く入定するを知らず、善く出定するを知らず、年五歳に滿たず、是の五法あり、依止なくして住すべからず。五法あり、依止なくして住するを得。即ち上の句に反する是れなり。復五法あり、依止なくして住すべからず、犯を知らず、不犯を知らず、輕を知らず、重を知らず、廣く二部の毘尼を誦せず、是の五法あり、依止なくして住すべからず。五法あり、依止なくして住することを得。即ち上の句に反する是れなり。復五法あり、依止を失ふ、若しは驅出し、若しは去る、若しは休道し、若しは休して依止を與へず、若しは戒場上に至る。是の五法あり、依止を失ふ。若しは死し、若しは去り、若しは休道し、若しは休して依止を與へず、若しは五歳若しは五歳を過ぐ、是の五法あり、依止を失ふ。復五法あり、依止を失ふ。若しは死し、若しは去る、若しは休道し、若しは休して依止を與へず、若しは本和尚を見る、是の五法あり、依止を失ふ。復五法あり、依止を失ふ。若しは死し、若しは去り、若しは休道し、若しは休して依止を與へず、若しは和向、阿闍梨命過す、是の五法あり、依止を失ふ、復五法あり、依止を失ふ、若しは死し、若しは去り、若しは休道し、若しは休して依止を與へず、若しは和尚、阿闍梨休道す、是の五法あり、依止を失ふ。復五法あり、依止を失ふ。若しは死し、若しは去り、若しは休道し、若しは休して依止を與へず、若しは還りて本和尚に隨ふ、是の五法あり、依止を失ふ。五法あり、弟子を驅遣す、若しは和尚、弟子に語りて言はく、「今汝を驅り去る、汝我が房に入るべからず、汝復我れを營勞すべからず、復我が所に至るべからず、共に語らざれ、是れを和尚の、五法弟子を驅遣すと爲す」。阿闍梨五法あり、弟子を驅遣す、

若しは可なりと言ひ、若しは是なりと言ひ、若しは善く自ら修行すと言ひ、若しは放逸ならずと言ふ、是れを五種の、依止法を與ふと言ふ。五種の人に依止法を與ふるあり、若しは善い哉と言ひ、若しは好しと言ひ、若しは起てと言ひ、若しは去れと言ひ、若しは依止を與ふと言ふ、是れを五種の依止を與ふと爲す。五法あり、依止なくして住すべからず、戒なく、定なく、慧なく、解脱慧なく、見解脱慧なし、是の五法あり、依止なくして住すべからず。五法あり、依止なくして住すべし、即ち上の句に反する是れなり。復五法あり、依止なくして住すべからず、若し戒なく、又自ら學戒を勤修する能はず、定なく、慧なく、解脱慧なく、見解脱慧なし、又自ら戒定慧解脱慧見解脱慧を勤修する能はず、是の五法あり、依止なくして住すべからず。五法あり、依止なくして住すべし。即ち上の句に反する是れなり。復五法あり、依止なくして住すべからず、具さに二百五十戒を持たず、多聞せず、自ら毘尼、阿毘曇を學する能はず、若し惡見の心生ずるも、開解して善見を習ふ能はず、是の五法あり、依止なくして住すべからず。五法あり、依止なくして住すべし。即ち上の句に反する是れなり。復五法あり、依止なくして住すべからず、具さに二百五十戒を持たず、多聞せず、毘尼、阿毘曇を學する能はず、五歳に滿たず、是の五法あり、依止なくして住すべからず。五法あり、依止なくして住すべし。即ち上の句に反する是れなり。復五法あり、依止なくして住すべからず、自ら毘尼、阿毘曇を學すること能はず、惡見生じ、捨てゝ善見に住すること能はず、若し所住所を樂しまざるも、至樂の處に移ること能はず、疑悔心の生ずるあるも、如法に開解すること能はず、是の五法あり、依止なくして住すべからず。五法あり、依止なくして住するを得。即ち上の句に反する是れなり。復五法あり、依止なくして住すべからず、自ら增戒・增心・增慧學を勤修すること能はず、病あるも、自ら將つて養ふこと能はず、亦他をして己れの爲めに瞻病せしむること能はず、年五歳に滿たず、是の五法あり、依止なくして住すべからず。五法あり、依止なくして住するを得。即ち上の句に反する是れなり。復五法あり、依止なくして住すべからず、自ら威儀戒を勤修する

あり、人に大戒を授くべからず。五法あり、人に大戒を授くべし。即ち上の句に反する是れなり。復五法あり、人に大戒を授くべからず、具さに波羅提木叉戒を持たず、多聞せず、弟子に戒增學を敎へず、若し弟子惡見あるも、弟子を敎へて惡見を捨て、善見に住せしむる能はず、善く毘尼を誦せず、此の五法あり、人に大戒を授くべからず。五法あり、人に大戒を授くべし。即ち上の句に反する是れなり。復五法あり、人に大戒を授くべからず、具さに波羅提木叉戒を持たず、多聞せず、弟子に增戒學を敎へず、若し弟子所住處を樂まざるも、移りて樂處に至ること能はず、堅く毘尼に住せず、是の五法あり、人に大戒を授くべからず。五法あり、人に大戒を授くべし。即ち上の句に反する是れなり。復五法あり、人に大戒を授くべからず、具さに二百五十戒を持たず、多聞せず、弟子に增戒學を敎へず、弟子疑ひあるも佛法の如く解釋すること能はず、諍事を決斷すること能はず、是の五法あり、人に大戒を授くべからず。五法あり、人に大戒を授くべし。即ち上の句に反する是れなり。是くの如く增心學・增慧學・增威儀學・增淨行學・增波羅提木叉學是くの如く、五五句を爲すこと上の如し。若し比丘、調順無畏にして能く語言するに堪ゆ。自ら此の事あり、亦能く弟子を敎ふ。是くの如き人は、人に大戒を授くべし。他に依止を與ふぐし、沙彌を畜ふべし、差して比丘尼を敎授すべし、若し已に差すれば敎授すべし。五種の人あり、大戒を受くることを得ず。自ら言ふ邊罪を犯すと、比丘尼を犯す、若しは賊心にて戒を受く、內外道黃門を破す、是の五法あり、大戒を受くべからず。復五種の人あり、大戒を受くべからず、父を殺し、母を殺し、阿羅漢を殺し、僧を破し、惡心にて佛身より血を出す、是の五法あり、大戒を受くべからず。五種の黃門あり、生黃門・形殘黃門・妬黃門・變黃門・半月黃門、是れを五種黃門と爲す。五種病人あり、大戒を受くべからず、癩、若しは癰疽・白癩・乾枯・癲狂、是くの如きの五種の病人は、大戒を受くべからず、五種の清淨無難あり、大戒を受くべし。是れ丈夫、負債せず、奴に非ず、年二十に滿つ、父母聽す、是くの如きの五清淨無難は、大戒を受くべし。五法あり、人に依止を與ふ、若しは能くすと言ひ、

曇を敎ふる能はず、十歲に滿ぜず、是の五法あれば、人に大戒を授くべからず。五法あり、人に大戒を授くべし。即ち上の句に反する是れなり。復五法あり、人に大戒を授くべからず、具さに波羅提木叉戒を持たず、弟子に毘尼・阿毘曇を敎ふること能はず。若しは弟子に惡見あるも敎へて惡見を捨て、善見に住せしむること能はず、此の五法あり、人に大戒を授くべからず。四法あり、人に大戒を授くべし。即ち上の句に反する是れなり。復五法あり、人に大戒を授くべからず、弟子に毘尼、阿毘曇を敎ふる能はず。若し弟子惡見あるも、敎へて惡見を捨て、善見に住しむる能はず、若し弟子所住處を樂まず、移つて樂處に至らること能はず、若し弟子に疑悔心の生ずるありて、佛法の如く開解すること能はず。此の五法あり、人に大戒を授くべからず。五法あり、人に大戒を授くべし。即ち上の句に反する是れなり。復五法あり、人に大戒を授くべからず、弟子に毘尼、阿毘曇を敎ふる能はず、若し弟子に惡見あるも、敎へて惡見を捨て、善見に住せしむること能はず、若しは所住處を樂まず、移りて樂處に至ること能はず、若しは十歲を滿ぜず、是の五法あり、人に大戒を授くること能はず。五法あり、人に大戒を授くべし。即ち上の句に反する是れなり。復五法あり、人に大戒を授くべからず、波羅提木叉戒を知らず、亦說くこと能はず、布薩を知らず、布薩羯磨を知らず、十歲を滿ぜず、是の五法あり、人に大戒を授くべからず。五法あり、人に大戒を授くべし。即ち上の句に反する是れなり。復五法あり、人に大戒を授くべからず、善く犯すを知らず、善く犯して懺悔するを知らず、善く入定せず、善く出定せず、十歲を滿ぜず、是の五法あり、人に大戒を授くべからず、五法あり、人に大戒を授くべし。即ち上の句に反する是れなり。復五法あり、人に大戒を授くべからず、犯を知らず、不犯を知らず、輕を知らず、重を知らず、十歲を滿ぜず、是の五法あり、人に大戒を授くべからず。五法あり、人に大戒を授くべし。即ち上の句に反する是れなり。復五法あり、人に大戒を授くべからず、具さに波羅提木叉戒を持たず、多聞ならず、弟子に戒增學を敎ふる能はず、瞻病する能はず、與に病人を瞻る能はず、若しは差し、乃至死す。廣く二部毘尼を誦せず、是の五法

句に反する是れなり。復五法あり、人に大戒を授くべからず、不信と無慚と無愧と懈怠と多忘となり、是くの如きの五法あり、人に大戒を授くべからず。五法あり、人に大戒を授くべし。即ち上の句に反する是れなり。復五法あり、人に大戒を授くべからず、増戒・増心・増慧學を知らず、白を知らず、羯磨を知らず、是の五法あり、人に大戒を授くべからず。五法あり、人に大戒を授くべし。即ち上の句に反する是れなり。復五法あり、人に大戒を授くべからず、威儀戒を知らず、増淨行を知らず、波羅提木叉戒を知らず、白を知らず、羯磨を知らず、是の五法あり、人に大戒を授くべからず。五法あり、人に大戒を授くべし。即ち上の句に反する是れなり。復五法あり、人に大戒を授くべからず、犯すことを知らず、犯し已りて懺悔することを知らず、犯し已りて懺悔すれば清淨なることを知らず、白を知らず、羯磨を知らず、是の五法あり、人に大戒を授くべからず、五法あり、人に大戒を授くべし。即ち上の句に反する是れなり。復五法あり、人に大戒を授くべからず。有難の法を知らず、無難法を知らず、白を知らず、羯磨を知らず、十歳を滿ぜず、是の五法あり、人に大戒を授くべからず。五法あり、人に大戒を授くべし。即ち上の句に反する是れなり。復五法あり、人に大戒を授くべからず、人に増戒學・増心學・増慧學を教ふること能はず、瞻病と作ること能はず、亦與に病人を瞻ること能はず、若しは差し、若しは乃至死す、若しは十歳に滿ぜず、是の五法あれば、人に大戒を授くべからず。五法あり、人に大戒を授くべし。即ち上の句に反する是れなり。復五法あり、人に大戒を授くべからず、弟子に増威儀戒・増淨行・増波羅提木叉戒を敎ふる能はず、若しは弟子に惡見あるも、方便して敎へて惡見を捨て、善見に住せしむる能はず、若しは十歳を滿ぜず、是の五法あり、人に大戒を授くべからず。五法あり、人に大戒を授くべし。即ち上の句に反する是れなり。復五法あり、人に大戒を授くべからず、犯を知らず、不犯を知らず、輕を知らず、重を知らず、廣く二部毘尼を誦せず、是の五法あり、人に大戒を授くべからず。五法あり、人に大戒を授くべし。即ち上の句に反する是れなり。復五法あり、人に大戒を授くべからず、具さに波羅提木叉を持たず、多聞ならず、弟子に毘尼・阿毘

て、多く不淨行非沙門を作す、汝當さに還りて、彼の居士を敎化し、信ぜしむべし。若し汝隨順して居士を敎化し、信ぜしむること能はずんば、汝此に在りて住することを得ず、若し能く隨順して居士を敎化すれば、汝の此に在りて住することを聽す。若し復隨順して居士を敎化し、信ぜしむること能はずんば、諸の比丘、汝と同羯磨・說戒・自恣・共住・同一坐せず、小食大食上に於て次を以て坐せず、亦迎逆・執手・禮拜・問訊なし。若し汝能く隨順して彼の居士を敎化し、信ぜしむれば、當さに汝と同羯磨、乃至禮拜問訊すべし。是れを四の信法と爲す。若し居士、居士兒も亦是くの如し。四の非聖法あり、見ずして見ると言ひ、聞かずして聞くと言ひ、觸れずして觸ると言ひ、知らずして知ると言ふ、是れを四の非聖法と爲す。四の聖法あり、即ち上の句に反する是れなり。四の非聖法あり、見るを見ずと言ひ、聞くを聞かずと言ひ、觸るゝを觸れずと言ひ、知るを知らずと言ふ、是れを四の非聖法と爲す。四の聖道あり、即ち上の句に反する是れなり。四語捨戒あり、佛を捨て、法を捨て、僧を捨て、和尙を捨つ、是れを四語捨戒と爲す。是くの如く佛法僧を捨つるを首と爲し、乃至沙門釋子に非ず、四四を句と爲すこと亦是くの如し。四利義を以ての故に、如來出世し、諸の比丘の爲めに戒を制し、僧を攝取し、乃至正法久住なり。四四を句と爲すこと、亦是くの如し。四利義あるが故に、如來出世したまひ、諸の比丘の爲めに、呵責羯磨を制し、僧を攝取し、乃至正法久住なり。四四を句と爲す亦是くの如し。乃至七滅諍も亦是くの如し』。

爾の時世尊、王舍城に在して、諸の比丘に告げたまはく『五法あり、人に大戒を授くべからず。若しは戒なく、定なく、慧なく、解脫慧なく、見解脫慧なし、是の五法ありて、人に大戒を授くべからず。復五法あり、人に大戒を授くべし。即ち上の句に反する是れなり。復五法あり、人に大戒を授くべからず、自ら戒なく、定なく、慧なく、解脫慧なく、見解脫慧なく、亦人を敎へて、戒定慧乃至見解脫に住せしむる能はず、是の五法あり、人に大戒を授くべからず。五法あり、人に大戒を授くべし。即ち上の

卷の第五十九（第四分の十）

毘尼增一の三

爾の時世尊、波羅榇に在しき。世尊知りて故らに阿難に問ひたまふ。『我れ穀貴き時に於て、諸の比丘を慈愍するが故に、四事を放捨す、內宿・內煮・自煮・自取食なり。今諸の比丘、故ほ食ふや。』阿難、佛に白して言さく、『故ほ食ふ。』佛、阿難に言はく、『食ふべからず、若し食へば法の如く治す』。佛、阿難に告げたまはく、『我れ穀貴き時を以て、諸の比丘を愍むが故に此の法を聽す、朝に小食を受け、彼れに從つて持ち來れる、若しは胡桃菓等、及び水中の可食物、是くの如き等故ほ食するや』。阿難答へて言はく、『爾り』。佛言はく、『食ふべからず、若し食へば法の如く治す。四法あり、呵責羯磨を作すは、非法非毘尼なり、羯磨成ぜず、處所を得ず。何等か四。無根の破戒・破見・破威儀・破正命なり、是れを四法と爲す。四法あり、呵責羯磨を作す、如法如毘尼なり、羯磨成就し、處所を得。即ち上の句に反する是れなり。四大賊あり、何等か四。或は大賊あり、是くの如きの意を生ず、若し百人千人を得、某甲城邑を破せん。異時に於て百人千人を得、彼の城邑を破す。是くの如きの惡比丘是の念を作さく、「我れ何の處に、當さに百人衆、千人衆を得て、某甲城邑に於て遊行すべき」。彼れ異時に於て、百人若しは千人を得、彼の城邑に遊行す、是れを第一大賊と爲す。復次ぎに大賊あり、淨行に非ずして、自ら是れ淨行と言ふ、是れを第二大賊と爲す。復次ぎに大賊あり、口腹を以ての故に、眞實ならず、已有に非ず、大衆の中に於て、故らに妄語を作し、自ら上人法を得たりと稱す、是れを第三大賊と爲す。復大賊あり、僧の華葉菓蓏を以て、以て自ら活命す、是れを第四大賊と爲す。四の信法あり、若し比丘、城廓村落に於て、多くの不淨行、非沙門法を作す。是の中應さに隨順して居士に教授して信ぜしむべし。彼の比丘、此の比丘に語りて言はく、「汝、某甲城邑村落に於

り。四法あり、應さに差して分粥人と作すべし。（即ち上の句に反する是れなり。）小食を分ち、佉闍尼食を分つ、會に差し、若しは臥具を敷き、臥具を分ち、雨浴衣を分ち、衣を分ち、取與するに、比丘使を差し、乃至沙彌使を差すも、亦是くの如し。四法あり、直ちに地獄に入る、猶ほし射箭のごとし。（即ち上に諸の知事を差すは是れなり）四非法あり、說戒を遮し、無根破戒破見破威儀破正命を遮す、是れを四の如法遮說戒と爲す。四淸淨あり、持戒淸淨・見淸淨・威儀淸淨・正命淸淨なり、是れを四淸淨と爲す。四依止法あり、糞掃衣・乞食・樹下坐・腐爛藥、是れを四依止法と爲す。四種の損法あり、或は有智にして能く忍ぶ、或は有智にして能く親近す、或は有智にして能く解す、或は有智にして能く斷ず、是れを四種の損法と爲す』。

四分律卷第五十八

からず、法別衆羯磨も爾すべからず、法和合衆羯磨は應さに爾すべし、是れ我が聽す所なり。非法別衆羯磨は、羯磨成ぜず、非法和合衆羯磨は、羯磨成ぜず、法別衆羯磨成ぜず、法和合衆羯磨は羯磨成就す。非法別衆羯磨は、處所を得ず、非法和合衆羯磨は處所を得ず、法別衆羯磨は、處所を得ず、法和合羯磨は處所を得。四種の布薩あり、三語布薩・淸淨布薩・說波羅提木叉布薩・自恣布薩なり。四妄語あり、波羅夷妄語・僧殘妄語・波逸提妄語・毘尼阿毘婆羅妄語なり。四衆あり、比丘衆・比丘尼衆・優婆塞衆・優婆夷衆なり。復四衆あり、刹利衆・婆羅門衆・居士衆・沙門衆なり。復四衆あり、四天王衆・忉利天衆・魔衆・梵衆なり。復四衆あり、愛恚怖癡衆なり。復四衆あり、不愛・不恚・不怖・不癡衆なり。四種の智慧平斷事人あり、人あり、身に惡を現ぜず、口に現ず、人あり、口に惡を現ぜず、身に現ず。人あり、身口に惡を現ず。人あり、身口に惡を現ぜず。云何が身に惡をぜず、口に現ずる。或は人あり、身に惡を現ぜず、口に言ひて指授し、與に共に同じく見る、是れを身に惡を現ぜず、口に現ずと爲す。云何が口に惡を現ぜず、身に現ずる。人あり、身に惡を現じ、口に指授せず、與に同じく見ず、是れを口に惡を現ぜず、身に現ずと爲す。云何が身に惡を現ぜず口に惡を現ぜざる。人あり、身に惡を現ぜず、口に指授せず、與に同じく見ず、是れを身口に惡を現ぜずと爲す。云何が身口に惡を現ずる。人あり、身に惡を現じ、口語指授して與に同じく見る、是れを身に惡を現じ、口に惡を現ずと爲す。是れを四種の有智の平斷事人と爲す。比丘に四法あり、自ら損して犯すあり、有智者の爲めに責められ、多く罪を得しむ。何等か四なる。愛あり、恚あり、怖あり、癡あり、比丘に是の四法ありて自ら損し、有智者の爲めに責められ、多罪を得しむ。比丘に四法あり、自ら損せず。（上の句に反する是れなり。）四法あり非道に趣く、愛あり、恚あり、怖あり、癡あり、是れを四と爲す。四法あり、非道に趣かず。（即ち上の句に反する是れなり。）四法あり、差して分粥人と爲すべからず、未だ差せざるは差すべからず、若し已に差すれば、分つべからず、愛あり、恚あり、怖あり、癡あ

す、此れは是れ第四犯畏なり。四種の犯人あり、若し比丘罪を犯さば、餘の比丘語りて言はく、「汝罪を犯す、見るや不や」。彼れ言はく、「見ず」。比丘復語りて言はく、「長老、若し罪を見ば、當さに懺悔すべし」。此れは是れ第一犯人なり。若し比丘罪を犯さば、餘の比丘語りて言はく、「長老、汝罪を犯す、見るや不や」。彼れ言はく、「見ず」。比丘復語りて言はく、「長老、若し罪を見ば、應さに僧中に懺悔すべし」と。此れは是れ第二犯人なり。若し比丘罪を犯さば、餘の比丘語りて言はく、「長老罪を犯す、見るや不や」。彼れ言はく、「見ず」。比丘復語りて言はく、「若し長老罪を見ば、當さに此の僧中に於て懺悔すべし」。此れは是れ第三犯人なり。若し比丘罪を犯さば、餘の比丘語りて言はく、「長老、汝罪を犯す、見るや不や」。彼れ言はく、「見ず」。時に僧應さに都べて捨棄すべし。是くの如き言を語る、「汝の意に隨つて、所至の所に去れ、汝を擧せんとせば、彼れ當さに汝が爲めに擧を作し、憶念を作し、自言を作し、汝の阿毘婆陀を遮し、說戒を遮し、自恣を遮す」。調馬師の如し、惡馬は調し難し、卽ち韁杙を合せて驅棄す、此の比丘も亦復是くの如し、一切捨棄す、是れを第四犯人と爲す』。

爾の時世尊、王舍城耆闍崛山に在しき。優波離座より起ちて、偏へに右の肩を露はし、右膝地に著け、合掌して佛に白して言はく、『長老、年少比丘の前に在りて懺悔するに、內に幾法ありてか、應さに懺悔すべき』。佛言はく、『內に四法ありて、應さに懺悔すべし。偏へに右の肩を露はし、革屣を脫し、胡跪合掌し、所犯の名を說き、我れ某甲の罪を犯す、今長老の前に於て懺悔す。彼れ應さに語りて言ふべし、「應さに改悔して、厭離の心を生ずべし」。答へて言はく、「爾り」。上座の比丘、下座の比丘に於て、是くの如きの四法あり、應さに懺悔すべし。四波羅提々舍尼あり、上に說くが如し。四波羅夷上に說くが如し。四羯磨あり、非法別衆羯磨・非法和合衆羯磨・法別衆羯磨・法和合衆羯磨なり、是れを四羯磨と爲す。是の中の非法別衆羯磨は爾すべからず、非法和合衆羯磨も爾すべ

ち、死相を現ぜんが爲めに、順路に唱令し、右門より出でゝ、敎處に至りて之を殺す。智人見已りて是くの如きの語を作す、「此の人極惡の重死罪を造る、我れ今當さに自ら勅し、并びに餘人を敎ふべし」。是くの如き重惡死罪を作すこと莫れ。是くの如く比丘・比丘尼、波羅夷法に於て大恐畏を生じ、是くの如きの念を作す。「若し未だ波羅夷を犯さず、終已まで犯さず、若し犯すも都べて覆藏の心なし、如法に懺悔す」。此れは是れ犯畏なり。是くの如きの男子あり、髮を被り、黑衣を著け、合鞘刀を持ち、大衆の中に至りて言はく、「我れ惡不善を作し、衆人の憙む所に隨つて、我れ當さに作すべし」と。時に彼の衆人、卽ち刀を奪取し、之を打ちて驅りて右門を出でしむ。智人あり、見て是くの如きの言を作す。「此の人惡罪を作す、我れ今當さに、自ら勅し、并びに人を敎ふべし、是くの如きの惡罪を作すこと莫れ」と。是くの如く比丘・比丘尼、僧殘法に於て大恐畏を生じ、是くの如きの念を作す、「若し未だ僧殘を犯さず、終りまで犯さず、若し犯すとも尋いで卽ち懺悔す」、此れは是れ第二犯畏なり。是くの如き男子あり、髮を被り、黑衣を著け、杖を持ち、大衆の中に至りて語りて言はく、「我れ惡不善を作す、衆人の憙む所に隨つて、我れ當さに作すべし」と。衆人卽ち其の杖を取りて打ち、驅りて右門を出でしむ。智人あり、見て是くの如きの言を作す、「此の人惡罪を作す、我れ今自ら勅し、并びに人に敎へ、是くの如き惡を作さゞらしむ」。是くの如く比丘・比丘尼、波逸提に於て大恐畏を生ず。未犯は終に犯さず、若し犯さば尋いで卽ち懺悔す、此れは是れ第三恐畏なり。是くの如き男子あり、髮を被り、黑衣を著け、衆人の所に至り、合掌して是くの如きの言を作す、「我れ惡不善を作す、衆人の憙む所に隨つて、我れ當さに之を作すべし」と。時に衆人種々に呵責し、驅りて右門を出でしむ。智人あり、見て是くの如きの言を作す、「此の人是くの如きの惡を作す、我れ今當さに自ら勅し、并びに人に敎へず、是くの如きの惡を作さゞれ」と。是くの如く比丘・比丘尼、波羅提々舍尼に於て恐畏を生ず。若し未犯は終に犯さず、若し犯さば尋いで卽ち懺悔

と爲す。云何が法に求めて、非法に與ふる。或は比丘あり、周旋往反して沙門の法を說き、非法を作さず、利養を求むること清淨なり、上の如き偏爲を作す、是れを法に求めて非法に與ふと爲す。云何が法に求めて法に與ふる。或は比丘あり、周旋往反して沙門の法を說き、非法を作さず、利養を求むるに清淨なり、上の如き偏爲を作さず、是れを法に求めて法に與ふると爲す。四法あり、他の爲めに大戒を受くべからず。增戒・增心・增慧學を知らず、廣く二部の戒を誦せず、是くの如きの四法あり、他の與めに大戒を受くべからず。四法あり、應さに他の爲めに大戒を受くべし。即ち上の句に反す、是れなり。四法あり、他の爲めに大戒を受くべからず、增戒學を知らず、增心學を知らず、增慧學を知らず、廣く毘尼を誦せず、是くの如きの四法は、他の爲めに大戒を受くべからず。復四法あり、應さに他の爲めに大戒を受くべし即ち上の句に反する是れなり。復四法あり、他の爲めに大戒を受くべからず、增戒・增心・增慧學を知らず、毘尼を誦すといへども決了すること能はず、是くの如きの四法は、他の爲めに大戒を受くべからず。復四法あり、應さに他の爲めに大戒を受くべし。即ち上の句に反する是れなり。復四法あり、他の爲めに大戒を受くべからず、二百五十戒を持たず、多聞ならず、若し弟子惡見あるも、弟子を教化して、惡見を捨て、善見を修習せしむること能はず、十歲に滿たず、是くの如きの四法あれば、他の爲めに大戒を受くべからず。復四法あり、他の爲めに大戒を受くべし、即ち上の句に反する是れなり。四法あり、名づけて持律と爲す。犯を知り、不犯を知り、輕を知り、重を知る。復四法あり、犯を知り、不犯を知り、有餘を知り、無餘を知る。復四法あり、犯を知り、不犯を知り、麁惡を知り、不麁惡を知る。復四法あり、可懺罪を知り、不可懺を知り、懺悔清淨を知り、懺悔不清淨を知る。復四諍あり、言諍・覓諍・犯諍・事諍なり。四犯畏あり、若し是くの如き男子の來るあり、髮を被り、黑衣を著け、刀を持ち、大衆の中に至りて、是くの如きの言を作さく、「我れは極大重惡斷頭罪を作せり、汝等の意む所に隨つて、我れ當さに作すべし」と。時に大衆、即ち捉縛して、惡聲の鼓を打

餘の比丘をして知らしめば、和合僧我が爲めに滅擯を作さん、餘の比丘あり、我れを助けて伴と爲らん」と。是れを惡比丘の、第三に僧破を見て歡喜すと爲す。復次ぎに惡比丘、邪見、邊見あり、是の念を作す「我れ邪見、邊見あり、餘の比丘をして知らしめば、和合僧我が爲めに滅擯を作さん、餘の比丘あり、我れを助けて伴と爲らん」と。是れを惡比丘の、第四に僧破を見て歡喜すと爲す。

四種の作法あり、前非法作後非法作・前非法作後法作・前法作後非法作・前法作後法作なり。何等か前非法作後非法作。前に非法に事を起し、敎呵すべきに、敎呵せずして住し、滅擯すべきに、滅擯せずして住す、是れを前非法作後非法作と爲す。何等か前非法作後法作。若し非法作者あり、前に非法に事を起し、彼れ敎呵すべき者は、呵して後に住し、滅擯すべきは、滅擯して後に住す、是れを前非法作後法作と爲す。何等か前法作後非法作。若し比丘、如法に事を起し、敎呵すべきは敎呵せずして住し、滅擯すべきは、滅擯せずして住す、是れを前如法作後非法作と爲す。何等か前如法作後如法作。若し比丘、前に如法に事を起し、敎呵すべきは敎呵し、滅擯すべきは、滅擯して後に住す、是れを前如法作後如法作と爲す。四種の供養あり、一には飲食、二には醫藥、三には衣服、四には是れ所須の者は與ふ。復四種の利法あり、非法に求め非法に與ふ、非法に求めて法に與ふ、法に求め非法に與ふ、法に求め法に與ふ。云何が非法に求め非法に與ふる。或は比丘あり、周旋往反して沙門の法を作さず、非法を說いて利養を求むること不淨なり、彼れ是くの如きの不淨を作して利養を求め、偏爲する所あり、是れを取りて是れを取るなく、爾許を取りて爾許を取るなく、是れを取り來りて、是れを取り來るなく、爾許を持ち來りて、爾許を持ち來るなく、此れに與へて、彼れに與ふるなく、爾許を與へて、爾許を與ふるなく、彼れは與ふべし、彼れは與ふべからずと。是れを非法に利養を求め、非法に與ふと爲す。或は比丘あり、周旋往反して非沙門の法を作し、非法を說いて、利養を求むること清淨ならず、上の如き偏爲を作さず、是れを非法に求めて、法に與ふ

破する』。佛、優波離に告げたまはく、『若し比丘あり、犯を不犯と言ひ、若しは不犯を彼れは犯と言ふ、輕を重と言ひ、重を輕と言ふ、若し比丘、此の四事に於て便ち伴を求索し、若しは人をして求めしめ、界内に於て、別部布薩羯磨說戒す。是れを齊りて名づけて破僧と爲す、是れを破和合僧と爲す』。優波離復問ふ。云何が和合僧、僧を破し已りて、誰か和合を爲す』。佛、優波離に告げたまはく、『若し比丘あり、犯を彼れは犯と言ひ、若し不犯は、彼れ不犯と言ひ、輕を輕と言ひ、重を重と言ふ。彼の比丘、此の四事に於て、伴を求めず、人をして求めしめず、別部の羯磨・布薩・說戒せず、是れを齊りて、名づけて和合僧と爲す、是れを僧破已りて、還た和合すと爲す』。

爾の時世尊、舍衞國に在しき。時に舍衞の比丘共に鬪諍す。阿尼樓陀に弟子あり、婆夷と名づく、獨り僧中に在りて語るらく、獨り當さに諍事に當らんと。時に阿尼樓陀は衆に在り、一語の教呵を說かず。爾の時阿難、世尊の所に往き、頭面に足を禮し、一面に在りて住す。世尊知りて故らに阿難に問ひたまふ。『諍事已に滅するや未だしや』。阿難答へて言さく、『諍事何ぞ滅することを得べけん、阿尼樓陀の弟子、僧中に在りて獨語し、「獨り諍事に當らん」と、而も阿尼樓陀僧中に在りて、曾て一語を以て呵責せず』と。佛、阿難に告げたまはく、『阿尼樓陀何の時か能く此の諍事を滅せん、豈、汝舍利弗・目連の事にあらずや』。爾の時佛、諸の比丘に告げたまはく、『惡比丘に四法あり、僧の破するを見て歡喜す。何等か四なる。是の惡比丘、破戒惡法なり、彼の惡比丘是の念を作す、「我れ破戒惡法なり、若し餘の比丘、我れを知るを得ば、和合して我が爲めに滅擯を作さん」、餘の比丘あり、我れを助けて伴と作らん。惡比丘、是の初法あり、僧破を見て歡喜す。復次ぎに惡比丘、邪命自治す、是の念を作して言はく、「我れ邪命自治す、餘の比丘をして我を知らしめば、和合僧我が爲めに滅擯を作さん、餘の比丘あり、我れを助けて伴と爲らん」と。是れを惡比丘の、第二に僧破を見て歡喜すと爲す。復次ぎに惡比丘、多く利養恭敬を求め、是の念を作す。「我れ利養恭敬を求む、

爾の時佛、諸の比丘衆に告げたまはく、『僧に四種の斷事人あり、何等か四なる。或は寡聞にして無慚なるあり、或は多聞にして無慚なるあり、或は寡聞にして有慚なるあり、或は多聞にして有慚なるあり。是の中の斷事の比丘、寡聞無慚ならば、僧中に在りて言說斷事に、僧應さに種々に苦切呵責し、無慚者をして、後更に爾らざらしむべし。若し彼の斷事人多聞無慚ならば、僧中に在りて言說斷事に、僧應さに種々に苦切呵責し、彼の無慚者をして、後更に爾らざらしむべし。是の中の斷事の比丘、有慚寡聞ならば、僧中に在りて言說斷事せんに、僧苦切に呵責すべからず、應さに依助開示し、彼の有慚者をして、後僧中に於て言說斷事せしむべし。是の中の斷事の比丘、有慚多聞ならば、僧中に在りて言說斷事せんに、僧呵責すべからず、彼の說を聽き已りて、應さに其の善哉を讚すべし、有慚者をして、後僧中に於て言說斷事せしむ。復四斷事の比丘あり、或は無慚にして、經文を暗んぜず、或は無慚にして經文を暗んず、或は有慚にして、經文を暗んぜず、或は有慚にして經文を暗んず。無慚にして經文を暗んぜざる者は、三失あり、彼れ無慚の失、可呵の失、經文を暗んぜざるの失あり、是れを斷事人の三失と爲す。無慚にして經文を暗んずる者に、二失あり。無慚の失、可呵の失なり、彼れ經文を暗んずれば不失なり、是れを斷事の比丘の二失と爲す。有慚にして經文を暗んぜざる者に一失あり、彼れ經文を暗んぜざるの失なり、彼れ有慚は不失にして、可呵なきも不失なり、是れを斷事の比丘の一失と爲す。有慚にして經文を暗んずる者は無失なり、彼れ有慚は不失にして、可呵あることなきも不失、經文を暗んずるは失なし、是れを斷事の比丘の第一最勝無失と爲す。破戒の四句も亦是くの如し。破見の四句も亦是くの如し。破正命の四句も亦是くの如し。破威儀の四句も亦是くの如し』。（此の中、精進に四比丘あり、物を四分に分つ、房舍犍度の中の如し、法異ならず、故に出さざるなり。）

爾の時、佛王舍城に在しき。時に優波離、坐より起ちて、偏へに右の肩を露はし、右膝地に著け、合掌して佛に白して言さく、『大德、說いて破僧と言ふ、幾名を齊りてか破僧と爲す、誰か和合僧を

羅・毘尼・法律と相應せず、法に違背せば、應さに彼の比丘に語るべし、汝の所說は、佛の所說にあらず、戒は是の長老審かに佛語を得ず、何を以ての故に、我れ修多羅・毘尼・法律を尋究するに、修多羅・毘尼・法律と相應せず、法に違背す、長老復誦習すべからず、亦餘の比丘に教ふる莫れ、今應さに捨棄すべしと。若し彼の比丘の說を聞き、修多羅・毘尼・法律を尋究する時、若し修多羅・毘尼・法律と相應せば、應さに彼の比丘に語りて言ふべし、「長老の所說は、是れ佛の所說なり、審かに佛語を得たり、何を以ての故に、我れ修多羅・毘尼・法律を尋究するに、與に共に相應して違背せず、長老應さに善く持ちて、誦習して、餘の比丘に教ふべし、忘失せしむる勿れ、此れは是れ初めの廣說なり。復次ぎに若し比丘是くの如く語る、「長老、我れ某村某城の和合僧中の上座の前に於て聞く、此れは是れ法、是れ毘尼、是れ佛の所教なり」と。彼の比丘の說を聞く時、嫌疑すべからず　亦呵すべからず、應に文句を審定し、修多羅・毘尼を尋究し、法律を撿挍すべし。若し彼の比丘の說を聞き、修多羅・毘尼・法律を尋究する時、與に相應せず、法に違背せば、應さに彼の比丘に語りて言ふべし、「長老、此れ佛の所說に非ず、是れ彼の衆僧及び上座、審かに佛語を得ず、長老も亦爾り、何を以ての故に、我れ修多羅・毘尼・法律を尋究するに、與に相違せず、法に違背す、長老、復誦習すべからず、亦餘の比丘に教ふる莫れ、今當さに之を棄つべし」と。若し彼の比丘の語を聞き、修多羅・毘尼・法律を尋究するに、與に相應して法に違背せざれば、應さに彼の比丘に語りて言ふべし、「長老、是れ佛の所說なり、彼の衆僧の上座及び長老、亦審に佛語を得、何を以ての故に。我れ修多羅・毘尼・法律を尋究するに、而も與に相應して違背あることなし。長老、應に善く持ちて誦習すべし、又餘人に教へて、忘失せしむる勿れ」と。此れは是れ第二廣說なり。次ぎに第三句は、法毘尼摩夷を知る衆多の比丘の所聞に從ふ亦是くの如し。第四句法毘尼・摩夷を知る一比丘の所聞に從ふも、亦是くの如し。是れを四の廣說と爲す』。佛說是くの如し。諸の比丘聞いて信樂し、歡喜、受持す。

復三懷色あり、青・黒・木蘭なり。復三法ありて持律と名づく。波羅提木叉戒を持ち、多聞を具足し、二部戒を誦して通利疑なし。復三持あり、波羅提木叉戒・多聞を具足し、廣く毘尼を誦して通利疑なし。復三持あり、波羅提木叉戒・多聞を具足し、毘尼中に住して動ぜず。復三持あり、波羅提木叉・戒多聞を具足し、善巧方便して能く諍事を滅す。復三辨あり、比丘辨・不放逸辨・清淨行辨なり。復三種の自恣あり、十四日・十五日・月の初日なり。復三種人の自恣あり、若しは僧、若しは衆多人、若しは一人なり。復三種の自恣を作すあり、若しは僧、若しは衆多人、若しは一人なり。復三種人あり、應さに自恣を作すべし、若しは僧、若しは衆多人、若しは一人なり。復三種あり、若しは知り、若しは知らず、若しは見る。復三種あり、若しは知り、若しは知らず、若しは癡なり。復三種あり、若しは身、若しは口、若しは身口倶なり。復三種あり、若しは見聞疑なり。復三語の捨戒あり、佛を捨て、法を捨て、僧を捨つ。是くの如く、三三を句と爲す。乃至沙門釋子に非ず。復三種の義あるが故に、如來出世して、諸の比丘の爲めに戒を制したまひ、僧を攝取するに從つて、三三を句と爲し、乃至正法久住す。三種の義あるが故に、如來出世したまひ、諸の比丘の爲めに、呵責羯磨を制したまひ、僧を攝取するに從つて、三三を句と爲し、乃至正法久住すること亦是くの如し、乃至七滅諍も亦是くの如し。

爾の時世尊、婆闍國地城中に在しき。諸の比丘に告げたまはく、『我れ四種の廣説を説く、汝等善く聽け、當さに汝が爲めに說くべし』。諸の比丘言はく、『大德、之を聞かんことを願樂す』。『何等か四なる。若し比丘是くの如く語る、「諸の長老、我れ某村某城に於て、親しく佛に從つて聞いて受持す、此れは是れ法、是れは毘尼、是れは佛の敎なり」と。若し彼の比丘說を聞かば、便ち嫌疑を生ずべからず、亦呵すべからず、應さに文句を審定すべし、已りて應さに修多羅、毘尼を尋究し、法律を撿挍すべし。若し彼の比丘の說を聽き、修多羅、毘尼を尋究し、法律を撿挍する時、若し修多

餘の病人も、亦應さに瞻視供養を與ふべし。三種の癡あり、一には犯罪、二には不見罪、三には罪を見るも、如法に懺悔せず、是れを三種の癡と爲す。三種の智慧あり、一には不犯罪、二には犯罪して能く見る。三には見罪して能く懺悔す。三種の癡あり、一には犯罪不見、二には犯罪を見るも懺悔せず、三には如法に懺悔するも、彼れ受けず。三種の智慧あり、（即ち上の句に反する是れなり。）三種の安居あり、前安居・中安居・後安居なり。聖法律の中に於て、歌戲すること猶ほ哭するが如く、舞ふこと狂者の如く、戲笑すること小兒に似たり。三種の不淨肉ありて、應に食ふべからず。若し見聞疑し、己れが爲す。三種の淨肉あり、應さに食ふべし。見聞疑せず、己れが爲めに作さず。三種の布薩あり、十四日・十五日・月の初日なり。三種人の布薩あり、若しは僧、若しは衆多人、若しは一人なり。三種人ありて布薩を作す、若しは僧、若しは衆多人、若しは一人なり。三種の人あり、應さに布薩を作すべし、若しは僧、若しは衆多人、若しは一人なり。或は知りて作す、或は知らずして作す、或は見て作す、或は知りて作す、或は知らずして作す、或は癡にして作す、或は身、或は口、或は身口俱なり。三種ありて、應さに犯罪を平斷すべし。一に戒序、二に制、三に重制なり、三法あり、平斷して犯さず、戒序・制・重制なり。三種の淨あり、三種の淨あり、三種の不淨あり、三種の聽あり、三種の不聽あり、亦是くの如し。三種の不恭敬あり、佛法僧なり。復三種の不恭敬あり、佛法戒なり。三不恭敬あり、佛法定なり。復三不恭敬あり、佛法父母なり。三不恭敬あり、佛法善法なり。恭敬に三あり、三句（即ち上の句に反する是れなり。）復三種の擧あり、一に不見、二に不懺悔、三に惡見不捨なり。三法あり、僧應さに覆鉢を作すべし、比丘の前に在りて、佛法僧を謗毀す。復三念あり、佛念・法念・僧念なり。復三念あり、佛念・法念・戒念なり。復三念あり、佛念・法念・施念なり。復三念あり、佛念・法念・天念なり。復三成就あり、持戒成就・定成就・慧成就なり。復三あり、戒成就・定成就・解脫定成就なり。復三あり、戒成就・定成就・見解脫・慧成就なり。復三賤法あり、刀賤・衣賤・色賤なり。

に使、二に增使、三に減使なり。云何が使と爲す。若し使能く教を受けて、增さず減ぜず、所聞に隨つて說く、是れを使と爲す。云何が增使。若し使、教を受け、增益して過說す、是れを增使と爲す。云何が減使。若し使、教を受けて、具足して說かず、是れを減使と爲す。復三子あり、等子・增子・不等子なり。云何が等子。若し父母に信戒施慧あり、子も亦信戒施慧あれば、是れを等子と爲す。云何が增子。若し父母に、信戒施慧あることなし、而も子に信戒施慧あれば、是れを增子と爲す。云何が不等子。若し父母に信戒施惠あり、而も子に信戒施惠なし、是れを不等子と爲す。而して偈を說いて言はく、

等子及び增子　應さに是くの如きの子を求むべし　不等子を求むること勿れ　在家は增益なし
彼の子常に如法なり　善行の優婆塞　信戒を成就し持つ　布施すれば慳嫉ならず　月の雲翳なきが如し　在家も亦是くの如し。

復三病あり、或は病ありて、若しは隨意食を得、若しは得ず。若しは隨病藥を得、若しは得ず、若しは隨意好瞻病人を得、若しは得ず。病人は倶に死し、病に從つて差ゆることを得る能はず、或は病人あり、是くの如し。或は病人あり、若し隨意食を得、若しは得ず。若しは隨病藥を得、若しは得ず。若しは隨意好瞻病人を得、若しは得ず、此の病人は、病に隨つて差ゆることを得、或は病人あり是くの如し。或は病人あり、隨意食を得ず、隨病藥を得ず、隨意好瞻病人を得ず、此の病人死し、病に隨つて差ゆることを得る能はず。若し隨意食を得、隨病藥を得、好瞻病人を得、彼の病死せず、病に從つて差ゆることを得。或は病人ありて是くの如し。此の中の病人、隨意食を得ず、隨病藥を得ず、隨意好瞻病人を得ず、此の病人死す、病に從つて差ゆることを得る能はず。若し隨意食を得、隨病藥を得、隨意好瞻病人を得、此の人死せず、病に從つて差ゆることを得。我れ是れがための故に、病者に隨意食、隨病藥、好瞻病人を與ふることを聽す、此の病因緣を以ての故に。

等か増戒學。若し比丘具足して波羅提木叉戒を持ち、威儀を就就し、輕戒を畏愼して、重きこと金剛の如くし、等しく諸戒を學ぶ、是れを増戒學と爲す。何等か増心學。若し比丘、能く欲惡を捨て、乃至第四禪に入ることを得、是れを増心學と爲す。何等か増慧學。若し比丘、實の如く苦諦を知り、集盡道を知る、是れを増慧學と爲す。復三學あり、増戒・増心・増慧學なり。増戒と増心とは上の如し。増慧學とは、若し比丘、內に貪欲ありと知り、實の如く之を知り、內に貪欲なき、實の如く之を知り、若し未生の貪欲は、實の如く之を知り、若し未生の貪欲、後に生ずるは實の如く之を知り、若し已生の貪欲能く斷ずるは、實の如く之を知り、若し未生の貪欲を生ぜざらしむること、實の如く之を知り、瞋恚・睡眠・調悔・疑も亦是くの如し。彼の比丘是の念を作す、「我れ眼色に於て、貪欲・瞋恚あり、實の如く之を知る、貪欲・瞋恚なき、實の如く之を知る。眼色に於て、未生の貪欲、瞋恚をして生ぜざること、實の如く之を知る。如し眼色に於て、未生の貪欲、瞋恚の、而も生ずることを、實の如く之を知る如し眼色に於て、已生の貪欲・瞋恚の斷滅すること、實の如く之を知る。如し眼色に於て、已に貪欲瞋恚を斷じ、後復生ぜざること、實の如く之を知る。耳鼻舌身意も亦是くの如し。復次ぎに比丘、內に念覺意あり、實の如く之を知る。內に念覺意なし、實の如く之を知る。如し未生の念覺意の生ぜざること、實の如く之を知る。如し未生の念覺意の、而も生ずること、實の如く之を知る。如し已生の念覺意は、修習滿足すること、實の如く之を知る。是くの如く法覺意・精進覺意・猗覺意・定覺意・喜覺意・護覺意も亦是くの如し。復三聚あり、持戒聚・定聚・慧聚なり。毘尼に三答あり、我れ是くの如く見、是くの如く聞き、是くの如く忍す。比丘に三法滅正法あり、非制を而も制す、是制は便ち斷ず、所制に隨はずして行ふ。比丘復三法ありて、正法を滅せず。（即ち上の句に反する是れなり。）三處ありて妄語を具滿す。前に妄語を作するを知り、妄語する時、是れ妄語なりと知り、妄語竟りて、妄語を作すことを知る。復三種あり、實語を具足す。（即ち上の句に反する是れなり。）三種の使あり、一

自ら證を得て、「我が生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じ、復受生せずと知る」。跋闍子比丘、自ら阿羅漢を得ることを知る』。佛說是くの如し。諸の比丘聞いて歡喜し、信樂し、受持す。

爾の時佛、諸の比丘に告げたまはく、『三學あり、增戒學・增心學・增慧學なり。何等か增戒學なる。若し比丘、戒學を尊重し、戒を以て主と爲し、定を重んぜず、定を以て主と爲さず、慧を重んぜず、慧を以て主となさず。彼れ此の戒に於て、若し輕を犯さば、懺悔せよ。何を以ての故に。此の中は破器破石の如くには非ざるが故に。若し是れ戒を重んぜば、便ち應さに堅持し、善く戒に住すべし、應さに親近して行じ、毀闕せずして行じ、染汚せずして行ずべし。常に是くの如くにして修習すれば、彼れ下の五使を斷じ、上の涅槃に於て復此に還らず。若し比丘、戒を重んじ、戒を以て主と爲し、定を重んじ、定を以て主と爲し、慧を重んぜず、慧を以て主と爲さゞれば、上の如し。若し比丘、戒を重んじ、戒を以て主と爲し、定を重んじ、定を以て主と爲し、慧を重んじ、慧を以て主と爲さば、彼の漏盡きて無漏心を得、解脫・慧解脫・現在前に於て、自ら得證、我生已盡・梵行已立・所作已辦、不復還此と知り、滿足行者は具滿成就し、不滿足行者は、不滿足成就を得、我れ此の戒を說くに、唐捐あることなし』。佛說是くの如し。諸の比丘聞いて歡喜し、信樂し、受持す。

『復三學あり、增戒・增心・增慧學なり。何等か增戒學なる。若し比丘あり、具さに戒行を滿じ、少しく定行を行じ、少しく慧行を行ずれば、彼れ下の五使を斷じ、上の涅槃に於て、復此に還らず、若し是くの如き處に至る能はざれば、能く三結の貪欲・瞋恚・愚癡を薄くし、斯陀含を得、世間に來生し、便ち苦際を盡くす。若し是くの如き處に至る能はざれば、能く三結を斷じ、須陀洹を得、惡趣に墮せず、決定して道を取り、七たび天上に生れ、七たび人中に生れ、便ち苦際を盡くす。若し比丘、戒行を具滿し、定行を具滿し、少しく慧行を行ずれば、亦上の如し。若し比丘、戒行を具滿し、定行を具滿し、慧行を具滿すれば、亦上の如し。復三學あり、增戒學・增心學・增慧學なり。何

汝比丘、至誠如法懺悔す、我れ爲めに之を受く』。時に彼の迦葉比丘、佛足を禮し已りて、却いて一面に坐す。佛告げて言はく、『若し上座既に戒を學せず、戒を讚歎せず、若し餘の比丘あり、學戒を樂しみ、戒を讚歎せんに、亦復時を以て勸勉讚歎すること能はず、迦葉比丘、我れは是くの如きの上座を讚歎せず、何を以ての故に、若し我れ讚歎せば、諸の比丘をして親近せしめん、若し親近する者あらば、餘人をして其の法を習學せしめん、若し其の法を習學するあらば、長夜に苦を受けん、是の故に迦葉比丘、我れ是くの如く上座の過失を見る、故に讚歎せず、若し中下座も亦是くの如し、』此の上中下座、是れ不如法者は、其の次ぎに、應さに上中下座如法者あり、上の句に反すべし、卽ち是れ煩文を復びせず、故に出さゞるなり。佛說是くの如し、迦葉比丘歡喜し、信樂し、受持す。

爾の時佛、諸の比丘に告げたまはく、『譬へば驢ありて、群牛と共に行くが如し。自ら我れも亦是れ牛なり、我れも是れ牛なりと言ふ。而も驢毛は牛脚に似ず、牛の音聲に似ず、亦牛に似ず、而も牛と共に行き、自ら言ふ、是れ牛なりと。是くの如く癡人あり、如法の比丘に隨逐し、自ら言ふ、我れは是れ比丘と。此の癡人、增戒・增心・增慧あることなし、善比丘の如くにして、衆僧と共に行く。自ら言ふ、我れは是れ比丘と。是の故に、汝等當に勤修して、增戒・增心・增慧學を習ふべし』。佛說是くの如し。諸の比丘聞いて歡喜し、信樂し、受持す。

爾の時世尊、毘舍離に在しき。跋闍子比丘あり、世尊の所に往き、頭面に足を禮し、却いて一面に坐し、世尊に白して言さく、『半月所說の戒多し、我れ是くの如きの多戒を學すること能はず』。佛告げて言はく、『汝に三戒を學することを聽す、增戒・增心・增慧學なり、若し汝是くの如く三戒を學すれば、便ち貪欲、瞋癡の盡くる處に至るを得、不善を造らず、諸惡に近かず』。比丘言はく、『大德、願樂し受持せん』。時に跋闍子比丘、世尊の略敎を聞き已り、獨り靜處に在り、精勤して放逸ならず、初夜にも後夜にも警意して、爲めに出家する所を思惟し、修習して久からず、無上淨行の現前を得、

一面に在りて坐し、阿難に白して言さく、『沙門瞿曇は何が故に諸の比丘の爲めに、增戒學・增淨行學・增波羅提木叉學を制したまふ』。阿難答へて言はく、『爾る所以は、貪欲・瞋恚・愚癡を調伏し、盡さしめんと欲したまふが故に、世尊諸の比丘の爲めに戒を制したまふ』。復問うて言はく、『若し比丘、阿羅漢漏盡を得ば、彼れ何の學する所あらん』。阿難答へて言はく、『貪欲・瞋恚・愚癡盡きて不善を造らず、諸惡に近かず、所作已に辦ずれば、名づけて無學と爲す』。婆羅門言はく、『向きに說くところの如き、便ち無學とせんや』。阿難答へて言はく、『是くの如し』と。阿難の說是くの如し、孔雀冠婆羅門聞き已りて歡喜し、信樂し、受持す。

爾の時世尊、摩竭國崩伽彌村中に在しき。諸の比丘の爲めに、無數に方便して戒法を說きたまふ。時に舊住の比丘あり、迦葉姓中に於て出家す。此の比丘、世尊の說法を聞き、信樂を生ぜず、愁憂して樂まず、「世尊數ば我等を恐れしむ」と。是に於て世尊、移りて王舍城に住したまふ。去ること未だ久しからず、彼の迦葉比丘、心自ら悔恨し、我れ利なし、善く得ず、世尊、諸の比丘の爲めに、無數に方便して戒を說きたまふ。而も我れ信樂を生ぜず、愁憂して樂まずして言はく、『世尊數ば我等を恐れしむ、我れ今寧ろ、世尊の前に於て、至誠に悔過すべきや』。時に彼の比丘、卽ち衣鉢を持ち、王舍城に往き、世尊の所に到り、頭面に足を禮し、却いて一面に坐し、此の因緣を以て、具さに世尊に白し、座より起ちて頭面に足を禮し、至誠に悔過して言さく、『大德、我れ愚癡無智にして不善なり、而も世尊、諸の比丘の爲めに、無數に方便して戒法を說きたまふ、而も我れ不信樂を生じ、心に憂惱を懷いて言はく、「世尊數ば我等を恐れしむ」と。唯願はくは大德、我が悔過を受けたまへ』と。佛、比丘に告げて言はく、『汝自ら愚癡無智不善を懺悔す、我れ諸の比丘の爲めに戒を說けるに、汝自ら信樂せず、心に憂惱を懷いて言はく、「世尊數ば我等を恐れしむ」と、我が法中に於て、能く至誠如法に懺悔すれば、便ち增益することを得、汝懺悔して、應さに厭離の心を生ずべし、

り。三種の人の諍ひを捨つるあり、若しは僧、若しは衆多人、若しは一人なり。應さに三種人の前に捨つべし、若しは僧、若しは衆多人、若しは一人なり。三種の人あり、應さに滅諍すべし、若しは僧、若しは衆多人、若しは一人なり。三種人あり、滅諍することを得、若しは僧、若しは衆多人、若しは一人なり。比丘に三種の正語あり、應さに比丘に語るべし、破戒・破見・破威儀なり。他の比丘を擧するに、應さに三事を以てすべし、若しは見、若しは聞、若しは疑なり。三種の覆あり、破戒を覆ひ、破見を覆ひ、破威儀を覆ふ。三種の發露あり、破戒・破見・破威儀なり。三種の懺悔あり、破戒・破見・破威儀なり。三種の放逸羯磨あり、破戒羯磨・破見羯磨・破威儀羯磨なり。三學あり、增戒學・增心學・增慧學なり、是れを三學と爲す。復三學あり、威儀學・淨行學・波羅提木叉學なり、是れを三學と爲す』。

爾の時衆多の比丘あり、世尊の所に往き、頭面に足を禮し、却いて一面に坐し、世尊に白して言さく『大德は是れ法の主、說いて學と言ふ、云何が學と爲す』。佛、諸の比丘に告げたまはく『戒を學するが故に學と言ふ。云何か戒を學する、增戒學・增心學・增慧學、是の故に學と言ふ。彼れ增戒學・增心學・增慧學の時、調伏を得て、貪欲・瞋恚・愚癡盡く、彼れ貪欲瞋癡盡き已ることを得て、不善を造らず、諸惡に近かず、是の故に學と言ふ』。佛說是くの如し。諸の比丘聞いて歡喜し、信樂し受持す。

爾の時佛、諸の比丘に問ひたまふ『汝云何が學する、云何が學を爲す』。諸の比丘、佛に白して言さく『大德は是れ法の根本、法の主たり、世尊の向きに說きたまふ所の如し、我等受持するが故に學すと言ふ』。『復三學あり、增戒學・增心學・增慧學なり、此の三學を學して、須陀洹・斯陀含・阿那含・阿羅漢果を得、是の故に當さに勤めて精進して、此の三學を學すべし。』

爾の時阿難、波羅離子城鷄園中に在り。時に孔雀冠婆羅門あり、阿難の所に至り、問訊し已りて

三種の作盗あり、波羅夷を犯す。若しは自ら取る、若しは現前に指示して取る、若しは使を遣はして取る。復三あり、已有想を作さずして取る、不暫にして取る、親厚に非ずして取る。復三あり、若しは他物、若しは他物想、若しは擧して本處を離る。

三種の斷命ありて波羅夷なり。若し人に人想を作し、若しは身を以て、若しは口を以て命を斷ず、是れを三種の斷命は波羅夷と爲す、三種の斷人命あり、波羅夷を犯さず、人に非人想を作し、若しは身を以て、若しは口を以て命を斷ず、是れを三種の斷人命は波羅夷を犯さずと爲す。

三種の自ら上人法を得ると稱するあり、波羅夷なり。得ざるを得ると言ひ、入らざるを入ると言ひ、證せざるを證すと言ふ、是れを三種と爲す。復三種あり、身犯・口犯・身口犯なり、是れを三と爲す。此の中の三犯に、更に復四句の異名あり、一句は三種の相と言ひ、二句は三種の呪と言ひ、三句は三の非威儀と言ひ、四句は三の邪命と言ふ。復三あり、身欲・口欲・身口欲なり、是れを三と爲す。復三あり、身恚・口恚・身口恚なり、是れを三と爲す。復三あり、身癡・口癡・身口癡なり、是れを三と爲す。復三あり、身欲善・口欲善・身口欲善なり、是れを三と爲す。恚癡も亦是くの如し。三種の人の犯あり、一には僧、二には衆多人、三には一人なり。三種人の懺悔あり、若しは僧、若しは衆多人、若しは一人なり。三種人の懺悔あり、若しは僧、若しは衆多人、若しは一人なり三種人の懺悔を受くべきあり、若しは僧、若しは衆多人、若しは一人なり。三種人の尼薩耆を犯すあり、若しは僧、若しは衆多人、若しは一人なり。尼薩耆を犯さば、應さに三種人の前に在りて捨つべし、若しは僧、若しは衆多、若しは一人なり。三種の人あり、應さに尼薩耆を受くべし、若しは僧、若しは衆多人、若しは一人なり。三種の默然あり、知りて默然するあり、知らずして默然するあり、癡にして默然するあり。三種の住あり、戒住・見住・羯磨住なり。復三あり、戒住・見住・威儀住なり。復三あり、戒住・見住・命住なり。復三種の人の諍ひあり、若しは僧、若しは衆多人、若しは一人なり。三種の人の諍ひを起すあり、若しは僧、若しは衆多人、若しは一人な

なり。是くの如き三法ありて呵責を作すは、非法非毘尼にして羯磨成ぜず、處所を得ず。三法ありて呵責を作す、如法如毘尼にして羯磨成就し、處所を得。卽ち上の句に反す、是れ煩文を復びせず、故に出さゞるのみ。三事あり、弄して失精すれば、僧伽婆尸沙を犯す、若しは憶念し、若しは弄し、若しは不淨を失ず、是くの如きの三事あれば、僧伽婆尸沙を犯す。復三事あり、若しは憶念し、若しは弄し、若しは靑色の不淨を出さんと欲し、若し靑不淨を失すれば僧伽婆尸沙なり。若しは憶念し、若しは弄し、若し靑不淨を出さんと欲し、乃ち黃不淨、若しは赤、若しは白、若しは黑、若しは酪色、若しは酪漿色不淨を出さば、僧伽婆尸沙なり。若しは憶念し、若しは弄し、乃至酪漿色不淨を出さんと欲し、乃ち靑黃赤白黑の不淨を出さば僧伽婆尸沙なり。是くの如く樂の爲めの故に、藥の爲めの故に、出づることを試みんが爲めの故に、福德の爲めの故に、祀天の爲めの故に、善道の爲めの故に、施の爲めの故に、種子の爲めの故に、憍恣の爲めの故に、試力の爲めの故に、顏色の爲めの故に、輕慢の爲めの故にす、一切僧伽婆尸沙なり、內色に於ても亦是くの如し、外色に於ても亦是くの如し、內外色に於ても亦是くの如し。若し水、若しは風、若しは虛空に於ても亦是くの如し。三種の人ありて犯す。不癲狂・不錯亂・不痛惱なり、是れを三種人の犯と爲す。三種人の不犯あり、若しは癲狂・錯亂・痛惱なり、是れを三種人の不犯と爲す。三種の衆生あり、婬を行じて波羅夷を犯す。人と非人と畜生となり、是れを三種の衆生に於て婬を行ずれば波羅夷なりと爲す。復三種あり、婬女・童女・二根なり。復三あり、婬女・童女・黃門なり。復三種あり、婦女・童女・男子なり。復三あり、男子・二根・黃門なり。復三種の婦女に於て婬を行ずれば波羅夷を犯す。人婦女・非人婦女・畜生婦女なり、童女も亦是くの如し。二根も亦是くの如し、黃門も亦是くの如し、男子も亦是くの如し。人婦女の三處に婬を行ずれば波羅夷なり、大小便道と口中となり。非人婦女・畜生婦女・人童女・非人童女・畜生童女・人二根・非人二根・畜生二根も亦是くの如し、

に大城を受くべし。比丘に三法あり、僧應に與めに呵責羯磨を作すべし、破戒と破見と破威儀となり、是くの如きの三法あり、僧應に與めに呵責羯磨を作すべし。若しは擯羯磨・依止羯磨・遮不至白衣羯磨・擧羯磨も亦是くの如し。被擧人に三法あり、爲めに羯磨を解くべからず、見るべきを見ず、懺すべきこと懺せず、捨つべきを捨てず、是くの如きの三法あり、爲めに羯磨を解くべからず。被擧者に三法あり、應さに爲めに羯磨を解くべし。見べきは而も見、懺すべきは而も懺し、捨つべきは而も捨つ、是の三法あらば、應に爲めに羯磨を解くべし。被擧人に三法あり、爲めに羯磨を解くべからず、見るべきを見ず、懺すべきを懺せず、信ずべきを信ぜず、是くの如きの三法あり爲めに羯磨を解くべからず。被擧人に三法あり、應さに爲めに羯磨を解くべし。見るべきは見、懺すべきは懺し、信ずべきは信ず、是くの如きの三法あり、應に爲めに羯磨を解くべし。比丘に三法あり、應に與めに遮不至白衣家羯磨を作すべし。白衣の家に在りて佛法僧を毀呰す、是くの如きの三法あらば、應に與めに、遮不至白衣家羯磨を作すべし。比丘のために遮不至白衣家羯磨を作す時は、應さに三法を以て量宜すべし。稱量比丘・稱量白衣・稱量事なり。三法あり、稱量比丘・稱量白衣・稱量羯磨なり。三法あり、稱量比丘・稱量白衣・稱量犯なり。復三法あり、實に實ならず、作に作さず、應さに與めに遮白衣家羯磨を作すべく、應さに與めに遮不至白衣家羯磨を作すべからず、是れを比丘のために三事の宜しきを量り、遮不至白衣家羯磨を作すと爲す。復三法あり、呵責羯磨を作す。非法非毘尼にして羯磨成ぜず、處所を得ず。何等か三なる。擧を作さず、憶念を作さず、自言を爲さず、是れを三と爲す。復三法あり、不犯と不可懺罪を犯すと、若しは已に懺罪すると、是れを三と爲す。復三あり、擧を作さゞると非法と別衆となり。復三あり、自言を作さゞると非法と別衆となり。復三あり、不犯と非法と別衆となり。復三あり、不可懺罪を犯すと、非法と別衆となり。復三あり、犯罪已りて懺すると、非法と別衆となり。復三あり、不現前と非法と別衆と

莫れ」と。而も諸の比丘、故ほ難詰して止まず。彼れ癡狂止み、僧に從つて不癡毘尼を乞ふ。若し僧不癡毘尼を與ふれば、是れを如法に不癡毘尼を與ふと爲す。若し比丘狂癡の故に、多く不淨行非沙門法を犯す。彼れ後に還た心を得、餘の比丘言はく、「汝是くの如きの重罪、波羅夷・僧伽婆尸沙・偸蘭遮を犯す、憶するや不や」。彼れ言はく、「我れ先きに狂癡の故に、多く不淨行非沙門法を犯す、我が故作にあらず、是れ癡狂の故のみ、人の夢中の所作を憶するが如し、諸の長老、爲めに難詰して我れに問ふこと莫れ』。而も諸の比丘、故ほ難詰して止まず、彼れ僧に從つて不癡毘尼を乞ふ。僧若し不癡毘尼を與ふれば、是れを如法に不癡毘尼を與ふと爲す。若し比丘、狂癡の故に、多く不淨行非沙門を犯す。餘の比丘言はく、「汝重罪・波羅夷・僧伽婆尸沙・偸蘭遮を犯す、憶するや不や」。彼れ言はく、「我れ先きに狂癡の故に、多く不淨行非沙門法を犯す、我が故作にあらず、是れ狂癡のみ、我れ憶す、人の高きより墜下して、少草木を攬るが如し、諸の長老、爲めに難詰して我れに問ふこと莫れ」。而も諸の比丘、故ほ難詰して止まず。彼れ僧に從つて不癡毘尼を乞ふ。若し僧不癡毘尼を與ふれば、是れを如法に不癡毘尼を與ふと爲す。是れを三の如法に不癡毘尼を與ふと爲す。三種の調法あり、呵責と擯出と依止となり、是れを三種の調法と爲す。三の滅法あり、用多人語と罪處所と草覆地となり、是れを三の滅法と爲す。復三法あり、應さに比丘を喚んで現前に著け、已りて白を作し、然る後に三羯磨を作し、我れは是れ如法と說くべし、處所羯磨成就を得ん。若し比丘鬪諍を憙ばんに、僧應さに與めに三種羯磨を作すべし。若しは呵責羯磨、若しは擯羯磨、若しは依止羯磨なり』。佛說是くの如し。諸の比丘聞いて歡喜し、信樂し、受持す。

爾の時佛、諸の比丘に告げたまはく、『三法あり、與めに大戒を受くべからず。一には破戒、二には破見、三には破威儀なり。是くの如きの三法あり、與ふに大戒を受くべからず。三法あり、應に與めに大戒を受くべし。破戒せず、破見せず、破威儀せず、是くの如きの三法あり、應に與め

復三非法あり、不癡毘尼を與ふ。若し比丘、癡狂ならざるに、而も詐りて癡狂と僞し、多く不淨行を犯す、沙門の法に非ず。餘の比丘言はく、「汝、重罪・波羅夷・僧伽婆尸沙・偸蘭遮を犯す」と。彼れ是の言を作す、「我れ癡狂心亂にして、多く不淨行非沙門の法を犯す、此れ我が故作に非ず、是れ癡狂の故のみ、諸の長老、難詰して我れに問ふこと莫れ」、而も諸の比丘、故ほ難詰して止まず。彼れ僧に從つて不癡毘尼を乞ふ。若し僧不癡毘尼を與ふれば、是れを非法に不癡毘尼を與ふと爲す。若し比丘、癡狂ならずして、而も詐りて癡狂と僞し、多く不淨行非沙門の法と犯す。餘の比丘言はく、「重罪・波羅夷・僧伽婆尸沙・偸蘭遮を犯す」と。問うて言はく、「汝重罪・波羅夷・僧伽婆尸沙・偸蘭遮を犯すことを憶するや不や」。彼れ言はく、「我れ先きに癡狂心亂にして、多く不淨行非沙門の法を犯す、我が故作にあらず、是れ癡狂の故に作すのみ、人の夢中の事を憶するが如し、我れも亦是くの如し、諸の長老、難詰して我れに問ふこと莫れ」。而も諸の比丘、故ほ難詰して止まず。彼れ僧に從つて不癡毘尼を乞ふ。僧若し不癡毘尼を與ふれば、是れを非法に不癡毘尼を與ふと爲す。若し比丘癡狂ならず、而も詐りて癡狂と僞し、多く不淨行非沙門法を犯す。餘の比丘言はく、「重罪・波羅夷・僧伽婆尸沙・偸蘭遮を犯す」と。問うて言はく、「汝重罪・波羅夷・僧伽婆尸沙・偸蘭遮を犯すことを憶するや不や」。彼れ言はく、「我れ先きに癡狂の故のみ、人の高きより墜下して、少草木を攬るが如し、諸の長老、爲めに難詰して我れに問ふこと莫れ」と。而も諸の比丘、故ほ難詰して止まず。彼れ僧に從つて不癡毘尼を乞ふ。若し僧不癡毘尼を與ふれば、是れを非法に不癡毘尼を與ふと名づく。是れを三の非法に不癡毘尼を與ふと爲す。復三種の如法に不癡毘尼を與ふるあり。若し比丘、狂癡の故に、多く不淨行非沙門法を犯す、彼れ後還た心を得。餘の比丘言はく、「汝是くの如きの重罪・波羅夷・僧伽婆尸沙・偸蘭遮を犯す、憶するや不や」。彼れ言はく、「我れ先きに癡狂の故に、多く不淨行非沙門法を犯す、我が故作にあらず、是れ狂の故のみ、諸の長老、爲めに難詰して我れに問ふこと

已に懺悔して淸淨なり、諸の長老、難詰して我れに問ふこと莫れ」と。而も諸の比丘故ほ難詰して止まず。彼れ僧に從つて憶念毘尼を乞ふ。僧若し與に憶念毘尼を作さば、非法なり。是れを三種の非法に、憶念毘尼を與ふと爲す。三種の如法に憶念毘尼を與ふるあり。若し比丘、重罪・波羅夷・僧伽婆尸沙・偷蘭遮を犯さず、餘の比丘、「重罪・波羅夷・僧伽婆尸沙・偷蘭遮を犯す」と言ふ。問うて言はく、「汝、是くの如き重罪・波羅夷・僧伽婆尸沙・偷蘭遮を犯すことを憶するや不や」。彼れ犯すことを憶せず、便ち是の言を作す、「諸の長老、我れ是くの如きの重罪・波羅夷・僧伽婆尸沙・偷蘭遮を犯すことを憶せず、諸の長老、難詰して我れに問ふこと莫れ」と。而も諸の比丘故ほ難詰して止まず。彼れ廣く憶念し、僧に從つて憶念毘尼を乞ふ。僧若し憶念毘尼を與ふれば、是れを如法に憶念毘尼を與ふと爲す。若し比丘、重罪・波羅夷・僧伽婆尸沙・偷蘭遮を犯さず、餘の比丘、「重罪・波羅夷・僧伽婆尸沙・偷蘭遮を犯す」と言ふ。問うて言はく、「汝、波羅夷・僧伽婆尸沙・偷蘭遮を犯す、憶するや不や」。彼れ言はく、「犯すことを憶せず」と。便ち是の言を作す、「長老、我れ是くの如きの重罪、波羅夷・僧伽婆尸沙・偷蘭遮を犯すことを憶せず、我れ小罪を犯す、當さに如法に懺悔して淸淨にすべし、諸の長老、難詰して我れに問ふこと莫れ」と。而も諸の比丘、故ほ難詰して止まず。彼れ廣く憶念して、僧に從つて憶念毘尼を乞ふ。若し僧憶念毘尼を與ふれば、是れを如法に憶念毘尼を與ふと爲す。若し比丘、重罪・波羅夷・僧伽婆尸沙・偷蘭遮を犯さず、餘の比丘、「重罪、波羅夷・僧伽婆尸沙・偷蘭遮を犯す」と言ふ。問うて言はく、「汝、是くの如きの重罪・波羅夷・僧伽婆尸沙・偷蘭遮犯す、憶するや不や」。彼れ犯すことを憶せず、便ち是の言を作す、「長老、我れ是くの如きの重罪・波羅夷・僧伽婆尸沙・偷蘭遮を犯すことを憶せず、我れ小罪を犯す、已に懺悔して淸淨なり、諸の長老、難詰して我れに問ふこと莫れ」と。而も諸の比丘、故ほ難詰して止まず。彼れ廣く憶念して、僧に從つて憶念毘尼を乞ふ。僧若し憶念毘尼を與ふれば、是れを三種の如法に憶念毘尼を與ふと爲す。

卷の第五十八（第四分の九）

毘尼增一の二

爾の時佛、諸の比丘に告げたまはく、『三羯磨ありて、一切の羯磨を攝す。何等か三なる。白羯磨・白二羯磨・白四羯磨なり、是れを三羯磨と爲す』。佛說是くの如し。諸の比丘聞いて歡喜し、信樂し、受持す。

爾の時世尊、王舍城に在して、諸の比丘に告げたまふ『三の非法ありて憶念毘尼を與ふ。何等か三なる、若し比丘重罪を犯さん、若しは波羅夷、若しは僧伽婆尸沙、若しは偸蘭遮なり。時に餘の比丘言はく、「波羅夷・僧伽婆尸沙・偸蘭遮を犯すことを憶するや不や」。彼れ言はく、「根本より見ず、諸の長老、我れ波羅夷・僧伽婆尸沙・偸蘭遮を犯すことを憶せず、難詰して我れに問ふこと莫れ」。而も諸の比丘、故ほ難詰して止まず。彼れ僧に從つて憶念毘尼を乞ふ。若し僧、彼れに憶念毘尼を與ふれば、是れを非法に憶念毘尼を與ふと爲す。若し比丘あり、重罪・波羅夷・僧伽婆尸沙・偸蘭遮を犯す。時に餘の比丘、「波羅夷・僧伽婆尸沙・偸蘭遮を犯す」と言ふ。餘の比丘問うて言はく、「汝、波羅夷・僧伽婆尸沙・偸蘭遮を犯すことを憶するや不や。」彼れ言はく、「根本より見ず、諸の長老、我れ是くの如き重罪を犯すことを憶念せず、我れ小罪を犯す、當さに懺悔して淸淨にすべし、諸の長老、難詰して我れに問ふこと莫れ」と。而も諸の比丘、故ほ難詰して止まず。彼れ僧に從つて憶念毘尼を乞ふ。若し僧憶念毘尼を與ふれば、是れを非法に憶念毘尼を與ふと爲す。若し比丘あり、重罪・波羅夷・僧伽婆尸沙・偸蘭遮を犯す。餘の比丘語りて言はく、「汝、重罪・波羅夷・僧伽婆尸沙・偸蘭遮を犯すことを憶するや不や」。彼れ言はく、「根本より見ず、諸の長老、我れ重罪・波羅夷・僧伽婆尸沙・偸蘭遮を犯すことを憶せず、我れ小罪を犯す、

せしむ。復二法あり、一には難調者をして調ずることを得しむ、二には慚を知りて、安樂に住することを得。復二法あり、一には正法をして久住せしめ、二には毘尼を攝取す。復二法あり、一には現在の世怨を斷ず、二には未來の世怨を斷ず。復二法あり、一には現在の有漏を滅す、二には未來の有漏を滅す。復二法あり、一には現在の恐怖を斷じ、二には未來の恐怖を斷ず。復二法あり、一には現在の重罪を斷じ、二には未來の重罪を斷ず。復二法あり、一には現在の不善法を斷じ、二には未來の不善法を斷ず。此の二義の爲めの故に、世尊諸の比丘の爲めに戒を制したまふ。復二法あり、二義の爲めの故に、世尊呵責羯磨を制したまふ。一には僧を攝取し、二には僧をして歡喜せしむ、乃至現在の不善法、未來の不善法を斷ずること、亦上の如し。是くの如く一一の句、乃至七滅諍なり。呵責羯磨の法の如し』佛說是くの如し。諸の比丘聞いて歡喜し、信樂し、受持す。

四分律卷第五十七

作し、遮阿呵婆陀・遮說戒・遮自恣を作すこと亦是くの如し。二處二事二見も亦是くの如し。復二法あり、比丘應さにために呵責羯磨を作すべし。非法を法と說き、法を非法と說き、乃至說不說も亦是くの如し。二處二事二犯も亦是くの如し。擯羯磨・依止羯磨・遮不至白衣家羯磨も亦是くの如し。二處二事二見も亦是くの如し。二法あり、有漏を增長す。慚づべきを慚ぢず、慚に非るを反つて慚づ、此の二法ありて有漏を增長す。復二法あり、有漏を增長せず、慚づべきを慚ぢ、慚にあらざるを慚ぢず。復二法あり、有漏を增長す。不淨を淨と見、淨を不淨と見る、是の二法ありて有漏を增長す。復二法あり、有漏を增長せず、不淨を不淨と見、淨を淨と見る、是の二法ありて有漏を增長せず。復二法あり、有漏を增長す、不犯を犯と見、犯を不犯と見る、是の二法ありて有漏を增長す。復二法あり、有漏を增長せず、不犯を不犯と見、犯を犯と見る、是の二事ありて有漏を增長せず。復二法ありて有漏を增長す、輕を而も重と見、重を而も輕と見る、是の二法ありて有漏を增長す。復二法あり、有漏を增長せず、輕を輕と見、重を重と見る、是の二法ありて有漏を增長せず。復二法あり、有漏を增長す、無餘を有餘と見、有餘を無餘と見る、是の二法ありて有漏を增長す。復二法あり、有漏を增長せず、無餘を無餘と見、有餘を有餘と見る、是の二法ありて有漏を增長せず。復二法あり、有漏を增長す、非法を法と見、法を非法と見る、是の二法ありて有漏を增長す。復二法あり、有漏を增長せず、非法を非法と見、是法を是法と見る、是の二法ありて有漏を增長せず。復二法あり、有漏を增長す。非制を而も制とし、是制は便ち斷ず、是の二法ありて有漏を增長す。復二法ありて有漏を增長せず、非制は制せず、是制は斷ぜず、是の二法ありて有漏を增長せず。二語ありて戒を捨つ、我れ佛を捨て、法を捨つ、乃至我れは沙門釋子に非ずと、上の如し。如來出世し給ひ、衆の過失を見るが故に、二義を以て諸の比丘の爲めに戒を制したまふ。一には僧を攝取し、二には僧をして歡喜せしむ。復二法あり、一には不信者をして信ぜしむ、二には已信者をして增長

すべし、一には眞實、二には不瞋なり、應さに是くの如きの二法を修すべし。被擧の比丘、亦應さに是くの如きの二法を修すべし、一には眞實、二には不瞋なり』。佛說是くの如し。諸の比丘聞いて歡喜し、信樂し、受持す。

爾の時佛、諸の比丘に告げたまはく『比丘に二法あり、疾く正法を滅す、非法を法と說き、法を非法と說き、乃至說不說も亦是くの如し。二處二事二犯も亦是くの如し。復二法あり、善法を生ずること能はず、法非法より、乃至說不說も亦是くの如し。二處二事二犯も亦是くの如し。復二法あり、比丘自ら破壞して罪を犯し、數ば有智の者の爲めに呵責せられ、多く衆罪を得、法非法より、乃至說不說も亦是くの如し。二處二事二犯も亦是くの如し。復二法あり、比丘地獄に墮すること、猶ほ射箭の如し。法非法より、乃至說不說も亦是くの如し。二處二事二犯も亦是くの如し』。

爾の時佛、諸の比丘に告げたまはく『二法あり、正法をして久住せしむ。非法を非法と說き、是法を是法と說き、乃至說不說も亦是くの如し。二處二事二犯も亦是くの如し。復二法あり、比丘能く諸善を生ず。非法を非法と說き、是法を是法と說く、乃至說不說も亦是くの如し。二處二事二犯も亦是くの如し。復二法あり、比丘自ら破壞せず、犯罪せず、智者の爲めに呵責せられず、福を受くること無量なり。非法を非法と說き、是法を是法と說き、乃至說不說も亦是くの如し。二處二事二犯も亦是くの如し。復二法あり、比丘疾かに天に生るゝことを得、猶ほし射箭の如し。非法を非法と說き、法を是法と說き、乃至說不說も亦是くの如し。二處二事二犯も亦是くの如し。比丘に二法あらば、應さに擧すべし。非法を法と說き、法を非法と說き、乃至說不說も亦是くの如し。爲めに憶念を作し、自言を作し、遮阿㝹婆陀・遮說戒・遮自恣を作すこと、亦是くの如し。二處二事二見も亦是くの如し。二處二事二見も亦是くの如し。復二法あり、比丘如法に擧す。非法を法と說き、法を非法と說き、乃至說不說も亦是くの如し。二處二事二犯も亦是くの如し。憶念を作し、自言を

をして復惡語を以て我れを呵せしめず、我れ若し是くの如くなれば、善法をして增長せしむ、是れを比丘能く自ら其の過を觀ると爲す』。云何が他の比丘を擧し、自ら其の過を觀せしむる。彼れ是の念を作す、「彼の比丘非を犯す、我れをして見ることを得しむ、若し彼れ非を犯さゞれば、我れ則ち見ず、彼れ非を犯すを以ての故に、我れをして見ることを得しむ、若し彼れ自ら能く至誠に懺悔すれば、我れをして惡音を出さしめず」。是くの如く、善法をして增長せしむ、是れを他の比丘を擧して、自ら其の過を觀ると爲す。當さに知るべし、此の過復增長せず、如法如毘尼佛所敎にして、諸の比丘安樂に住することを得』。舍利弗是くの如きの語を說く。諸の比丘聞いて歡喜し、信樂し、受持す。

爾の時佛、諸の比丘に告げたまはく、『二種の癡あり、一には犯罪、二には不見罪、是れを二種の癡と爲す。復二種の智あり、一には不犯罪、二には見犯罪、是れを二種の智と爲す。復二種の癡あり、一には犯罪を見ず、二には犯罪を見て如法懺悔せず、是れを二種の癡と爲す。復二種の智あり、一には犯罪を見る、二には罪を見て、能く如法に懺悔す、是れを二種の智と爲す。復二種の癡あり、一には罪を見て如法に懺悔せず、二には如法に懺悔するも彼れ受けず。復二種の智あり、一には罪を見て如法に懺悔す、二には如法に懺悔するに彼れ受く、是れを二種の智と爲す』。佛說是くの如し。諸の比丘聞いて歡喜し、信樂し、受持す。

爾の時佛、諸の比丘に告げたまはく、『諸の比丘、過失あるを以ての故に、世尊二義を以て斷諍法を制したまふ。一には難調人を調せしむ、二には慚愧を知るものは安樂を得』。此の二義を以ての故に、世尊諸の比丘の爲めに斷諍法を制したまふ。佛說是くの如し。諸の比丘聞いて歡喜し、信樂し、受持す。

爾の時佛、諸の比丘に告げたまふ、『他の比丘を擧し、他の罪を擧せんと欲せば、應さに二法を修

非法は便ち行ひ、是法は行はず、彼れ勤行して精進ぜず、未だ得ざるを得せしめ、未だ入らざるを入らしめ、未だ證せざるを證せしむる、則ち諸天人民をして利益を得ず、長夜に苦を受けしむ』。佛說是くの如し。諸の比丘聞いて歡喜し、信樂し、受持す。

爾の時佛、諸の比丘に告げたまはく、『若し國に、法王の力強くして、衆賊の力弱ければ、皆來りて歸伏し、或は復逃竄す。時に法王安樂に出入して、憂患あることなし、邊國の小王は教令に順從し、境內の人民も、亦安樂なることを得、生業自ら恣にして、諸の憂苦なし、多く利益を得、損減あることなし。是くの如く、妙法の比丘力を得、非法の比丘力なければ、非法の比丘、非法の比丘、如法比丘の所に未至し、教令に隨順して敢て違逆せず、若しは逃竄すべし、衆惡を作さず。爾の時如法の比丘、安隱にして樂を得、若しは僧中に在りても語ることを得、若し空處に在り住するも、如法羯磨を作して非法羯磨を作さず、毘尼羯磨を作して非毘尼羯磨を作さず、是法は便ち行ひ、非法は行はず、勤修して精進すれば、未だ得ざるは能く得、未だ入らざるは能く入り、未だ證せざるは能く證し、則ち諸天人民をして大利益を得しむ』。佛說是くの如し。諸の比丘聞いて歡喜し、信樂し、受持す。

爾の時舍利弗、諸の比丘に告ぐ『諸の長老、若し鬪諍ありて、他の比丘及び有罪の比丘を擧し、自ら觀察せざれば、當さに知るべし、此の諍は遂に更に增長し、如法如毘尼に除滅することを得ず、諸の比丘安樂ならず。若し比丘共に諍ひ、他の比丘及び有罪の者を擧し、各自ら過を觀れば、當さに知るべし、此の諍は復增長深重ならず、如法如毘尼に除滅することを得、諸の比丘便ち安樂に住することを得。諸の比丘、云何が自ら過を觀る。有罪の比丘是の念を作す、「我れ已に是くの如きの事を犯す、彼れも我れ非を犯せりと見る。我れ若し犯さゞれば、彼れも我れ非を犯せりと見ることを得ず、我れ犯すを以ての故に、彼れをして我れを見せしむ、我れ今應さに自ら悔過すべし、彼れ

して慈心あることなきも亦是くの如し』。佛說是くの如し。諸の比丘聞いて歡喜し、信樂し、受持す。

爾の時佛、諸の比丘に告げたまはく『二衆あり、一には法語衆、二には非法語衆なり。何等か非法語衆なる。衆中にて法毘尼を用ひず、佛の所教を以て說かず、應さに教ふべきに、教へずして住し、應さに滅すべきに、滅せずして住す、是れを非法語衆と爲す。何等か法語衆なる。衆中に法毘尼を用ひ、佛の所教に隨つて說き、應さに教ふべきは教へて住し、應さに滅すべきは滅して住す、是れを法語衆と爲す。此の二衆の中にて、法語衆は、我れ讃歎して尊しと爲す』。佛說是くの如し。諸の比丘聞いて歡喜し、信樂し、受持す。

『復二衆あり、如法衆と不如法衆となり。何等か不如法衆なる。衆中にて、若し非法の者力あり、如法の者力なければ、非法の者は伴を得、如法の者は伴を得ず、非法羯磨を作して法羯磨を作さず、非毘尼羯磨を作して、毘尼羯磨を作さず、非法は便ち行ひ、是法は行はず、是れを非法衆と爲す。何等か如法衆なる。若し衆中にて如法の者力あり、非法の者力なければ、如法の者は伴を得、不如法の者は伴を得ず、法羯磨を作して非法羯磨を作さず、毘尼羯磨を作して、非毘尼羯磨を作さず、是法は行ひ、非法は滅す、是れを如法衆と爲す。此の二衆の中、如法衆は、我れ讃歎して尊しと爲す』。佛說是くの如し。諸の比丘聞いて歡喜し、信樂し受持す。『二衆あり、等衆と不等衆と亦是くの如し』。

爾の時佛、諸の比丘に告げたまはく『若し國、法王の力弱くして衆賊熾盛なれば、爾の時法王、安樂に出入することを得ず、邊國の小王は教令に順はず、國界の人民も亦安樂に出入することを得ず、生業休廢し、憂苦し損減して利益を得ず。是くの如く、非法の比丘に力あり、是法の比丘に力なければ、如法の比丘は安樂なることを得ず、若し衆中に在りても亦語ることを得ず、若し空處に在りて住せんに、是の時非法羯磨を作して法羯磨を作さず、非毘尼羯磨を作して毘尼羯磨を作さず、

ありて、自ら解脱することを得、一には犯罪を見る、二には犯して能く如法に懺悔す。二法ありて解脱することを得ず、一には罪を見て如法に懺悔せず、二には、若し如法懺悔するも、而も彼れ受けず。二法あり、自ら解脱することを得。一には罪を見て能く如法に懺悔す、二には如法に懺すれば、彼れ能く如法に受く。縛不縛も亦是くの如し。二種の清淨あり、一には不犯、二には懺悔なり』。佛說是くの如し。諸の比丘聞いて歡喜し、信樂し、受持す。

爾の時佛、諸の比丘に告げたまはく『二種の人あり、如來を謗す。一には信樂せずして憎嫉す、二には、信樂すれども、解して受持せず。是の故に我れ今汝等に告げ、此の義を知らしむ。如來を謗ずれば、大重罪を得。若し一切の諸天及び世人、若しは魔・梵王・沙門・婆羅門を謗ずるは、其の罪輕し、如來を謗ずれば、其の罪最も重し』。佛說是くの如し、諸の比丘、聞いて歡喜し、信樂し、受持す。

『復二種ありて如來を謗ず。一には非法を法と言ひ、二には法を非法と言ふ。二種ありて如來を謗ぜず。一には非法を非法と說き、法を是れ法なりと說く。二種あり、如來を謗ず。一には非毘尼を毘尼と說く、二には是毘尼を非毘尼と說く。二種ありて如來を謗ぜず、一には非毘尼は非毘尼と說き、二には、是毘尼を毘尼と說く。二種ありて如來を謗ず、一には非制を制と言ひ、二には是制を而も斷ず。二種ありて如來を謗ぜず、一には非制を非制と言ひ、二には是制を斷ぜず。二法ありて如來を謗ず。一には非法を法と言ひ、二には法を非法と言ふ。二法ありて如來を謗ぜず、一には非法を非法と言ひ、二には法を是法と言ふ。乃至說を非說といふも亦是くの如し。二處二事二見も亦是くの如し。復二法あり、如來の善教を受けざるも亦是くの如し。復二法あり、如來に違ふも亦是くの如し。復二法あり、堅持して如來と諍ふも、亦是くの如し。復二法あり、如來を奉ぜざるも亦是くの如し。復二法あり、如來に値はざるも亦是くの如し。復二法あり、如來の所に於て、麁獷に

心未だ無學に至らざるも、常に求めて修習し、勝法を增進し、此の二法ありて多くの利益を得。未だ得ざるに能く得、未だ入らざるに能く入り、未だ證せざるに能く證す。是の故に汝等當さに勤めて修習して、是くの如きの法を學すべし』。佛の說きたまふこと是くの如し。諸の比丘聞いて歡喜し、信樂し、受持す。『善く入定し、善く出定するも亦是くの如し』。

爾の時佛、諸の比丘に告げたまはく『比丘あり、心未だ無學に至らざるも、常に求めて修習し、勝法を增進すれば、二法ありて多くの利益を得、未だ得ざるに能く得、未だ入らざるに能く入り、未だ證せざるに能く證す。何等か二なる。可厭處に厭を生じ、已に厭すれば、正憶念して斷ず。是くの如きの學人は、心未だ無學に至らざるも、常に求めて信習し、勝法を增進すれば、此の二法ありて、多くの利益を得、未だ得ざるに能く得、未だ入らざるに能く入り、未だ證せざるに能く證す。是の故に汝等、可厭處に厭を生じ、已に厭すれば、當さに正憶念して斷ずべし。而も偈を說いて言はく、

明者は厭處に在りて　能く厭離の心を生じ、　無畏にして恐怖せず　能く斷ずれば聖を得　比丘正念にして斷ずれば　無上正道を得　終に復退轉せず　涅槃に住することを得。

佛說是くの如し。諸の比丘聞いて歡喜し、信樂し受持す。

爾の時佛、諸の比丘に告げたまはく『破戒は二道に墮す、地獄と畜生の中なり。持戒は二道に生る、天及び人中に生ず。屏處に惡業を造れば、生れて二道に墮す、地獄及び畜生なり、屏處に善業を造れば、二道に生ることを得、天及び人中に生る。邪見は二道に生る、地獄及び畜生なり。正見は二道に生る、天及び人中に生る。佛の聖弟子は天人中の尊貴なり、二法ありて解脫することを得ず、一には戒を犯す、二には犯すことを見ず。二法ありて、身解脫することを得、一には不犯、二には見犯、二法ありて解脫することを得ず、犯して罪を見ず、犯すを見て如法に懺悔せず。二法

を道と見る。復二見あり、可行を非行と見、非行を可行と見る。復二見あり、出離を不出離と見、不出離を出離と見る。復二見あり、棄を不棄と見、不棄を棄と見る。復二見あり、世間は常と見、世間は無常と見る。復二見あり、世界は有際と見、世界は無際と見る。復二見あり、是の身は是れ身命、異に命異なりと見る。復二見あり、如來の滅度あり、如來の滅度なし。復二見あり、如來の滅度なきことあり、如來の滅度なきことあるに非ず。佛法の內に於て是くの如きの二見あり、出家人は行ずべからず、若し修行すれば、法の如く治す』。佛の說きたまふこと是くの如し。諸の比丘聞いて歡喜し、信樂し、受持す。

爾の時佛、諸の比丘に告げたまはく『二種の毘尼あり、有犯毘尼と有諍毘尼となり。復二種の毘尼あり、犯毘尼と結使毘尼となり。復二の毘尼あり、比丘毘尼と比丘尼毘尼となり。復二の毘尼あり方、毘尼と遍毘尼となり。是れを二種の毘尼と爲す』。佛の說きたまふこと是くの如し。諸の比丘聞いて歡喜し、信樂し、受持す。

爾の時佛、諸の比丘に告げたまはく『二種の人ありて不安樂に住す、一には瞋を憙ぶ、二には怨みを懷し。復二法あり、一には急性、二には難捨。復二法あり、一には慳、二には嫉妬。復二法あり、一には欺詐、二には諂曲。復二法あり、一には自ら高ぶる、二には諍を憙ぶ。復二法あり、一には飾りを好む、二には放逸。復二法あり、一には慢、二には增上慢。復二法あり、一には貪、二には恚。復二法あり、一には自ら譽む、二には他を毀る。復二法あり、一には邪見、二には邊見。復二法あり、一には教を難ずるあり、二は訓導を受けず。是くの如き二種の人は、不安樂に住す』。

爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『有學の比丘、心未だ無學に至らるも、常に求めて修習して、勝法を增進すれば、二法あり、多くの利益を得。未だ得ること能はざるに能く得、未だ入らざるに能く入り、未だ證せざるに能く證す。何等か二なる。善く犯して除犯す。是くの如きの學人は、

れ守園人なりと憶し、我れは是れ優婆塞なりと憶し、我れは是れ沙彌なりと憶し、我れは是れ外道なり、是れ外道の弟子なりと憶し、我れは沙門釋子の法にあらずと憶す。一々の句も亦是くの如し』。

爾の時佛諸の比丘に告げたまはく、『二種の犯あり、一には輕、一には重、是れを二種の犯と爲す』と、佛の說きたまふこと是くの如し。諸の比丘聞いて歡喜し、信樂し受持す。『復二事あり、一には輕にして餘あり、二は輕なる者羯磨を作すことを得。復二事あり、波羅夷と僧伽婆尸沙なり。復二事あり、波羅夷と偸蘭遮なり。復二事あり、波羅夷と波逸提なり。復二事あり、波羅夷と波羅提提舍尼なり。復二事あり、波羅夷と突吉羅なり。復二事あり、波羅夷と惡說なり。僧伽婆尸沙乃至惡說も亦是くの如し。波羅提提舍尼乃至惡說も亦是くの如し。突吉羅と惡說も亦是くの如し』。

爾の時佛、諸の比丘に告げたまはく、『二見あり、出家人は行ずることを得ず。非法を法と見、法を非法と見る。復二見あり、毘尼を非毘尼と見、非毘尼を毘尼と見る。復二見あり、非犯を犯と見、犯を非犯と見る。復二見あり、輕なるに而も重と見、重なるに而も輕と見る。復二見あり、有餘を無餘と見、無餘を有餘と見る。復二見あり、麁惡を非麁惡と見、非麁惡を麁惡と見る。復二見あり、舊法を非舊法と見、非舊法を舊法と見る。復二見あり、制を非制と見、非制を制と見る。復二見あり、是說を非說と見、非說を說と見る。復二見あり、酒を非酒と見、非酒を酒と見る。復二見あり、飮を非飮と見、非飮を飮と見る。復二見あり、食を非食と見、非食を食と見る。復二見あり、時を非時と見、非時を時と見る。復二見あり、淨を不淨と見、不淨を淨と見る。復二見あり、重を非重と見、非重を重と見る。復二見あり、難を非難と見、非難を難と見る。復二見あり、無蟲を蟲と見、蟲を無蟲と見る。復二見あり、破を不破と見、不破を破と見る。復二見あり、種を非種と見、非種を種と見る。復二見あり、已觧を未觧と見、未觧を已觧と見る。復二見あり、可親を非親と見、非親を可親と見る。復二見あり、怖を不怖と見、不怖を怖と見る。復二見あり、道を非道と見、非道

正法をして久住せしむ。是の故に、汝等當さに此の教に隨ふべし。非毘尼を非毘尼と說き、是毘尼を是毘尼と說く、當さに是くの如く學すべし』。佛說是くの如し、諸の比丘聞いて歡喜し、信樂し、受持す。

爾の時佛諸の比丘に告げたまはく、『如來出世したまひ、衆の過失を見るが故に、一義を以て、諸の比丘の爲めに結戒し、僧を攝取したまふ。此の一義を以ての故に、如來諸の比丘の爲めに結戒したまふ』。佛說是くの如し、諸の比丘聞いて、歡喜し信樂し受持す、乃至正法久住す、句に亦是くの如し。

爾の時佛、諸の比丘に告げたまはく、『如來出世し、一義を以ての故に、諸の比丘の爲めに、呵責羯磨を制し、僧を攝取したまふ。是の一義を以ての故に、如來出世し、諸の比丘の爲めに、呵責羯磨を制したまふ』。佛說是くの如し、諸の比丘聞いて歡喜し、信樂し、受持す、乃至正法久住す。『句々亦是くの如し。是くの如く、擯羯磨・依止羯磨・遮不至白衣家羯磨・作不見罪擧羯磨・不懺悔羯磨・惡見不捨羯磨なり。法律の所制を撿挍するに、受依止を制し、梵罰を制し、擧を制し、憶念を制し、求聽を制し、自言を制し、遮阿兜婆陀を制し、遮說戒を制し、遮自恣を制し、戒を制し、說戒を制し布薩を制し、布薩羯磨を制し、自恣を制し、自恣羯磨を制し、白羯磨を制し、白二羯磨を制し、白四羯磨を制し、與覆藏・與本日治・與摩那埵・與出罪を制し、四波羅夷を制し十三僧伽婆尸沙・二不定法・三十尼薩耆・九十波逸提・四波羅提提舍尼・式叉迦羅尼・七滅諍を制す。一々の句は、呵責羯磨の如し』。

爾の時佛諸の比丘に告げたまふ、『一語を說けば便ち捨戒を成ず、是くの如きの言を作す、「我れ佛を捨つ」と、是くの如き一語を作せば、便ち捨戒と爲す』。佛說是くの如し、諸の比丘聞いて歡喜し、信樂し、受持す。『法を捨て、僧を捨て、和上を捨て、同和上を捨て、阿闍梨を捨て、同阿闍梨を捨て、諸の淨行の比丘を捨て、戒を捨て、毘尼を捨て、學事を捨つ。我れは是れ白衣なり、我れは是

『實と爲し、故らに以て毀謗せず、無犯』。時に比丘あり、比丘の腰帶を取る。彼れ言はく『汝我が帶を盜む』。彼れ言はく『我れ盜まず、親厚意を以て取る』。彼れ疑ふ。佛言はく『實語と爲し、故らに以て毀謗せず、無犯』。時に比丘あり、無根僧伽婆尸沙を以て他を謗じ、疑ふ。佛言はく『波逸提なり』。

毘尼增一の一

是くの如く我れ聞きき。佛舍衞國祇洹精舍給孤獨食園に在しき。時に世尊、諸の比丘に告げたまはく『汝等に諦かに聽き、善く之を思念せよ。若し比丘相似の文句を說き、法毘尼を遮すれば、此の比丘、多人をして利益を得ざらしめ、諸の苦業を作し、以て正法を滅す。若し比丘、文句に隨順し、法毘尼に違せず、此くの如きの比丘は、多人を利益し、衆の苦業を作さしめず、正法を久住せしむ。是の故に諸の比丘、汝等當さに文句に隨順すべし、增減して法毘尼に違せしむる勿れ、當さに是くの如く學すべし』。佛說是くの如し、諸の比丘聞いて歡喜し、信樂受持す。佛言はく、『若し比丘、非法を法と說き、法を非法と說かば、此くの如きの比丘は、多人をして利益を得ざらしめ、衆の苦業を作して、以て正法を滅す。其れ比丘あり、非法の說を非法と言ひ、是法の說を是法と言ふ。此くの如きの比丘、多人を利益を作し、衆の善業を作し、正法をして久住せしむ。是の故に汝等當さに此の敎に隨順すべし。非法は當さに說いて非法と言ひ、是法は說いて是法と言ふべし、當さに是くの如きの學を作すべし』。佛說是くの如し、諸の比丘、聞いて歡喜し、信樂し、受持す。

爾の時佛諸の比丘に告げたまはく『若し比丘、非毘尼を說いて非毘尼と言ひ、是毘尼を說いて非毘尼と言はゞ、多人をして利益を得ざらしめ、衆の苦業を作して、以て正法を滅す。若し比丘、非毘尼を說いて非毘尼と言ひ、是毘尼を說いて、是毘尼と言はゞ、多人を利益し、苦業を作さず、

はく、『某甲童女言はく、「我が父母、汝を奪ひて更に餘人に與へんと欲す」、汝今當さに迎ふべし、若しに當さに之を放つべし』。彼れ疑ふ。佛言はく『彼れ先きに已に言誓す、無犯、白衣の爲めに使するは突吉羅』。時に居士あり、彼の童女を占護す、既にして婦を迎へず、又餘の嫁を聽かず。彼の父母言はく、『知らず誰をして某甲居士に語りて、此の童女を迎ひ去らしむる、若しは餘に嫁せしむるを聽すべし』。彼の家の常供養比丘狂病あり、便ち言はく『我れ當さに爲めに語るべし』。比丘卽ち彼の居士の所に往き、頭を捉りて語つて言はく、『汝、某甲童女を迎へよ、若しは當さに放ち去るべし』と。後還た心を得て疑ふ。佛言はく『顚狂・心亂・痛惱所纒は一切無犯なり』。

爾の時世尊、王舍城に在しき。優波離座より起ちて、偏へに右の肩を露はし、右膝地に著け、合掌して佛に白して言さく『大德、沓婆摩羅子淸淨なり、慈地比丘、無根を以て之を謗ず、是れ犯すや不や』。佛言はく『初めは未だ戒を制せず、無犯なり』。『大德、若し無根法を以て、淸淨比丘を謗ずれば、是れ犯すや不や』。佛言はく『僧伽婆尸沙』。時に比丘あり、女人を樹下に在りて坐す。餘の比丘語りて言はく『汝女人を婬犯す』。彼れ答へて言はく『我れは犯さず、共に樹下に坐するのみ』。彼の謗者疑ふ。佛言はく『眞實語と爲し、故らに毀謗を欲せざれは無犯なり』。時に比丘あり、家に在りて故二と共に通ず、異比丘あり、餘比丘と相似たり、此の相似の比丘に語りて言はく『汝故二を犯す』。彼れ言はく『我れ犯さず、彼の故二を犯すの比丘、我れと相似るのみ』と、彼れ疑ふ。佛言はく『實と爲して、故らに以て毀謗せざれば、無犯なり』。時に比丘あり、婬女を檀越と爲す。餘の比丘語りて言はく『汝婬女を犯す』。彼れ言はく『是れ我が檀越なり、犯さず』と、彼れ疑ふ。佛言はく『實と爲し、故らに以て毀謗せず、無犯。婦女、若しは童女、若しは黃門、若しは比丘尼、若しは式叉摩那、沙彌尼も亦是くの如し』。時に比丘あり、小沙彌を捉へて摩捫嗚す。餘の比丘語りて言はく『汝沙彌を犯す』。彼れ言はく『我れ犯さず、之を摩捫嗚するのみ』。彼れ疑ふ。佛言はく、

ひ、驅出せらる、我れ今共に懺悔せんと欲す』と。比丘即ち和合の爲めに懺悔せしめ、疑ふ。佛言はく『懺悔の爲めの故に無犯』。時に婦人あり、夫と共に鬪ひ已りて出で、去る。常供養比丘の所に至り、語りて言はく『我れ夫と共に鬪ひ已りて外に出づ、今懺悔せんと欲す』。比丘即ち往いて、和合し懺悔せしめ、疑ふ。佛言はく『懺悔の爲めにす、無犯なり』。時に婦人あり、夫と共に鬪ひ語りて言はく『汝若し、我れを須つて婦と爲さゞれば、當さに須ひずとのぶべし』。夫言はく『我れ汝を須つて婦と爲さず』と、即ち驅出す。常供養比丘の所に往いて語りて言はく『我れ夫と共に鬪ふ、我れ夫に語つて言はく「若し我れを須つて婦と爲さゞれば、當さに須ひて婦と爲さずといふべし」。夫言はく「須ひず」と、即ち我を驅りて出す、今懺悔せんと欲す』。比丘即ち和合して懺悔せしめ、疑ふ。佛言はく『懺悔の爲めの故に無犯なり』。時に居士あり、婬女を取りて婦と爲す。先きに常に此の女人を往返するもの、見已りて語りて言はく『我れ汝と、如是如是の事を作さんと欲す』。餘人語りて言はく『此れ復婬女を作さず、今已に某甲居士の爲めに婦と爲る』。彼の人即ち强えて將ひ、共に婬を行ず。時に夫聞き已り即ち驅出す。便ち常供養比丘の所に往きて語りて言はく『大德、我れ自ら居士の爲めに婦と作りて已來、未だ曾て他の男子を犯さず、唯此の賊ありて、强えて牽いて我れを犯す、我れ今夫と共に懺悔せんと欲す』。比丘即ち往いて和合し、夫と共に懺悔せしむ、疑ふ。佛言はく『懺悔の爲めの故に無犯』。時に居士あり、婬女に所須を給し、常供養比丘の所に往き、語りて言はく『我が爲めに某甲婬女に語れ、「某處に在りて我れを待て」と』。比丘疑ふ。佛言はく、『先きは和合を以て無犯なり、白衣のために使するは突吉羅なり』。時に居士あり、彼の童女を占護す、既にして婦を迎へず、又餘の嫁を聽かず。時に女常供養の比丘に語りて言はく『大德、我が爲めに某甲居士に語れ、我か父母、汝を奪いて、我れを持つて餘人に與へんと欲す、汝若しは我を迎ふべし、若しは我れを放つべし』。比丘言はく『爾すべし』。彼の比丘即ち居士の所に往きて語りて言

中に還りて僧に白す。僧即ち彼の居士に告げて知らしむ、比丘疑ふ。佛言はく『一切僧伽婆尸沙。』時に檀越あり、僧伽藍の中に往き、諸の比丘に語りて言はく『大德、僧我が爲めに語れ』。比丘言はく、『居士、何の語を說かんと欲する』。彼れ言はく『我が爲めに某甲居士に語れ、「汝の女を以て、我が爲めに婦と爲せ」と』。比丘言はく、『當さに汝が爲めに語るべし。即ち一比丘を差して白二羯磨を作し、彼の居士の所に往かしめて、語りて言はく、居士、我れ汝が爲めに衆僧の語を說かん』。彼の居士言はく、『大德、僧何の勅せらるゝ所ぞ』。比丘言はく、『衆僧汝に語る、「汝の女を以て、某甲居士に與へて婦と作せ」と』。彼れ言はく、『大德、僧の勅を奉じて當さに與ふべし』。使比丘是の念を作さく、「我れ今若し還りて衆僧に白さば、恩我れに在らず」、即ち自ら往いて彼の居士に語り已りて疑ふ。佛言はく、『衆僧は偸蘭遮、使比丘は僧伽婆尸沙』。時に檀越あり、常供養比丘の所に往き、比丘に語りて言はく、『我が爲めに某甲居士に語れ、「彼れの女を以て、我れに與へて婦と作せ」と』。比丘言はく、『居士、當さに汝が爲めに語るべし』。比丘即ち彼の居士の所に往いて語つて言はく、『汝、女を以て彼の某甲居士に與へて婦と作すべし』。居士言はく、『我が女は已に他に與ふ』と。若しは他已に將ひ去ると言ひ、若し死すと言ひ、若し賊偸み去ると言ひ、若しは無しと言はゞ、比丘、居士の所に還り、是くの如きの語を語らば、一切偸蘭遮なり』。時に檀越あり、常供養比丘に語りて言はく『汝我が爲めに某甲居士に語れ、「女を以て我れに與へて婦と作すべし」と』。比丘言はく『當さに汝が爲めに語るべし』。比丘即ち彼の居士の所に往き、語りて言はく『汝女を以て某甲居士に與へて婦と作すべし』。居士言はく、『我が女に癩病あり、若しは癰、若しは白癩ありと言ひ、若しは乾枯病と言ひ、若しは狂と言ひ、若しは痔病と言ひ、若しは常當有血出病と言ひ、若しは足下の常熱病と言はゞ、比丘還りて、居士に是くの如きの言を語り、已りて疑ふ。佛言はく『一切僧伽婆尸沙』。時に居士あり、婦と闘ひ、婦を驅出す。即ち常供養比丘の所に往き、語りて言はく『大德、夫、我れと共に闘

し、若しは婦事を爲し、若しは私通事を爲す、是れ犯すや不や』。佛言はく、『初めは未だ戒を制せず、不犯なり』。『若し語を受け往いて說き、而も彼の語を持つて還る、是れ犯すや不や』。佛言はく、『僧伽婆尸沙』。『若し語を受け、彼れに向つて說き、語を持たずして還る、是れ犯すや不や』。佛言はく、『偸蘭遮』。若し彼れに向つて說くを聞き、語を持たずして還るは偸蘭遮。若し疑を受けずして往き、彼れに向つて說き、彼の語を持つて還るは偸蘭遮。若し語を受け、彼れに向つて說かず、彼の語を持たずして還るは突吉羅。若し聞いて彼れに向つて說かず、語を持たずして還るは突吉羅。若し語を受けず、彼れに向つて說き、語を持たずして還るは突吉羅なり』。時に比丘あり、檀越家あり、其の婦喪して未だ久しからず、比丘往いて問訊す。檀越に二兒あり、比丘語りて言はく、『汝何ぞ更に婦を取らざる』。檀越言はく、『我が小兒をして、辛苦せしめんことを恐る、若し某甲童女を得ば、我れ當さに取るべし』。時に比丘卽ち彼の童女の所に往きて語つて言はく、『我れ某甲居士より言を聞く、「我れ若し某甲童女を得ば、當さに取りて婦と爲すべし」と』。童女言はく、『若し我れを須つて婦と爲さば、我れ亦彼れを須つて夫と爲さん』。比丘卽ち檀越の所に還りて語つて言はく、『我れ彼の女の語を聞く、「若し我れを須つて婦と爲さば、我れ亦彼れを須つて夫と爲さん」と』。比丘更に語を持たずし還り、疑ふ。佛言はく、『若し聞いて彼れに向つて說き、語を持たずして還るは偸蘭遮、磨香の女人も亦是くの如し』。時に居士あり、僧伽藍の中に往き、諸の比丘に語つて言はく、『大德、我が爲めに語れ』。諸の比丘言はく、『居士、何の語を說かんと欲する』。彼れ言はく、『我が爲めに某甲居士に語れ、我れに女を與へて婦と作せ』と。比丘言はく、『居士、當さに汝が爲めに語るべし』。卽ち一比丘を差し、白二羯磨を作し、彼の居士の所に往いて語つて言はしむ。居士、我れ汝が爲めに衆僧の語を說く。彼れ言はく、「大德、僧は何の勅せらるゝ所ぞ。」比丘言はく、『衆僧言はく、汝の女を以て某甲居士に與へて婦と作せ』。彼れ言はく、『大德、僧の勅を奉じて當さに與ふべし』。時に使比丘僧伽藍の

德、若し女想を作して、男子の前に於て、自ら身を讃歎す、是れ犯すや不や』。佛言はく、『偸蘭遮。大德、若し男子の前に於て、女想を作す、是れ犯すや不や』。佛言はく、『偸蘭遮。大德、若し此の女想を作し、彼の女の前に於て自ら身を讃歎す、是れ犯すや不や』。佛言はく、『說いて了々なれば僧伽婆尸沙、不了々は偸蘭遮』。『大德、若し此の男の前に於て、彼の男の想を作す、是れ犯すや不や』。佛言はく、『突吉羅』。手印信書相の、了々として知るは僧伽婆尸沙、不了々は偸蘭遮。『大德、若し天女・龍女・阿修羅女・夜叉女・餓鬼女・畜生能變化者女の前に於て、自ら讃歎するは、是れ犯すや不や』。佛言はく、『說いて了々たるは偸蘭遮。不了々は突吉羅、手印信書相の了々知らしむるは偸蘭遮、不了々は突吉羅』。時に比丘あり、檀越あり。檀越、婦に語りて言はく『若し某甲比丘所說あらば、其の所說に隨つて、汝當さに供養すべし』、婦言はく『爾すべし』。婦に語り已りて、比丘の所に往き、語つて言はく『我れ已に婦に勅して言はく、「某甲比丘若し所說あらば、比丘の語に隨つて供養せよ」と、大德、若し所須あらば往いて索むべし』。比丘言はく『爾すべし』。後異時に於て、比丘晨朝に衣を著け、鉢を持ち、其の家に往き、座に就いて坐す。檀越の婦語りて言はく『我が夫已に我れに勅して言はく、「某甲比丘所說あらば、所說に隨つて供養せよ」と、大德、今若し說くことあらば便ち說け』。比丘語りて言はく『汝倶に一切供養すること能はず』。彼れ問うて言はく『大德、云何が一切供養すること能はざる』。比丘默然たり、疑ふ。佛言はく、『說いて不了々は偸蘭遮。此の中の四句上の如し、麁惡語中に同じ、上は麁惡語を以てし、此れは供養を以てするを異とするのみ、今略して一句を出すも、復煩文を須ひず、故に出さず。時に比丘あり、女人を檀越と爲す。其の家に至りて語りて言はく『姉、此の事最上第一なり、自慈・口慈・心慈なり、持戒行善法の比丘を供養せよ』。と疑ふ。佛言はく『無犯なり』。

爾の時世尊、王舍城に在しき。時に優波離、坐より起ち、偏へに右の肩を露はし、右膝地に著け、合掌して佛に白して言さく『大德、迦羅比丘媒嫁し、男に向つて女を歎說し、女に向つて男を歎說

酥を消して形露はる。比丘見已りて語りて言はく、『汝酥を消するや』。彼れ言はく、『大德、爾り我れ酥を消す』。比丘默然として疑ふ。佛言はく、『說いて不了々は偷蘭遮』。時に乞食の比丘あり、晨朝に衣を着け鉢を持ち、白衣の家に往く、時に赤衣を着けたる女人あり、形露はる。比丘見已りて語りて言はく、『汝赤衣を着く』。彼れ答へて言はく、『大德、我れ赤衣を着く』と。彼れ默然として疑ふ。佛言はく、『偷蘭遮』。

爾の時世尊、汝羅榛國に在しき。時に比丘あり、婬女を檀越と爲す。比丘に語りて言はく、『大德、若し此の事を須めば便ち說け。』彼れ默然たり。婬女言はく、『大德、今須むるや、何故に默然たる』、彼れ疑ふ。佛言はく、『無犯。』

爾の時世尊舍衞國に在しき。外道の女人あり、形貌端正なり。比丘見已りて、意を繫けて彼れに在り。後異時に、此の女人祇洹を去ること遠からずして行く。比丘言はく、『汝多く作せり』。彼れ答へて言はく、『實に爾り、多く作せり』。比丘疑ふ。彼れ答へて言はく、『僧伽婆尸沙』。

爾の時世尊、舍衞國に在しき。波優離坐より起ちて、偏へに右の肩を露はし、右膝地に着けて世尊に白して言さく、『大德、迦留陀夷女人の前に於て自ら身を讚歎す、是れ犯すや不や』。佛言はく、『初め未だ戒を制せざれば不犯なり』。『大德、若し男子の前に於て、自ら身を讚歎するは、是れ犯すや不や』。佛言はく、『突吉羅』。『大德、若し黃門の前に於て、自ら身を讚歎す、是れ犯すや不や』。佛言はく、『偷蘭遮』。『大德、若し二根人の前に於て自ら身を讚歎す、是れ犯すや不や』。佛言はく、『偷蘭遮』。『若し畜生不能變化者の前に於て、自ら身を讚歎す、是れ犯すや不や』。佛言はく、『突吉羅』。『人女に人女想す、是れ犯すや不や』。佛言はく、『僧伽婆尸沙』。『人女に疑あり、是れ犯すや不や』。佛言はく、『偷蘭遮』。『人女よ非人女想す、是れ犯すや不や』。佛言はく、『偷蘭遮。非人女に人女想す、是れ犯すや不や』。佛言はく、『偷蘭遮。非人女に疑あり、是れ犯すや不や』、佛言はく、『偷蘭遮』。『大

德所須あらば便ち與へよ」と。大德若し所須あらば、往いて索めよ』。比丘言はく、『爾すべし』。比丘後時に、衣を着け鉢を持ち、檀越の家に往き、夜を敷いて坐す。檀越の婦言はく、『我が夫已に我れに勅して言はく、「某甲比丘所須あらば便ち與へよ」と。大德、今所須あらば便ち説け』。比丘言はく、『一切『汝一切能く與ふ、唯此の事あり、與ふること能はず。彼れ卽ち其の心を知り、答へて言はく、『一切能く與ふ、此れも亦能く與ふ』と。比丘疑ふ。佛言はく、『僧伽婆尸沙』。時に比丘に檀越あり、檀越、其の婦に語りて言はく、『某甲比丘一切所須あらば便ち與へよ』。檀越、比丘の所に往き、語りて言はく、『我れ已に婦に勅す、「某甲比丘、一切所須あらば便ち與へよ」と、大德若し所須あらば、往いて索めよ』。比丘言はく、『爾すべし』。後異時に於て、衣を着け鉢を持ち、其の家に往き、座を敷いて坐す。檀越の婦語りて言はく、『我が夫已に我れに勅して言はく、「某甲比丘、一切所須あらば便ち與へよ」。大德、今所須あらば便ち説け』。比丘言はく、『汝一切與ふべからず』。彼れ問うて言はく、『大德、何等か一切與ふべからざる』。比丘默然たりて疑ふ。佛言はく、『説いて不了々たるは偸蘭遮。（次の句は此の句と同じ、正しくは以て汝一切與ふべし、此の事與ふべからずと言ふ、彼れ言ふ、此の事も亦能く與ふと、比丘疑ふ。佛言はく、僧伽婆尸沙。）

時に乞食比丘あり、晨朝に衣を着け鉢を持ち、檀越の家に至る、男根起つ。檀越の婦に語りて言はく、『增益す』と。彼れ問うて言はく、『大德、何等か增益する』。默然たり、疑ふ。佛言はく、『説いて不了々は偸蘭遮』。時に比丘あり、式叉摩那を檀越と爲す、彼れ數ば戒を犯し、比丘の前に於て懺悔す、比丘言はく、『汝慚愧なし、不淨行を犯す』と、比丘疑ふ。佛問うて言はく、『汝何の心を以てする』。答へて言はく、『敎授の爲めの故にす、欲心を以てせず』。佛言はく、『無犯。』時に比丘あり、童女ありて檀越と爲る、數ば戒を犯して比丘に語る。比丘言はく、『汝慚愧なし、持戒者を犯す』と、比丘疑ふ。佛問うて言はく、『汝何の心を以てする』。答へて言はく、『敎授を以ての故にして、欲心を以てせず』。佛言はく、『無犯』。時に比丘あり、晨朝に衣を着け鉢を持ち、白衣の家に往く。女人あり、

つゝ麁惡語す、疑ふ。佛言はく『說いて了々たるは僧伽婆尸沙、不了々は偷蘭遮。此れに向つて說かんと欲し、錯りて彼れに向つて說くは、一切僧伽婆尸沙なり』。時に婬女あり、比丘を喚んで共に不淨を行ぜんとし、其の女根を示す。比丘言はく『汝の女根をして、斷じ、破壞し、臭爛をして、燒燋し墮せしめよ、驢と如是の事を作せ』と疑ふ。佛問うて言はく『汝何の心を以てする』。答へて言はく『彼れを打辱す、欲心を以てせず』。佛言はく『無犯、惡言を以て突吉羅なり』。迦留陀夷の性たる麁惡語を好む。佛言はく『性として麁惡語を好むは突吉羅』。六群比丘、性麁惡語を好む。佛言はく『突吉羅』。時に乞食比丘あり、晨朝に衣を着け鉢を持ち、白衣の家に往き、檀越の婦に語つて言はく『得べきや不や』。彼れ即ち言はく『大德、何等か得べきや不や』と問ふ。比丘默然として答へず、疑ふ。佛言はく『說いて不了には偷蘭遮』。時に乞食比丘あり、晨朝に衣を著け鉢を持ち、白衣の家に往き、檀越の婦に語りて言はく『我がために來れ』。彼れ即ち問うて言はく『大德、何等のためぞ』。比丘默然たり、疑ふ。佛言はく『說いて不了々たるは偷蘭遮。若し我れに與ふべきや不やと言ひ、若しは看よと言ひ、若しは何等に似たり等と言ふ、說いて不了々たるは、一切偷蘭遮』。時に比丘に檀越あり、檀越、婦に語りて言はく『某甲比丘所須あらば便ち與へよ』。婦答へて言はく『爾すべし』。是に於て檀越即ち比丘の所に往き語つて言はく『我れ已に婦に勅して言はく「若し某甲比丘所須あらば便ち與へよ」と、大德所須あらば、往きて牽むべし』。比丘言はく『爾すべし』。彼に比丘、衣を着け鉢を持ち、檀越の家に往き、座を敷いて坐す。檀越の婦、比丘に語りて言はく『某甲比丘所須あらば便ち與へよと。大德、今所須あらば便ち說け』。比丘言はく『汝倶に一切我れに與ふること能はず』。婦答へて言はく『大德、何等をか一切與ふること能はざる』。比丘默然たり、疑ふ。佛言はく『說いて不了々は偷蘭遮』。時に比丘に檀越あり、檀越、婦に勅して言はく『某甲比丘所須あらば便ち與へよ』と。檀越即ち比丘の所に往き、語りて言はく『我れ已に婦に勅して言はく「大

を打つは突吉羅』。時に女人あり、木に倚る。比丘欲心にて木を動かす、疑ふ。佛言はく、『偸蘭遮。若しは繩床、若しは坐床、若しは企床、若しは板、若しは石、若しは樹、若しは梯は一切偸蘭遮なり。』時に女人あり、輿に乘りて行く。比丘欲心にて輿を動かす、疑ふ。佛言はく、『偸蘭遮。輦若しは舡も亦是くの如し』。時に女人あり、比丘の背を捉る、彼還た顧みて是の女人を見る、觸を覺して受樂す、疑ふ。佛言はく、『僧伽婆尸沙』。

爾の時世尊、舍衛國に在しき。優婆離坐より起ち、偏へに右の肩を露はし、右膝地に着け、合掌して佛に白して言さく、『大德、迦留陀夷女人と麁惡語す、是れ犯すや不や』。佛言はく、『初め未だ戒を制せざれば無犯なり』。『大德、若し男子と麁惡語すれば、是れ犯すや不や』。佛言はく、『突吉羅』、若し黄門と麁惡すれば、是れ犯すや不や』。佛言はく、『偸蘭遮。若し二根人と麁惡語すれば、是れ犯すや不や』。佛言はく、『偸蘭遮。若し畜生不能變化者と麁惡語すれば、是れ犯すや不や』。佛言はく、『突吉羅』。『大德、人女を人想し麁惡語すれば、是れ犯すや不や』。佛言はく、『僧伽婆尸沙』。『人女の疑あり、是れ犯すや不や』。佛言はく、『偸蘭遮』。『人女に非人女す、是を犯すや不や』。佛言はく、『偸蘭遮。非人女に人女想す、是れ犯すや不や』。佛言はく、『偸蘭遮』。非人女に疑あり、佛言はく、『偸蘭遮』。『大德、若し女想して男子と麁惡語すれば、是れ犯すや不や』。佛言はく、『偸蘭遮』。大德、『男想して女人と麁惡語すれば、是れ犯すや不や』。佛言はく、『偸蘭遮』。『大德、若し此の女想を作して、彼の女と麁惡語す、疑ふ。』佛言はく、『若し說いて了々たるは僧伽婆尸沙、不了々は偸蘭遮。手印信書相の了々知は僧伽婆尸沙、不了々知は偸蘭遮』。『大德、若し此の男想を作し、彼の男と麁惡語すれば、是れ犯すや不や』。佛言はく、『突吉羅』。『大德、若し天女・龍女・阿修羅女・夜叉女・餓鬼女・畜生能變化者女と麁惡語すれば、是れ犯すや不や』。佛言はく、『說いて了々たるは偸蘭遮、不了々は突吉羅。手印・信書・相の說いて了々知は偸蘭遮、不了々知は突吉羅』。時に比丘あり、女人に向

て比丘の手を捉る、比丘疑ふ。佛、比丘に問ふ。『汝觸を覺して樂受するや不や』。答へて言はく、『不』。佛言はく、『無犯。脚を捉るも亦是くの如し』。時に比丘あり、欲心にて女人の衣角を捉る、牽く比丘疑ふ。佛言はく、『偸蘭遮』。時に比丘あり、欲心にて、女人と共に衣を抖擻す、疑ふ。佛言はく、『偸蘭遮』。時に比丘あり、欲心にて、就いて女人の耳環を捉る、疑ふ。佛言はく、『偸蘭遮。華鬘を取り、釵を捉るも一切偸蘭遮』。時に比丘あり、雨中に女人と共に行く、泥滑かにして、女人の脚跌いて地に倒れ、比丘も亦脚跌いて地に倒れ、女人の上に墮つ、疑ふ。佛問うて言はく、『汝觸を覺して受樂するや不や』。答へて言はく、『不』。佛言はく『無犯。比丘地に倒れ、女人上に墮つるも亦是くの如し』。時に比丘あり、雨中に女人と共に行く、倶に脚跌いて地に倒れ、相觸れて婉轉し、還た相離る、疑ふ。佛問うて言はく、『汝觸を覺して受樂するや不や』。答へて言はく、『不』。佛言はく、『無犯』。時に比丘あり、手、女人の大小便道の間に觸れ、疑ふ。佛言はく、『僧伽婆尸沙。若しは股間・膞間、若しは曲膝の間、若しは脇邊、若しは乳間、若しは耳中、若しは鼻中、若しは瘡中も一切僧伽婆尸沙なり』。時に比丘あり・小沙彌を捉へて摩捫し鳴[二]す、疑ふ。佛問うて言はく、『汝何の心を以てする』。答へて言はく、『愛の故にし、欲心を以てせず』。佛言はく、『無犯、爾すべからず』。時に比丘あり、比丘尼を身相觸れ、疑ふ。佛言はく、『僧伽婆尸沙。式叉摩那、沙彌尼も亦是くの如し』。時に比丘あり、蘇毘羅漿を持ち、道に在りて行く。故に喚んで共に不淨を行ぜんとし、即ち其の女根を示す。彼れ即ち蘇毘羅漿を以て之に灑いで言はく、『臭物還た臭物を著くと』。疑ふ。佛問うて言はく、『比丘・汝何の心を以てする』。答へて言はく、『其の意を打辱す、欲心を以てせず』。佛言はく、『無犯、爾すべからず。水を持つて道に在り行くも、亦是くの如し』。時に婬女あり、比丘を喚んで不淨を行ぜんとし、女根を以て比丘に示す。比丘、石を以て彼の女根を打つ、疑ふ。佛問うて言はく、『汝何の心を以てする』。答へて言はく、『其の意を打辱す、欲心を以てせず』。佛言はく、『無犯、女人

〔二〕鳴には、口を以て身に接吻するのである。

て樂を受くるや不や』。答へて言はく『不』。佛言はく『無犯』。比丘笑つて、女人を捉ふることも、亦是くの如し』。時に比丘あり、牸牛の尾を捉りて水を渡り、水を渡り已りて、方さに是れ牸牛なりと知る、比丘疑ふ。佛言はく『無犯、牸牛の尾を捉りて、水を渡るべからず』。時に比丘あり、欲心にて女人の衣角を捉り、疑ふ。佛言はく『偸蘭遮』。時に比丘あり、欲心にて、女人の身上に就き、女人の嚴身具を捉り、疑ふ。佛言はく『偸蘭遮』。時に比丘あり、欲心にて女人の尻を抄す、疑ふ。佛言はく『僧伽婆尸沙』。時に母あり、比丘を捉ふ。彼れ觸を覺し樂を受く、身を動さず、疑ふ。佛言はく『突吉羅。姉、故二、婬女も亦是くの如し』。時に比丘あり、欲心にて女人の髮を捉る、疑ふ。佛言はく『僧伽婆尸沙』。時に大童女あり、水の爲めに漂はさる。比丘見已りて、慈念して卽ち接出す、疑ふ。佛問うて言はく『比丘、汝觸を覺し受樂するや不や』。答へて言はく『不』。佛言はく『無犯』。時に磨香女人あり、水の爲めに漂はさる。比丘見て慈念して、卽ち接出す、疑ふ。佛問うて言はく『汝觸を覺して受樂するや不や』。答へて言はく『不』。佛言はく『無犯』。時に比丘あり、死女人の身、未だ壞せざる者と、身相觸れ、疑ふ。佛言はく『僧伽婆尸沙。若しは多く壞せざる者と身相觸るれば、僧伽婆尸沙。半ば壞する者と、身相觸るれば偸蘭遮。身多く壞する者、若しは一切壞する者と、身相觸るれば偸蘭遮』。時に女人あり、却いて床に倚る。比丘欲心を起し、床を動かす、疑ふ。佛言はく『偸蘭遮』。時に比丘あり、欲心にて女人の手を捉り、疑ふ。佛言はく『僧伽婆尸沙』。時に比丘あり、欲心にて女人の脚を捉ふ、疑ふ。佛言はく『僧伽婆尸沙』。時に女人あり、比丘の手を捉る、比丘觸を覺して受樂し、身を動かす、疑ふ。佛問うて言はく『比丘、汝觸を覺して受樂するや不や』。答へて言はく『爾り』。佛言はく『僧伽婆尸沙』。女人、比丘の脚を捉るも、亦是くの如し。時に比丘あり、戯笑して女人の手を捉る、疑ふ。佛問うて言はく『比丘、汝觸を覺して受樂するや不や』。答へて言はく『不』。佛言はく『犯さず。脚を捉るも、亦是くの如し』。時に女人ありて戯笑し

【一】牸牛は牝牛のこと。

卷の第五十七（第四分の八）

調部の三

爾の時世尊、舍衛國に在しき。優波離坐より起ち、偏へに右の肩を露はし、右膝地に着け、合掌して佛に白して言さく『大德、迦留陀夷、女人と身相觸る、是れ犯すや不や』。佛言はく『初めは未だ戒を制せず、犯さず』。『大德、若し男子の身と相觸るれば、是れ犯すや不や』。佛言はく、『突吉羅。大德、若し黃門身と相觸るれば、是れ犯すや不や』。佛言はく『偸蘭遮。大德、若し二根の人と、身相觸るれば是れ犯すや不や』。佛言はく『偸蘭遮。大德、若し畜生の不能變化の者と身相觸るれば、是れ犯すや不や』。佛言はく『突吉羅。人女に人女想あるは、是れ犯すや不や』。佛言はく『僧伽婆尸沙。人女に疑あり、是れ犯すや不や』。佛言はく『偸蘭遮。人女に非人女想す、是れ犯すや不や』。佛言はく『偸蘭遮。非人女に人女想す、是れ犯すや不や』。佛言はく『偸蘭遮。非人女に疑あり、是れ犯すや不や』。佛言はく『偸蘭遮。大德、若し女想を作して、男身と相觸るれば、是れ犯すや不や』。佛言はく『偸蘭遮』。『若し男想を作して、女人の身と相觸るれば、是れ犯すや不や』。佛言はく『偸蘭遮』。『此の女身と相觸れて、餘の女想を作さば、是れ犯すや不や』。佛言はく『僧伽婆尸沙』。『此の男身と相觸れ、餘の男想を作さば、是れ犯すや不や』。佛言はく『突吉羅』。『天女・龍女・阿修羅女・夜叉女・餓鬼女と、畜生能變化者の女身と相觸る、是れ犯すや不や』。佛言はく『偸蘭遮』。時に女人あり、比丘の足を捉りて禮す。觸を覺えて樂を受け、身を動す、偸ふ。佛言はく『僧伽婆尸沙』。時に女人あり、比丘の足を捉りて禮す。觸を覺して樂を受け、身を動さず、疑ふ。佛言はく『突吉羅』。時に女人あり、比丘の足を捉りて禮す、觸を覺して樂を受け、足の大指を動す、疑ふ。佛言はく、『僧伽婆尸沙』。時に女人あり、笑つて比丘を捉ふ、比丘疑ふ。佛問うて言はく『比丘、汝觸を覺し

婬女、比丘を捉るも、亦是くの如し』。時に比丘あり、憶想し、骨間に弄して不淨を失す、疑ふ。佛言はく『偷蘭遮』。時に比丘あり、浴室中に細末藥を以て、若しは泥にて身を揩摩し、誤つて觸れて不淨を失す、疑ふ。佛言はく『犯さず。若し大に喚ぶ時、若しは力を出して作す時、不淨を失するは犯さず』。時に比丘あり憶想し、大小便道の中間に於て、弄して不淨を失す、疑ふ。佛言はく『若しは道想を作し、若しは疑はゞ偷蘭遮。若しは非道想にして疑はざれば僧伽婆尸沙。是くの如く、股間、膞間に於て、若しは曲膝、若しは脇邊、若しは乳間、若しは腋下、若しは耳鼻中、若しは瘡中、若しは繩床木床の間、若しは大小褥の間、若しは枕間、若しは地、若しは泥摶の間、若しは君持口中、是くの如き一切は、若しは道想、若しは疑はゞ偷蘭遮。若しは非道想にして疑はざれば僧伽婆尸沙』。時に比丘あり、樂の爲めの故に、憶想し、弄して不淨を失す、疑ふ。佛言はく『僧伽婆尸沙。樂の爲めの故に、自試の爲めの故に、福德の爲めの故に、祠の爲めの故に、善道の爲めの故に、施の爲めの故に、種の爲めの故に、戲の爲めの故に、力の爲めの故に、顏色の爲めの故に、當さに審定して作すべきは、一切僧伽婆尸沙なり』。

の功德あり、惡夢を見ず、諸天衞護す、心に樂法を思ふ、繫想して明に在り、不淨を失せず。是くの如く、住心にして眠るに五事の功德あり、若し夢中に失するは不犯なり』。時に比丘あり、夢中に憶識し、弄して不淨を失す、彼れ疑ふ。佛言はく『犯さず』。時に比丘あり、邪憶念にして不淨を失す。佛言はく『犯さず。』若し美色を見、觸れずして不淨を失す、犯さず』。時に比丘あり、憶念して弄して不淨を失す、疑ふ。佛言はく『僧伽婆尸沙』。時に比丘あり、憶念して弄して失せず、疑ふ。佛言はく『偸蘭遮。時に女人あり、比丘の前を捉る彼れ動身して不淨を失す、疑ふ。佛言はく『僧伽婆尸沙。時に女人あり、比丘の前を捉る、不動身にして不淨を失す』、疑ふ。佛言はく『突吉羅。比丘の後を捉るに、二事あること亦是くの如し。時に女人あり、比丘の足を執りて禮す、動身して不淨を失す』、疑ふ。佛言はく『僧伽婆尸沙。時に女人あり、比丘の足を執りて禮す、不動身にして不淨を失す』、疑ふ。佛言はく『突吉羅。時に女人あり、難陀の足を禮す。難陀多欲にして不淨を失し、女人の頭上に墮つ。時に女人慚愧し、難陀も亦慚愧す』。諸の比丘、佛に白す。佛言はく『難陀に、遮身衣を作ることを聽す』。時に比丘あり、『行く時男根、衣、涅槃僧に觸れ、不淨を失す』。佛言はく、『犯さず』。若し大小便の時に失するは犯さず。若し冷水若しは煖水中に洗ひ、失するは犯さず』。時に比丘あり、男根を以て水に逆ひ、憶想し、身動いて不淨を失す、疑ふ。佛言はく『僧伽婆尸沙』。時に比丘あり、男根を以て水に順ひ、憶想し、身動いて不淨を失す、疑ふ。佛言はく『僧伽婆尸沙』。時に比丘あり、水を以て男根に灑ぎ、憶想し、身動いて不淨を失す、疑ふ。佛言はく『僧伽婆尸沙』。時に比丘あり、男根、風に逆ひ、憶想し、身動いて不淨を失す、疑ふ。佛言はく『僧伽婆尸沙』。若しは風に順ひ、若しは口に男根を[四]噓し、憶想し、身動いて不淨を失す、憶想して、空に動身して不淨を失す、疑ふ。佛言はく『是くの如きは、一切僧伽婆尸沙なり』。時に母あり、比丘の兒の身を捉る、不動にして不淨を失す、疑ふ。佛言はく『突吉羅』。姉、比丘を捉る、故二、故私通、

【四】噓は吹くこと、强く息を出すの吹、靜かに息を出すのは噓と、字書には區別して居る。

匿王を破る、目連前を見て後を見ず、是の故に目連は無犯なり。阿闍世王、毘舍離と戰ふも亦是くの如し』。

爾の時世尊、目連に告げたまはく『汝止めよ止めよ、復說くことを須ひざれ、諸の比丘、汝の言を信ぜず、何を以ての故に。諸の比丘をして信ぜざらしむるが故に多くの罪を得』。時に世尊、諸の比丘に告げたまはく『汝等當さに信ずべし、是くの如きの阿羅漢比丘は、大神力あり、疑つて信ぜざること勿れ、長夜に苦を受けん』。中に比丘あり、名を嚴好といふ。諸の比丘に告げて言はく『諸の長老、我れ五百劫の事を憶す』。諸の比丘言はく『世尊未だ曾て自ら五百劫の事を憶すと說きたまはず、而も汝自ら說く、虛しく上人法を得たりと稱す、波羅夷にして比丘に非ず』。諸の比丘、佛に白す。佛言はく『嚴好比丘は一生の事を憶す、我は無數生の種々の事を憶す、乃至受形相類、言說する所あるは、皆悉く之を憶す』。佛言はく『嚴好比丘は無犯なり』。

爾の時世尊、舍衞國に在しき。優波離坐より起ち、偏へに右の肩を露はし、右膝地に著け、合掌して佛に白して言さく『大德迦留陀夷、故らに弄して不淨を出す、是れ犯すや不や』。佛言はく『最初未だ戒を制せざれば無犯なり』。時に比丘あり、散亂心にて眠り、夢中に不淨を失し、夢中に於て識了す。彼れ是の念を作さく『「世尊、比丘の爲めに戒を制したまふ、故らに弄して不淨を失すれば僧伽婆尸沙なり」と、而も我れ散亂心にて眠り、夢中に不淨を失し、自覺憶識す、我れ將た犯さゞるなからんや、云何せんを知らず』。此の因緣を以て、具さに諸の比丘に白す『善い哉長老、我が爲めに佛に白せ、若し佛敎へたまふ所あらば、我れ當さに修行すべし』。時に諸の比丘、世尊の處に往き、頭面に足を禮し、此の因緣を以て具さに世尊に白す。世尊此の因緣を以て比丘僧を集め、告げて言はく『散亂心にて眠るに五の過失あり、夢に惡事を見、諸天衞護せず、心に法を憶せず、繫想して明に在らず、夢中に不淨を失す。散亂心にて眠るに此の五の過失あり、住心にして眠るに、五

なるや不や』。諸の比丘復言はく『汝は是れ阿羅漢、神足力あり、或は能く化作す、眞實にあらず、虛しく上人法を得たりと稱す、波羅夷にして比丘にあらず』。諸の比丘、佛に白す。佛言はく『目連の所說は、如實にし無犯なり』。時に目連、諸の比丘に告ぐ『北方に池あり阿耨達と名づく。水彼の池より流れ來りて、此に湧出す』。諸の比丘、目連に語りて言はく『汝北方に池あり、阿耨達と名づく、水彼れより流れ來りて、此に湧出すと說く、世尊に是くの如きの言あり、本に依りて知る、彼の池の水淸冷なり、而も今此の水熱沸して垢濁すと、事相應せず、虛しく上人法を得たりと稱す、波羅夷にして比丘に非ず』。諸の比丘、佛に白す。佛言はく『目連の所說の如し、而も此の水小地獄を經過し、來りて王舍城に湧出す、是の故に熱沸して垢濁す、目連は無犯なり』。時に目連、諸の比丘に告ぐ『此の水の出づる處、下に池水あり、淸冷の水彼れよりして來る』。諸の比丘、言はく『目連、汝是くの如きの語を作す、世尊の所說の如きは、本に依りて知る、此の水熱沸す、下水淸冷なるは、事相應せず、虛しく上人法を得たりと稱す、波羅夷にして比丘に非ず』。諸の比丘、佛に白す。佛言はく『比丘、目連の所說の如し、沸水出づる處、下に池水あり、淸冷にして垢濁あることなし、水彼れより來るに、小地獄を經過し、來りて王舍城に湧出す、是の故に熱沸して垢あり、目連は無犯なり』。時に拘薩羅國王波斯匿・摩竭國王阿闍世・二國の中間に在りて共に戰ふ。波斯匿王、阿闍世王の軍を破る。時に大目連、諸の比丘に告ぐ『波斯匿王・阿闍世王、二國の中間に共に戰ひ、波斯匿王勝つと。後阿闍世王復更に軍を起して共に戰ふ、阿闍世王還つて勝を得たり。時に王舍城國内に告令す、阿闍世王、波斯匿王を破る』と。諸の比丘、目連に語りて言はく『汝は言ふ、波斯匿王、阿闍世王と共に戰ひ、波斯匿王、阿闍世王を破ると、而も今摩竭國内に告令して言はく、「阿闍世王、波斯匿王を破る」と、目連虛しく上人法を得たりと稱す、波羅夷にして比丘に非ず』。諸の比丘、佛に白す。佛言はく『是くの如き事あり、波斯匿王、阿闍世王を破る、阿闍世後更に軍を起し、波斯

に語る。『大德自ら言ふ、空慧定に入りて、彼の諸象の、曼陀延池水に入る聲を聞くと。大德、空慧定に入りて音聲を聞く」と、是の處あることなし、虛しく上人法を得たりと稱す、波羅夷にして比丘にあらず』。時に諸の比丘往いて佛に白す。佛言はく、『是くの如き定あり、但し清淨ならず、而も目連は無犯なり』。爾の時目連、諸の比丘に告ぐ。『我れ空慧定に入り、彼の象王の、蘇池水に入る聲を聞く』。時に諸の比丘、目連に語る。『汝自ら言ふ、空慧定に入りて、彼の象王の、蘇池水に入る聲を聞くと、何ぞ空慧定に入るありて、而も聲を聞くことあらんや、是の處あることなし、虛しく上人法を得たりと稱す、波羅夷にして比丘に非ず』。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『是くの如き定あり、清淨に非ず、目連は無犯なり。識慧定處、無所有慧定處も亦是くの如し』。時に目連、諸の比丘に告ぐ。『諸の長老、北方に池あり阿耨達と名づく、其の水清淨にして垢穢あることなし、中に分陀利華あり、車輪の如く其の根は車軸の如し、之を折れば汁出づ、色白きこと乳の如し、其の味蜜の如し』。諸の比丘言はく、『汝自ら言ふ、北方に是くの如きの池ありと、是の處あることなし、虛しく上人法を得たりと稱す、波羅夷にして比丘に非ず』。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『北方に是くの如きの池あり、目連の所說の如し、目連は無犯なり』。時に目連、諸の比丘に告ぐ。『北方に池あり、阿耨達と名づく。彼れを去ること遠からず、更に一池あり、曼陀延と名づく。縱廣五十由旬なり、其の水清淨にして垢穢あることなし。中に金色の蓮華あり、大さ車輪の如し』。諸の比丘言はく、『目連、汝の所說の如く、是くの如くの池ありとは、是の處あることなし』。時に大目連、神足力を以て彼れに往き、華を取りて寺に還り、置いて屋內に在り、諸の比丘を喚びて語りて言はく、『北方に池あり、阿耨達と名づく、池を去ること遠からずして、曼陀延池あり、中に金色の蓮華あり、車輪の如し』。諸の比丘言はく、『目連、是の處あることなし、虛しく上人法を得ると稱す、波羅夷にして比丘に非ず』。目連卽ち屋に還り、華を取りて諸の比丘に示し、語りて言はく、『諸の長老、此の華は實の如く

人法を得たりと稱す、波羅夷にして比丘に非ず』。諸の比丘、往いて佛に白す。佛言はく『我れも先きに亦是くの如きの衆生を見る、而も我れ說かず。何を以ての故に、恐らくは人信ぜず、其の信ぜざるものは、長夜に苦を受くればなり。此の衆生は、是れ迦陵伽王の第一の夫人なり、嫉妬を以ての故に、熱沸油を以て、第二夫人の眠れる時、以て其の頂に灌ぐ。此の業報の因緣を以て、地獄の中に墮ち、百千萬歲まで諸の苦痛を受け、餘業の因緣にて此の身を受く。是の故に目連は無犯なり』。爾の時目連、諸の比丘に告ぐ。我れ阿修羅の宮殿城郭の海底に在りて、水其の上に懸るも、其の宮城に入らざるを見る』。諸の比丘、目連に語りて言はく、『汝自ら言ふ、阿修羅の宮城は海底に在り、四邊及び上より、而も水の入ることとなしと、是の處あることとなし、虛しく上人法を得たりと稱す、波羅夷にして比丘にあらず』。諸の比丘、佛に白す。佛言はく『是くの如き事あり、阿修羅の宮城は、四面及び上に、四種の風ありて水を持つ、住風・持風・不滅風・牢縶風なり、是の故に目連は無犯なり』。爾の時目連、諸の比丘に告ぐ『我れ是くの如き衆生あることを見る、骨なく、皮なく、肉なく、血なく、不淨あることなく、亦疲極なく、女にして産せず』。諸の比丘言はく『目連、汝自ら言ふ、是くの如き衆生あり、乃至女にして産せずと、是の處あることとなし、虛しく上人法を得たりと稱す、波羅夷にして比丘に非ず』。諸の比丘、佛に白す。佛言はく『是くの如きの衆生あり、目連は無犯なり』。爾の時世尊王舍城に在しき。時に大目連、諸の比丘に告げて言はく『諸の長老、我れ空慧定に入りて、伊羅婆尼象王の、難陀池水に入る聲を聞く』。諸の比丘言はく『大德目連、汝言ふ、空慧定に入りて、伊羅婆尼象王の、難陀水に入る聲を聞くと。大德、空慧定に入りて音聲を聞くは、是の處あることとなし、虛しく上人法を得たりと稱す、波羅夷にして比丘に非ず』。諸の比丘、佛に白す。佛言はく『是の定あり、而も清淨ならず、目連は無犯なり』。時に目連、諸の比丘に告げて言はく『我れ空慧定に入り、八萬四千の象の、曼陀延池水に入る聲を聞く』。時に諸の比丘、目連

百千萬歳を經るまで、諸の苦痛を受け、此の餘罪の因緣を以て、是くの如きの形を受く。是の故に目連は無犯なり』。爾の時目連、諸の比丘に告ぐ『我れ衆生ありて、屎中に沒在し、大苦痛を受け、號哭して大に喚ぶを見る』。諸の比丘、目連に語りて言はく『汝自ら是くの如き衆生あり、屎中に沒在して大苦痛を受け、號哭して大に喚ぶを見ると言ふ、是の處あることとなし、虛しく上人法を得たりと稱す、波羅夷にして比丘に非ず』。諸の比丘、佛に白す。佛言はく『我れ先きに亦是くの如き衆生を見る、而も我れは說かず。何を以ての故に。恐らくは人信ぜず、其の信ぜざる者は、長夜に苦を受くればなり。此の衆生、波羅捺國に在りて、迦葉佛の時婆羅門と爲る。時に佛及び僧を請じ、屎を以て槽に盛滿し已り、人を遣はして、時到ると白す。語りて言はく、「大德、汝此れを食ひ、此れを飲み、意に隨つて持ち去るべし。」此の惡業の因緣を以て、泥犁の中に墮し、百千萬歳まで大苦痛を受け、餘罪の因緣にて、屎中に沒在す。是の故に目連は無犯なり』。爾の時目連、諸の比丘に告ぐ『我れ衆生ありて鐵床の上に坐し、鐵床より火出で、擧身燋然、衣鉢坐具針筒亦皆燋然たるを見る』。諸の比丘、目連に語りて言はく『汝是くの如きの衆生を見、苦を受くること是くの如しと。是の處あることとなし、虛しく上人法を得たりと稱す、波羅夷にして比丘に非ず』。諸の比丘、佛に白す。佛言はく『我れ先きに亦是くの如きの衆生の苦を受くることの、是くの如きを見る。而も我れは說かず、何を以ての故に。恐らくは人信ぜず、其の信ぜざる者は、長夜に苦を受くればなり。此の衆生は、過去世の時、波羅捺國に在り、迦葉佛の時の惡比丘なり、此の因緣を以て地獄の中に墮ち、百千萬歳まで諸の苦痛を受け、餘業の因緣にて此の身を受く。是の故に目連は無犯なり。惡比丘尼、惡式叉摩那、惡沙彌沙彌尼の苦を受くること亦是くの如し』。爾の時目連、諸の比丘に告ぐ。『我れ衆生ありて、其の身熟爛し、衆蠅封著して苦痛なり、大に喚ぶを見る』。諸の比丘、目連に告げて言はく『汝是くの如き衆生あるを見る、苦を受くること是くの如しと。是の處あることとなし、虛しく上

と、彼れ默然たり、疑ふ。佛言はく『不了々は偸蘭遮。數ば檀越の家に入り、若しは坐を受け、若しは食を受くるも亦是くの如し』。時に檀越あり、常供養の比丘に語りて言はく『若し大德是れ佛弟子聲聞ならば僧伽梨を脫せよ』と、卽ち脫して相を現じ、語らず、疑ふ。佛言はく『偸蘭遮。僧伽梨を著け、若しは坐し、若しは起ち、閣屋に上り、若しは下るも亦是くの如し』。時に目連、諸の比丘に告ぐ、業報の因緣にて神足を得。諸の比丘言はく『目連汝業報の因緣にて神足を得ると、此の處あることなし、虛しく上人法を得ると稱す、波羅夷にして比丘に非ず』。諸の比丘、佛に白す。佛言はく『是の業報の因緣にて神足を得るあり、目連は無犯なり。』時に目連、諸の比丘に告ぐ『業報の因緣にて、天耳識宿命知他心天眼を得』。諸の比丘言はく『目連、汝は言ふ、業報の因緣にて、天耳乃至天眼を得ると、是の處あることなし、虛しく上人法を得ると稱す、波羅夷にして比丘に非ず』。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『業報の因緣あり、天耳を得、乃至天眼を得、目連は無犯なり』。時に目連、諸の比丘に告ぐ『諸の長老、是くの如きの衆生あり、虛空より過ぐ、身骨相觸るゝの聲を聞く』。諸の比丘、目連に語りて言はく『大德、汝は言ふ、是くの如きの衆生あり、虛空より過ぐ、其の身骨相觸るゝの聲を聞くと、是の處あることなし、虛しく上人法を得たりと稱す、波羅夷にして比丘に非ず』。諸の比丘、佛に白す。佛言はく『是くの如きの衆生あり、目連は無犯なり。』爾の時目連、諸の比丘に告ぐ『我れ衆生ありて、擧身に針を以て毛と爲し、自ら其の身に於て、或は出し、或は入れ、苦を受くること無量にして、號哭して大に喚ぶ』。時に諸の比丘、目連に語りて言はく『汝是くの如きの衆生あるを見ると、是の處あることなし、虛しく上人法を得たりと稱す、波羅夷にして比丘に非ず』。諸の比丘、佛に白す。佛言はく『我れ先きにまた是くの如き衆生を見る、而も我れは說かず、何を以ての故に。恐らくは人信ぜず、其の信ぜざる者は、長夜に苦を受くればなり。此の衆生、王舍城中に於て、憙んで兩舌鬪亂す、此の惡業の因緣を以て、地獄中に墮ち、

と說き、比丘疑ふ。佛言はく、『波羅夷』。時に比丘あり、人の爲めに、根力覺意禪定解脫三昧正受を說き、自ら得たりと言はず、比丘疑ふ。佛言はく、『無犯』。時に比丘に檀越あり、比丘語りて言はく、『常に汝が爲めに說法する者は是れ阿羅漢なり』と。檀越卽ち問うて言はく、『大德、何の說く所ぞ』、便ち默然たり、比丘疑ふ。佛言はく、『不了々は偸蘭遮』。時に比丘に檀越あり、比丘語りて言はく、『數ば汝の家に至る者は阿羅漢なり』と。檀越卽ち問うて言はく、『大德、何の說く所ぞ』と、便ち默然たり、比丘疑ふ。佛言はく、『不了々は偸蘭遮』。時に比丘に檀越あり、比丘語りて言はく、『數ば汝の座に坐する者は、是れ阿羅漢なり』と、卽ち問うて言はく、『大德、何の說く所ぞ』と、便ち默然たり、比丘疑ふ。佛言はく、『不了々は偸蘭遮』。時に比丘に檀越あり、比丘語りて言はく、『數ば汝の食を受くる者は是れ阿羅漢なり』と、檀越問うて言はく、『大德、何の說く所ぞ』と、彼れ默然たり、疑ふ。佛言はく、『不了々は偸蘭遮』。時に檀越あり、常供養の比丘に語りて言はく、『若し大德是れ阿羅漢ならば僧伽梨を脫せよ』。比丘卽ち脫して相を現じ、語らず、疑ふ。佛言はく、『偸蘭遮』。時に檀越あり、常供養の比丘に語りて言はく、『大德若し阿羅漢ならば僧伽梨を著けよ』。比丘卽ち著けて相を現じ、語らず、疑ふ。佛言はく、『偸蘭遮』。時に檀越あり、常所供養の比丘に語りて言はく『大德若し是れ阿羅漢ならば繩床に坐すべし』。彼れ卽ち坐して相を現じ、語らず、疑ふ。佛言はく、『偸蘭遮』。時に檀越あり、常所供養の比丘に語りて言はく、『大德若し是れ阿羅漢ならば起て』。彼れ卽ち起ちて相を現じ、語らず、疑ふ。佛言はく、『偸蘭遮』。時に檀越あり、常所供養の比丘に問うて言はく、『大德若し是れ阿羅漢ならば閣上に上れ』。彼れ卽ち上りて相を現じ、語らず、疑ふ。佛言はく、『偸蘭遮』。時に檀越あり、常所供養の比丘に語りて言はく、『大德若し是れ阿羅漢ならば下るべし』。比丘卽ち下りて相を現じ、語らず、疑ふ。佛言はく、『偸蘭遮』。時に比丘あり、檀越あり、比丘語りて言はく、『數ば汝が爲めに說法する者は、是れ佛弟子聲聞なり』。檀越問うて言はく、『是れ何の說く所ぞ』

に坐し、此の因緣を以て具さに世尊に白す。世尊爾の時此の因緣を以て比丘僧を集め、而も爲めに隨順して說法したまふ。無數に方便して、頭陀端嚴、少欲知足にして出離を樂ふものを讃歎し、諸の比丘に告げたまはく『增上慢は無犯なり』。諸の比丘、佛に白して言さく『大德、若し不能變化畜生の前に於て、自ら上人法を得たりと稱す、是れ犯すや不や』。佛言はく『突吉羅』。『大德、人に人想を作す、是れ犯すや不や』。佛言はく『波羅夷』。『人に疑ひあり、是れ犯すや不や』。佛言はく『偷蘭遮』。『人に非人想を作す、是れ犯すや不や』。佛言はく『偷蘭遮』。『非人に人想を作す、是れ犯すや不や』。佛言はく『偷蘭遮』。『非人に疑あり、是れ犯すや不や』。佛言はく『偷蘭遮』。『大德、若し男の前に女想を作さば、是れ犯すや不や』。佛言はく『波羅夷』。『女の前に男想を作さば、是れ犯すや不や』。佛言はく『波羅夷』。『若し此の女の前に於て、彼の女想を作さば、是れ犯すや不や』。佛言はく『若し說いて了々たるは波羅夷、若し不了々は偷蘭遮』。『今此の男に於て、彼の男想を作さば、是れ犯すや不や』。佛言はく『若し說いて了々たるは波羅夷、說いて不了々は偷蘭遮、若しは手印、若しは使、若しは書、若しは現相にて、了々知らしむるは波羅夷、不了々知るは偷蘭遮なり』。『大德、若し天・龍・阿修羅・乾闥婆・夜叉・餓鬼・畜生の能變化者の前にて、自ら上人法を得たりと稱せば、是れ犯すや不や』。佛言はく『說いて了々たるは偷蘭遮、了々は突吉羅、手印使書現相にて、不了々知らしむるは偷蘭遮、不了々は突吉羅』。時に比丘あり、人の前に自ら上人法を得たりと稱し、疑ふ。佛言はく『說いて了々は波羅夷、不了々は偷蘭遮。此れに向つて說かんと欲して、乃ち彼れに向つて說くは、一切波羅夷』。時に衆多の比丘あり、拘薩羅國に於て遊行す。時に信樂能相の婆羅門あり、見已りて是くの如きの言を作す『大德阿羅漢來る』と。比丘問うて言はく『汝何の說くところぞや』。答へて言はく『大德、應さに飲食・衣服・醫藥・所須の具を受けたまふべし』。比丘言はく『是の理あり』。と、比丘疑ふ。佛言はく『無犯』。時に比丘あり、自ら根力覺意禪定解脫三昧正受を得たり

言はく『彼の人死するは無犯、方便して自殺せんと欲するは偸蘭遮』。時に比丘あり、休道して下業に墮ちんと欲す、是くの如きの念を作す、『我れ佛法の中に於て出家す、是くの如きの惡事を作すべからず』。彼れ波羅呵那山頂に上り、自ら身を投じ、斫竹人の上に墮つ、彼れ死し、比丘は活く。佛言はく『彼の人の死するは無犯、方便して自殺せんと欲するは偸蘭遮なり』。時に比丘あり、蘇毘羅漿を持ち、塚を去ること遠からずして行く。尖標頭人語りて言はく『我れに此の漿を與へて飲ましめよ』。比丘卽ち與ふ、飲み已りて便ち死す、疑ふ。佛問うて言はく『汝何の心を以てする』。答へて言はく『殺心を以てせず』。佛言はく『無犯』。時に比丘あり、水を持つて、塚を去ること遠からずして行く。尖標頭人言はく『我れに人を與へて飲ましめよ。』卽ち與ふ、飲み已りて便ち死す、疑ふ。佛言はく『無犯』。時に顚狂の比丘あり、人を殺して後、還た醒了す、疑ふ。佛言はく『無犯』。若し心錯亂し、苦痛の爲めに惱まさるゝは、一切無犯なり。

爾の時世尊毘舍離に在しき。優波離坐より起ちて、偏へに右の肩を露はし、右膝地著け、合掌して世尊に白して言さく『大德、婆裘河邊の比丘、食の爲める故に眞實ならず。己有に非るに、白衣の前に於て、自ら歎じて、上人法を得たりと說く、是れ犯すや不や』。佛言はく『初め未だ戒を制せされば、無犯なり』。時に比丘あり、增上慢にして自ら犯す、後精勤して懈らず、增上勝法を證す。彼れ是の念を作さく『世尊諸の比丘の爲めに戒を制したまふ、若し比丘自ら知らず、自ら上人法を得、我れ是れを知り、我れ是れを見ると稱す。後異時に於て、若しは問ひ、若しは問はざるも、淸淨を求めんがための故に是の言を作す、我れ知らず、見ず、而も知り見ると言ふと。虛誑の妄語にして比丘波羅夷不共住なり。我れ增上慢を以て自ら犯す、後精勤して懈らず、增上の勝法を得たり、我れ云何がすべき』。卽ち因緣を以て同意の比丘に向ひて說く『善い哉長老、我が爲めに世尊に白せ、世尊の教に隨つて我れ當さに修行すべし』。諸の比丘、佛所に往詣し、頭面に是を禮し、却つて一面

差ゆることを得ん』。卽ち與へて洗はしむ。洗ひ已りて便ち死す、疑ふ。佛問うて言はく『汝、何の心を以てする』。答へて言はく、『殺心を以てせず』。佛言はく『無犯、而も與へて洗ふべからず。水を持つて洗ふも亦是くの如し』。時に比丘寺を去ること遠からず、人ありて手脚を截らる。比丘尼あり、蘇毘羅を持つて、彼れを去ること遠からずして行く。比丘尼是の念を作さく、「若し蘇毘羅を以て彼の瘡を洗はゞ、或は早く死せしめん」。卽ち爲めに之を洗ふ、便ち死す。佛問うて言はく、『汝何の心を以てする』。答へて言はく、『殺心を以てす』。佛言はく、『波羅夷』。水を以てために洗ふも亦是くの如し。』

爾の時衆多の比丘あり、六群比丘と耆闍崛山に在り、此に木片を破りて屋を覆ふ。一六群比丘あり、尖頭の木片を捉り、直に人に當つて擲つ、木彼の身に入りて過ぐ、卽ち死す、疑ふ。佛問うて言はく、『汝何の心を以てする』。答へて言はく、『殺心を以てせず』。佛言はく、『無犯、而も人に當つて、直に木を擲つべからず。應さに横に擲つべし』。時に經營の比丘あり、親房を作り、誤つて石を失ひ、比丘の上に墮つ、卽ち死す、疑ふ。佛問うて言はく、『何の心を以てする』。答へて言はく、『殺心を以てせず』。佛言はく、『無犯。墼若しは木頭・摶・拱・屋・棟、種々の材木を失ひ、墮すことも亦是くの如し』。爾の時に、耆闍崛山に牧牛の人ありて放牛す。一六群比丘、石を以て彼の牛角を打つ、石迸りて放牛人の上に墮つ、卽ち死す、疑ふ。佛問うて言はく、『汝何の心を以てする』。答へて言はく、『殺心を以てせず』。佛言はく、『無犯、畜生の不能變化の者を打つは突吉羅なり』。爾の時比丘あり、耆闍崛山中に在り、石を崩し、墮ちて道行の人を打ちて死す、疑ふ。佛問うて言はく、『汝何の心を以てする』。答へて言はく、『殺心を以てせず』。佛言はく『無犯、而も石を崩すべからず、若し因縁ありて石を取らんと欲すれば、當さに人に語りて避けしむべし』。時に比丘あり、捨戒して下業に墮ちんと欲す。彼れ是の念を作す、「我れ已に佛法の中に於て出家す、是くの如きの惡事を作すべからず」。卽ち摩頭山頂に往き、自ら身を投ずるに、斫竹人の上に墮ち、比丘は活き、彼の人は死す、疑ふ。佛

母却つて地に倒れ、即ち命過す、彼れ疑ふ。佛問うて言はく、『汝何の心を以てする』。答へて言はく、『殺心を以てせず』。佛言はく、『無犯、而も母を推排すべからず』。時に父あり、比丘を捉ふ。比丘自ら解いて推却す、父、地に倒れて即ち命過す、彼れ疑ふ。佛問うて言はく、『汝何の心を以てする』。答へて言はく、『殺心を以てせず』。佛言はく、『無犯、而も推すべからず』。兄、比丘を捉へ、姉、比丘を捉へ、故二、比丘を捉ふ、亦是くの如し。時に故二の姉あり其の、妹に語りて言はく、『何ぞ比丘より衣食を索めざる』。彼れ言はく、『出家するを以て、從つて索むる所あるを欲せず。若し我れに比丘の處を示せば、我れ當さに汝の爲めに索むべし』。彼れ即ち處を示す。彼れ比丘に語りて言はく、『汝何ぞ我が妹に衣食を與へざる』。即ち前んで比丘を捉ふ。比丘推却して自ら解く。彼れ地に倒れて命過す、疑ふ。佛問うて言はく、『汝何の心を以てする』。答へて言はく、『殺心を以てせず』。佛言はく、『無犯、而も推すべからず』。時に男女あり、比丘を捉ふ。比丘推却して自ら解く。彼れ地に倒れて命過す、疑ふ。佛問うて言はく、『汝何の心を以てする』。答へて言はく、『殺心を以てせず』。佛言はく、『無犯、而も推すべからず』。時に比丘尼寺を去ること遠からず、男子あり、手を截り脚を截る。時に比丘尼、蘇毘羅漿を持つて、彼れを去ること遠からずして行く。彼れ見已りて語りて言はく、『阿姨、我れに漿を與へて飲ましめよ』。比丘尼即ち與ふ、彼れ飲んで便ち死す、疑ふ。佛問うて言はく、『汝何の心を以てする』。答へて言はく、『殺心を以てせず』。佛言はく、『無犯』。時に比丘尼寺を去ること遠からず、人ありて手を截り脚を截る。比丘尼水を持つて、彼れを去ること遠からずして行く。彼れ見已りて語りて言はく、『阿姨、我れに水を與へて飲ましめよ』。即ち與ふ。飲み已りて便ち死す、疑ふ。佛問うて言はく、『汝何の心を以てする』。答へて言はく、『殺心を以てせず』。佛言はく『無犯』。時に比丘尼寺を去ること遠からず、人あり、手を截り脚を截る。比丘尼あり、蘇毘羅を持つて、彼れを去ること遠からずして行く。彼れ見已りて語りて言はく、『阿姨、我れ蘇毘羅を須ひて瘡を洗はゞ、或は少しく

二種あり、亦是くの如し。

爾の時偸羅難陀比丘尼、晨朝衣を著け鉢を持ち、白衣の家に往く。一小兒あり、碓屋の中に在りて睡る。偸羅難陀往いて彼の步を、碓杵に觸る、杵小兒の上に墮ち、卽ち命過す、疑ふ。佛問うて言はく、汝何の心を以てする。答へて言はく、『殺心を以てせず』。佛言はく『無犯、他の碓杵に觸るべからず』。時に偸羅難陀比丘尼、晨朝に衣を著け鉢を持ち、白衣の家に往く。小兒あり、碓臼の邊に在りて眠る。偸羅難陀他の碓臼に觸る、臼轉じて小兒を壓殺す、疑ふ。佛問うて言はく『汝何の心を以てする』。答へて言はく『殺心を以てせず』。佛言はく『無犯、而も他の碓臼に觸るべからず』。時に偸羅難陀比丘尼、晨朝に衣を著け鉢を持ち、白衣の家に往く。床上に小兒の眠るあり。偸羅難陀看ずして坐す。檀越の婦言はく、『阿姨、小兒の上に坐する莫れ』。彼れ聞かずして便ち坐す、小兒卽ち死す、疑ふ。佛問うて言はく、『汝何の心を以てする』。答へて言はく『殺心を以てせず』。佛言はく『無犯、而も白衣の家に、床座を見ずして坐すべからず。』

爾の時舍衞國に檀越あり、佛及び僧を、明日の食に請ず。卽ち夜に於て、種々多美の飲食を辦具す。晨朝に、往いて時至ると白す。世尊衣を著け鉢を持ち、千二百五十の比丘と倶なり、檀越の家に至り、座に就いて坐す。諸佛の常法、衆未だ集まらざれば、飲食を受けず。時に晩出家の比丘あり、兒を將ひて出家す。小食の時、餘の白衣の家に往く。諸の比丘、其の兒に問うて言はく『汝の父、何處に往いて去る』。乃ち世尊をして、待つて食せざらしむる。彼れ言はく『知らず』。比丘語りて言はく、『汝往いて求覓せよ』。兒、父に語りて行はく、『何處に往いて來るや、父を待つを以ての故に、佛衆僧をして、食を受くることを得ざらしむ』。其の父瞋りて卽ち兒を捉ふ。兒自ら解推す、父地に倒れて命過す、彼れ疑ふ。佛問うて言はく、『汝何の心を以てする』。答へて言はく、『殺心を以てせず』。佛言はく、『無犯、而も父を推すべからず』。時に母あり、比丘を捉ふ。比丘自ら解き、卽ち推す。

り、方便して共に他の命を斷ず。中に一人あり、疑つて卽ち遮し、而も故往かしめ命を斷じ、疑ふ。佛言はく『遮する者は偸蘭遮、遮せざる者は波羅夷』。時に賊あり、比丘の衣鉢針筒坐具を盜取す。時に比丘卽ち賊を捉へて壓治し、命過し、疑ふ。佛問うて言はく『汝何の心を以てする答』へて言はく『殺心を以てせず』。佛言はく『無犯、而も壓治すべからず』。時に賊あり、比丘の衣鉢坐具針筒を盜む。比丘賊を捉へて得、地窖中に內著す、遂に命過す、彼れ疑ふ。佛言はく『汝何の心を以てする』。答へて言はく『殺心を以てせず』。佛言はく『無犯、而も爾すべからず』。時に惡比丘あり、比丘の衣鉢坐具針筒を盜む。餘の比丘言はく『此の惡比丘、比丘の衣鉢坐具針筒を盜む、應さに捉取し、ために法語を說くべしと』。卽ち捉取し、打つて熟手せしめ、後に遂に命過す、彼れ疑ふ。佛問うて言はく『汝何の心を以てする』。答へて言はく『殺心を以てせず』。佛言はく『無犯、而も受大戒人を打つは波逸提』。時に比丘あり、白衣と共に諍ふ。比丘卽ち官に詣りて言す。時に大臣あり、捉へて繫閉せしめ、遂に獄中に命過す、彼れ疑ふ。佛言はく『汝何の心を以てする』。答へて言はく『殺心を以てせず』。佛言はく『不犯、而も[三]言人は突吉羅』。時に比丘あり、獼猴を殺す、彼れ疑ふ、我れ人命を斷ず波羅夷なりと、諸の比丘、佛に白す。佛言はく『無犯、畜生命を斷ずるは波逸提』。時に比丘あり、彼の比丘と共に諍ふ。彼の比丘病めり、此の比丘往いて問訊す。餘の比丘之を察するに、此の比丘、病比丘と先きに怨あり、今來りて問訊するは、必ず異あらん。時に此の比丘、卽ち病者に非藥を與へて命過す、疑ふ。佛問うて言はく『汝何の心を以てする』。答へて言はく『殺心』。佛言はく『波羅夷』。時に比丘あり、比丘と諍ふ。彼の比丘、人間に往き病を得。此の比丘言はく『汝人間に往くと雖、猶ほ脫することを得ず』。卽ち往いて問訊す。餘の比丘之を察するに、此の比丘先きに病比丘と怨あり、今來りて問訊す必ず異あらんと。此の比丘卽ち病者に非藥を與ふ、命過して疑ふ。佛問うて言はく『汝何の心を以てする』。答へて言はく『殺心』。佛言はく『波羅夷』。非食を與ふるに

【三】言人は訴人のこと、官に人を告訴することである。

心を以てする』。答へて言はく、『殺心を以てせず』。佛言はく、『無犯、而も是くの如く強く按ずべからず』。時に比丘あり、通身腫る。比丘あり、急燥藥を以て之に塗る。彼れ言はく、『止めよ止めよ塗ること莫れ、我れ熱痛を患ふ』。彼れ言はく、『小しく忍べ、當さに除差することを得べし』と、之を塗りて止まず、遂に便ち命過す、疑ふ、佛問うて言はく、『汝何の心を以てする』。答へて言はく、『殺心を以てせず』。佛言はく、『無犯、而も是くの如く強えて塗るべからず』。時に比丘あり、蔭中より病比丘を移し、日中に至る。彼の病者命過す、疑ふ。佛言はく、『無犯』。日中より蔭處に至るも亦無犯なり』。病者自ら蔭中より日中に至り、日中より蔭中に至らんと欲す、病者命過す、彼の扶くる者疑ふ。佛言はく、『無犯』。若し病人を扶け、屋を出で、若しは屋に入り、病者命過し、疑ふ。佛言はく『無犯』。病人自ら屋を出でんと欲し、扶けて屋を出でしめ、自ら屋に入らんと欲し、扶けて屋に入らしめ、而も命過す。『扶くるもの無犯』。病人を扶けて大便處に至り、命過す、若しは扶けて屋に還りて命過す、『盡く無犯』。病人を扶けて、小便處に至り命過す、若しは屋に還りて命過す、『盡く無犯なり』。時に比丘あり、癰を患ふ。比丘あり、強えて上を壓す。彼の病者言はく、『壓すこと莫れ壓すこと莫れと』。之を壓して已まず、遂に便ち命過す、疑ふ。佛問うて言はく、『汝何の心を以てする』。答へて言はく、『殺心を以てせず』。佛言はく『無犯、而も是くの如く強えて壓すべからず』。時に比丘ありて病む。餘の比丘往いて問訊し、衣を撥いて面を看、問うて言はく、『長老、病小しく差ゆるや不や』。彼れ言はく、『撥くこと莫れ撥くこと莫れ』。彼之を撥いて已まず、遂に便ち命過す、疑ふ。佛問うて言はく、『汝何の心を以てする』。答へて言はく、『殺心を以てせず』。佛言はく、『無犯、而も強え撥くべからず』。時に衆多の比丘あり、方便して一人を遣はし、彼の命を斷ぜしむ、卽ち往いて命を斷ず、彼れ疑ふ。佛言はく、『一切波羅夷』。時に衆多の比丘あり、方便して一人を遣はし、他の命を斷ぜしむ。中に一人あり、疑つて遮せず。彼れ卽ち往いて命を斷じ、疑ふ。佛言はく、『一切波羅夷』。時に衆多の比丘あ

を解せず、汝來れ、汝がために腹を按ぜん』。卽ち爲めに之を按じ墮胎せしめ、疑ふ。佛問うて言はく、『汝何の心を以てする』。答へて言はく、『殺心』。佛言はく、『波羅夷』。時に婦人あり、夫行いて不在なり、他邊に娠むことを得たり、常所供養比丘尼の所に往き、語りて言はく、『阿姨、我が夫行いて在らず、他邊に娠むことを得たり、我れに藥を與へて之を墮せよ』。比丘尼言はく、『我れ藥を解せず、來れ、汝が爲めに之を嚙まん、卽ち當さに胎處すべし』。嚙んで墮せしめ、疑ふ。佛問うて言はく、『汝何の心を以てする』。答へて言はく、『殺心を以てす』。佛言はく、『波羅夷』。時に婦人あり、夫行いて在らず、他邊に娠むことを得たり、常供養比丘の所に往き、語りて言はく、『大德、我が夫行いて在らず、他邊に娠むことを得、我れに藥を與へて之を墮せよ』。比丘卽ち過度の吐下藥を與ふるに、母死し兒は活く、疑ふ。佛言はく、『母死あるは無犯、方便して墮胎せんと欲し、死せざるは偸蘭遮』。

時に比丘あり、病人を扶けて起たしむ、病者命過す、疑ふ。佛言はく『無犯、若し扶けて坐せしむるに、命過するも無犯。若し洗浴を爲す時、命過するも無犯。若し服藥の時、命過するも無犯』。時に比丘あり長く病む。時に瞻病者厭患し、非所應食を與へ、命を斷ぜしめ、疑ふ。佛問うて言はく、『汝何の心を以てする』。答へて言はく、『殺心』。佛言はく、『波羅夷』。時に比丘あり、長く病む、瞻病者厭患す、卽ち非藥を與へて命過せしむ、疑ふ。佛問うて言はく、『汝何の心を以てする』。答へて言はく『殺心』。佛言はく、『波羅夷』。時に比丘あり、長く病む、多く器物あり。瞻病者利を貪り、卽ち非所應食を與へて命過せしめ、疑ふ。佛問うて言はく、『汝何の心を以てする』。答へて言はく『殺心』。佛言はく、『波羅夷』。時に比丘あり、長く病む、多く財物あり。瞻病者利を貪り、卽ち非藥を與へて命過せしめ、疑ふ。佛問うて言はく、『汝何の心を以てする』。答へて言はく『殺心』。佛言はく、『波羅夷』。時に比丘あり、腋下に癰腫あり、比丘あり、爲めに之を按ず、彼れ語りて言はく、『按ずること莫れ。按ずること莫れ』。而も故ら爲めに之を按じて止まず。遂に便ち命過す、疑ふ。佛問うて言はく、『汝何の

ず』。比丘卽ち其の夫に非藥を與へ、命を斷ぜしめ、疑ふ。佛問うて言はく、『汝何の心を以てする。』答へて言はく、『殺心』。佛言はく。『波羅夷』。時に比丘あり、檀越病む、往いて問訊す。比丘形貌端正なり、其の婦見て欲心あり、意を比丘の所に繫く。語りて言はく、『大德、我れと共に如是の事を作すべし』。比丘答へて言はく、『大姉、是の語を作すこと莫れ、我が應ぜざる所なり、汝の夫存在す、云何ぞ是くの如き惡事を作さん』。其の婦是くの如きの言を作す『我が夫死せざる間は、與に共に和合することを得ず』。卽ち其の夫に藥を與へ、命を斷ぜしむ。夫既に死し已りて、比丘に語つて言はく、『我が夫已に死す、我れと共に如是の事を作すべし』。比丘言はく、『大姉、是くの如き語を作すこと莫れ、我が應ぜざる所なり』。彼の婦語りて言はく、『我れ汝が爲めの故に夫の命を斷ず、云何ぞ如是の事を作さゞる』。比丘之を聞いて疑を生じ、佛に白す。佛問うて言はく、『汝何の心を以てする。』卽ち具さに因緣を說く。佛言はく、『無犯』。吐下藥、非所應食、非藥も亦是くの如し』。時に婦人あり、夫行いて在らず、他邊に娠むことを得たり。卽ち家の常所供養の比丘の所に往き、語りて言はく、『我が夫在らず、他邊に娠むことを得たり、我れに藥を與へて之を墮せよ』。比丘卽ち食を呪して之を與へて食せしむ。彼れ墮胎することを得たり、比丘疑ふ。佛問うて言はく、『汝何の心を以てする。』答へて言はく、『殺心』。佛言はく、『波羅夷』。時に婦人あり、夫行いて在らず、他邊に娠むことを得たり。卽ち家の常所供養の比丘の所に往き、語りて言はく、『大德、我が夫行いて在らず、他邊に娠むことを得たり。我れに藥を與へて之を墮せよ。』比丘卽ち藥を呪して與へて墮胎せしむ。比丘疑ふ。佛問うて言はく』、汝何の心を以てする』。答へて言はく、『殺心』。佛言はく、『波羅夷。細末藥を呪し、華鬘を呪し、熏香衣服を呪し、胎を呪するも亦是くの如し、一切波羅夷なり』。時に婦人あり、夫行いて不在、他邊に娠むを得たり、卽ち家の常所供養の比丘尼の所に往き、語りて言はく、『阿姨、我が夫行いて在らず、他邊に娠むことを得たり、我れに藥を與へて之を墮せよ』。比丘尼言はく、『大姉、我れ藥

や不や』。佛言はく、『波羅夷』。『大德、若し男想を作して女命を斷ぜば、是れ犯すや不や』。佛言はく、『波羅夷』。『若し此の女想を作して、而も彼の女命を斷ぜば、是れ犯すや不や』。佛言はく、『波羅夷』。『大德、若し此の男想を作して、彼の男命を斷ぜば、是れ犯すや不や。佛言はく、『波羅夷』。若し刀を持つ人を求覓せば、是れ犯すや不や』。佛言はく、『若し命を斷ぜば犯す』。爾の時比丘あり、檀越家病む、往いて問訊す。彼の檀越の婦、顏貌端正なり。比丘見已りて欲心繫著す。比丘語りて言はく、『我れと共に如是の事を作すべし』。其の婦言はく、『大德、是の語を作すこと莫れ、我が夫存在す、是くの如き惡事を作すことを欲せず』。比丘卽ち其の夫に向ひ、死の快きを歎ず、彼の夫卽ち死す、疑ふ。佛問うて言はく、『汝何の心を以てする』。答へて言はく、『殺心』。佛言はく、『波羅夷』。時に比丘あり、檀越病む、往いて問訊す。檀越の婦端正なり。比丘見已りて欲心繫著す。語りて言はく、『我れと共に如是の事を作すべし』。其の婦言はく、『我が夫存在す、是くの如き事を作すを欲せず』。比丘卽ち彼の夫に藥を與へて死せしむ、疑ふ。佛問うて言はく、『汝何の心を以てする』。答へて言はく、『殺心を以てす』。佛言はく、『波羅夷』。時に比丘あり、檀越病む、往いて問訊す。檀越の婦端正なり。比丘見已て欲心繫著し、語りて言はく、『我れと共に如是の事を作せ』。其の婦言はく、『我が夫存在す、如是の事を作すを欲せず』。比丘卽ち其の夫に吐下藥を與へ、命を斷ぜしめ、疑ふ。佛問うて言はく、『汝何の心を以てする』。答へて言はく、『殺心』。佛言はく、『波羅夷』。時に比丘あり、檀越病む、往いて問訊す。檀越の婦端正なり、比丘見已りて欲心繫著す。語りて言はく、『我れと共に如是の事を作せ』。其の婦言はく、『我が夫存在す、是の如き事を作すを欲せず』。比丘卽ち非所應食を與へて命を斷ぜしむ、疑ふ。佛問うて言はく、『汝何の心を以てする』。答へて言はく、『殺心を以てす』。佛言はく、『波羅夷』。時に比丘あり、檀越病む、往いて問訊す。檀越の婦端正なり、比丘見已りて欲心繫著す。語りて言はく、『我れと共に如是の事を作せ』。其の婦言はく、『我が夫存在す、是くの如き事を作すを欲せ

勝と字づく。檀越家あり、檀越病めり。比丘來りて問訊す。彼れに二小兒あり、黠了なり。時に檀越寶藏を示し已り、此の比丘に處所を語る。語りて言はく『此の二小兒長大し已り、若し勝るゝものに、此の寶處を示せ』。是に於て命過す。時に高勝比丘、此の二兒の勝るゝものを看て、卽ち寶處を示す。時に一小兒涕泣して寺內に來至し、阿難に語りて言はく『大德、此の高勝比丘を看よ、我が父の遺財二人の分を以て、併せて一人に與ふ』。時に阿難、高勝比丘に語りて言はく『汝云何ぞ他の父の遺財、二人の分を以て一人に與ふるや』『高勝、汝去るべし、汝と同じく布薩すべからず』。時に阿難、六布薩を經て與に共に同じうせず。時に高勝比丘、羅睺羅と伴黨たり、時に羅睺羅、晨朝に衣を著け鉢を持ち、迦維羅衛國に至る。舍夷の婦女、拘梨の婦女、是くの如きの言を語る『汝曹男女を將ひて、阿難の前に著くべし、若し小兒啼かば、阿難當さに言ふべし『小兒を將ひ去れ』。汝等當さに是くの如きの言を語るべし『我等小兒を將ひ去ること能はず、乃至阿難、當さに高勝比丘の語を聽くべし』。時に諸の婦女、羅睺羅を遣はし、去りて男女を將ひて阿難の前に著く。時に小兒啼く。阿難言はく『小兒を將ひ去れ』。時に諸の女人言はく『我等小兒を將ひ去ること能はず、乃至高勝比丘の語を受けよ』。阿難慈心にて卽ち言はく『高勝、汝の事云何』。高勝卽ち爲めに具さに因緣を說く。阿難言はく『汝去れ、乃至突吉羅をも犯さず』。

爾の時世尊、毘舍離に在りき。優波離座より起ちて、偏へに右の肩を露はし、右膝地に著け、合掌して佛に白して言さく『大德、諸の比丘、婆裘河邊に在りて不淨觀を作し、身を厭ひて自殺す、是れ犯すや不や』。佛言はく『初め未だ戒を制せざれば、無犯なり』。『人に人想を作す、是れ犯すや不や』。佛言はく『波羅夷』。『人に疑ひあり、是れ犯すや不や』。佛言はく『偸蘭遮』。『人に非人想を作す、是れ犯すや不や』。佛言はく『偸蘭遮』。『非人に人想する、是れ犯すや不や』。佛言はく『偸蘭遮』。『非人に疑あり、是れ犯すや不や』。佛言はく『偸蘭遮』。『大德、若し女想を作して男命を斷ぜば、是れ犯す

汝我れに語りて、汝の說くに隨へと言へり』。諸の比丘、佛に言す。佛言はく、『是くの如きの語を作すべからず、說いて言ふべし、「是の語を說け」と。是の時比丘あり、他の薪を盜む、彼れ疑ふ。佛言はく『波羅夷』。時に比丘あり、他の薪を盜む、疑ふ。佛言はく、『直五錢は波羅夷』。爾の時畢陵伽婆蹉に檀越あり、檀越に二小兒あり、黠了して人を畏れず、畢陵伽婆蹉家に至る、時に小兒脚を抱いて婉轉して戲る。後異時に、此の二小兒、賊の爲めに偷み去らる。時に畢陵伽婆蹉、晨朝に衣を著け鉢を持ち、檀越家に至り、座を敷いて坐す。小兒の父母向つて涕泣し、涙を流して言はく、『小兒賊の爲めに偷み去らる、若し今在らば、當さに來りて大德の脚を捉へて戲るべし』。卽ち答へて言はく、『屋內に於て處々求覓すべし』。彼の父母求覓すれども得ず。時に畢陵伽婆蹉、還りて寺內に至り、房中に入り、思惟入定して、念じて身に在り、淸淨過人の天眼を以て小兒を見るに、賊偷んで恒水の中に在り、船に乘じて去る。見已りて譬へば人の屈申臂の如き頃に、寺內より沒して恒水の賊の船中に至りて立つ。時に小兒見て卽ち歡喜し、來りて脚を抱く。婆蹉卽ち神足を以て、小兒を合せて持ち來り、閣上の房中に著け、檀越の所に至り、座を敷いて坐す。時に父母涕泣して言はく、『若し我が兒在らば、今當さに大德の脚を抱いて戲るべし』。答へて言はく、『閣上の房中に於て覓むべし』。彼れ言はく、『已に求覓すれども得ず』。畢陵伽婆蹉言はく、『但更に覓めよ』。彼れ卽ち更に閣上の房中に於て覓め得たり。時に兒の父母大に歡喜して言はく、『我が兒賊の爲めに偷まる、而も今畢陵伽婆蹉我が爲めに將ひ來る』。時に諸の比丘聞く。中に少欲知足にして頭陀を行じ、學戒を樂しみ、慚愧を知る者あり、畢陵伽婆蹉を嫌責して言はく、『云何ぞ賊、他の兒を偷み去るに、而も奪ひ來るや。』畢陵伽婆蹉聞き已りて疑ふ。佛所に往き、頭面に足を禮し、却いて一面に坐し、此の因緣を以て、具さに世尊に白す。世尊知りて故らに問ひたまふ。『汝何の心を以て取る』。答へて言はく、『慈心にて取る、盜意あることなし』。佛言はく、『無犯、而も是くの如き事を作すべからず』。爾の時比丘あり高

若しは滅擯羯磨、若しは作すも成せず、突吉羅を得。爾の時比丘あり、風飄衣を得、彼れ疑ふ。佛問うて言はく、『汝何の心を以て取る』。答へて言はく、『糞掃衣を以てし、盗心を以て取らず』。佛言はく、『無犯、[一]風飄衣糞掃衣を取るべからず』。爾の時居士あり、衣を浣ひ已りて、牆上に著けて曬す』、糞掃衣比丘、見て是れを糞掃衣と謂ひ、即ち持ちて去る。時に居士見て語りて言はく、『大徳、我が衣を持ちて去ること莫れ』。比丘言はく、『我れは是れ糞掃衣なり謂へり』と、即ち衣を放ちて去る、疑ふ。佛問うて言はく、『汝何の心を以て取る』。答へて言はく、『糞掃衣とし取る』。佛言はく、『無犯、而も牆上に於て、若しは離上、若しは塹中に、糞掃衣を取るべからず』。時に居士あり、衣を浣ひ已りて、[二]笟上に著けて曬す。六群比丘あり、盗心にて持ちて去る、疑ふ。佛言はく、『波羅夷』。時に衆多の賊あり、舍衛城を出で、祇洹を去ること遠からず、晝日に酒を飲み、日入り已りて、餘酒を樹間に舉著し、舍衛城に入る。時に六群比丘、祇洹を出でゝ、盗心にて取りて飲む、疑ふ。佛言はく、『汝波羅夷』。時に乞食比丘あり、晨朝に衣を著け、鉢を持ち、檀越家に往き、天の瀑雨するに遇ふ、水に種々の脂を飄す。彼れ念じて言はく、『此れ求めずして得、以て藥と爲すべし』。即ち取りて之を服し、疑ふ。佛問うて言はく、『汝何の心を以てする』。答へて言はく、『糞掃とて取る、盗心にあらず』。佛言はく、『無犯、水中の糞掃物を取るべからず、受けずして服す、波逸提なり』。時に比丘、檀越家あり。異比丘語りて言はく、『我れ汝の檀越に往き、何の所說あらんを欲するや』。答へて言はく、『汝の說くに隨へ』。彼の比丘、五十兩の石蜜を須む。檀越家に至りて、語りて言はく、『某甲比丘、五十兩の石蜜を須ふ』と。檀越言はく、『得べし』と、即ち之を與ふ。此の比丘得て便ち自ら食ひ、彼の比丘に與へず。後異時に、彼の比丘、往いて檀越家に詣る。檀越語りて言はく、『大徳、蜜を好むや不や』。比丘問うて言はく、『何等の石蜜ぞ、誰の石蜜とか爲す』。檀越即ち具さに本末を說く。彼の比丘還りて、此の比丘に語りて言はく、『汝盗を犯す、我が石蜜を取る』。彼れ答へて言はく、『我れ盗を犯さず、

【一】風飄衣糞掃衣は、一本風飄及糞掃衣とある、恐らくは風飄糞掃衣ならん、風飄衣糞掃衣にても意通ぜず。

【二】笟は音義に「說文に竹を判して圜し、以て穀を盛る者」とあり、字書にも「穀を盛る圓囤なり」とある。

ふ。卽ち衣を持ちて去る。彼れ言はく、『大德、我が衣を持ちて去ること莫れ』。比丘言はく、『是れは某甲の衣、先きに我れに語りて言はく、「衣を須ひば便ち取れ」と』。彼れ答へて言はく、『某甲は已に死す』。比丘、衣を放ちて去る、疑ふ。佛問うて言はく、『汝何の心を以てする』。具さに因緣を答ふ。佛言はく、『無犯、而も主に問はずして取るべからず』。

爾の時世尊、毘舍離に在しき。不信樂の離奢あり、弊物を以て五錢を裹み、糞聚の間に置き、人を遣はして微に伺はしめ、若し取る者を見ば、將に來らしむ。時に糞掃衣の比丘、見て是れ糞掃衣なりと謂ひ、卽ち取りて囊中に著く。時に彼の使人、見已りて語りて言はく、『某甲離奢喚ぶ』。比丘答へて言はく『去らん』。去りて離奢の所に至る。離奢問うて言はく、『大德、應さに錢寶を捉るべきや不や』。比丘答へて言はく、『不應なり。汝何が故に取るや』。答へて言はく、『我れ取らず。彼れ言はく、『出して之を看ん』。彼れ卽ち囊中より出して示す。此の比丘慚愧す、餘の比丘も亦爾り。此の因緣を以て、具さに世尊に白す。世尊言はく、『諸の比丘善く聽け、若し比丘あり、是くの如きの糞掃衣を取らんと欲せば、應さに左の足指を以て、右指を躡み、牽いて解き看るべし、若し不淨あれば之を出し、淨なる者は持ちて去れ』。

爾の時世尊、舍衞國に在しき。迦留陀夷、六群比丘と、阿夷婆提河中に在りて浴す。迦留陀夷先づ岸上に出でゝ、錯りて六群比丘の衣を著けて去る。六群比丘後に出づ。岸上已れの衣を見ず、迦留陀夷の衣を見る。便ち言はく、『彼れ盜を犯す、我等の衣を取る』。卽ち現前に於てせずして滅擯を作す。時に迦留陀夷之を聞いて疑を生じ、世尊の所に往き、頭面に足を禮し、却いて一面に坐す、此の因緣を以て具さに世尊に白す。世尊問うて言はく、『汝何の心を以てする』。答へて言はく、『是れ已れの衣と謂へり、盜心を以てせず』。佛言はく、『無犯、而も衣を看ずして、便ち著くべからず。亦不現前にして、呵責を作すべからず。若しは擯、若しは依止、若しは遮不至白衣家、若しは擧、

べからず』。時に比丘あり、陶師を檀越と爲す。檀越語りて言はく、『大德、器を須ひんには、便ち語られよ』。彼れ答へて言はく、『爾すべし』。其の檀越起ち去りて家に還る。更に異人あり、賣器處に來至し、器を賣ふ。後時に、比丘瓶を須ふ、卽ち他の瓶を取りと持ち去る。彼れ比丘に語りて言はく、『大德、我が瓶を持ちて去ること莫れ』。比丘言はく、『此れは是れ比丘の瓶なり、某甲先きに我れに語りて言はく、「若し器を須ひば、便ち取れ」と、是の故に我れ取る』。彼れ言はく、『此れは某甲の瓶に非ず』と。比丘卽ち瓶を放ちて去り、疑ふ。佛問うて言はく、『汝何の心を以てする』。卽ち具さに因緣を說く。佛言はく『無犯、而も主に問はずして取るべからず』。時に比丘あり、沽酒家を檀越と爲す。檀越、比丘に語りて言はく、『大德、若し飯を須ひんには取れ』。答へて言はく、『爾すべし』。時に檀越卽ち家に還る。更に異人あり、沽酒處に在りて住す。後に比丘飯を須め來りて取り去る。彼れ語りて言はく、『大德、我が飯を持ちて去ること莫れ』。比丘言はく、『此れは是れ某甲の飯、某甲先きに語らる、「飯を須ひば便ち取れ」と、是の故に取るのみ』。彼れ言はく、『此れは某甲の飯にあらず』と。比丘飯を放ちて去り、疑ふ。佛問うて言はく、『汝何の心を以てする』、具さに因緣を答ふ。佛言はく、『不犯、而も主に問はずして、他物を取るべからず』。時に比丘あり、估客を檀越と爲す。語りて言はく、『大德、若し所須あらば、便ち取れ』と。答へて言はく『爾すべし』。彼の估客家に還る。後更に異人あり、此の處に在つて物を賣ふ。後に比丘、米を須む、卽ち米を持ちて去る。彼れ語りて言はく、『大德、我が米を持ちて去ること莫れ』。比丘言はく、「此れは是れ某甲の米、先きに我れに語りて言はく、「若し所須あらば、便ち取れ」と、是の故に我れ取る』。彼れ言はく、『此れは某甲の米に非ず』。比丘卽ち米を置いて去る、疑ふ。佛問うて言はく、『汝何の心を以てする』。具さに因緣を答ふ。佛言はく、『無犯、而も主に問はずして取るべからず』。時に賣衣人あり、檀越と爲る。檀越語りて言はく、『大德、衣を須ひんには、便ち取れ』。答へて言はく、『爾すべし』。彼の檀越命過す、兒の在るあり。比丘、衣を須

卷の第五十六（第四分の七）

調部の二

時に差摩比丘尼あり、檀越家あり、彼の弟子其の家に往き、檀越に語りて言はく、『阿姨差摩、五斗の胡麻子を須む』と。檀越言はく、『得べきのみ』と、即ち之を與ふ。彼の弟子胡麻を得て、便ち自ら食ふ。後異時に於て、差摩比丘尼、晨朝に衣を著け、鉢を持ち、檀越の家に往き、座を敷いて坐す。檀越問ふ、『胡麻子美なりや不や』。彼れ答へて言はく、『何等の胡麻ぞ』。檀越即ち具さに本末を說く。差摩比丘尼還りて、彼の弟子比丘尼に語りて言はく、『汝我が五年の胡麻を盜む』。弟子答へて言はく、『我れ盜まず、親厚の意を以て取る』と。疑ふ。佛問うて言はく、『汝何の心を以てする』。答へて言はく、『親厚意にて取る』。佛言はく、『無犯、而も非親厚意に、親厚意を作して取るべからず、妄語を以ての故に波逸提を得』。時に差摩比丘尼に、檀越家あり、其の弟子、其の家に往いて語りて言はく、『阿姨差摩、三種の藥粥を須む』。彼れ言はく、『得べきのみ』。即ち與ふ。彼れ得て便ち自ら食す。後時に差摩比丘尼、晨朝に衣を著け、鉢を持ち、其の家に往き、座を敷いて坐す。檀越問うて言はく、『阿姨、三種の藥粥美なりや不や』。彼れ即ち言はく、『何等の三種の藥粥ぞ』。檀越即ち具さに爲めに本末を說く。差摩還りて、彼の比丘尼弟子に語りて言はく、『汝我が種三の藥粥を盜む』。彼れ答へて言はく、『我れ盜まず、親厚意を以て取ると』。彼れ疑ふ。佛問うて言はく、『汝何の心を以て取る』。答へて言はく、『親厚意にて取る』。佛言はく、『無犯、而も非親厚に、親厚意を作して取るべからず、妄語を以ての故に波逸提を得』。時に比丘あり、和尙の佉闍尼分を取る。和尙語りて言はく、『汝我が分を食ひ、盜を犯す』。答へて言はく、『我れ盜まず』。親厚意にて取る。彼れ疑ふ。佛問うて言はく、『汝何の心を以てする』。答へて言はく、『親厚意にて取る』。佛言はく、『無犯、而も非親厚意を、親厚意と作して取る

はく、『盜心を以てす』。佛言はく、『直五錢にして、處を離れば波羅夷』。時に衆多の比丘あり、六群比丘と白衣の家內に在り、共に坐して食ふ。白衣大價衣を以て、敷いて座と爲す。中に一の六群比丘あり、盜心にて脚を以て轉側し、疑ふ。佛言はく、『汝何の心を以てする』。答へて言はく、『盜心』。佛言はく、『方便して五錢を求め、未だ處を離れざるは偸蘭遮なり』。

即ち放ち去る、比丘疑ふ。佛問うて言はく、『汝何の心を以てする』。答へて言はく盗、『心を以てす』。佛言はく、『直五錢にして、處を離るれば波羅夷』。時に豹あり、鹿を捉ふ。鹿瘡を被りて、來りて寺に入りて死す、諸の比丘取りて食ひ、疑ふ。佛言はく、『無犯』。時に獵師あり、鹿を捕ふ、鹿來りて寺に入る。獵師鹿を尋ねて來り、諸の比丘に問うて言はく、『是くの如き、是くの如きの鹿を見るや不や』。諸の比丘、見ざる者は、見ずと言ふ。彼れ即ち處々に求覓して得。時に獵師即ち比丘を瞋嫌して言はく、『沙門釋子慚愧あることなし、妄語欺調す、自ら稱して我れ正法を知れりと、鹿を見て見ずと言ふ、是くの如きは、何ぞ正法あらん』。諸の比丘疑ひて佛に白す。佛言はく、『無犯』。時に比丘あり、波利迦羅衣を盗取し、疑ふ。佛言はく、『波羅夷』。時に比丘あり、盗心にて、他の波利迦羅衣を擧げて處を離る、疑ふ。佛言はく、『波羅夷』。時に比丘あり、盗心にて波利迦羅衣を轉側し、疑ふ。佛言はく、『方便して五錢を求め、未だ處を離れず、偸蘭遮なり』。時に比丘あり、繩床、木床、大小褥、枕、氈被、若しは瓶、若しば澡罐、若しは杖、若しは扇を盗む。佛言はく、『直五錢なれば一切波羅夷なり』。時に比丘あり、繩床を倒易して言はく、此れも亦是れ僧彼れも亦是れ僧。佛言はく、『倒易すべからず』。時に比丘あり、木床大小褥、若しは枕を倒易し、此れも亦是れ僧、僧彼れも亦是れ僧、氈被瓶澡罐杖扇も、言はく此れも亦是れ僧、彼れも亦是れ僧と。佛言はく、『爾すべからず』。時に比丘あり、他の石を盗む、彼れ疑ふ。佛言はく、『直五錢は波羅夷』。材木竹葦、又若草、婆々草、樹皮、若しは他の守護する所の樹葉花菓を、盗塹す、彼れ疑ふ。佛言はく、『直五錢は一切波羅夷なり』。時に比丘あり、他の衣架上より、衣を盗取し、疑ふ。佛言はく『波羅夷』。時に比丘あり、盗心にて他の衣架上の衣を擧げ、架を離る、疑ふ。佛言はく『波羅夷』。時に比丘あり、盗心にて、他の架上より衣を轉側し、疑ふ。佛言はく、『方便して五錢を求め、未だ處を離れざるは偸蘭遮なり』。時に比丘あり、他の衣架上の帶と、幷び架とを合せ取り、疑ふ。佛問うて言はく、『汝何の心を以てする』。答へて言

【九】盗塹は、盗斬ではあるまいか。

し、此の岸より彼の岸に至り、疑ふ。佛言はく、『波羅夷。彼の岸より此の岸に至り、水に順ひ、若しは水に逆ひ、若しは水中に沈み、若しは牽いて陸地に著け、若しは他の船を解いて處を離る、一切波羅夷。若し方便して解かんと欲し、處を離れざれば偸蘭遮。』時に二比丘あり、阿夷羅婆提河中に往いて浴す、貴價の衣籠の、水に隨つて流下するを見る。一比丘見て便ち言はく、『此の籠ば我れに屬す』。第二比丘言はく、『籠中の物は我れに屬す』。卽ち共に貴價衣を取得し、便ち疑ふ。佛言はく、『汝何の心を以てする』。答へて言はく、『糞掃衣想』。佛言はく、『不犯、水中の糞掃衣を取るべからず』。比丘あり、金花鬘を盜み、疑ふ。佛言はく『波羅夷』。時に祇洹中に衆多の鳥あり、巢住す。後夜に至り、鳴喚して諸の坐禪の比丘を亂す。舊比丘あり、守園人を遣はして、鳥巢を除去す。彼れ鳥巢の中に於て、金あり、碎帛あるを見、持ち來りて舊比丘に與ふ、彼れ疑ふ。佛言はく、『鳥獸には用なし、無犯なり、而も是くの如きものを受くべからず』。時に祇洹中に鼠穴あり、比丘、守園人を壞せしむ、彼れ鼠穴中に於て、藥、碎帛を得、持ち來りて比丘に與ふ、比丘疑ふ。佛言はく、『畜生には用なし、無犯なり、而も是くの如き物を受くべからず』。時に寺を去る遠からずして村あり、諸鼠村中に往き、胡桃を取り來り、寺内に在りて大聚を成す。六群比丘、『盜心を以て取りて食ひ、彼れ疑ふ。佛言はく、『波羅夷』。時に祇洹を去ること遠からず、獵師あり、機を安んじ、發して鹿を捕ふ、機中に死鹿あり、六群比丘盜心を以て取りて食ひ、疑ふ。佛言はく、『波羅夷』。時に比丘あり、晝日阿蘭若處に往く。賊あり、牛を繫いで樹に在り。牛、比丘を見て泣涙す。比丘慈念し、便ち解放して去らしむ、比丘疑ふ。佛問うて言はく、『汝何の心を以てする』。答へて言はく、『慈心を以てす、盜意なし』。佛言はく『無犯、是くの如き事を作すべからず』。時に比丘あり、晝日阿蘭若處に往く、賊あり、牛を縛して中に置く　比丘の左右に人を見ず、念じて言はく、『此れ我れに於て益あり』と、卽ち牛を解いて牽き去る。去ること遠からずして、還た意に念ずることを得て、便ち言ふ、「我れ何ぞ此の牛を用ひん」と、

波梨婆菓、蒲桃の種々の菓、若し直五錢ならば、一切波羅夷なり』。時に比丘あり、他の梨菓を搖かして墮ちて損減せしめんと欲す。佛言はく『直五錢ならば波羅夷。若し搖かして、閻浮菓、波梨婆菓、蒲桃の種々の菓を墮し、損減せしめしと欲せば、一切波羅夷』。時に比丘あり、他の胡瓜を盜み疑ふ。佛言はく『直五錢ならば波羅夷』。時に比丘あり、他の蓮華を取り、疑ふ。佛言はく『直五錢ならば波羅夷。鉢頭摩、頭々摩、拘頭摩、分陀利華、直五錢は一切波羅夷なり』。若し復折壞して、他を減損せんと欲し、直五錢は一切波羅夷なり』。時に他の守視人及び賊あり、比丘に佉闍尼食を與ふ比丘是くの如きの意を作して言はく『此れは彼れの食にあらず』と。受けず。諸の比丘、佛に白す。佛言はく『此れは是れ檀越食なり、手を淨洗して、受けて是を食ふべし』。時に比丘あり、他の藕根を取り、疑ふ。佛言はく『直五錢は波羅夷』。時に比丘あり、他の所守護の林中に在りて材を取り、疑ふ。佛言はく『波羅夷』。時に比丘あり、盜心無根[八]にして、他の食を取り、疑ふ。佛言はく『波羅夷』。時に比丘あり、無根にして他の食を取り、疑ふ。佛問うて言はく『汝何の心を以てする』。答へて言はく、盜心なし、佛言はく『無犯、妄語の故に波逸提』。時に比丘あり、比丘を遣はして繩床を盜取す、彼の使比丘謂へらく『盜ならず』と、卽ち爲めに床を取りて來る、疑ふ。佛言はく『方便して敎ふる者は波羅夷、使者は犯さず』。時に比丘あり、比丘を遣はして繩床を取る、彼の使謂へらく盜取と、卽ち床を取りて來る、疑ふ。佛言はく『取る者は波羅夷、敎ふる者は無犯なり』。時に衆多の比丘あり、輿あり、六群比丘と共に行く。六群比丘是の念を作す、「前んで住處に到らば、當さに彼の輿を盜取すべし」と。佛言はく『若し此に在りて盜むは波羅夷、若しは道中に在り、若しは住處に至りて盜むも亦波羅夷』。時に六群比丘あり、恒水の中に流船あるを見て、是の念を作す、「我等此の船を盜取するに身手を勞せざるべし」と、彼れ疑ふ。佛問うて言はく『何の心を以てする』。卽ち具さに因緣を答ふ。佛言はく『但意ふは無犯、而も是くの如きの意を生ぜざるべし』。比丘あり、他の船を盜取

【八】無根は虛僞のこと、僞りて他の食を取るのである。

菓て〻田をして毀撥せしむ、彼れ疑ふ。佛言はく、『波羅夷』。時に比丘あり、他の水を盗む、彼れ疑ふ。佛言はく、『直五錢なれば波羅夷。諸の比丘、疑つて敢て渠水、泉波沖水を取らず。佛言はく、『若し人の所護にあらざれば不犯なり』。時に比丘あり、旃陀羅と字づく。鬪諍の事あり、貴價の蘇摩鉢あり、彼れ諍事を以ての故に常に、憂愁を懷き、是くの如きの語を作す『若し諍事を滅する者あらば、當さに此の鉢を與ふべし』。時に阿夷頭比丘あり、聰明了々として、善く諍事を滅す、即ち彼れが爲めに滅諍し已り、鉢を持つて去る。此の比丘、鉢を失へりと謂ひ、便ち行いて求覓し、阿夷頭の手中に捉れるを見、即ち語りて言はく『汝我が鉢を偷む、即ち答へて言はく『我れ汝の鉢を偷まず、汝自ら要言あり、若し能く我が諍事を滅する者あらば、當さに此の鉢を持つて與ふべし』と。是の故に我れ取るのみ』と、彼れ疑ふ。佛問うて言はく『汝何の心を以て取る。』彼れ具さに因縁を說く。佛言はく、『不犯、而も是くの如き者を受くべからず』、時に比丘あり、耶輸伽と字づく、僧伽梨あり、復比丘あり、婆修達多と名づく、語らずして輙ち著く。聚落に入りて乞食す。彼れ衣を失へりと謂へり。便ち行いて求覓し、婆修達多の著たるを見て、即ち之を捉へて言はく『汝盗を犯す』。彼れ答へて言はく『我れ汝の衣を盗まず、親厚の意を以て取るのみ』、彼れ疑ふ。佛問うて言はく『汝何の心を以てする』。答へて言はく『親厚意を以て取る、盗心に非ず。佛言はく無犯、而も非親厚に於て、親厚意を作して取るべからず』。時に比丘あり、清淨と字づく。僧伽梨あり。須陀夷比丘あり、主に問はずして輙ち著け、聚落に入りて乞食す。主は衣を失へりと謂ひ、便ち行いて求覓し、須陀夷の著くるを見、即ち捉へて語つて言はく『汝我が衣を取り、盗を犯す』。彼れ答へて言はく『我れ盗まず、借りて著くるのみ』、彼れ疑ふ。佛問うて言はく『汝何の心を以てする』。答へて言はく『借りて著く、盗心に非ず。』佛言はく『無犯、而も主に問はずして、輙ち著けて聚落に入るべからず』。時に比丘あり、他の梨菓を取り、疑ふ。佛言はく、『直五錢にして、本處を離るれば波羅夷。閻婆菓、

を以てする。』答へて言はく、『盗心』。佛言はく、『直五錢にして、本處を離るれば波羅夷』。時に比丘あり、盗心にて、他の分物籌を倒易し、彼れ疑ふ。佛言はく、『籌を擧ぐれば、便ち波羅夷』。時に比丘あり、他の分物籌を盗み、疑ふ。佛言はく、『直五錢にして、本處を離るれば波羅夷』。時に比丘あり、他の籌を轉側し、疑ふ。佛言はく、『方便して五錢を取り、未だ本處を離れざれば偸蘭遮』。時に比丘あり、再び物を盗取して五錢に滿さず、彼れ是くの如きの念を作す、「我れ前後五錢に滿たず、波羅夷を犯さず」。佛言はく、『前後五錢に滿つれば波羅夷』。時に祇洹を去ること遠からず、居士ありて耕す。客比丘あり、見て語りて言はく、『此れは是れ僧地、汝耕すこと莫れ』と。居士即ち犂を放ちて去り、是くの如きの言を作す。『我れ自ら地あれども、しかも耕すことを得ず』と。彼の客比丘祇洹に入り、舊比丘に問ふ。『居士あり此を去ること遠からずして耕す、此れは是れ誰の地ぞ』。答へて言はく、『是れ彼の居士の地なり』。舊比丘言はく『汝何故に問ふや』。即ち具さに因緣を説き、便ち疑ふ。佛問うて言はく、『汝何の心を以てする』。具さに因緣を說く。佛言はく。『汝無犯、而も是くの如きことを作すべからず』。時に優波離座より起ち、偏へに右の肩を露はし、右膝地に著け、佛に白して言さく、『減損の意を作して、五錢若しは過五錢を取り、自ら取り、若しは人をして取らしめ、自ら斷壞し、若しは人をして斷壞せしめ、自ら破り、若しは人をして破らしめ、若しは燒き、若しは埋め、若しは色を壞す、是れ犯すや不や』。佛言はく、『一切波羅夷』。時に比丘あり、地を分ちて、他の標相を移す、彼れ疑ふ。佛言はく『汝何の心を以てする』。答へて言はく『盗心を以てす』。佛言はく、『標相を移し、若し直五錢ならば波羅夷』。爾の時衆僧園に、水なくして荒毀す。六群比丘、他の田水を決して僧園中に著け、疑ふ。佛問うて言はく『汝何の心を以てする』。答へて言はく『盗心』。佛言はく、『波羅夷』。時に比丘あり、『檀越の家の田、水なくして荒毀するあり、彼れ他の水を決し、檀越の田中に著け、疑ふ。佛言はく『波羅夷。』時に比丘あり、白衣の家と怨みあり、彼れ他の田水を決し、之を

還りて當さに取るべしと言ひき。餘の糞掃衣の比丘、見て是れ糞掃衣なると謂ひ卽ち持ち去る。彼の比丘還りて衣を見ず、寺内に至りて、比丘の浣治するあるを見、卽ち語りて言はく『汝我が衣を偸む、盜を犯す』。彼れ答へて言はく『我れ盜取せず、糞掃衣のみと』、彼れ疑ふ。佛言はく『汝何の心を以てする』。答へて言はく『糞掃衣と作して取る』。佛言はく『不犯、而も聚糞掃衣を取るべからず。』時に居士あり、塚を去ること遠からずして行く、遙に大價の糞掃衣あるを見、卽ち往いて取り、草中に置いて去る、言はく『還りて當さに取り、某甲比丘に與ふべし』と。時に糞掃衣比丘あり、見て卽ち持ち去る。彼の居士還りて衣を見ず、寺中に至りて、比丘の浣治するを見、卽ち語りて言はく『汝我が衣を盜む』と。比丘答へて言はく『我れ汝の衣を盜まず、糞掃衣を取るのみと、疑ふ。佛問うて言はく『汝何の心を以てする』。答へて言はく『糞掃衣を以て取る』。佛言はく『無犯』。而も是くの如き處の糞掃衣を取るべからず』。時に牧牛の人あり、衣を脫して、頭前に置いて眠る。糞掃衣比丘あり、見て是れを死んと謂ひ、是の念を作さく、「世尊[七]完死人の衣を取ることを聽したまはず」と、卽ち死人の髀骨を取りて頭を打つ。彼れ覺め起きて言はく『大德、何が故に我れを打つや』。比丘言はく、『我れ汝を死人と謂へり』。彼の牧牛人言はく、『汝寧ろ我が死生を別さざるべきや。卽ち比丘の熟手を打つ。』諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『死人を打つて、破りて衣を取らしむべからず』。時に衆多の小兒あり、衣を脫して一處に置き、土堆を作りて戲る。糞掃衣の比丘あり、見て卽ち持ち去る。諸の小兒見て語りて言はく『我が衣を持ちて去ること莫れ』。比丘答へて言はく『我れ是れ糞掃衣なりと謂へり』と、置きて去る、疑ふ。佛問うて言はく、『汝何の心を以てする』。答へて言はく、『糞掃を以て取る』。佛言はく『無犯なり』、而も聚糞掃衣を取るべからず』。時に六群比丘、石蜜を以て小兒を誘誑し、人間に將つて賣らんと欲す。父母之を見て、卽ち比丘に問うて言はく『大德、何の說く所ぞ』。彼れ答へて言はく『說く所なし』と、卽ち小兒を留めて去り、疑ふ佛問うて言はく、『汝何の心

【七】完死人は、身體に何等損傷もなく、腐爛もして居ない死屍のこと、故に之を傷けて衣を取らんとしたのである。

へて言はく、『盜心を以て取る』。佛言はく、『五錢を取り、本處を離るれば波羅夷』。時に王家の勇健の人あり、信樂を以ての故に、世尊に從つて出家す。異の破戒の比丘あり、誘誑して言はく、『長老、彼の某甲村中に、多く財物あり、亦健人あり而も汝は彼れに勝つ、今共に往いて彼の財物を取るべし』。卽ち答へて言はく、『爾すべし』。彼の比丘語り已つて、便ち去ること遠からず、此の比丘是の念を作さく、『我れ信樂して出家す、是くの如きの惡事を作すべからず』。彼の破戒比丘、異時に於て復來りて語りて言はく、『今共に往いて彼の財物を取るべし』。答へて言はく、『往かず』。問うて言はく、『何を以ての故に』。答へて言はく、『我れ汝の去れる後に於て思惟し、是の念を作す、『我れ信を以て出家し、而も是の事を作すべからず』、是れを以ての故に往かず』。復異時に、彼の破戒比丘、彼の村に往きし他物を盜み、各々に分ち已り、一分と作して此の比丘に送與す。此の比丘答へて言はく、『我れ此の分を須ひず。我れ先きに是くの如きの言を作さずや、『信を以て出家す』、是くの如きの事を作すべからざるをや』。疑ふ。佛問うて言はく、『汝何の心を以てする』。卽ち具さに因緣を以て佛に白す。佛言はく、『無犯なり、先きに然可するは、彼れ突吉羅なり』。時に比丘あり、他の衣を盜まんと欲し、而も錯りて己れが衣を取り、疑ふ。佛言はく、『汝偸蘭遮』。時に比丘あり、他の衣を盜取し、幷びに己れの衣を得たり、疑ふ。佛言はく、『己れの衣は偸蘭遮、他の衣は波羅夷』。時に比丘あり、他、物を盜取し、而も彼の盜者の物を奪ひ、疑ふ。佛言はく、『波羅夷』。時に衆多の白衣ありて塚間に在り、衣を脫して一處に置き、死人を埋む。糞掃衣の比丘あり、謂へらく、『是れ糞掃衣と』、卽ち持ち去る、諸の白衣見已りて語る。『大德、我が衣を持つて去ること莫れ』。彼れ答へて言はく、『我れ糞掃衣と謂へり』と。卽ち衣を置いて去る、疑ふ。佛問うて言はく、『汝何の心を持つてする』。答へて言はく、『糞掃衣想を以てし、盜心を以てせず』。佛言はく、『無犯、若し多く衣聚あるも、糞掃衣と作して取るべからず』。時に比丘あり、塚を去る遠からずして行く、遙に多く糞掃衣あるを見、卽ち聚集して去り、

ふべからず』。時に比丘あり、他の塔廟中の、衣を取り、疑ふ。佛問うて言はく、『汝何の心を以て取る』。答へて言はく、『糞掃衣を以て取る』。佛言はく、『無犯、他の塔廟中の、莊飾衣を取るべからず』。時に比丘あり、賣綖人と共に行く。彼れ比丘に語りて言はく、『長老、汝等關を度るに、稅を輸せず。今此の綖を以て長老に託し、關を度らんと欲す』。時に比丘即ち爲めに衣を過ぎ、便ち疑ふ。佛言はく、『汝何の心を以てする』。答へて言はく、『盜心を以てす』。佛言はく、價直五錢にして、關を過ぐれば便ち波羅夷』。時に衆多の比丘あり、方便して一人を遣はし、他物を取り、五錢若しは過五錢を得、彼れ疑ふ。佛言はく。『一切波羅夷』。時に衆多の比丘あり、方便して一人を遣はし他物を取る。中に疑ふ者あり、而も遮せず、即ち往いて物を取り、五錢若しは過五錢を得、彼れ疑ふ。佛言はく、『一切波羅夷』。時に衆多の比丘あり、方便して一人を遣はし、他物を取る。中に疑ふ者あり、即ち遮す。彼れ故往いて取る。五錢若しは過五錢を得。彼れ疑ふ。佛言はく『遮する者は偸蘭遮、遮せざる者は波羅夷』。時に衆多の比丘あり、方便して一人を遣はし、[六]他物を盜ましむ、即ち往いて、五錢若しは過五錢を取り、減五錢を得たり。彼れ是の念を作さく、『我等減五錢を得たり、波羅夷を犯さず』。佛言はく『本取物處に依り、直五錢ならば波羅夷』。時に衆多の比丘あり、方便して一人を遣はし、五錢若しは過五錢を取り、還りて共に分ち、各減五錢を得たり。彼れ是の念を作さく、『我等減五錢を得たり。波羅夷を犯さず』。佛言はく、『通じて一分と作して波羅夷』。時に衆多の比丘、方便して共に一人を遣はし、他物を取る。彼れ往いて減五錢を取り、此に來至して五錢を得たり。彼是の念を作さく、『我等五錢を得たり波羅夷なり』。佛言はく、『本取物處に依り、偸蘭遮』。時に比丘あり、彼の聚落の物を取り、來りて城に入り、疑ふ。佛言はく、『汝何の心を以てする』。答へて言はく、『盜心』。佛言はく、『五錢を取りて、本處を離るれば波羅夷』。時に比丘あり、他の經を盜み、是の念を作さく、『佛語は價なし、應さに紙墨の直を計すべし』、彼れ疑ふ。佛言はく、『汝何の心を以てする』。答

【六】他物を取りし處にては五錢以上のものも、取り來りし處にては、五錢以下のものであつた場合のことである。

疑あり。佛問うて言はく、『若し價直五錢にして、取りて本處を離るれは波羅夷』。時に乞食の比丘あり、晨朝に衣を着け鉢を持ち、白衣の家に往く。方獨座榻蹬あるを見左右を看るに人を見ず、念じて言はく、「此れを取れば我れに益あり、」即ち持ち去りて疑ふ。佛問うて、言はく、『汝何の心を以て取る』。答へて言はく、『盜心にて取る』。佛言はく、『若し價直五錢にして、取りて本處を離るれば波羅夷』。時に比丘あり、浣衣處に於て、他の衣を取りて持ち去り、疑ふ。佛問うて言はく、『汝何の心を以て取る』。答へて言はく、『盜心を以て取る』、佛言はく、『價直五錢にして、取りて本處を離るれば波羅夷』。時に比丘あり、浣衣處を去る遠からずして、貴價衣を曬すあるを見、即ち憶識して去る。念じて言はく、「還る時當さに取るべし」、便ち疑ふ。佛問うて言はく、『汝何の心を以てする』。答へて言はく、『盜心を以てす』。佛言はく、『方便して五錢を求め未だ本處を離れさるは偷蘭遮』。時に乞食比丘あり、晨朝に衣を着け鉢を持ち、白衣の家に往き、門屋の下に、貴價衣を曬すを見、脚を以て轉側して看る、彼れ疑ふ。佛問うて言はく、『汝何の心を以てする』。答へて言はく、『盜心を以てす』。佛言はく、『方便して五錢を求め、未だ本處を離れざるは偷蘭遮』。時に乞食比丘あり、晨朝に衣を着け鉢を持ち、白衣の家に往き、獨坐床あるを見、左右を看るに人を見ず、自ら念ず、『此れ我れに於て益あり』。即ち持ちて去り、疑ふ「佛問うて言はく、『汝何の心を以て取る』。答へて言はく、『盜心を以てす。』佛言はく、『波羅夷』。時にも乞食比丘あり、晨朝に衣を着け鉢を持ち、白衣の家に往き、獨坐床と幷びに衣あるを見、左右を看るに人を見ず、自ら念ず、「此れ我れに於て益あり、即ち持ち去り、彼れ疑ふ。佛問うて言はく、『汝何の心を以てする』。答へて言はく、『盜心を以てす』。佛言はく、價直五錢にして、取りて本處を離るれば、波羅夷』。時に乞食比丘あり、晨朝に衣を着け鉢を持ち、白衣の家に往く。獨坐床あるを見、暫らく取り用つて坐す、疑ふ。佛問うて言はく、『汝何の心を以てする』、答へて言はく、暫取にして盜心にあらず』。佛言はく、『無犯、主に問はずして、暫取して用

して佛に白して言さく、「大德、陀尼伽陶師子、王瓶沙の材木を取り、與へざるに而も取る、是れ犯すや不や』。佛言はく、『最初未だ戒を制せず、不犯なり』。復佛に白して言さく、『大德、若し空處の他の守護する所の物、若しは五錢、若しは過五錢を取る、是れ犯すや不や』。佛言はく、『波羅夷』。他物に他物想し、若しは五錢、若しは過五錢を、與へざるも而も取る、是れ犯すや不や。佛言はく『波羅夷』。『他物に疑あり、若しは五錢、若しは過五錢を取る、是れ犯すや不や』。佛言はく、『偸蘭遮』。『非他物に他物想し、五錢若しは過五錢を取るは偸蘭遮』。非他物に疑あり『五錢若しは過五錢を取る、是れ犯すや不や』。佛言はく、『偸蘭遮』。『若し他物に他物想し、減五錢を取る、是れ犯すや』。佛言はく、『偸蘭遮』。『若し他物に疑あり、減五錢を取るは、是れ犯すや不や。』佛言はく、『突吉羅』。非他物に他物想し、減五錢を取る。是れ犯すや不や。』佛言はく、『突吉羅』。『非他物に他物想し、減五錢を取る、是れ犯すや不や。』佛言はく『突吉羅』。『非他物に疑あり、減五錢を取る、是れ犯すや不や』。佛言はく『突吉羅』若し女想を作して、男物五錢、若しは過五錢を取る。是れ犯すや不や。』佛言はく、『波羅夷』。『若し男想を作して、女物五錢、若しは過五錢を取る、是れ犯すや不や』。佛言はく、『波羅夷』。『若し此の女想を作して、餘女の物を取る、是れ犯すや不や。佛言はく、『波羅夷』。若し此の男想を作して、餘男の物を取る、是れ犯すや不や』。佛言はく、『波羅夷』。

爾の時世尊、波羅㮈に在しき。時に世穀貴く、人民飢餓し、乞食得難し。晨朝に衣を著け鉢を持ち、白衣の家に往く。女人あり、器に飯を盛り、地に置き已りて、還りて屋に入る。比丘左右を看るに人を見ず、是の念を作す、「我れ此の食を取れば、我れに於て益あり」、即ち持つて去り、彼れ疑ふ。佛問うて言はく、『汝何の心を以て取る。』答へて言はく、『盜心を以て取る』。佛言はく、『若し價値五錢にして、取りて本處を離るれば波羅夷。麨、乾飯、魚肉、佉闍尼、是くの如き、一切直五錢にして取りて本處を離るれば波羅夷』。時に乞食の比丘あり、晨朝に衣を著け鉢を持ち、白衣の家に往き銅杆あるを見、右左を着るに人を見ず、念じて言はく、「此れ我れに於て益あり」、即ち持ち去る、

の比丘佛に白す、佛言はく『五事の因緣あり、男根をして起たしむ。大便急なり、小便急なり、風患、慰周陵伽虫嚙む、欲心あり。是れを五事と爲す。若し阿羅漢に、欲心ありて男根起つとは、是の處あることなし。』

爾の時世尊、王舍城に在しき。王子無畏、男根に病あり、女人をして之を含ましめ、後に差ゆることを得、差え已りて、卽ち此の女人の口中に於て婬を行ず。此の女人憂愁して樂まず、便ち是の念を作さく「若し王瓶沙來る時は、我れ當さに頭を覆ひ、形を露はして、王の前に在りて住すべし。若し王我れに問うて言はん「汝は狂人か、何が故に乃ち作すこと、是くの如くなる」。我れ當さに答へて言ふべし、狂ならず、是れ王子の所須の故に、我れ今覆護す、何を以ての故に、王子常に我が口中に於て婬を行じたまふ、是の故に覆護す」。後に異時に、王瓶沙、無異の所に往く。時に女人、先きの所念の如く、王の前に於て是くの如く住す。王問うて言はく『汝狂せるか、何が故に是くの如くする』。女答へて言はく『我れ狂せず、是れ王子の所須、是の故に覆護するのみ』。王卽ち無畏を喚び來らしめ、語りて言はく『汝云何ぞ乃ち、侍女の口中に於て欲を行ずるや。』無畏之を聞いて、甚だ以て慚愧す。後に異時に於て王子無畏言はく『此の女人罪あり』と。爲めに黑衣を著けて城門の邊に安置し、是くの如きの言を作す『若し如是の病あるものは、當さに此の婬女の口中に於て、婬を行ずれば差ゆることを得べし』。時に諸の比丘是くの如きの言を爲す『若し病を治せんが爲めの故に、男根を以て、彼の女人の口中に著けて含ましむるも不犯なりや』。佛言はく『波羅夷』。爾の時に城あり、婆樓越奢と名づけ、王を海と字づく。婬女罪あり、王是の言を作す『女根兩邊の肉を剜ぎ、此れを以て羅と爲す、卽ち之を剜ぐ。』諸の比丘是くの如きの言を作す『若し生人の骨間に於て婬を行ぜば、犯とせんや不や』。佛言はく『偸蘭遮』。

爾の時世尊、王舍城に在しき。優波離座より起ち、偏へに右の肩を露はし、右膝地に著け、合掌

在りて行く。遙に死女人を見る、身猶ほ衣服莊嚴す、卽ち婬を行じ、已りて疑ふ。佛言はく、『汝波羅夷。時に比丘あり、房を守る』。小女あり、來りて時到ると白す。比丘卽ち捉へて婬を行じ、彼の女根を破り、大便道と通じ、卽ち命終す、彼れ疑ふ。佛問うて言はく、『汝何の心を以てする』。答へて言はく、『殺心を以てせず』。佛言はく、『殺を犯さず、婬を犯す、波羅夷』。時に比丘あり、木女像の身中に於て婬を行じ、疑ふ。佛言はく、『偸蘭遮を犯す』。壁上の女像の形に於て婬を行ず。佛言はく、『偸蘭遮』。時に比丘あり。天女と共に婬を行じ、已りて疑ふ。佛言はく、『波羅夷。阿修羅女　龍女、夜叉女、餓鬼女、若しは畜生能變化者の女に婬を行ずれば、一切波羅夷なり』。時に比丘あり、晨朝に衣を著け鉢を持ち、白衣の家に至りて乞食す。時に天大に雨ふる、女人あり、身を低うして潦水を除決す、形露はる。彼れ是の念を作す『我れ其の身に觸れず、但男根を以て入るれば、無犯なることを得ん』、念じ已りて卽ち婬を行じ、疑ふ。佛言はく、『波羅夷』。

爾の時世尊、舍衞國に在しき。比丘あり、阿蘭若處に往き、晝日に眠る。時に取薪の女人あり、比丘の形上に於て婬を行じ、已りて去る、比丘に遠からずして住す。比丘覺め已りて、身の不淨に汚るゝを見、念じて言はく、『此の女必ず、我が身上に於て婬を行ず』、疑を生ず。佛問ふて言はく、『汝覺するや不や』。答へて言はく、『我れ覺せず』。佛言はく、『犯さず。比丘是くの如き處に住し、晝日に眠るべからず』。爾の時世尊、婆祇提國に在しき。比丘あり、阿蘭若處に往き、晝日眠る。擔華の女人あり、比丘の形上に於て婬を行ず。比丘知覺せず、已りて樂を受けず、卽ち之を却け、已りて女人を打つ、比丘疑ふ。佛問うて言はく、『汝樂を受くるや不や』。答へて言はく、樂を受けず。佛言はく、汝犯さず、女人を打つは、突吉羅を得』。時に世尊、瞻婆國に在しき。比丘あり、阿蘭若處に至り晝日思惟して、繫念して前に在り、此の比丘は是れ阿羅漢あり、風患あり、男根起つ。時に賊女あり、強えて比丘と共に婬を行ず。比丘是くの如く語る『阿羅漢猶ほ欲ありて、男根起つや。諸

丘なり、浴室の中に、異比丘のために身を揩す。此の比丘の身軟かなり、異比丘卽ち欲心を生じ、便ち共に婬を行ず。彼れ樂を受けず、還出して彼れ疑ふ。佛言はく『汝樂を受くるや不や』。答へて言はく、『樂を受けず』。佛言はく、『汝は犯さず、彼の入るゝ者は犯す』。

爾の時世尊、舍衞國に在しき。比丘あり、晝日戸を闔さずして眠る、男根起つ。時に衆多の女人あり、僧房に詣りて觀看し、彼の比丘の屋に至り、比丘の仰眠して、男根の起つを見、見已りて慚愧し、疾々として出づ。諸の女人中に賊女ありて共に行く。賤女屋に至り、卽ち比丘の形上に於て婬を行ず。婬を行じ已りて、華鬘を以て男根の頭に繫けて去る。彼の比丘眠りて覺めず、覺め已りて、不淨の身を汚し、男根に華鬘あるを見、便ち是くの如きの念を作す。「乃ち不淨の身を汚すあり、男根に華鬘あり、將に女人ありて、我れに於て婬を行ずるなからんや」、疑ふ。佛問うて言はく、『汝覺するや不や』。答へて言はく、『覺せず』。佛言はく、『犯すことなし、而も晝日戸を闔さずして眠るべからず』。時に舍衞國に比丘、比丘尼母子の、夏安居するあり、母子數々相見、既に數ば相見て、倶に欲心を生ず。母、兒に語つて言はく、『汝此れより出づ、今還つて此に入る、無犯なるを得べし』。兒卽ち母の言の如くす、彼れ疑ふ。佛言はく、『波羅夷』。時に比丘あり、死女人の上に於て婬を行ず、彼れ疑ふ。佛言はく、『波羅夷、若しは多く壞せざれば波羅夷、若しは半ば壞すれば偸蘭遮、若しは多壞し、若しは一切壞すれば偸蘭遮、若し骨間は偸蘭遮』。爾の時蘇卑優婆私、比丘に語りて言はく、『男根も女根も、倶に遮して婬を行ずれば、無犯を得べし』。比丘卽ち是の如くにして、婬を行じ已りて疑ふ。佛言はく、『汝羅夷』。時に蘇摩優婆私あり、比丘に語りて言はく、『汝我れと共に婬を行に於て精を出せば、犯なることを得べし』。卽ち是の如くにして、婬を行じ已りて疑ふ。佛言はく、『汝波羅夷』。時に婬女あり、比丘に語りて言はく、『汝樹葉を以て男根を裹み婬を行ずれば、無犯なるを得べし』。卽ち言の如くにして婬を行じ、已りて疑ふ。佛言はく、『汝波羅夷』。爾の時比丘、塚間に

此の比丘を喚んで、共に不淨を行ず。彼れ是の念を作す、「我れ向きに他の肉を持つて來り、已りて波羅夷を犯す、即ち此の女人と共に不淨を行ず」。諸の比丘是の念を作さく、「彼の比丘、前を犯すとせんや。後を犯すとせんや」。佛言はく、『前は犯すなし、後は犯す、而も是くの如き肉を受くべからず』。時に比丘あり、狗の口中に於て婬を行ず、彼に疑ふ。佛言はく、『波羅夷』。時に比丘あり、衣を褰げて小便す。狗あり小便を舐め、漸を以て前んで男根を含む、彼れ樂を受けず、即ち還出して便ち疑ふ。佛向うて言はく、『比丘、汝樂を受くるや不や』。答へて言はく、『樂を受けず』。佛言はく、『犯さず』。時に比丘あり、衣を褰げて小便す、狗あり小便を舐め、復前んで男根含む、彼れ樂を受け已りて、還出して疑ふ。佛向うて言はく、『汝樂を受くるや不や』。答つて言はく、『樂を受く』。佛言はく、『汝は波羅夷』。時に比丘あり、衣を褰げて伊羅婆提河を渡る。魚あり、男根を含む。彼れ樂を受けず、還出して疑ふ。佛問うて言く、『汝樂を受くるや不や』。答へて言はく、『樂を受けず』。佛言はく、『犯さず』。時に比丘あり、衣を褰げて伊羅婆提河を渡る。魚あり、男根を含む、彼れ樂を受く、還出して疑ふ。佛問うて言はく、『汝樂を受くるや不や』。答へて言はく、『樂を受く』。佛言はく、『汝波羅夷』。時に比丘あり、大小便道の中間に婬を行じ、彼に疑ふ。佛言はく、『偸蘭遮。膞中曲脚の間[四]、胸邊の乳の間、腋下、耳鼻の中、瘡孔の中、繩床、木床の間、大小褥の間、枕邊に在り、地泥摶の間、若持の口の中に在り、若しは道想、若しは疑ふ、一切偸蘭遮なり』。爾の時乞食の比丘あり、晨朝に衣を著け鉢を持ち、白衣の家に往く。童女あり、門內に在り、仰臥して睡る。彼れ是の念を作す、「我れ若し男根婬犯して、入るれば便ち波羅夷なり」、即ち足の大指を以て、彼の女根の中に入れ、疑ふ。佛言く、『偸殘』。時に比丘あり、欠口す[五]。異比丘あり、男根を以て口中に入る。彼れ樂を受けず、之を出して疑ふ。佛問うて言はく、『汝樂を受くるや不や』。答へて言はく、『樂を受けず』。佛言はく、『汝は犯さず、入るゝ者は犯す、自今已去、若し欠口の時は、應さに手を以て口を障ふべし』。時に比

【四】膞中曲脚の膞につき、音義には、「脚曲膞也」といひ、これは脚曲の膞で、「渠也」ともある。脚を曲げて出來た、膝の裏のくぼんだところである。音義に、「膞字未ㇾ詳ニ何出一　應ニ俗字一耳」ともある。

【五】欠口は、あくびのこと。

於て、大小便道、口中に婬を行ず、彼れ眠りて覺めず、覺めて乃ち知り、樂を受く。佛言はく『汝樂を受くるや不や』。答へて言はく『樂を受く』。佛言はく『二俱に犯す』。時に蓮華色比丘尼、晝日戸を闔さずして眠る。賊屋に入り、婬を行じ已りて去る。彼れ眠りて覺めず、覺め已りて不淨の身を汚すを見、彼れ是の念を作す「我が身に不淨の汚れあり、將た人あり、我れを婬犯するなからんや」、彼れ疑ふ。佛言はく『犯さず、比丘尼は、晝日戸を闔さずして眠るべからず』。爾の時難陀比丘尼あり、晝日華樹下、衆人の戲るゝ處に在り、賊あり捉へて婬犯す、彼れ疑ふ。佛言はく『汝難陀、樂を受くるや不や』。答へて言はく『大德、熱鐵の體に入るに如似す』。佛言はく『無犯、比丘尼は、是くの如き處に住まるべからず』。爾の時乞食の比丘あり、晨朝に衣を著け、鉢を持ち、白衣の家に至る。彼れの門下に小狗子を繫ぐ、比丘を見て便ち聲を作す、比丘慈愍し、解いて放ち去らしむ。比丘復餘處に行く、故二見て喚んで共に不淨を行ず。彼れ是の念を作す「我れ他の狗子を放ちて去らしめ、已りて波羅夷を犯す、便ち故二と共に不淨を行ず」。諸の比丘是くの如きの念を作す「此の比丘前を犯すとせんや、後を犯すとせんや」。佛言はく『前は犯さず、後は犯す、而も他の狗子を放ちて去らしむべからず』。時に比丘あり、晨朝に衣を著け、鉢を持ち白衣の家に往き、豚子の水中に溺るゝを見る、比丘を見て便ち聲を作す。比丘慈愍し、即ち出して放ち去らしむ。復餘處に往き、故私通女人と、喚んで共に不淨を行ず。彼れ是の念を作す「我れ他の豚子を放ち去らしめ、已りて波羅夷を犯す、便ち共に不淨を行ず」。餘の比丘是の念を作さく「此の比丘、前を犯すとせんや、後を犯すとせんや」。佛言はく『前は犯さず、後は犯す、而も是くの如き事を作すべからず』。時に異女人あり、屠牛處に往き、肉を買ひ持ちて行く。鵄鳥あり、其の肉を抄撮して空中に在り、乞食比丘の鉢中に失墮す。彼の女人之を見て、即ち語りて言はく『大德此れは是れ我が肉なり、持ち去ること莫れ』。比丘答へて言はく『我が鉢中に墮つ、汝が肉にあらず、持ち去りて還らず。前に行いて婬女を見る、

惡沙彌、惡阿蘭若あり、比丘尼、沙彌尼、式叉摩那を捉へて、大小便道、口中に婬を行ず。彼れ樂を受け、還出して疑ふ。佛言はく『汝樂を受くるや不や』。答へて言はく『樂を受く』。佛言はく『二俱に犯す』。時に惡比丘、惡沙彌、惡阿蘭若あり、比丘を捉へて、大便道、口中に婬を行ず。彼れ樂を受けず、佛言はく『汝比丘樂を受くるや不や』。答へて言はく、『樂を受けず』。佛言はく『汝は犯さず、彼れは犯す』。時に惡比丘、惡沙彌、惡阿蘭若あり、比丘尼、式叉摩那、沙彌、沙彌尼を捉へ、大小便道、口中に婬を行ず、彼れ樂を受けず、還出して疑ふ。佛言はく『汝沙彌尼樂を受くるや不や』。答へて言はく『樂を受けず』。佛言はく『汝は犯さず。彼れは犯す』。時に惡比丘、惡沙彌、惡阿蘭若あり、眠比丘を捉へ、大便道、口中に婬を行ず、彼れ眠りて覺せず、覺むる時も亦知らず、彼れ疑ふ。佛問うて言はく『汝覺するや不や』。答へて言はく『覺せず』。佛言はく『汝は犯さず、彼れは犯す』。時に惡比丘、惡沙彌、惡阿蘭若あり、眠比丘尼、式叉摩那、沙彌、沙彌尼を捉へ、大小便道、口中に婬を行ず。彼れ眠りて覺せず、覺する時も亦知らず、彼れ疑ふ。佛問うて言はく『汝覺するや不や』。答へて言はく『覺せず』。佛言はく『汝沙彌尼は犯さず、彼れは犯す』。時に惡比丘、惡沙彌、惡阿蘭若あり、眠比丘に於て、大便道、口中に婬行ず、彼眠り覺めて樂を受けず、還出して彼れ疑ふ。佛言はく『汝樂を受くるや不や』。答へて言はく『樂を受けず』。佛言はく『汝犯さず、入るゝ者は犯す』。時に惡比丘、惡沙彌、惡阿蘭若あり、眠比丘尼式叉摩那、沙彌、沙彌尼に於て、大小便道、口中に婬を行ず、彼れ眠りて覺めず、覺め已りて樂を受けず、疑ふ。佛言はく『汝樂を受くるや不や』。答へて言はく『樂を受けず』。佛言はく『汝は犯さず、彼の入るゝ者は犯す』。時に惡比丘、惡沙彌、惡阿蘭若あり、眠比丘に於て、大便道、口中に婬を行じ、彼れ眠りて覺めず、覺め已りて知り、樂を受く、還出して疑ふ。佛言はく『汝樂を受くるや不や』。答へて言はく『受く』。佛言はく『二俱に犯す』。時に惡比丘、惡沙彌、惡阿蘭若あり、眠比丘尼、式叉摩那、沙彌、沙彌尼に

れ婬を行ずるも無犯なり」。卽ち婬を行じて疑ふ。佛言はく、『汝波羅夷を犯す』。時に比丘あり是の念を作す。「我れ眠女人と婬を行ず、彼れ樂を覺せず、無犯なることを得ん」。卽ち婬を行じて疑ふ。佛言はく、『汝波羅夷を犯す』。時に比丘あり。是の念を作す。「醉女人と婬を行ずるに、彼れ樂を覺せず、無犯なることを得ん」。卽ち共に婬を行じて疑ふ。佛言はく、『汝は波羅夷』と。時に比丘あり、是の念を作す、「我れ顚狂女人と婬を行ずるに彼れ樂を覺せず、無犯なることを得ん」。卽ち婬を行じて疑ふ。『汝波羅夷』。時に比丘あり、此の念を作す。「我れ瞋恚女人と共に婬を行ぜんに、彼れ樂を受けず、無犯なることを得ん」。卽ち婬を行じて疑ふ。佛言はく、『汝波羅夷』。時に比丘あり、是の念を作す。「我れ苦痛女人と共に婬を行ぜんに、彼れ樂を受けず、無犯なるを得ん』。卽ち婬を行じて疑ふ。佛言はく、『汝波羅夷』。時に比丘あり、是の念を作す、「我れ身根の壞せる女人と共に婬を行ぜんに、彼れ樂を覺せず、無犯を得ん」。卽ち婬を行じて疑ふ。佛言はく、『汝波羅夷』。時に比丘あり、是の念を作す。「我れ強えて女人を捉へ、共に婬を行ぜんに、彼れ樂を受けず、無犯を得ん」。卽ち婬を行じて疑ふ。佛言はく、『汝波羅夷』。時に比丘あり、是の念を作す、「我れ男子を捉へて婬を行ぜんに、彼れ樂を受けず、無犯を得ん」。卽ち婬を行ず。佛言はく、『汝波羅夷』。時に女人あり、強えて比丘を捉へて婬を行ず、比丘樂を受けず、還出して彼れ疑ふ。佛言はく、『比丘、汝樂を受くるや不や』。答へて言はく、『樂を受けず』。佛言はく、『汝犯さず』。時に黃門あり、強えて比丘を捉へて共に婬を行じ、疑ふ。佛言はく、『比丘』、汝樂を受くるや不や』。答へて言はく、『受けず』。佛言はく、『汝犯さず』。時に男子あり、強えて比丘を捉へて共に婬を行ず。彼れ樂を受けず、還出して疑ふ。佛言はく、『比丘、汝樂を受くるや不や』。答へて言はく、『樂を受けず』。佛言はく、『汝犯さず』。時に惡比丘、惡沙彌、惡阿蘭若あり、比丘を捉へて、大便道、若しは口中に婬を行ず、彼れ身に樂を受け、還出して疑ふ。佛言はく、『汝樂を受くるや不や』。答へて言はく、『樂を受く』。佛言はく、『二倶に波羅夷』。時に惡比丘、

となからんや』。佛言はく、『犯す』。時に比丘あり、藍婆那と字づく。男根長し、持つて大便道中に入る、彼れ疑ふ、『我れ將た波羅夷を犯さゞるや』。佛言はく、『犯す』。時に比丘あり、男根起つ、異比丘即ち持つて自ら口中に內る、此の比丘以て樂と爲さず、即ち却けて受けず。疑を生ず『我れ將た波羅夷を犯すなからんや』。佛言はく、『汝は犯さず、彼の比丘は犯す』。時に乞食比丘あり、晨朝に衣を著け、鉢を持ち、白衣の家に至る。白衣の家に、小兒ありて眠る。男根起つ、比丘即ち持つて自ら口中に內れ、已りて疑ふ、『我れ將た波羅夷を犯すなからんや』。佛言はく、『犯す』。時に比丘あり、餘の比丘を捉へ、共に婬を行ず、彼れ疑ふ、『我れ將た波羅夷を犯すなからんや』。佛問うて言はく、『汝樂を受くるや不や』。答へて言はく、『受く』。佛言はく、『二俱に波羅夷』。時に比丘あり、沙彌と俱に婬を行ず、疑ふらくは『我れ將た犯すなからんや』。佛言はく、『汝沙彌樂を受くるや不や』。答へて言はく『受く』。佛言はく、『二俱に犯す』。時に沙彌あり、大比丘を捉へて共に婬を行ず、疑ふ。佛言はく、『比丘、汝樂を受くるや不や』。答へて言はく、『受く』。佛言はく、『二俱に犯す』。時に沙彌あり、沙彌と共に婬を行ず、疑ふ。佛言はく、『汝樂を受くるや不や』。答へて言はく、『受く』。佛言はく、『二俱に犯す』。時に比丘あり、強えて比丘と共に婬を行ず、樂を受けず、[三]還出して彼れ疑ふ。佛言はく、『汝樂を受くるや不や』。答へて言はく、『受けず』。佛言はく、『汝無犯なり、入るゝものは犯す』。時に比丘あり、強えて沙彌を捉へて婬を行ず、樂を受けず、還出して彼れ疑ふ。佛言はく、『沙彌樂を受くるや不や』。答へて言はく、『受けず』。佛言はく、『汝犯さず、入るゝ者は犯す』。時に沙彌あり、強えて沙彌を捉へて婬を行ず、樂を受けず、還出して疑ふ。佛言はく、『汝沙彌、樂を受くるや不や』。答へて言はく、『樂を受けず』。佛言はく、『汝犯さず、入るゝ者は犯す』。時に比丘あり、自身の根壞して所覺なし、彼れに觸れて、是の念を作す。『我れ觸を覺せず、婬を行ずるも無犯なることを得ん』。彼れ即ち婬を行じ已りて疑ふ。佛言はく、『汝波羅夷を犯す』。時に比丘あり、男根起たず。念じて言はく、『我

【三】還出は、入れし婬根を出すことで、所犯の人である、入るゝ者は、能犯の人である。

さに羯磨に堪能なる人を差し、上の如く是くの如きの白を作すべし。「大德僧聽け、此の難提比丘婬欲法を犯し、都べて覆藏心なし、今僧に從つて波羅夷戒を乞ふ、若し僧時到らば僧忍聽せよ、僧今難提比丘に、波羅夷戒を與ふることを、白すること是くの如し」。「大德僧聽け、此の難提比丘、婬欲の法を犯し、都べて覆藏心なし、今僧に從つて波羅夷戒を乞ふ、僧今難提比丘に波羅夷戒を與ふ、誰か長老、僧の難提比丘に、波羅夷戒を與ふることを忍する者は、默然せよ、誰か忍せざる者は說け」。是れは初羯磨なり、第二第三も是くの如く。說く僧已に難提比丘に波羅夷戒を與へ竟る。僧忍して默然するが故に、是の事是くの如く持つ。波羅夷戒を已らば、應さに隨順して行ずべし。是の中の隨順行の法とは、人に大戒を授け、及び人に依止を與ふべからず、沙彌を畜ふべからず、比丘尼を敎授するを受くべからず、設ひ差すとも、往いて敎ふべからず、僧の爲めに說戒すべからず、僧中に在りて、毘尼を問答すべからず、僧の差使を受けて、知事人と作るべからず、僧差を受けて、別處に斷事を平ぐべからず、僧差使命を受くべからず、早く聚落に入り、暮に逼りて還るべからず、應さに比丘に親附すべし、外道白衣に親附すべからず、應さに比丘法に隨順すべし、餘俗の語を說かざれ、更に此の罪を犯すべからず、餘も亦應ぜず、若しは相似たる、若しは此れより生ずる、若しは此れより重き者なり、非羯磨すべからず、非羯磨の者は、淸淨比丘の、敷座、洗足水、水器、革屣を拭ひ、身を揩摩し、及び禮拜し、迎送問訊を受くべからず、淸淨比丘の、衣鉢を捉持するを受くべからず、淸淨比丘を擧し、爲めに憶念を作し、自言を作すべからず、他の語を助くべからず、說戒、自恣すべからず、淸淨比丘と諍ふべからず、波羅夷戒比丘のために、僧の說戒及び羯磨の時、來るも來らざるも、無犯なり』。諸の比丘是くの如き語を作す『比丘波羅夷戒を與へ已りて、復重ねて犯さば、應さに更に波羅夷戒を與ふることを得べきや不や』。佛言はく、『爾すべからず、應さに滅擯すべし』。爾の時比丘あり、體軟弱なり、男根を以て口中に內れ、彼れ疑ふ、『將た波羅夷を犯すこ

威儀に非ず、沙門の法に非ず、淨行に非ず、隨順行に非ず、爲すべからざる所なり、云何ぞ乃ち獼猴と共に不淨を行ずる、入れば便ち波羅夷なり。癡人、共住すべからず』。爾の時優波離座より起ちて、偏へに右の肩を露はし、右膝地に著け、合掌して世尊に白して言さく、『大德、若し比丘、餘の畜生と不淨を行ずるは、波羅夷を犯すや不や』。佛言はく『犯す』。

爾の時世尊、王舍城に在しき。難提比丘ありて坐禪し、世俗心解脫を得、第四禪より覺め已りる、時に魔天女即ち前に在りて立つ。比丘捉へて犯さんと欲す、魔女便ち外に出づ。比丘亦隨つて外に出づ、彼れ屋の欄外に出づ、比丘亦隨つて屋の欄外に出づ、彼れ中庭に出づ、比丘も亦隨つて中庭に出づ、彼れ寺外に出づ、比丘も亦寺外に出づ、寺外に死[二]騲馬あり、彼れ死馬の處に於て便ち滅して、天形現はれず。時に難提比丘、便ち死馬の形に於て、不淨行を行ず、不淨を行じ已りて、都べて覆藏心あることなし、即ち是の念を作さく、『世尊は諸の比丘の爲めに戒を制したまひ、不淨行を行ずることを得ず、若し不淨を行ずれば、波羅夷不共住なりと、而も我れ今不淨を行ず、都べて覆藏心あることなし、將た波羅夷を犯すなからんや、我れ當さに云何がすべき』。即ち同伴の比丘に語る。『世尊、諸の比丘の爲めに戒を制したまひ、若し比丘不淨を行ずれば、波羅夷不共住を得』と、而も我れ今不淨を犯す、都べて覆藏心なし、將た波羅夷を犯すことなからんや、善い哉長老、我が爲めに佛に白せ、佛の所敎に隨つて、我れ當さに奉行すべし』。時に諸の比丘、佛の所に往き、頭面に禮を作し、却いて一面に坐し、此の因緣を以て具さに世尊に白す。世尊爾の時、此の因緣を以て比丘僧を集め、告げて言はく、『今僧、難提比丘に波羅夷戒を與へ、白四羯磨して是くの如く與ふ。彼の比丘僧中に往き、革屣を脫し、偏へに右の肩を露はし、右膝地に著け、合掌して是くの如きの白を作す。『大德僧聽け、我が難提比丘、婬欲の法を犯し、都べて覆藏心なし、今僧に從つて波羅夷戒を乞ふ、願はくは僧慈愍の故に、我れに波羅夷戒を與へよ』。是くの如し第二第三も說く。衆中應

【二】騲は字書に「牝畜之通稱」とある、こゝでは牝馬の死屍である。

合掌して世尊に白して言さく、『是の道を道想と作すは、犯すと爲さんや不や』。佛言はく、『波羅夷』。復問ふ、『是の道を疑はゞ、是れ犯すや不や』。佛言はく『波羅夷』。復問ふ、『是の道を非道想す、是れ犯すや不や』。佛言はく、『波羅夷』。復問ふ、『非道を道想す、是れ犯すや不や』。佛言はく『偸蘭遮』。復問ふ『非道を疑ふは、是れ犯すや不や』。佛言はく、『偸蘭遮』。復問ふ、『是の男を女想を作し、不淨を行ず。是れ犯すや不や』。佛言はく『波羅夷』。復問ふ。『是の女を男想を作して不淨を行ず、是れ犯すや不や』。佛言はく『波羅夷』、復問ふ『此の女人と通じ、女人想を作して共に不淨行を行ず、是れ犯すや不や』。佛言はく『波羅夷』、『此の男に於て、彼の男想を作して共に不淨を行ず、是れ犯すや不や』。佛言はく『波羅夷』。時に比丘あり、女象と不淨を行ず。彼れ疑ふ『是れ波羅夷を犯すや不や』。佛言はく、『犯す。是くの如く、牸牛馬駝鹿驢羊猪狗鴈孔雀雞、是くの如き一切は、盡く波羅夷なり』。

爾の時世尊、毘舍離に在しき。時に一乞食の比丘あり、林間に在りて住す。雌獼猴あり、林間を行く。此の比丘人間に出でて乞食し、持つて林中に還りて食ふ、餘食あれば、此の獼猴に與ふ。獼猴遂に便ち親近隨逐す、東西乃至手捉して去らず。時に比丘、卽ち共に不淨を行ず。時に衆多比丘、房舍臥具を按行し、次いで彼の林中に至る。彼の獼猴來りて、諸の比丘の前に在りて住し、尾を擧げ相を現はす。彼の諸の比丘、是くの如きの念を作す。『此の雌獼猴、今我等の前に在りて、相を現はすこと是くの如し、餘の比丘の、將た此の獼猴を犯すあるなからんや』。卽ち隱れて屏處に在りて之を伺ふ。時に乞食比丘、食を持て林中に還り、食し已りて、餘花を持つて獼猴に與ふ。獼猴食し已りて共に不淨を行ず。彼の諸の比丘觀見し、卽ち問うて言はく『長老、佛は比丘の不淨を行ずるを得ざるを制せざるや』。彼れ答へて言はく『佛は人女を制したまふ、畜生を制したまはず』。時に諸の比丘、佛所に往き、頭面に足を禮して、却いて一面に坐し、此の因緣を以て具さに世尊に白す。世尊爾の時、此の因緣を以て比丘僧を集め、彼の乞食比丘を呵責して言はく、『汝の所爲は非なり、

【一】 道は、女子陰部のこと、卽ち婬道、婬道を婬道と知りて婬を行ずるは、道を道想するといふ、道を果して道か非道かと疑つて、婬を行ずるは、道を疑ふと言ふ、以下準じて知るべし。

卷の第五十五（第四分の六）

調部の一

爾の時、世尊毘舍離に在しき。時優波離、卽ち座より起ち、偏へに右の肩を露はし、右膝地に著け、合掌して佛に白して言さく『須提那迦蘭陀子、故二と不淨行を行ず、是れ波羅夷を犯すや不や』。佛言はく『優波離、最初は未だ戒を制せず、不犯なり』。爾の時婆闍子比丘、愁憂して樂まず、淨行を樂まず、卽ち家に還りて、故二と不淨を行ず。彼れ是の念を作さく『世尊諸の比丘の爲めに戒を制したまふ、若し比丘不淨行を犯し、婬欲の法を行ずれば波羅夷不共住を得と。我れ愁憂して樂まず、淨行を樂まず故二と不淨を行ず、我れ波羅夷を犯さゞるなからんとするや』。云何せんを知らず、卽ち同伴の比丘に語る『世尊諸の比丘の爲めに戒を制したまふ、若し比丘不淨行を犯し、婬欲の法を行ずれば、波羅夷不共住を得と。而も我れ愁憂して樂まず、淨行を樂まず、家に還りて故二と不淨を行ず、我れ波羅夷を犯さゞる無からんとするや、善い哉長老、我が爲めに佛に白すべし、佛の所敎に隨つて、我れ當さに奉行すべし、我れ若し復佛法の中に於て、淨行を修するを得ることを得んには、我れ當さに之を行ずべし』。時に彼の比丘、卽ち佛所に往き、頭面に禮足して、却いて一面に坐し、此の因緣を以て具さに世尊に白す。世尊爾の時此の因緣を以て比丘僧を集め、無數に方便して婆闍子比丘を呵責して言はく『汝の所爲は非なり、威儀に非ず、沙門の法に非ず、淨行に非ず、隨順行に非ず爲すべからざる所なり、云何ぞ癡人、淨行を樂まずして、家に還りて、故二と不淨行を行ずる、入れば便ち波羅夷不共住を犯す。若し餘の比丘あり、愁憂して樂まず、淨行を樂まさる者は、捨戒して去ることを聽す。若し復佛法に於て、淸淨行を修せんと欲する者は、還た出家して、大戒を受くることを聽す』。爾の時優波離座より起ちて、偏へに右の肩を袒ぎ、右膝地に著け、

して食す、是の故に制す。此れは是れ第一事、非法非毘尼にして非佛所教なり。僧中に於て撿挍し已り、一舍羅を下す』。是くの如く一一に撿挍し、乃至十事なり、非法非毘尼非佛所教なり、僧中に於て撿挍し已ると、皆舍羅を下す。毘舍離に在る七百阿羅漢の、集まりて法毘尼を論ず、故に七百集法毘尼と名づく。

四分律卷第五十四

丘僧を集む、是くの如く、諸の上座皆集まる。時に一切去上座卽ち白を作す『大德僧聽け、若し僧時到らば僧忍聽せよ、今僧法毘尼を論ず、白すること是くの如し』。時に離婆多卽ち白を作す『大德僧聽け、若し僧時到らば僧忍聽せよ、僧今一切去上座に法毘尼を問ふ、白すること是くの如し』。時に上座一切去卽ち復白を作す『大德僧聽け、若し僧時到らば僧忍聽せよ。僧今離婆多をして我れに問はしめ、法毘尼を答へしむ、白すること是くの如し』。離婆多問うて言はく『大德上座、二指淨なることを得るや不や』。卽ち還た問うて言はく『云何が二指は淨なる』。答へて言はく『大德長老、足食已りて威儀を捨て、二指抄食して食するを得るや』。答へて言はく、『爾すべからず』。問うて言はく、『何處に在りて制する』。答へて言はく、『舍衞國に在り、餘食法を作さずして食ふ、是れを以ての故に制したまふ、此れは是れ第一事、非法にして毘尼に非ず、佛の所教に非ず、別處に平宜し已る、一舍羅を下す』。是くの如く一一に撿挍し、乃至十事、非法非毘尼非佛所教と、皆舍羅を下す。彼の諸の長老是の語を作す『我等の如き、今別處に於て、此の事を平宜し已る、今復僧中に於て是くの如く撿挍せんと欲す、何を以ての故に、衆人をして皆知らしむるが故に』。彼の諸の長老、皆毘舍離に往く。時に一切去上座、卽ち比丘僧を集め已りて白を作す『大德僧聽け、若し僧時到らば僧忍聽せよ、僧今法毘尼を論ず、白すること是くの如し』。長老離婆多卽ち白を作す『大德僧聽け、若し僧時到らば僧忍聽せよ、僧今一切去上座に法毘尼を問ふ、白すること是くの如し』。時に一切去上座、卽ち白を作す『大德僧聽け、若し僧時到らば僧忍聽せよ、僧今離婆多をして、法毘尼を問ひ、我れをして答へしむ、白すること是くの如し』。離婆多卽ち問うて言はく『大德長老、二指は淨なることを得るや不や』。彼れ問うて言はく『云何が二指は淨なることを得るや』。答へて言はく『大德長老、足食已りて威儀を捨て、餘食法を作さずして、二指抄食して食することを得るや』。答へて言はく『爾すべからず』。問うて言はく『何處に在りて制する』、答へて言はく『舍衞國に在り、餘食法を作さず

しむべし」。彼れ問うて言はく、『大徳長老、二指抄食を得るや不や』。問うて言はく、『云何が二指抄食を得る』。答へて言はく、『大徳、足食已りて威儀を捨て、餘食法を作さずして、二指抄食して食することを得るや』。答へて言はく、『爾すべからず』。問うて言はく、『何の處に至りて制する』。答へて言はく、『舍衞國に在り、餘食法を作さずして食ふ、是れを以ての故に制す』。是くの如く一々に説く、乃至布薩の時、金銀を受取し、物を人分に分たしむ、上に説くが如し。彼れ即ち言はく、『餘人に語ること勿れ、恐らくは人心同じからず、和合することを得ざらん』。一切去上座を第一上座と爲し、三浮陀は第二上座、離婆多は第三上座、婆搜村は是れ第四上座なり、阿難は皆其の和尚たり。時に長老一切去、僧事を知る。時に上座即ち白を作す『大徳僧聽け、若し僧時到らば僧忍聽せよ、今僧法毘尼を論ず、白すること是くの如し』。時に波夷那比丘、波梨比丘に語りて言はく、『汝等今平當人を出すべし』。彼れ即ち言はく、『上座一切去・離婆多・耶舍・蘇曼那・是れ平當人なり』。波梨比丘、波夷那比丘に語りて言はく、『汝等亦應さに平當人を出すべし』。彼れ即ち言はく『長老三浮陀・婆搜村・長老・沙留・不闍蘇摩是れ平當人なり』。此の中に阿夷頭比丘あり、勸化に堪任す。彼の諸の比丘言はく、『此の比丘を持つて數中に在かん、何を以ての故に、彼れ所處に在りて、當さに我等がために勸化すべし』。即ち數中に著く。彼の諸の上座是の念を作さく、「我等若し衆中に在りて此の事を問はゞ、恐らくは更に餘の諍事を生じ、誰の語は是、誰の語は非なるを知らざらん、我等今寧ろ差次して別處に在り、共に平論すべきか』。彼の諸の長老、是の念を作さく、「我等何の剃處に於て、此の事を平宜すべき」。即ち言はく、『當さに婆梨林中に於てすべし』。時に一切去長老即ち白を作す『大徳僧聽け、此くの如く僧所擧の比丘たり、若し僧時到らば僧忍聽せよ、婆梨林中に於て、法毘尼を論ずるに、餘の比丘は中に在らず、白すること是くの如し』。是くの如く白を作し已りて、應さに羯磨して二三比丘を差すべし、餘の比丘を取りて、婆梨林中に至らんと欲す。時に一切去上座、此の因縁を以て比

遺はすを怖畏するか』。答へて言はく『我が供養を受けず、云何ぞ畏れざらん』。時に離婆多及び諸の比丘、是くの如く語る『我等今當さに諍所起の處に往くべし』。卽ち船に乘じ、恒水の中より往く。時に天熱くして疲極す、船を住めて、岸邊の蔭下に在りて息ふ。時に婆搜村に長老あり、道に在りて行き、是くの如きの念を作す。「我れ今此の諍事、當さに修多羅毘尼を觀、誰か法語、誰か非法語なるかを知るべし」。彼れ卽ち修多羅毘尼を觀、法律を檢挍し、便ち波梨國の比丘は是れ法語、波夷那の比丘は非法語なることを知る。時に天あり、身を現ぜずして讃して言はく『善い哉善男子、汝の所觀の如し、波梨の比丘は如法語にして、波夷那の比丘は非法語なり』。時に諸の長老、卽ち共に毘舍離に往く。毘舍離に長老あり、一切去と字づく、是の閻浮提中の最上座なり。時に三浮陀、離婆多に語つて言はく『今一切去上座の屋中に往いて宿し、具さに此の事を說いて、其れをして聞くことを得しめん』。時に二人卽ち共に相隨ひ、往いて彼の屋に至る。時に一切去長老、夜坐禪思惟し、夜已に久し。離婆多是の念を作さく、「此の上座年已に老い、氣力羸劣なり、而も久しく坐すること是くの如し、況んや我れ當さに是くの如きの坐を作さゞるべけんや」。時に離婆多卽ち坐して思惟し、夜久しきに至る。一切去長老是の念を作さく、「此の客比丘、遠くより來りて疲極す、猶ほ故ほ坐禪思惟すること是くの如し、況んや我れにして久しく坐せざらんや」。時に彼の長老、卽ち復久しく坐して思惟す。夜已に多くを過ぎ、離婆多に語りて言はく『長老、汝此の夜何の法をか思惟する』。答へて言はく『我れ先きに白衣の時、嘗て慈心を習ふ、此の夜思惟して慈三昧に入る』。彼れ卽ち言はく『汝此の夜小定に入る、何を以ての故に、慈心三昧は是れ小定なり』。卽ち復問うて言はく『大德一切去、此の夜、何の法をか思惟する』。答へて言はく『我れ先きに白衣の時空法を習ふ、我れ此の夜空三昧に入る』。彼れ言はく『大德、此の夜大人の法を思惟す、何を以ての故に、大人の法は空三昧に入る』。彼れ是の念を作さく、「今正さに是れ時なり、先きの因緣を說いて、其れをして知るを得

衆僧に金銀を施さしめ、物を人分に分たしむ』。彼れ言はく、『汝餘人に語ること莫れ、何を以ての故に、恐らくは諸の比丘、見るところ同じからずして、和合比丘に與せず。汝阿吁恒河山中に往くべし、彼處に三浮陀比丘あり、是れ我が同和上なり、六十の波羅離子比丘と共に住せり、彼れ皆勇猛精進にして、無所畏を度す。此の因緣を以て、具さに彼れが爲めに說き已りて、共に期せよ、婆呵河邊の我れも、亦當さに往くべし』。時に耶舍伽那子比丘、即ち彼の山中に往き、三浮陀の所に至り、此の因緣を以て、具さに彼れに向つて說く、『婆呵河邊の大德離婆多も、亦當さに來るべきを期す』と。時に毘舍離の婆闍子比丘、耶舍子伽那子の人間に往き、伴黨を求索すと聞き、彼れ即ち大に毘舍離の好衣を持つて、離婆多の弟子の所に往き、語りて言はく、『我れ大德離婆多の爲めの故に、此の好衣を持つて來り與ふ、今止めんには復與へず、即ち廻して汝に與ふ、取るべし』と。彼れ言はく、『止めよ止めよ、我れ受れず』。彼れ復慇懃に逼りて受けしむ。彼れ遂に便ち受く。既に受け已りて是の言を作す。『長老、彼の波夷那、波梨二國の比丘共に諍ふ、世尊は出でて波夷那國に在せり、善い哉、長老、能く我が爲めに大德上座に白せ、波夷那、波梨二國の比丘共に諍ふ、世尊は出でて波夷那國に在せり、善い哉大德、當さに波夷那比丘を助くべし』。彼れ即ち答へて言はく、『大德長老、離婆多尊重、我れ難し敢て言はず』。彼れ即ち強えて之を逼りて已まず。便ち離婆多の所に往き、是くの如きの言を白す、『大德、彼の波夷那と波梨との二國の比丘共に諍ふ。世尊は出でて波夷那に在せり、願はくは大德、彼の波夷那の比丘を助けよ』。彼れ即ち答へて言はく、『汝癡人、我れを持つて不淨部中に在く、汝去れ、復汝を須ひず』。彼れ遣を得已りて、便ち毘舍離闍子比丘の所に往き、是くの如きの言を語る。『長老、我れ先きに語る、大德離婆多尊重、爲めに言ふべきこと難し、我れ語ること能はずと、今大に責めらる』。彼れ問うて言はく、『何等をか說く』。彼れ言はく、『已に我れを遣はす』。復問うて言はく、『汝幾臘ぞ』。答へて言はく、『十二歲』。問うて言はく、『汝十二歲、猶ほ故ほ

答へて言はく、『王舍城に住り、布薩犍度の中に制したまへり』。復問ふ、『常法を得るや不や』。還た問うて言はく、『云何が常法を得る』。答へて言はく、『大德長老、此に是れを作し已りて、是れ本來の所作と言ふ』。彼れ答へて言はく、『比丘知るや不や、應さに修多羅毘尼を觀、法律を檢校すべし、若し毘尼を觀ず、法律を檢校せず、法に違反するは、若しは已作も作すべからず、未作も亦作すべからず。若し修多羅毘尼を觀、法律を檢校し、修多羅と相應し、法律と相應し、本法に違はざれば、若しは已作、若しは未作、應さに作すべし』。復問うて言はく、『大德長老、和するを得るや不や』。彼れ還た問うて言はく、『云何が和するを得る』。答へて言はく、『大德長老、足食已りて、威儀を捨て、酥油蜜生酥石蜜酪を以て、一處に和して食することを得るや不や』。答へて言はく、『爾すべからず。』問うて言はく、『何處に在りて制する』。答へて言はく、『舍衞國に在り、餘食法を作さずして食す、是れを以ての故に制したまふ』。復問うて言はく、『大德長老、鹽と共宿するを得るや不や』。彼れ還た問うて言はく、『云何が鹽と共宿するを得る』。答へて言はく、『大德長老、共宿鹽を用つて、食中に著けて、食するを得るや』。答へて言はく、『爾すべからず』。問うて言はく、『何處に在りて制する』。答へて言はく、『舍衞國に在り、藥犍度の中に制したまふ』。復問うて言はく、『大德長老、闍樓羅酒を飮むを得るや不や』。答へて言はく、『爾すべからず』。問うて言はく、『何處に在りて制する』。答へて言はく、『拘睒彌國に在り、長老娑伽陀比丘に因りて制したまふ』。復問ふ、『大德長老、不割截坐具を畜ふることを得るや不や』。答へて言はく、『畜ふべからず』。問うて言はく、『何處に在りて制する』。答へて言はく』。舍衞國に在り、『六群比丘に因りて制したまふ』。復問ふ。『大德長老、金銀を受取するを得るや不や』。答へて言はく、『爾すべからず』。問うて言はく、『何處に在りて制する』。答へて言はく、『王舍城に在り、跋難陀釋子に因りて制したまふ』。彼れ言はく、『大德長老、毘舍離婆闍子比丘、此の十事を行じて言はく、淸淨如法なり、是れ佛の聽したまふ所なりと。彼れ檀越を勸めて、布薩の時に於て、

即ち答へて言はく、『聞く伽那慰闍國に在りと』。即ち彼の國に往く、既に至れば、離婆多復在らず。復問ふ『離婆多何處に在る』。答へて言はく、『阿伽樓羅國に在り』と。即ち彼の國に往く、而も復在らず。即ち問ふ『離婆多何處に在る』。答へて言はく、『僧伽賒國に在り』と。即ち復彼の國に往き、離婆多を見、衆僧の集まれるに値ふ。離婆多供養の弟子に問うて言はく、『汝の大德長老離婆多、衆僧の中に往くや不や』。答へて言はく、『當さに往くべし』。時に離婆多、集僧中に往き、說法を聽き已り、夜半後、尼師壇を取りて屋に還る。時に耶舍伽那子、亦僧中に在り、集まりて法を聽き已り、夜半後、尼師壇を捉り、離婆多の所に往く。彼れ是の念を作す、「今正に是れ時なり、當さに具さに先きの因緣を說き、其れをして聞くことを得しむべし」。彼れ即ち離婆多に問うて言はく、『大德上座、二指抄食を得るや不や』。彼れ還た問うて言はく、『云何が二指抄食』。答へて言はく、『大德長老、足食已りて威儀を捨て、餘食法を作さずして、二指にて食を抄して食するを得るや不や』。離婆多言はく、『爾すべからず』。問うて言はく、『何處に在りて制する』。答へて言はく、『舍衞國に在り、餘食法を作さずして食す、是れを以ての故に制す』。復問うて言はく、『大德長老、村間を得るや不や』。彼れ還た問うて言はく、『云何が村間を得る』。答へて言はく、『大德長老、足食已りて、威儀を捨て、餘食法を作さず、村中の間に往き、食を得るなり』。離婆多言はく、『爾すべからず』。問うて言はく、『何處に在りて制する』。答へて言はく、『舍衞國に在り、餘食法を作さずして食す、是の故を以て制す』。彼れ問うて言はく、『大德長老、寺內を得るや不や』。彼れ還た問うて言はく、『云何が寺內を得る』。答へて言はく、『大德長老、寺內に在りて別衆羯磨を得るなり』。離婆多言はく、『爾すべからず』。『何處に在りて制する』。答へて言はく、『王舍城に在り。布薩犍度の中に制したまふ』。『大德長老、後に聽可するを得るや不や』。還た問うて言はく、『云何が後に聽可するを得る』。答へて言はく、『大德長老、界內に在りて、別衆羯磨已りて、後に聽可す』。離婆多言はく、『爾すべからず』。問うて言はく、『何處に在りて制する』

飾好を捨てず、此れは是れ第三塵穢なり、或は沙門婆羅門あり、邪命を以て自治して除斷すること能はず、此れは是れ第四塵穢なり、是れを四事と爲す、此の四事を以ての故に、沙門婆羅門をして、汚穢して不明に、光顯あることなからしむ。世尊爾の時卽ち偈を說いて言はく、

貪欲の垢に汚さる〻　沙門婆羅門は　愚癡に覆蓋せられ　好色に愛著し　飮酒して心を散亂し
復愛欲の法を行じ　金寶瓔を受取す　此れを無智者と爲す　沙門婆羅門　邪命以て自ら治す
佛之を說いて結と爲す　日の雲翳を生ずるが如く　光顯成耀なし　不淨純垢に汚れ　盲冥の闇に閉ぢられ　愛奴に使はれ　惡不善業を造る　癡にして　何ぞ能く直を行ぜん　怨憎甚だ增益し　更に未來の身を受けん

是の故に離奢、此の因緣を以ての故に、汝等當さに知るべし、沙門釋子は、金銀を受取すべからず、飾好を除去せよ』と、我れ此の語を說く、『汝此の事を以て我れを信ぜざるや』。彼の離奢言はく、『我れ信ぜざるにあらず、我れ汝に信樂あり、汝此の毘舍離に住すべし、我れ當さに衣服飮食醫藥所須の物を供給すべし』。時に伽那子比丘、諸の離奢のために解說し、歡喜を得しめ已り、彼の使比丘と倶に、婆闍子比丘の所に還る。遙に伽那子比丘の來るを見、卽ち使比丘に問うて言はく、『伽那子比丘、已解喩して、諸離奢信ずることを得たりや』。答へて言はく、『爾り』、卽ち言はく、『彼れ已に伽那子を信樂し、我等を以て沙門釋子に非ずと作す』。婆闍子比丘問うて言はく、『何の故ぞや』。卽ち具さに先きの因緣を說く。彼の毘舍離比丘、伽那子比丘に語りて言はく、『汝先きに衆僧を罵る、罪を見るや不や』。答へて言はく、『我れ衆僧を罵らず』。彼れ卽ち和合して與めに擧を作す』。伽那子比丘是の念を作さく、『我が此の諍事は、若し長老離婆多[三]を得、我がために伴と作さば、便ち如法に滅することを得べし』。彼れ卽ち餘人に問うて言はく、『離婆多何處に在る』。彼れ卽ち答へて言はく、『聞く婆呵河の邊に在り』と。卽ち婆呵河邊に往く、離婆多在らず。彼れ卽ち問ふ、離婆多何處に在る。『彼れ

【三】離婆多(Revata)。

言を語る『汝實に我れを瞋るや』。我れ言はく、『沙門釋子は金銀を受取せず、珍寶を棄捨し、飾好を著けず』。優婆塞に語りて言はく、『世尊王舍城に在す時、王の宮中に王の群臣集まり、是くの如きの語を説く。「沙門釋子應さに金銀を受取することを得、珍寶を捨てず、飾好を著けざるに非るべし」と。時に彼の衆中に大長者あり、珠髻と字づく、諸の大臣に語りて言はく、「是の言を作すこと勿れ、沙門釋子金銀を受取し、珠寶を捨てず、飾好を著けざるに非ずと。何を以ての故に。沙門釋子は金銀を受取すべからず、珠寶を棄捨し、飾好を著けず」と。時に珠髻長者、諸の大臣の爲めに解説し、各解を得て歡喜を得しむ。 珠髻長者、後に異時に於て、世尊の所に往き、頭面に禮足して、却いて一面に坐し、先きの因緣を以て、具さに世尊に白して言はく、「我れ卽ち爲めに解説し、各歡喜せしむ」。世尊、我れ是の言を説く、聖旨を違失することなかんとするや、如法に敎へざるや。佛言はく、「長者、汝の所説の如し、如法なり如實なり、世尊の敎法に違はず、何を以ての故に、沙門釋子は、金銀を受取すべからず、珠寶を棄捨す、飾好を著けず、其れ金銀を受取する者あらば、則ち五欲を受く、若し五欲を受くれば、則ち沙門釋子の法に非ず。長者、汝若し沙門釋子の金銀を捉持するを見ば、決定して應さに知るべし、沙門の法に非ず、我れ是の説を作す、竹葦草木の爲めの故に、金銀を求乞することを聽す、終に自ら金銀を受取すべからず」。是の故に離奢、此の因緣を以て、沙門釋子は金銀を受取すべからず、珠寶を棄捨し、飾好を著けず、離奢、復異時に於て、世尊祇洹中に在し、諸の比丘に告げたまはく、「四事あるが故に、日月をして不明ならしむ、何等をか四と爲す、阿修羅の烟雲塵霧是れなり、四事の爲めに、日月をして不明ならしむ。是くの如く沙門婆羅門に亦四事の汚染塵穢あり、沙門婆羅門をして、光顯あることなからしむ。何等か四なる。或は沙門婆羅門あり、飲酒して除斷すること能はず、此れは是れ第一塵穢なり、或は沙門婆羅門あり、愛欲の法を行じて、捨離すること能はず、此れは是れ第二塵穢なり、或は沙門婆羅門あり、金銀を受取し、

皆餘食法を作さずして食ふことを得るを聽す』。大德迦葉答へて言はく、『實に汝の所說の如し、世尊穀貴の時、世の人民相食ひ、乞求するも得難し、比丘を慈愍するが故に、此の八事を聽したまふ、時に世還た豐熟して、飲食多饒なり、佛還た制して聽したまはず』。彼に復是の言を作す、『大德迦葉、世尊は是れ一切知見なり、制し已りて還た開し、開し已りて復制したまふべからず』。迦葉答へて言はく、『世尊は是れ一切知見なるを以ての故に、制し已りて還た開し、開し已りて復制したまふべし。富羅那、我等是くの如きの制を作す、是れ佛の制せざる所は、制すべからず、是れ佛の制したまふ所は、則ち却くべからず、佛制戒したまふ所の如く、應さに隨順して學すべし』。王舍城に在る五百の阿羅漢、共に法毘尼を集む、是の故に法毘尼を集むるに五百人ありと言ふ。

七百集法毘尼

爾の時世尊般涅槃したまひて百歲、毘舍離跋闍子比丘、十事を行じて言はく、『是の法淸淨、佛の聽したまふ所なり。應さに兩指抄食すべし、聚落の間に得、寺內に得、後に聽可す、常法を得、和得を、鹽と共宿するを得、闍樓羅酒を飮むことを得、不截坐具を畜ふることを得、金銀を受くることを得』。彼れ布薩の日に於て、檀越、金銀を布施し、而も共に之を分つ。時に耶舍伽那子あり、毘舍離の比丘の、是くの如き事を行ずるを聞き、卽ち跋闍子比丘の所に往き、檀越に勸め、布薩の時に、衆僧に金銀を布施せしむるを見る。僧中唱令し、伽那子比丘に與ふ。卽ち言はく、『我れ受けず、何を以ての故に、沙門釋子は、珠寶を捨棄し、飾好を著けず』。彼れ餘日に於て、分を作し已りて、送りて伽那子比丘に與ふ。伽那子比丘言はく、『我れ須ひず、我れ先きに言ふ、沙門釋子は珠寶を棄捨し、飾好を著けず』と。彼れ卽ち言はく、『毘舍離の優婆塞瞋る、汝往いて敎化して喜ばしめよ』と。時に卽ち使を差し、共に往く。耶舍伽那子比丘、毘舍離優婆塞の所に至り、是くの如きの

一處に集めて安居犍度と爲す。一切自恣法、一處に集めて自恣犍度と爲す。一切皮革法、一處に集めて皮革犍度と爲す。一切衣法、一處に集めて衣犍度と爲す。一切藥法、一處に集めて藥犍度と爲す。一切迦絺那衣法、一處に集めて迦絺那衣犍度と爲す。二律幷びに一切犍度、調部・毘尼增一、都べて集めて毘尼藏と爲す。時に大迦葉卽ち白を作す『大德僧聽け、若し僧時到らば僧忍聽せよ、僧今阿難に法毘尼を問ふ。白すること是くの如し』。時に阿難卽ち復白を作す『大德僧聽け、若し僧時到らば僧忍聽せよ、僧今大迦葉をして問ひ、我れをして答へしむ、白すること是くの如し』。大迦葉卽ち阿難に問うて言はく、『梵動經は何處に在りて說き、增一は何處に在りて說き、增十は何處に在つて說き、世界成敗經は何處に在つて說き、僧祇陀經は何處に在りて說き、大因緣經は何處に在つて說き、天帝釋問經は何處に在つて說きたる。阿難皆答ふ『長阿含に說くが如し、彼れ卽ち一切の長經を集めて長阿含と爲し、一切の中經を中阿含と爲し、一事より十事に至り、十事より十一事に至るを增一と爲し、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆私、諸天を雜え、帝釋を雜え、魔を雜え、梵王を雜えて、集めて雜阿含と爲す』。是くの如く、生經・本經・善因緣經・方等經・未曾有經・譬喩經・優婆提舍經・句義經・法句經・波羅延經・雜難經・聖偈經、是くの如きを集めて雜藏と爲す。有難無難繫相應作處を集めて阿毘曇藏と爲す、時に卽ち集めて三藏と爲す。時に長老富羅那、王舍城の五百の阿羅漢、共に法毘尼を集む、卽ち五百の比丘と倶なりと聞き、王舍城に往き、大迦葉の所に至り、是くの如きの言を語る『我れ聞く大德、五百の阿羅漢と共に、法毘尼を集むと、我れ亦豫りて是の次に在り、法を聞かんと欲す』。時に大迦葉、此の因緣を以て比丘僧を集め、此の比丘の爲めに更に優波離に問ひ、乃至集めて三藏と爲す、上に說く所の如し。彼れ言はく、『大德迦葉、我れ盡く此の事を認可す、唯八事を除く。大德、我れ親しく佛に從つて聞き、憶持して忘れず、佛、內宿・內煮・自煮・自取食・早起受食、彼れに從つて食を持ち來る、若しは雜菓、若しは池中所出の食すべき者、是くの如きは、

若し僧時到らば僧忍聽せよ、僧今上座大迦葉をして問ひ、我をして答へしむ、白すること是くの如し』。時に大迦葉即ち問うて言はく、『第一波羅夷本何處より起り、誰か先づ犯すや』。優波離答へて言はく、『毘舍離に在りて、須提那迦蘭陀子初めて犯す』。『第二は復何處に起る』、答へて言はく『王舍城に在り、陀尼伽比丘陶師子初めて犯す』。復問ふ。『第三は本何處に起る』。答へて言はく『毘舍離の婆裘河邊に在り、比丘初めて犯す』。『第四は本何處に起る』。答へて言はく、『毘舍離婆裘河邊に在り、比丘初めて犯す』。復問ふ、『第一僧殘は本何處に起る』。答へて言はく、『舍衛國に在り、迦留陀夷初めて犯す』。是くの如く展轉して、所起の處に隨ひ、初分の如く說く。復問ふ『第一不定法本何處に起る』。答へて言はく、『舍衛國に在り、迦留陀夷初めて犯す。第二も亦爾なり』。復問ふ、『尼薩耆本何處に起る』。答へて言はく、『舍衛國に在り、六群比丘初めて犯す』。是くの如く展轉して、亦初分の如く說く、復問ふ、『初波逸提は本何處に起る』。答へて言はく、『釋翅瘦象刀子比丘初めて犯す』。是くの如く展轉して、初分の如く說く。復問ふ、『波羅提々舍尼は本何處に起る』。答へて言はく、『舍衛國に在り、蓮華色比丘尼に因りて起る』。第二・第三・第四も初分の如く說く。復問ふ、『第一衆學法は本何處に起る』。答へて言はく、『舍衛國に在り、六群比丘初めて犯す。是くの如く展轉して、初分の如く說く。比丘尼の別戒は、律の所說の如し。復問ふ、最初に大戒を受くることを聽すは、本何處に起る』。答へて言はく、『波羅㮈の五比丘に在り』。復問ふ、『最初に說戒を聽すは、何處に在る』。答へて言はく、王舍城に在り、諸の少年比丘の爲めなり』。復問ふ、『初め安居を聽すは、本何處に起る』。答へて言はく、『舍衛國に在り、六群比丘に因りて起る』。復問ふ、『初め自恣の本は、何處に起る』。答へて言はく、『舍衛國に在り六群比丘に因りて起る』。是くの如く展轉して、乃ち毘尼增一に至る。時に彼れ即ち比丘を集めて一切事、幷びに一處に在りて比丘律と爲す。比丘尼事幷びに一處に在りて比丘尼律と爲す。一切受戒法一處に集めて受戒犍度と爲す。一切布薩法、一處に集めて布薩犍度と爲す。一切安居法、

葉復言はく、『汝佛の爲めに僧伽梨を縫ふや、脚にて躡んで縫へり、突吉羅罪を得、今應さに懺悔すべし』。阿難答へて言はく、『大德迦葉、我れ慢じて故作するにあらず、更に人の捉るなし。故に爾るのみ、我れ此れに於て、自ら罪あることを見ず、大德を信ずるが故に、今當さに懺悔すべし』。迦葉復言はく、『世尊涅槃を取りたまはんと欲し、三反汝に告ぐ、汝世尊に、住世若しは一劫、若し過一劫を請うて、無數の人をして利益を得、世間の諸天人民を慈愍し、安樂を得しめず、汝突吉羅罪を得、今應さに懺悔すべし』。阿難答へて言はく、『大德迦葉、我が故作にあらず、魔我が心にあり、我れをして、佛の住世を請はざらしむ、我れ此の中に於て、自ら罪あるを見ること能はず、大德を信ずるが故に、今當さに懺悔すべし』。迦葉復言はく、『世尊在せし時、汝に從つて水を索めたまひき、汝與へず、突吉羅を得、今應さに懺悔すべし』。阿難答へて言はく、『我が故作にあらず、時に五百の乘車あり、水中より過ぎ、其の水甚濁る、恐らくは世尊之を飮みたまひて患を作さん、是の故に與へず』。迦葉復言はく、『汝但應さに與ふべし、若しは佛の威神、或は復諸天能く水をして清淨ならしむ』。阿難言はく、『我れ此の中に於て、自ら罪あることを見ず、大德を信ずるが故に、今當さに懺悔すべし』。迦葉復言はく、『汝世尊に、何者か是れ雜碎戒なるやを問ひたてまつらず、突吉羅罪を得、今應さに懺悔すべし』。阿難言はく、『我が故作にあらず、時に我れ無賴の失を愁憂し、世尊に問ひたてまつらず、何者か是れ雜碎戒なると、我れ此の中に於て、自ら罪あることを見ず、大德を信ずるが故に、今當さに懺悔すべし』。迦葉復言はく、『汝女人を遮せず、佛足を汚さしむ、突吉羅罪を得今應さに懺悔すべし』。阿難答へて言はく、『我が故作にあらず、女人心軟かなり、佛足を禮する時、手に泣涙して佛足を汚す、我れ此の中に於て、自ら罪あることを見ず、大德を信ずるが故に、今當さに懺悔すべし』。時に大迦葉卽ち白を作して言はく、『大德僧聽け、若し僧時到らば僧忍聽せよ、僧今優波離に僧毘尼を問ふ、白すること是くの如し』。時に優波離卽ち白を作して言はく、『大德僧聽け、

集まりて法毘尼を論ず、白すること是くの如し。時に阿難卽ち座より起つて、偏へに右肩を露はし、右膝地に著け、合掌して大迦葉に白して言さく『我れ親しく佛に從つて聞き、佛語を憶持す、自今已去、諸の比丘の爲めに、雜碎戒を捨てん』。迦葉問うて言はく『阿難、汝世尊に問ひたてまつるや不や、何者か是れ雜碎戒』。阿難答へて言はく『時に我れ無賴の失を愁憂し、世尊に問ひたてまつらず、何者か是れ雜碎戒なりや』。時に諸の比丘皆言はく『來れ、我れ當さに汝に雜碎戒を語るべし』。中に或は言ふものあり、四波羅夷を除いて、餘は是れ雜碎戒なり。或は言ふものあり、四波羅夷十三事を除いて、餘は皆是れ雜碎戒なり。或は言ふものあり、四波羅夷・十三事・二不定法を除いて、餘は皆是れ雜碎戒なり。或は言ふものあり、四波羅夷・十三事・二不定法・三十事を除いて、餘は皆是れ雜碎戒なり。或は言ふものあり、四波羅夷乃至九十事を除いて、餘は皆是れ雜碎戒なり。時に大迦葉諸の比丘に告げて言はく『諸の長老、今衆人の言各不定なり、何者か是れ雜碎戒なるを知らず、自今已去、應さに共に制を立つべし、若し佛先きに制したまはざる所は、今制すべからず、佛先きに制したまふ所は、今卻くべからず、應さに佛の所制に隨つて學すべし』。時に卽ち共に、此くの如きの制限を立つ。

　大迦葉、阿難に語りて言はく『汝佛法の中に於て、先きに女人を度せんことを求む、突吉羅を得、今應さに懺悔すべし』。阿難答へて言はく『大德、此れ我が故作にあらず、摩訶波闍波提は、佛に於て大恩あり、佛母命過し、世尊を長養せり、大德迦葉、我れ今此れに於て自ら罪あることを見ず、大德を信ずるを以ての故に、今當さに懺悔すべし』。大迦葉復言はく『汝世尊をして、三友請はしめて、汝供養人と作る、而も作らずと言ふ、突吉羅罪を得、今當さに懺悔すべし』。阿難、迦葉に答へて言はく『我れ故作せず、佛の爲めに供養人と作ること難し、是の故に能はずと言ふのみ、我れ此の中に於て、自ら罪あることを見る能はず、大德を信ずるを以ての故に、今當さに懺悔すべし』。迦

く』。時に諸の長老皆毘舍離に往く、阿難、毘舍離にありて住す。諸の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆私・國王・大臣、種々の沙門・外道、皆來りて問訊し、多人衆集す。時に跋闍子比丘あり、大神力あり、天眼知、他心智を得、是くの如きの念を作す。「今阿難毘舍離に在り、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆私・國王・大臣・種々の沙門外道、皆來りて問訊し、多人衆集せり、我れ今寧ろ阿難を觀察すべし、是れ有欲とせんや、無欲なるや。便ち阿難を觀察するに、是れ有欲にして、是れ無欲にあらず」、復念じて言はく、「我れ今當さに其れをして、厭離の心を生ぜしむべし」。將さに阿難をして、厭離の心を生ぜしめんと欲して、卽ち偈を說いて言はく、

靜に空樹の下に住し　心に涅槃を思ひ　坐禪して放逸なる莫れ　多說するも何の作す所ぞ

時に阿難、跋闍子比丘の、厭離を說くを聞き已り、便ち獨處精進して放逸ならず、寂然として亂るゝなし。是れ阿難未曾有の法なり。時に阿難露地に在り、繩床を敷き、夜は多く經行す。夜過ぎて明相出でんと欲する時、身疲極す。念じて言はく、「我れ今疲極す、寧ろ小しく坐すべし」。念じ已りて卽ち坐す、坐し已りて、方さに亞臥せんと欲し、頭未だ枕に至らざる頃に、其の中間に於て、心に無漏解脫を得たり。此れは是れ阿難未曾有の法なり。時に阿難、阿羅漢を得已りて、卽ち偈を說いて言はく、

多聞にして種々に說き　常に世尊を供養す　已に生死を斷ず　瞿曇今臥せんと欲す

時に諸の比丘、毘舍離より王舍城に往き、是くの如きの言を作す、「我等先づ當さに何等をか作すべき。當さに先づ房舍臥具を治すべしとせんや、先づ法毘尼を論ぜんや」。皆言はく、『先づ當さに房舍臥具を治すべし』。卽ち房臥具を治す。時に大迦葉、此の因緣を以て比丘僧を集む。中に陀醯羅迦葉ありて上座を作り、長老婆々那第二上座と作り、大迦葉第三上座と作り、長老大周那第四上座と作る。時に大迦葉僧事を知り、卽ち白を作す。『大德僧聽け、若し僧時到らば、僧忍聽せよ、僧今

葉哀歎し、偈を説いて棺を遶ること七匝す、火燒かざるに自ら然ゆ。時に大迦葉、舍利を燒き已りて、此の因緣を以て比丘僧を集めて告げて言はく『我れ先きに道に在りて行く時、跋難陀の諸の比丘に語るを聞くに、是くの如きの言を作せり。「長老且らく止めよ、復愁憂啼哭すること莫れ、我等今彼の摩訶羅の邊に於て解脫することを得たり、彼れ世に在る時は、我等を教呵して、是れ爾すべし、是れ爾すべからず、應さに是れを作すべし、應さに是れを作すべからずと、今我等已に自在を得たり、作さんと欲すれば便ち作す、作さゞるは便ち作さず」と。我等今共に法毘尼を論ずべし、外道をして、以て餘言譏嫌を致さしむる勿れ、「沙門瞿曇の法律は烟のごとし、其の世尊の在時は、皆共に戒を學す、而も今滅後は、戒を學するものなし」と。諸の長老、今比丘の多聞智慧ありて、是れ阿羅漢なる者を料差すべし』。時に即ち差して四百九十九人を得たり、皆是れ阿羅漢にして、多聞智慧の者なり。時に諸の比丘言はく『應さに阿難を差して數中に在くべし』。大迦葉言はく『阿難を以て數中に在くこと勿れ、何を以ての故に、阿難は愛耆怖癡あり、愛恚怖癡あり、是の故に數中に在かしむべからず』。時に諸の比丘復言はく『此の阿難は是れ佛を供養するの人、常に佛に隨つて行き、親しく世尊に從つて所敎の法を受く、彼れ必ず處々にて世尊に疑問したてまつる、是の故に今應さに數に在らしむべし』。即ち數に在らしむ。諸の比丘皆此の念を作さく『我等當さに何處に於て、集まりて法毘尼を論ずるに、飲食臥具多饒にして、乏しきこと無かるべきや』。即ち皆言はく『唯王舍城のみ、房舍飲食臥具衆多なり、我等今宜しく共に往いて彼れに集まり、法毘尼を論ずべし』。時に大迦葉即ち白を作す。『大德僧聽け、此の諸の比丘、僧の爲めに差せらる、若し僧時到らば、僧忍聽せよ、僧今王舍城に往き、集まりて共に法毘尼を論ず、白すること是くの如し』。白を作し已りて、倶に毘舍離に往く。時に阿難、道に在りて行く、靜處に心に自ら念じて言はく『譬へば新生の犢子の、猶ほ乳を飮むもの、五百の大牛と共に行くが如し、學人有作の者、而も五百の阿羅漢と共に行

世間の明眼何ぞ乃ち速に滅する、我曹所宗の法、何ぞ便ち盡くることを得たる。或は宛轉し地に在るあり、猶ほ圓木のごとし。此の諸の未離欲の比丘も、亦復是くの如し。啼哭憂惱して言はく、『善逝、涅槃したまふこと、何ぞ乃ち太だ早き』。爾の時跋難陀釋子あり、衆中に在り、諸の比丘に語りて言はく、『長老且らく止めよ、大に憂愁啼哭すること莫れ、我等彼の摩訶羅の邊に於て解脱することを得たり、彼れ在る時は、數ば我等を敎へたり、是れは應、是れは不應、當さに是れを作すべし、是れを作すべからずと。我等今は便ち自任を得たり、作さんと欲すれば便ち作す、作さゞらんと欲すれば便ち作さず』。時に大迦葉之を聞いて悅ばず、卽ち諸の比丘に告げて言はく『且らく起ちて、疾かに衣鉢を捉れ』。時に往いて、世尊の舍利未だ燒かざるに及び、當さに見ることを得べし。諸の比丘、迦葉の言を聞き、卽ち疾々に衣鉢を執持す。是に於て大迦葉、五百人と倶に、拘尸城に往き已り、城を出で、[一]醯蘭若河を渡り、天觀寺に往き、阿難の所に至りて語りて言はく、『阿難、我れ世尊の舍利、未だ燒かざるに及びて、之を見たてまつらんと欲す』。阿難答へて言はく、『世尊の舍利、未だ燒かざるに及ばんと欲し、之を見たてまつらんと欲するも、見たてまつることを得べきこと難し、何を以ての故に、世尊の舍利は已に洗浴し、裹むに新劫具を以てし、復五百帳の氎を以て之を纏ひ、置いて鐵棺に在り、香油を盛滿し、木槨の内に著け、下に衆香の薪を積み、今之を燒かんと欲するに垂んとす、故に見たてまつることを、得べきこと難し』。時に大迦葉、漸く前んで、佛舍利の積所に往けば、棺槨自ら開き、世尊、足を現はしたまふ、時に大迦葉、世尊の足下の輪相の垢汚せるを見、卽ち阿難に問ふ『世尊顏容端政にして、身は金色を作す、誰か足下の輪相を汚すや』。阿難答へて言はく、『大德迦葉、女人は心軟かなり、前んで佛を禮する時、泣淚上に墮ちたる手にて、捉りて世尊の足を汚す』。大迦葉之を聞いて悅ばず、卽ち世尊の足を禮す。比丘・比丘尼・優婆塞・優婆私、諸天大衆亦皆佛足を禮したてまつる。時に世尊の足、還りて棺中に內れて現はれず、時に大迦

【一】醯蘭若河。

卷の第五十四　（第四分の五）

集法毘尼五百人

爾の時世尊、拘尸城末羅園沙羅林間に在して般涅槃したまふ。諸の末羅子、佛の舍利を洗ひ已りて、淨劫具を以て褁み、復五百張の疊を持つて、次いで之を纒ひ、鐵棺を作りて香油を盛滿し、舍利を安んじて中に置き、蓋を以て上を覆ひ、復木槨を作りて鐵棺を安んじて中に置き、下に衆香の薪を積む。時に末羅子の中の標首たるもの、火を持つて之を然やす。時に天卽ち火を滅す、餘の大末羅子、展轉して、皆大炬を以て之を然やす。時に天亦皆之を滅す。阿那律、末羅子に語るらく、『乃ち爾の疲苦を須ひず、諸天、汝等の火を滅す』。卽ち阿那律に問うて言はく、『大德、諸天何が故に火を滅する』。答へて言はく、『摩訶迦葉、彼の波婆拘尸城に在り、兩國の中間に、道に在りて行く、大比丘衆五百人と倶なり。彼れ是の念を作さく、「我れ當さに未燒の佛舍利を見たてまつることを得べきや不や」と。諸天、迦葉の心に是くの如く念ずるを知り、「是れを以ての故に火を滅す」。末羅子言はく、『大德阿那律、今便ち小らく停め、彼の諸天の意を遂げん』。爾の時摩訶迦葉、彼の二國の中間に在りて道を行く、大比丘僧五百人と倶なり。時に異の尼揵子あり、世尊の般涅槃したまふ時の、曼陀羅華を以て、道に在りて行く。時に迦葉遙に見て問うて言はく、『汝等何所より來る』。答へて言はく、『我れ拘尸城より來る』。復問うて言はく、『我が世尊を識るや不や』。答へて言はく、『識る』。復問ふ、『今故世に在すや不や』。答へて言はく、『世に在さず、般涅槃し來りて已に七日なり、我れは彼れより、此の華を持ちて來る』。時に迦葉之を聞いて悅ばず。中に未離欲の比丘あり、世尊の已に涅槃を取りたまふと聞き、便ち自ら地に投ず、譬へば樹を斫り、根斷じて樹倒るゝが如し。此の諸の未離欲の比丘も、亦復是くの如し、啼哭して言はく、『善逝、涅槃したまふこと、何ぞ乃ち太だ早き、

是れ魚鼈の東西遊行と見るが如し。比丘も亦復是くの如し、定心淸淨を以て無動地に至り、無漏智證を得、乃至復更に生れず、此れは是れ比丘第三明を得。無明を斷じて明法生じ、闇法去りて明曉の法存す、是れを無漏智明と爲す。何を以ての故に。不放逸・精進・不懈念・無錯亂・寂靜の故に」。

雜犍度具足して竟る。

四分律卷第五十三

心清淨を以て、乃ち無動地に至り、宿命智證を以て、能く無數百千劫の種々の衆事を憶す。此れは是れ比丘第一明を得。無明を斷滅して明法生ず、闇已に去りて、明曉法存す、此れは是れ比丘の憶宿命智證明なり。何を以ての故に。不放逸・精進・不懈心・無錯亂・樂處寂靜に由るが故に。彼れ定心清淨を以て、乃ち無動地に至り、一心に修習して、衆生の此に死し、彼に生るゝと見、彼の天眼を智證して清淨なり、衆生の此に死して彼に生れ、形色の好醜善惡、諸道の尊貴卑賤を見、衆生所造の業報因緣に隨つて、皆能く之を知る、此くの如き人は、身惡行・口惡行・心惡行を造り、賢聖を誹謗し、邪見なり、邪見の報を以ての故に、地獄餓鬼畜生に墮す、此くの如き衆生は、身に善を行じ、口に善を行じ、心に善を念じ、賢聖を誹謗せず、正見にして正業を修習し、身死して天上人中に生ずることを得、是くの如く天眼清淨なりと、衆生の此に死して、彼に生ずるを見、衆生所造の業因に隨つて、皆悉く之を知る。譬へば廣大の平地、四交道頭に高顯の大堂あり、眼眼の人ありて中に在り、衆生の來りて西方に至り、西方より東方に往き、南方より北方に往き、北方より南方に往くを見るが如し。比丘も是くの如し。定心清淨を以て、乃至無動地に至り、衆生の此に死し、彼に生るゝを見る、天眼清淨を以て、衆生の此に死し、彼に生るゝを見、乃至衆生所造の業報因緣に隨つて、皆悉く之を知る。此れは是れ比丘第二明を得。無明を斷じ、明法生ず、闇已に去り、明曉の法存す。此れは是れ衆生の此に死し、彼に生るを見る智證明なり。何を以ての故に。不放逸・精進・不懈心・不錯亂・樂寂靜に由るが故に。彼れ定心清淨を以て、乃ち無動地に至り、一心に無漏智證を修習し、彼れ如實に苦聖諦、集盡道諦を知り、如實に有漏の漏集漏盡を知り、如實に趣の漏盡、道聖諦を知る。彼れ是くの如く知り、是くの如く見、欲漏・有漏・無明漏より、心解脫を得、已に解脫智を得て、我が生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じ、更に復生れず。譬へば清水の中に、木石魚鼈水性の屬あり、東遊西行し、有眼の者之を觀、木石魚鼈を見て、此れは是れ木石、此れは

の所作に隨つて乃ち梵天に至る、此れは是れ比丘の第三勝法なり。彼れ定心清淨を以て、乃至無動地に入り、一心に修習して天耳智を證す、彼れ天耳清淨にして人耳を過出し、二種の聲を聞く、人と非人となり。譬へば城部國邑の中に講堂あり、廣大高顯なり。聰耳の人あり、中に在りて、聽力を勞せずして、種々の音聲を聞くが如し。比丘も亦是くの如し、心定を以ての故に、天耳清淨なり、人非人の種々の音聲を聞くことを得、此れは是れ比丘の第四勝法なり。彼れ定心淸淨を以て、乃至無動地に入り、一心に修習して他心智を證す。彼れ外の衆生の心を知る、有欲無欲・有垢無垢・有癡無癡・廣心略心・小心大心・定心亂心・縛心脱心・上心無上心、皆悉く之を知る。譬へば自喜の男子女人、水鏡を以て自ら照すに、見るを得ざるなきが如し。比丘も亦復是くの如し、定心清淨を以ての故に、外の一切の衆生の心の所念を知る、此れは是れ比丘の第五の勝法なり。彼れ定心淸淨を以て、乃至無動地に入り、一心に宿命智證を修習し、便ち能く宿命の無數若干種の事を憶識し、能く一生十生百生千生無數百千生を憶し、刦燒して都べて盡きれば、國土還た生ず、我れ彼れに在りて生れ、名字は是くの如く、種は是くの如く、姓は是くの如く、食は是くの如く、壽命は是くの如く、在世は是くの如く、壽盡は是くの如く、受苦樂は是くの如し、彼れに從つて命終し、復彼れに生る、是くの如く展轉して此に來生す。是くの如く形色相貌、無數の種々皆悉く憶識す。譬へば人あり、已れの村落より他國に往至す、彼の間にありて、若しは行き、若しは住し、若しは語り、若しは默す。彼の國より復餘國に往き、若しは行き、若しは住し、若しは語り、若しは默す。是くの如く展轉して復其の國に還り、多力を勞せずして、能く所行の諸國を憶識するが如し。我れ此の國より乃ち彼の國に往き、彼の國內に在りて、是くの如く行き、是くの如く住し、是くの如く語り、是くの如く默し、彼の國より復彼の國に至り、彼の國に在りて、是くの如く行き、是くの如く住し、是くの如く語り、是くの如く默す、是くの如く展轉して還りて本國に至ると。比丘も亦是くの如し、能く定

と。譬へば人あり、篋より衣を出すが如し、彼れ是の念を作す、「此れは是れ篋、此れは是れ衣、篋異に衣異なり、[六]篋中より衣を出す」と。比丘も亦復是くの如し、此れは是れ比丘の初勝法なり。何を以ての故に、不放逸・精進・不懈怠・無錯亂・樂(處)寂靜に由るが故に。彼れ定心清淨を以て、乃至不動地に入り、已れの四大色身中より、心を起して化身を化作し、一切の諸根肢節具足す、彼れ是の念を作さく、「此の身は是れ四大合成なり、彼の身は化に從つて有り、此の四大色身異に、彼の化の四大色身異なり、此の心は此の身に在り、此の身に依りて此の身を繫ぐ、譬へば琉璃、摩尼珠の、瑩治して甚だ明かに、清淨無垢なるが如し、若し青 黃赤 綖を以て之を貫き、有眼の男子、掌に置いて觀んに、此れは是れ珠、此れは是れ綖、珠異に綖異なり、此の珠は綖に繫在す」と。比丘も亦是くの如し、此の四大色身より、心を起して化身を化作す、一切の諸根肢節具す、而も是の念を作さく、「此の身は是れ四大合成なり、彼の身は化に從つて有り、此の四大色身異に、彼の化の四大色身異なり、此の心は此の身に在り、此の身に依りて此の身を繫ぐ、此れは是れ比丘の第二勝法なり。何を以ての故に。不放逸・精進・不懈念(怠)・無錯亂・樂(處)寂靜に由るが故に。彼れ定心清淨を以て、乃至無動地に入り、一心に神通智證を修し、彼れ便ち能く種々の變化を作し、一身を以て無數身と爲し、無數身を還た一身と爲し、身能く飛行し、石壁皆過ぎ、觸閡する所なく、虛空を行くが如し、空中に行住し、鳥の飛翔するが如く、地に出沒して、水の涌波、或は烟、或は焰、若しは大火積の如し。手能く日月を捫摸し、身、梵天に至る。譬へば陶師の善く泥を調和し、意の所造に隨ひ、何の器を作らんと欲するも、便ち能く之を成して、利益あるが如し。譬へば巧匠の、善く木を治し、意の所造に隨つて、自在に之を成して利益あるが如し。譬へば治象牙師の、善く牙を治し、意の所作に隨つて、自在に之を成して利益あるが如し。譬へば金師の、善く眞金を鍊り、意の所作に隨つて、自在に之を成して利益あるが如し。比丘も亦復是くの如し、定心清淨にして無動地に至り、意

【六】篋は、字書に「竹高篋也」とある。

て空處あることなし、比丘の第二禪に入るも、亦復是くの如し。心定喜樂遍滿盈溢す、此れは是れ第二身得樂なり。彼れ喜心を捨て、護念樂に住し、身に快樂を受くること、聖の所說の如し、護念快樂にして第三禪に入る。彼れ身に於て喜なし、樂を以て潤漬遍滿盈溢して空處あることなし、譬へば優鉢羅華・拘頭摩・分陀利華の如し、生じて地を出づと雖、而も未だ水を出でず、根莖華葉水中に潤漬し、空處あることなし、而も潤漬せず。比丘第三禪に入るも亦復是くの如し、離喜住樂、身を潤漬し、遍からざる所なし、此れは是れ第三禪の得現身快樂所遊戲處なり。彼れ苦樂憂喜を捨て、由先づ不苦不樂を斷じ、護念清淨にして第四禪に入る、身心清淨具滿盈溢して、遍せざる所なし、由男子女人の沐浴淨潔にして、被むるに新日淨衣を以てし、覆はざる所あることなきが如し、比丘の第四禪に入るも亦復是くの如し、其の心清淨にして身に遍滿し、空缺の處なし、彼れ第四禪に入りて、心掉動せず、亦懈怠せず、愛恚と相應せず、無動地に住す。譬へば密屋の如し、內外泥治し、堅く戶嚮を閉ぢ、風塵あることなし、內に於て燈を燃すに、人非人風鳥の扇動あることなし、其の燈焰直上して、曲戾あるなく、恬定として然ゆ。比丘の第四禪に入るも、亦復是くの如し、掉動あることなし、心に懈怠なく、愛恚と相應せず、已に無動地に住す、此れは是れ第四禪の現身得樂所遊戲處なり、何を以ての故に。不放逸・精進・不懈怠・不錯亂・樂處寂靜に由るが故に。彼れ定心清淨を得て、垢穢あることなく、柔軟調伏にして無動地に住し、自ら身中に於て心を起し、能く異身を化作し、肢節具足し、諸根闕くるなし、時に卽ち之を觀るに、此の身色は四大合成し、彼の身色は化有なり、此の四大身色異る、彼の化身の四大色異なり、此の四大身色中より、心を起して化作し、彼の身の諸根肢節具足す。譬へば人あり、鞘中より刀を拔き、彼れ是の念を作す、「此れは是れ鞘、此れは是れ刀、刀異に鞘異なり、此の鞘中より、刀を拔いて出す」と。亦人の篋[五]中より、蛇を出すが如し、彼れ是の念を作す、「此れは是れ篋、此れは是れ蛇、篋異に蛇異なり、此の篋中より蛇を出す」

【五】篋は、文書に「盛物竹器也」とある。

を擧して治生を行ひ、能く利息を得て、本に還し既に畢るも、復餘の在るなり、以て妻子を養活するに足る、彼れ自ら念じて言はく、「我れ先きに債を擧し、以て治生に用ふ、而も利息を得て既に本に還すことを得、復餘の在るあり、妻子を養ふに足る、我れ今便ち自在を得、復人を畏れず」、是の因緣を以て便ち歡喜を得、其の心安樂なるが如し。人の久しく痛み、病に從つて差ゆることを得、食飮消化し、身に色力あり、彼れ是の念を作す、「我れ先きに病あり、而も今差ゆることを得たり、飮食消化して、身に色力あり」と、是の因緣を以て便ち歡喜を得、其の心安樂なるが如し。人の久しく牢獄に閉ぢられ、獄より安隱に脫することを得、彼れ是の念を作さく、「我れ先きに繫閉せられ、今已に脫することを得、復畏るゝ所なし」と、是の因緣を以て便ち歡喜を得、其の心安隱なるが如し。人の多く財寶を持ち、大曠野を度せんに、賊劫に遭はずして過ぐることを得、彼れ是の念を作さく、「我れ先きに多く財寶を持ち、曠野より過ぐることを得て、今復畏るゝところなし」と、是の因緣を以て便ち歡喜を得、其の心安樂なるが如し。比丘に五蓋あること、亦復是くの如し。奴の債を負ひ、久しく病む、獄に在り、大曠野を行くが如し。自ら見て未だ諸結を斷ぜず、心をして染汚せしめ、惠力明かならず、彼れ卽ち欲惡不善法を捨て、覺觀と俱にして喜樂を受け、初禪に入ることを得。彼れ喜樂を以て身を潤漬し、遍滿盈溢して遍からざる處なし、人の巧みに浴器に細末藥を盛り、水を以て之を漬し、和合して相得れば、其の水潤漬して、潤はざるあるなく、而も零落なきが如し。比丘の初禪に入るも、亦復是くの如し。喜樂身に遍くして、空處あることなし、此れは是れ最初の現身得樂なり。何を以ての故に、不放逸・精進・不懈念・無錯亂・樂心寂靜に由るが故に。彼れ覺觀を捨て、更に內信を生じ、心一處に在り、無覺無觀にして、心定喜樂にして第二禪に入る。彼れ心定喜樂を以て身を潤漬し、遍滿盈溢して、遍せざる處なし、猶ほ山頂の泉水の、中より出づるが如し。東西南北より、及び上より來らず、卽ち此の池中より淸冷の水出づ、一池を潤漬し、遍滿盈溢し

起き、繫想して明に在り、心に錯亂なし、後夜に在り、便ち起きて思惟し、若し行、若しは坐、常爾に一心に諸蓋を除かんと念ず。比丘是くの如き聖戒あり、聖諸根に逮び、食には止足を知り、初夜後夜精進して覺悟し、常爾に一心に念じて錯亂なし。云何が比丘念じて錯亂なき。比丘是くの如く、內身の身念處を觀じ、精進して懈らず、念に錯亂なし、慳貪の世間の憂惱を調伏す。外身の身念處を觀じ、精進して懈らず、念に錯亂なし、慳貪の世間の憂惱を調伏す。內外身の身念處を觀じ、精進して懈らず、念に錯亂なし、慳貪の世間の憂惱を調伏す。愛心法も亦是くの如し、是れを比丘、念に錯亂なしと爲す。云何が比丘一心なる。若しは行步入出、左右瞻視、屈申俯仰、衣鉢を執持し、飮食を受取す、大小便利す、睡眠と覺悟と、若しは坐し若しは立つ、若しは所說あり、若しは寂然たり、是くの如き一切に、常爾に一心なる、是れを一心と爲す。譬へば人あり、大衆と共に行くに、若しは前に在り、若しは中に在り、若しは後にあるも、常に安樂を得て、畏るゝあることなきが如し。比丘も亦復是くの如し、行步入出乃至默然まで、常爾に一心なり。比丘是くの如きの聖戒あり、聖諸根を得、食には止足を知り、初夜後夜に精進し覺悟し、常爾に一心にして錯亂あることなし、樂うて阿蘭若處の樹下に在りて住し、或は樂うて山窟に處し、若しは露地の糞聚の邊にあり、若しは塚間、水岸の間にあり。彼れ乞食し、還り已りて足を洗ひ、衣鉢を安置し、結加趺坐し、直心正意にして繫念して前に在り、慳貪を斷除して、心與に共俱せず、瞋恚を斷除して怨嫉あることなく、心無瞋に住し、清淨にして恚るなし。常に慈愍あり、睡眠を除去して、與に俱にせず、繫想して明に在り、念に錯亂なし、調愧を斷除して、與に共俱せず、內心寂滅して、調愧の心淨し。疑を除斷し、已に疑を度して、其の心一向に善法に在り、譬へば奴あり、大家姓を與へて、安隱にして奴を脫せしむ、彼れ自ら念じて言はく、「我れは先きに是れ奴なり、而も今解脫し安隱なり、已に自在を得て、復人に從はず」、此の因緣を以て便ち歡喜を得、其の心安樂なるが如し。又人あり、他の財物

り、是くの如きの惡報ありと言ひ、日蝕星蝕も亦是くの如し、是くの如き邪命法を除斷す。餘の沙門婆羅門の如き、他の信施を食ひ、妨道法を行じて邪命自活す、或は此の國當さに勝つべし、彼の國如かず、或は彼の國勝つ、此の國如かず、或は此れ勝つ彼れ如かずと言ひ、或は彼れ勝つ、此れ如かずと言ひ、是くの如き吉凶好惡を瞻る、是くの如き妨道法を除斷す。彼れ此の事の中に於て、聖戒を修集し、內に所著なく、其の心安樂なり、眼、色を視るといへども、而も相を取らず、眼色の却す所と爲らず、眼根堅固にして、寂然として住す、貪欲する所なくして憂患なし、諸惡不善法を漏さず、戒品を堅持して、能く眼根を護す。耳鼻舌身意も亦是くの如し。是くの如く六觸入中に於て、善く護持調伏を學び止息を得しむ、猶ほ平地の四交道頭の如し、象馬車乘に駕し、善く調御する者は、左に鞚を執り、右に鞭を持ち、善く護持を學び、善く調伏を學び、善く止息を學ぶ、比丘も亦是くの如し、六觸入中に於て、善く護持を學び、善く調伏を學び、善く止息を學ぶ、彼れに是くの如きの聖戒あり、聖眼根を得、食は止足を知り、亦食味せず、以て其の身を養ふ、而も貢高憍慢ならず、取りて自ら身を支へ、苦患なからしめ、淨行を修することを得、故に苦消滅して新苦生ぜず、增減あることなし、有力無事にして、身をして安樂ならしむ。猶ほ男子女人の身に瘡を患ひ、藥を以て之に塗り、取りて瘡をして差えしむるが如し、比丘の食は以て足るを知り、取りて身をして安からしむること、亦復是くの如し。譬へば人の、膏油を以て車に膏し、財物の爲めのが故に、轉載せしめんと欲するに、至到する所あらしめんと欲するが如し。比丘の食に止足を知り、取りて身を支へしむるも、亦復是くの如し。比丘に是くの如きの聖戒あり、聖諸根を得、食中に於て能く止足を知り、初夜にも後夜にも精進して覺悟し、若しは晝日に至りて、若しは行き、若しは坐し、常爾に一心に諸蓋を除かんと念じ、彼れ初夜に於て、若しは行き、若しは坐し、常爾に一心に諸蓋を除かんことを念ず。彼れ中夜に於て、右脇を側て、脚を累ねて臥し、念じて時に當りて

如き使命の事を遠離す。餘の沙門婆羅門の如き、他の信施を食ひ、但種々の鬪戯を作す、或は弓鬪、或は刀鬪、或は杖鬪、或は鷄鬪、或は狗鬪、或は猪を鬪はし、或は羖羊を鬪はし、或は鹿を鬪はし、或は象を鬪はし、或は馬を鬪はし、或は駄を鬪はし、或は牛を鬪はし、或は撃牛鬪、或は水牛鬪、或は女人を鬪はし、或は男子を鬪はし、或は童男童女を鬪はす、是くの如き一切の嬉戯の鬪事を斷除す。餘の沙門婆羅門の如き、他の信施を食ひ、妨道法を行じ、邪命自活し、男女の好惡相を瞻相し、種々生を畜つて以て利養を求む、是くの如き種々の妨道法を斷除す。餘の沙門婆羅門の如き、他の信施を食ひ、妨道法を行じて、邪命自活す、鬼神を召喚し、或は驅遣し、種々厭禱す、是くの如き妨道法を除斷す。餘の沙門婆羅門の如き、他の信施を食ひ、妨道法を行じて邪命自活す、或は人の爲めに病を見し、或は惡術を誦し、或は好呪を誦し、或は背病を治し、若しは爲めに汗を出し、或は針を行じて病を治し、或は鼻を治し、或は下部の病を治す、是くの如き邪命妨道法を除斷す。餘の沙門婆羅門の如き、他の信施を食ひ、妨道法を行じて邪命自活す、藥を行じて、人の病を療治し、或は吐、或は下、男を治し女を治す、是くの如き妨道法を除斷す。餘の沙門婆羅門の如き、他の信施を食ひ 妨道法を行じて邪命自活す、或は火を呪し、或は行來を呪して吉利ならしめ、或は刹利呪を誦し、或は鳥呪を誦し、或は枝節呪を誦し、或は安置舍宅符呪を誦し、若しは火にて鼠嚙物を燒いて能く解呪を爲し、或は別死生書を誦し、或は別夢書を誦し、或は手を相し、肩を相し、或は天人問を誦し、或は別鳥獸音聲書を誦す、是くの如き妨道法を除斷す。餘の沙門婆羅門の如き、他の信施を食ひて邪命自活す、天時を瞻相して、或は雨ふるべしと言ひ、或は穀貴からんと言ひ、或は穀賤からんと言ひ、或は病多しと言ひ、或は病少しと言ひ、或は恐怖と言ひ、或は安隱と言ひ、或は[四]地動と言ひ、或は慧星現はると言ひ、或は月蝕すと言ひ、或は蝕せずと言ひ、或は日蝕すと言ひ、或は蝕せずと言ひ、或は星蝕すと言ひ、或は蝕せずと言ひ、或は月蝕して、是くの如きの好報あ

【四】地動は地震のこと。

の飲食衣服香味觸法を求む、是くの如き無厭足の事を離る。餘の沙門婆羅門の如き、他の信施を食ひ、種子を聚集して、樹木鬼神村を種殖す、是くの如き事を離る。餘の沙門婆羅門の如き、他の信施を食ひ、但方便を作して諸の利養を求め、象牙雜寶の高廣大床、種々の文繡被褥、及び雜色の諸皮なり、是くの如き利養法を離る。餘の沙門婆羅門の如く、他の信施を食ひ、但方便を作して自ら嚴身を求め、酥油にて身を摩し、香水に洗浴し、香を以て身を塗り、香澤に頭を梳り、好羊鬘を著け、眼を紺色に染め、種々に面首を莊嚴し、色綖を臂に繫け、道中杖を捉り、刀劍幷びに孔雀蓋を執り、珠を以て扇と爲し、鏡を以て自ら照し、雜色の革屣を著け、純白の衣を著す、能く是くの如き、莊嚴の事を離る。餘の沙門婆羅門の如き、他の信施を食ひ、專ら嬉戲を爲し、棊局・博掩・樗蒲・八通・十通、或は復拍石、是くの如き種々の嬉戲を斷除す。餘の沙門婆羅門の如く、他の信施を食ひ、但道を妨ぐる法を說き、或は王事・賊事・鬪戰軍馬の事、大臣の事、騎乘の事、園觀出入の事、臥起の事、女人の事、衣服飮食の事、親軍の事、國土の事、世間を思憶し大海に入る事を說く、是くの如く一切妨道の業を斷除す。餘の沙門婆羅門の如き、他の信施を食ひ、無數に方便して、但諛諂の美辭を作し、現相毀訾して、利を以て利を求む、是くの如き邪命諛諂を捨つ。餘の沙門婆羅門の如き、他の信施を食ひ、常に共に講論諍言し、或は園觀に在り、若しは浴池に在り、或は講堂に在り、我れは是くの如きの法律知る、汝は知るところなし、汝邪道に趣く、我れは正道に向ふ、前言を以て後に著け、後言を前に著け、我れ能く忍ぶ、汝は忍ぶ能はず、我は汝に勝る、汝は但狂言なり、汝と共に論議し、我れ今勝を得たり、能問し便問す、是くの如き一切の諍事を除斷す。餘の沙門婆羅門の如き、他の信施を食ひ、但方便を作して、使節を爲さんことを求め、若しは王、王の大臣、婆羅門若しは居士の爲めに通信し、此處より彼處に往き、彼れより此れに還り、此の信を持つて彼れに往き、彼の信を持つて此れに來り、自ら是れを作し、他を敎へて是れを作さしむ、能く是くの

道に入るべし。彼れ異時に於て、錢財若し多、若し少、皆悉く捨棄し、親屬若しは多若しは少、皆悉く捨離し、鬚髪を剃除し、袈裟を披、家を捨てゝ非家道に入り、彼れ出家人と同じく飾好を除捨し、諸比丘と同戒にして、殺生せず、刀杖を放捨し、常に慚愧あり、衆生を慈念す、是れを不殺生と爲す。偸盜を捨つ、與へれば便ち取る、與へざるは取らず、其の心清淨にして盜意あることなし、是れを不偸盜と爲す。婬不淨行を捨つ、梵行を修し、勤めて精進し、欲愛に著せず、清淨香潔にして住す、是れを捨婬不淨行と爲す。妄語を捨つ、如實にして世を欺詐せず、是れを不妄語と爲す。兩舌を捨つ、若し此の語を聞くも、傳へて彼れに至らず、若し彼の語を聞くも、傳へて此に至らず、相壞亂せず、若し離別あれば、善く和合を爲し、和合親愛なれば、常に歡喜せしむ、和合の言を出すには、所說に時を知る、是れを不兩舌と爲す。麁惡の言を離る、言ふ所麁獷にして、他人を苦惱し、瞋恚を生じて、喜樂せざらしむ、是くの如きの麁惡言を斷除し、言は則ち柔軟にして、怨害を生ぜず、能く利益を作し、衆人愛樂して、其の言を聞くことを樂む、常に是くの如きの利益善言を出す、是れを不麁惡言と爲す。無利益語を離れ知時語、實語、利益語・法語・律語・滅諍語、緣あれば而も說く、所言時を知る、是れを離無利益と爲す。飲酒せずして放逸の處を離れ、華香瓔珞に著せず、歌舞倡伎せず、亦往いて觀聽せず、高廣床上に坐せず、非時に食せず、若しは是れ一食なり、金銀七寶を把持せず、妻妾童女を取らず、奴婢象馬車乘鷄狗猪羊を畜養し、田宅園觀に、一切の諸物を儲積畜養せず、欺詐して輕拜小斗せず、惡物を合和せず、治生販賣せず、他の肢節を斷じ、殺害繫閉し、他の錢財を斷じ、役使して業を作さしめ、言は輙ち虛詐にして、諍訟を發起し、他人を棄捨す、是くの如きの諸の不善の事行を斷ず。則ち時を知りて、非時に行かず、腹を量りて食し、身を度りて衣、足るを取るのみ、衣鉢自ら隨ふは、猶ほ飛鳥の羽翮の身と倶なるがごとし、比丘も是くの如く、所去の處に、衣鉢身に隨ふ。餘の沙門婆羅門の如き、他の信施を受けて、種々の餘積

王言はく『今當さに云何がすべき』。夫人言はく『此の摩訶迦旃延は是れ大婆羅門種より、今之を請ふべし』。并びに更に餘の七婆羅門種の比丘を請はん。王の如許の供具を以て、此の八人に與へん。彼の法は受けず、若し與ふるも亦受けず。王言はく『爾るべし』。時に王優陀延、卽ち迦旃延の所に往き、頭面に足を禮し、却いて一面に坐す。時に迦旃延種々に方便して、王の爲に說法し、歡喜を得せしむ。時に王聞法歡喜し已りて、是くの如きの言を白す『願はくは我が明日の淸食を受けたまへ、已れを通じて八人なり』。時に迦旃延默然として之を受く。時に王、迦旃延の默然受請を見已り、座より起つて頭面に足を禮し、歡喜して去る。王其の家に還り、種々多美の飲食を辨じ、明日淸旦往いて時至ると白す。時に大迦旃延、淸旦衣を著け、鉢を持ち、已れを通じて八人、王憂陀延の宮に往き、座を敷いて坐す。憂陀延手づから種々の多美の飲食を斟酌し、飽食を得せしめ、食已りて鉢を捨て、金瓶を取り、水を盛りて之を授け、象を以て布施す。迦旃延言はく『止めよ止めよ、王此れ便ち供養を爲し已る、我等是くの如きの供養を受くべからず』。復車馬人兼金銀琉璃頗梨眞珠車渠馬瑙の七寶を以て布施す。迦旃延言はく『止めよ止めよ、此れ便ち供養を爲す、我等是くの如きの供養を受くべからず』。時に王憂陀延、卽ち迦旃延の足を禮し已り、更に卑床を取りて坐す。時に迦旃延種々王の爲めに說法し、歡喜を得しめ已り、坐より起つて去り、寺內に還りて諸の比丘に白す。諸の比丘、佛に白す。佛爾の時此の因緣を以て比丘僧を集め、諸の比丘の爲めに、大小持戒揵度を說く。如來出世應供正遍知明行足爲善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊、一切の諸天世人沙門婆羅門天魔梵王の衆中に於て、自ら覺悟證知して、人の爲めに說法し、初語亦善く、中語亦善く、下語亦善し、文義具足し、淨業を開顯し、若しは居士、居士子聞き、若しは復餘の種姓に生るゝ者、彼れ正法を聞いて、便ち信樂を生じ、信樂の心を以て是の念を作さく、「我れ今家に在居し、妻子繫縛し、純ら梵行を総することを得ず、我れ今寧ろ鬚髪を剃除し、袈裟を披、信を以て家を捨て、非家

勅して言はく、『聲を作すこと勿れ』と。船を牽いて岸に近づかしむ。彼れ卽ち岸に近づく。王優陀延善く調象の法術を知る。卽ち術を誦し、彈琴して前に往き、象を取る。時に守象人卽ち王を捉ふ。王甚だ恐怖す。彼れ王に問うて言はく、『怖るゝや』。王言はく、『我れ怖る』。彼れ言はく、『王怖るゝこと勿れ』。波羅殊提王、王を喚ぶ、王更に恐怖して念じて言はく、『波羅殊提將さに我れ幷びに侍從を殺すことなからんとするや。卽ち之を繫いて、衞送して、波羅殊提王の所に往く。問うて言はく、『汝怖るゝや』。答へて言はく、『怖る』。王怖るゝこと勿れ、汝我が兒瞿波羅に調象術を敎へ、幷びに我が女に彈琴を敎ふべし』。彼將ひて慰禪國に至り、七年中脚を鎖す。時に跋難陀釋子、拘睒彌の奢彌跋提夫人の所より、來りて慰禪國の憂陀延の所に至り、王優陀延の信を持つて、夫人の所に往く。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『比丘は白衣のために使を作すべからず、若し作さば突吉羅なり』。時に彼れ王兒に調象の術を敎へ、女に彈琴を敎ふ。後異時に於て、遂に王女と通ず。拘波羅王子之を知り、彼れ是の念を作す、「若し我れ王に白さば、必ず其の命を奪はん、彼れは是れ我が師なり、我れを敎へて辛苦す、此れは是れ王女なり、彼れは是れ王なり、爾すべきことを得んのみ」。卽ち覆藏して人に語らず。後に王優陀延逃走せんと欲し、卽ち自ら疾行の牸象を嚴る。拘婆羅之を知り、便ち是の念を作す、「彼れ自ら疾行象を嚴る、必ず逃走せんと欲す。若し我れ王に白さば、必ず其の命を奪はん、此れは是れ我が師なり、我れを敎へて辛苦す、遂に藏して人に語らず」。彼れ王女を安んじて象上に置き、象上に於て飮み、琉璃器を失ひ、未だ地に至らざる頃に、巳に慰禪より拘睒彌國に至る。王卽ち奢彌跋提夫人の所に至り、是くの如きの言を語る『我れ彼れ在り繫がれ』、時に誓つて言はく、『當さに八婆羅門を供養すべし、一切の所須皆具足せしめん、今之を與へんと欲す、便ち辨具すべし』。夫人言はく、『若し是くの如くなれば、諸の象馬車の金銀七寶、王及び我が身、一切當さに如許の所有を盡し、幷びに一人に與ふべし、彼れ亦都べて受け、猶ほ厭足なけん』。

過ぎて言はく『今日は是れ初日、是くの如く乃至七日にして是くの如きの言を作す、「沙門の語は虛なり」。便ち諸の婇女と洹水の中に在り、船に乘じて遊戲す』。時に慰禪王の國內七年雨ふらず、彼れ摩竭國王瓶沙に出水珠あり、若し此の珠を出せば、天卽ち雨を降すと聞き、彼れ便ち四部の兵を興し、王舍城に往き、城を圍みて住す。彼の城牢固にして、餘の方便の得べきにあらず、唯水穀飮食盡くれば、乃ち得べきのみ』。時に城內に多方便智慧の大臣あり、教へて竹葦を以て池中に著け、衆蓮花をして孔中に在りて生じて竹上に出でしむ。時に彼の大臣、瓶沙王の所に至り、白して言さく、『王今知るや不や』、王舍城は牢固なり、餘の方便の得べきにあらず、唯水穀盡くんば、乃ち得べきのみ、今應さに人を遣はして波羅殊提王に語りて、是くの如く言ふべし、「今且らく停むべし、象馬車乘刀劍にて、共に鬪ふことを須ひざれ、汝今衆華優鉢羅・鉢頭摩・拘頭摩、分陀利華を用ひて、共に鬪ふべし、我れ亦當さに、是くの如き華を以て共に鬪ふべし、汝も亦飯摶を作りて、相打つて共に鬪ふべし。我れも亦飯摶を作りて共に鬪ふべし』。王言はく『爾るべし』。時に卽ち使を遣はし、波羅殊提王の所に往き、具さに上の言を說く。彼れ是の念を作さく、『王舍城は牢固なり、唯水穀飮食盡くれば、乃ち得べきあり、而も城內は水穀飮食豐多なり』。彼れ卽ち使に報へて言はく『我れ城の爲めの故に來らず、我が國內七年雨らず、汝の國中に水珠あり、若し此の珠を出す時は、天卽ち雨を降らすと、是れを以ての故に來る』。使答へて言はく『大王、初めの時何ぞ珠を須むと言はざる、若し珠を須むと言はゞ、我れ卽ち與ふべし、王今去るべし、尋いで當さに珠を送るべし』。王卽ち軍を還して拘睒彌國に向ふ。彼れ王優陀延の、婇女と遊戲する聲を聞き、卽ち傍人に言はく『戲聲は是れ何人ぞ』。傍臣答へて言はく『大王知るや不や』、王優陀延、諸の婇女と船に乘じ、洹水中に遊戲す、是れ彼れの戲聲なり』。王卽ち傍人に勅し『聲を作すこと勿れ』。象を洹水の邊に放つ、卽ち第一白象藏の守象人を放つ。時に王優陀延の大臣、出でて白象を見、王に白して言さく、『野象あり』と。王卽ち人に

こと能はず、畏愼して敢て騎乘せず。佛言はく『步挽車に乘ずることを聽す。若しは男子乘、一切畜生乘、亦は男、彼れに命難、淨行難あり、畏愼して敢て騎乘避走せず』。佛言はく『若し是くの如きの難あらば、象馬に乘じて避くることを聽す』。時に諸の白衣、刀劍を持ち、來りて諸の比丘の藏に寄す。比丘畏愼して敢て受けず、世尊是くの如きの敎あり、刀劍を持つを聽したまはず。佛に白す。佛言はく『檀越の堅牢の爲めの故に、藏擧することを聽す』。

爾の時世尊、拘睒彌國に在しき。王優陀延は、是れ賓頭盧の親厚の知識なり、王朝晡に常住に問訊す。時に不信樂の婆羅門大臣あり、王に從つて王に白して言さく『云何ぞ大王、朝晡に此の下賤業の人を問訊するに、而も王を見て起さざる』。王卽ち報へて言はく『明日淸旦當さに往くべし、若し故起さずんば、當さに其の命を奪ふべし』。王明日淸旦に、便ち賓頭盧の所に往く、遙に王の來るを見て、便ち是の念を作さく、「此の王今惡心を懷き來る、若し我れ起たずんば、當さに我が命を奪ふべし、我れ今若し起たば、彼れ王位を失はん、若し我れ起さずんば、當さに我が命を奪ひて、地獄に墮すべし、此の王をして地獄に墮せしめんや、王位を失はしめんや」。尋いで復念じて言はく、「寧ろ位を失はしむるも、地獄に墮せしむべからず」。卽ち起ちて遠く迎へ、意に先ちて問訊して言はく『善來大王』と。王問うて言はく『汝今何が故に起ちて我れを迎ふるや』。答へて言はく『汝の爲めの故に起る』。王言はく『昨日は何が故に起さざる』。答へて言はく、『亦汝の爲めの故に』。王問うて言はく、『云何が我が爲めなるや』。答へて言はく『汝昨日は善心にて來る、今日は惡心を懷いて來る、若し我れ起さざれば、當さに我が命を奪ふべし、若し我が命を奪へば必ず地獄に墮せん、寧ろ王位を失はしむるも、地獄に墮せしめず、是の故に起つのみ』。王問うて言はく『我れ當さに位を失ふべきや』。答へて言はく『失はん』。王復問うて言はく『幾日にして失ふべき』。答へて言はく『却後七日』と。時に王卽ち拘睒彌に還り、城壍を修治し、穀食柴薪を收檢し、軍衆を聚集し、城を守りて警備す。數日

諸の比丘、食物の齒間に入るを患ふ。佛言はく、『摘齒物を作ることを聽す』。彼れ寶を由ひて作る。佛言はく、『寶を用ひて作るべからず、骨牙角乃至竹木を用ひて作ることを聽す』。彼れ用ひ已りて、洗はずして便ち擧ぐ。諸の比丘、見て皆之を惡む。佛言はく、『爾すべからず、應さに洗ふべし』。彼れ洗ひ已りて、曬燥せずして便ち擧げて壞を生ず。佛言はく、『爾すべからず、應さに燥かしめて之を擧ぐべし』。時に諸の比丘、耳中に垢あるを患ふ。佛言はく、『挑耳篦を作ることを聽す』。彼れ寶を用ひて作る。佛言はく、『爾すべからず、骨牙角乃至竹木を用ひて作るべし』。彼れ用ひ已りて、洗はずして便ち擧ぐ。諸の比丘見て之を惡む。佛言はく、『爾すべからず、應さに洗ひ已りて之を擧ぐべし』。彼れ燥さずして便ち壞を生ず。佛言はく、『爾すべからず、應さに燥かし已りて之を擧ぐべし』。

爾の時世尊、舍衞國に在しき。時に諸の比丘、多く鸚鵡鳥、鸜鵒鳥を畜ふ、初夜後夜に鳴喚し、諸の比丘の坐禪を亂す。諸の比丘、佛に白す、佛言はく、『是くの如きの鳥を畜ふべからず』。爾の時世尊、拘睒彌に在しき。時に跋難陀釋子、狗子を畜ふ。諸の比丘を見て吠ゆ。比丘、佛に白す。佛言はく、『畜ふべからず』。爾の時世尊、婆祇提國に在りき。時に毘舍離の波闍子比丘、羆子を畜ふ、比丘の衣鉢坐具針筒を裂き、乃ち復比丘の身體を傷く。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『畜ふべからず』。

爾の時世尊、毘舍離國に在しき。時に諸の離奢、象馬車乘輦輿に乘じ、刀劍を捉持し、來りて世尊を見奉らんと欲す。彼れ刀杖を留めて寺外に在り、內に入りて問訊す。時に六群比丘外に出で、輙ち彼象馬車輦輿に乘じ、刀劍を捉持して共に戲る。時に諸の居士、見て皆共に譏嫌して言はく、『沙門釋子厭足を知らず、慚愧あることなし、乃ち彼の象馬車乘に乘じ、刀劍を捉持して共に戲る、猶ほ國王大臣の如し』。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『比丘、象馬車乘輦輿に乘じて、共に戲笑すべからず、比丘亦刀劍を捉持すべからず』。時に諸の上座の老病比丘、此の住處より、彼の處に至る

はく、受くることを聽す』。二種の器あり、畜ふべからず、瓦坐床・瓦牀・瓦斗升合なり。爾の時跋羅陀釋子、陶師の家に往き、瓦器上に在りて髀を重ねて坐し、器破れ、仰いで地に倒れ、形露はる。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『瓦器の上に坐すべからず、亦白衣の家にて、髀を累ねて坐すべからず』。時に六群比丘、外道の舍宅に安置する、吉凶符書呪・枝節呪・刹利呪・尸婆羅呪・知人生死吉凶呪、解諸音聲呪を誦す。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『爾すべからず』。彼れ他に敎ふ。佛言はく、『爾すべからず』。彼れ此れを以て活命す。佛言はく、『爾すべからず』。時に諸の比丘、口臭し。佛言はく、『應さに楊枝を嚼むべし、楊枝を嚼まざれば五事の過あり、口氣臭し、味を別たず、熱癊を增益す、食を引かず、眼明かならず、楊枝を嚼まざれば、是くの如きの五過あり、楊枝を嚼きば五事の利益あり、一には氣臭からず、二に味を別つ、三に熱癊消す、四に食を引く、五に眼明かなり、楊技を嚼めば、是くの如きの五事の利益あり』。世尊既に楊技を嚼むことを聽したまふ、彼れ長楊技を嚼む。佛言はく、『爾すべからず、極長は一搩手を聽す』。彼れ楊技の奇なる者を嚼む。佛言はく、『爾すべからず』。彼れ雜葉の者を嚼む。佛言はく、『爾すべからず』。彼れ純ら皮を嚼む。佛言はく、『爾すべからず』。時に比丘あり、短楊技を嚼む、佛を恭敬するが故に便ち咽ぶ、卽ち以て患と爲す。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『爾すべからず、極短の者も長さ四指なり』。彼れ多人の行處に於て楊技を嚼む、若しは溫室に在り、若しは食堂に在り、若しは經行堂に在り。諸の比丘、見て之を惡み、往いて佛に白す。佛言はく、『爾すべからず。三事あり、應さに屛處に在るべし、大小便と嚼楊技となり、是くの如きの三事は、應さに屛處に在るべし』。時に諸の比丘舌上に垢多し。佛言はく、『刮舌刀を作ることを聽す』。彼れ寶を用ひて作る。佛言はく、『爾すべからず、骨牙角銅鐵白鑞鉛錫舍羅草竹葦木を用ふべし』。彼れ洗はずして便ち擧ぐ、餘の比丘見て之を惡む。佛言はく、『爾すべからず、應さに洗ふべし』。彼れ洗ひ已りて曬燥せず、便ち擧げて壞を生ず。佛言はく、『爾すべからず』。時に

等か五なる。若し如法は和合すべし、若しは默然として之に任ず、若しは與欲す、若しは可信人に從つて聞く、若しは先きに中に在りて默然として坐す、是くの如きの五事は、應さに和合すべし』。

爾の時世尊祇洹中に在して、無數の衆のために說法したまふ。時に世尊、諸の比丘に嚔[一]して呪願して言はく『長壽』と。諸の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷、亦長壽と言ひ、大衆遂に便ち閙亂す。佛言はく『爾すべからず』。時に居士あり、諸の比丘に嚔す。諸の比丘畏愼して敢て長壽と言はず。居士皆譏嫌して言はく、『我等嚔す、諸の比丘長壽を呪願せず』と。諸の比丘、佛に白す、佛言はく『長壽を呪願することを聽す』。時に諸の居士、比丘を禮す、比丘、畏愼して、敢て長壽と言はず、世尊、我が呪願を聽したまはず。諸の居士皆譏嫌して言はく『我等比丘を禮す、比丘我等の長壽を呪願せず』。諸の比丘、佛に白す。佛言はく『長壽を呪願することを聽す』。爾の時六群比丘、小事あり、便ち呪咀を作して言はく『我れ若し是くの如きを作さば、當さに地獄・餓鬼・畜生に墮すべし、佛法の中に生れず、若し餘人是くの如き事を作さば、當さに地獄・餓鬼・畜生の中に墮すべし、佛法の中に生れず』。諸の比丘、佛に白す。佛言はく『爾すべからず、是くの如きの語を作すことを聽す、若し我れ是くの如き事を作さば、南無佛、若し汝是くの如き事を作さば、亦言はく南無佛』。爾の時六群比丘腰帶を畜へ、頭に茸を安んず。佛言はく『爾すべからず』。彼れ革帶を畜ふ。佛言はく『爾すべからず』。六群比丘闍提那帶を畜ふ。佛言はく『爾すべからず』。彼れ散綖帶を畜ふ。佛言はく『爾すべからず。汝等癡人、我が遮する所を避けて、更に餘事を作す。自今已去、是くの如き一切の帶は畜ふべからず』。時に六群比丘、長廣帶を畜ふ。佛言はく『爾すべからず、腰帶は廣さ三指、腰を遶ること三周に作るを聽す』。彼の六群比丘、大に眞色[二]に染めて帶を作る。佛言はく『爾すべからず』。彼れ白帶を作る。佛言はく『爾すべからず、袈裟[三]色の帶を作ることを聽す』。

爾の時信樂の陶師あり、種々の器を作りて、諸の比丘に與ふ。比丘敢て受けず、佛に白す。佛言

【一】嚔は、音義に「音帝、噴色」とある。「ヤア」と聲をかける類のことか、長壽は、御機嫌と言つた樣な挨拶か。

【二】眞色は、正色のこと、靑黃赤等である。眞色の反對は間色である。

【三】袈裟(Kaṣāya)は歪色と譯す、間色のことである。所謂木蘭色である。今袈裟は、衣のことゝするも、元來色の名であつて、袈裟色の衣なるが故に、終に衣が袈裟と言はるゝ樣になつたのである。

れ自ら言ふ、我れ正法を知ると、王の鹿苑を焼く、是くの如くにして何ぞ正法あらんや』。諸の比丘往いて佛に白す。佛言はく、『爾すべからず』。時に諸の比丘道路を行くに、草ありて妨閡す。佛言はく、『竹を以て草を壓し、若しは石、若しは木を、上に鎭することを聽す』。時に祇洹の外に野火あつて焼き、蔓莚して來至す。諸の比丘云何せんを知らず、卽ち佛に白す。佛言はく、『中間の草を逆除することを聽す、若しは坑塹を作りて斷じ、若しは土を滅し、若しは逆燒す』。時に比丘あり、羸老して洛嚢に鉢を盛り、杖なくして行くこと能はず。彼れ是の念を作さく、「我れ當さに云何がすべき」、諸の比丘に白す。諸の比丘、佛に白す。佛言はく『僧彼の老比丘に、杖洛嚢白二羯磨を與ふることを聽す。應さに是くの如く與ふべし。衆中應さに羯磨に堪能なるものを差し、上の如く是くの如く白すべし。「大諸僧聽け、此の某甲比丘、羸老にして、洛嚢に鉢を盛り、杖なくして行くこと能はず、彼れ僧に從つて杖洛嚢を乞ふ、若し僧時到らば僧忍聽せよ、某甲比丘に、杖洛嚢を與ふることを、白すること是くの如し」。「大諸僧聽け、此の某甲比丘羸老にして、杖洛嚢なくして行くこと能はず、今僧に從つて、杖洛嚢を乞ふ、僧今此の比丘に杖洛嚢を與ふ、誰か諸の長老、僧某甲比丘に、杖洛嚢を與ふることを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」。僧已に某甲比丘に、杖洛嚢を與ふることを忍し竟る、僧忍して默然するが故に、是の事是くの如く持つ』。

爾の時舍利弗、衆僧の非法羯磨を作すを見る、同意する者なし、默然として之に任ぜんと欲す。佛言はく、『默然を聽す。五法あり、默然すべからず、若し如法羯磨にして、而も心同せず、默然として之に任ず、若し同意伴を得、亦默然として之に任ず、若し小罪を見て默然し、爲めに別住を作して默然し、戒場上に在りて默然す。是くの如きの五法に默然する者は非法なり。五法あり應さに默然すべし、他の非法を見て默然す、伴を得ずして默然す、重を犯して默然す、同住して默然す、同住地に在りて默然す、是くの如きの五法は、應さに默然すべし。五事あり應さに和合すべし、何

遠くより來るを見、疾々に髮を收め、前んで阿難を迎へて白し言さく、『大德、善い哉、願はくは前んで舍に入りたまへ』。阿難報へて言はく、『我れ汝が家に入りて、床坐飲食の供養を受くべからず』。離奢言はく、『大德阿難、何を以ての故に』。答へて言はく、『僧已に汝が爲めに、覆鉢不相往來を作すが故に』。離奢言はく、『何事を以ての故に』。阿難卽ち爲めに具さに因緣を說く。彼れ卽ち言はく、『大德阿難、是くの如きは便ち我れを殺さんとするや』。尋いで卽ち悶絕して地に倒れ、久うして乃ち醒悟す、還た起ちて、手を以て眼を捫し、阿難に白して言さく、『我れ當さに何の方便を作してか、我が覆鉢を解き、還た相往來せんや』。阿難言はく、『汝應さに往いて、衆僧に懺悔すべし』。時に大離奢衆僧に隨順して敢て違逆せず、僧に從つて覆鉢を解き、還た相往來せんことを乞ふ。時に諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『若し大離奢、衆僧に隨順し、敢て違逆せず、僧に從つて覆鉢を解き、還た相往來せんことを乞はゞ、應さに爲めに解くべし、白二羯磨を作せ、衆中羯磨に堪能なるものを差し、上の如く、是くの如き白を作すべし。「大德僧聽け、今僧大離奢の爲めに、覆鉢不相往來を解く、彼れ衆僧に隨順し、敢て違逆せず、僧に從つて解覆鉢不相往來羯磨を乞ふ、若し僧時到らば、僧忍聽せよ」、僧今大離奢の爲めに、解覆鉢還相往來を作す、白せること是くの如し」。「大德僧聽け、僧大離奢の爲め、覆鉢不相往來を作す、彼れ衆僧に隨順して敢て違逆せず、僧に從つて、解覆鉢不相往來羯磨を乞ふ、今僧大離奢の爲めに覆鉢を解き、還た相往來す、誰か長老、僧彼の大離奢の爲めに、覆鉢を解き、還た相往來することを忍するものとは默然せよ、誰か忍せざる者は說け」。僧已に彼の大離奢の爲めに覆鉢を解き、還た相往來することを忍し竟る。僧忍して默然するが故に、是の事是くの如く持つ』。

時に迦留陀夷、阿蘭若處にありて住す、彼れ道路に於て草を燒く、火勢蔓延して、遂に乃ち王波斯匿の鹿苑を燒く。時に居士皆譏嫌して言はく、『沙門釋子慚愧あることなし、衆生の命を斷ず、彼

離奢、沓婆摩羅子清淨なるに、而も無根波羅夷を以て謗ず、若し僧時到らば、僧忍聽せよ、僧今此の大離奢のために、覆鉢不相來往を作すことを、白すること是くの如し」。「大德僧聽け、此の大離奢、沓婆摩羅子清淨なるに、而も無根波羅夷法を以て謗ず、今僧爲めに覆鉢不相往來を作す、誰か諸の長老、僧大離奢の爲めに、覆鉢不相往來を作すことを忍する者は默然せよ、誰か不忍せざるものは說け。僧已に大離奢の爲めに、覆鉢不相往來を作すことを忍し竟る、僧忍して默然するが故に、是の事是くの如く持つ。僧、使を差して大離奢の所に往き、是くの如きの言を語ることを聽す。「僧、汝の爲めに覆鉢不相往來を作す」と。白二羯磨を作すに八法あらば、應さに使を差して往くべし。能く聽き、能く說き、自ら解し、他をして解せしむ、能く受け、能く憶持して謬失なし、好惡の義を別つ、是くの如きの八法あらば、應さに差して僧使と爲すべし。而も偈を說いて言はく、

若し大衆の中に在りて　心に怯弱あることなく　所說亦增さず　教を受けて損減なく　言に錯亂あることなく　問ふ時移動せず　是くの如きの比丘あり　僧使となるに堪任す

阿難、是くの如きの八法あり、差して僧使と爲すことを聽す。彼の大離奢に語るらく、「今僧、汝が爲めに覆鉢不相往來白二羯磨を作す」と。衆中羯磨に堪能なる者を差し、上の如く、是くの如きの白を作す。「大德僧聽け、若し僧時到らば僧忍聽せよ」、僧今阿難を差して僧使と爲し、大離奢の所に往いて語つて言はく、「今僧、汝が爲めに覆鉢不相往來を作す、白すること是くの如し」。「大德僧聽け、僧今和難を差して僧使と爲し、大離奢の所に往き是くの如きの言を作す。「僧今汝の爲めに、覆鉢不相往來を作す」と。誰か長老、僧、阿難を差して僧使と爲す者は默然せよ、誰か忍せざるもの說け」。僧已に、阿難を差して僧使と爲すことを忍す、彼の大離奢の所に往きて語つて言はく、「僧、汝が爲めに、覆鉢不相往來を作し竟る。僧忍して默然するが故に、是の事是くの如く持つ』。爾の時阿難、衣を著け鉢を持ち、彼の大離奢の家に往く。時に大離奢、外門屋下に在りて頭を梳る。遙に阿難の

へ、無根不淨法を以て、此の沓婆摩羅子清淨の比丘を謗ずることなかれ、無根不淨法を以て清淨比丘を謗ずれば、大重罪を得』。時に諸の比丘、世尊の教を聞き、卽ち大離奢のために相詰問す『汝實を說くべし、此の事云何、無根不淨法を以て、沓婆摩羅子を謗ずること莫れ、無根不淨法を以て、清淨比丘を謗ずれば、大重罪を得』。時に諸の大離奢、諸の比丘の詰問を得已りて、便ち是の言を作す。『沓婆摩羅子清淨にして、不淨行あることなし、此れは是れ慈地比丘我れに敎ふるのみ』。諸の比丘聞く。中に少欲知足にして頭陀を行じ、學戒を樂しみ、慚愧を知るものあり、彼の大離奢を譏嫌して言はく『沓婆摩羅子實に不淨行なし、云何ぞ無根不淨を以て謗ずるや』。諸の比丘、世尊の所に往き、頭面に足を禮し、此の因緣を以て具さに世尊に白す。世尊爾の時比丘僧を集め、無數の方便を以て大離奢を呵責して言はく『汝の所爲は非なり、隨順行にあらず、清淨行に非ず、云何ぞ無根不淨法を以て、沓婆摩羅子を謗ずるや』。無數の方便を以て呵責し已りて、諸の比丘に告げたまはく『自今已去、大離奢のために覆鉢を作し、與に往反言語せず、白二羯磨を作せ。白衣の家には五法あり、應さに與に覆鉢を作すべし。父に孝順ならず、母に孝順ならず、沙門を敬せず、婆羅門を敬せず、比丘に供事せず、是くの如きの五法あり、應さに與に覆鉢を作すべし。五法あり、應さに與に覆鉢を作すべからず。何等か五なる。父に孝順に、母に孝順に、沙門を恭敬し、婆羅門を恭敬し、比丘に敬事す、是くの如きの五法あらば、與に覆鉢を作すべからず。復十法あり、衆僧應さに與に覆鉢を作すべし。比丘を罵謗し、比丘の爲めに損減を作し、比丘の前に於て、佛法僧の惡を說き、無根不淨法を以て比丘を謗じ、若しは比丘尼を犯す、是くの如きの十法あらば、僧應さにために覆鉢を作すべし。是くの如く九八七六五四三二一法にて、比丘を罵謗すれば、僧應さに覆鉢を作すべし。是くの如きの一法あるも、僧應さにために覆鉢を作すべし。應さに是くの如く作すべし。衆中應さに羯磨に堪能なる者を差し、上の如く、是くの如きの白を作すべし、『大德僧聽け、此の大

卷の第五十三（第四分の四）

雜揵度の三

爾の時慈地比丘、毘舍離國に來至す。彼れ諸の離奢と親友智識たり、諸の大離奢、慈地比丘の毘舍離に來至すと聞き、卽ち往いて問訊す。慈地比丘答に應ぜず。彼れは言ふ『長老、我れ何の犯す所ぞ、故らに相問訊し、而も答へられざる』。彼れ卽ち答へて言はく『我れ何ぞ汝等と共に語ることを用ふるをせんや、沓婆摩羅子輕慢にして我れを惱ます、而も汝等佐助せられず』。彼れ卽ち言はく、『我れ當さに何の方便を作してか、沓婆摩羅子をして、汝を惱まさゞらしめん』。答へて言はく、汝往いて、佛及び衆僧の大に集まる時を伺ひ、彼れに往いて、是くの如きの言を作せ。『大德、是くの如きの事あらば、不善なり、不隨順なり、非威儀なり、時を得ず。我等は此の處を、淸淨にして安樂なりと謂ひ、恐怖あることなし。而も反つて憂惱を生ず、猶ほ水より火を生ずるが如し。何を以ての故に。沓婆摩羅子我が婦を侵犯す』と。衆僧當さに和合し、ために滅擯を作すべし。是くの如くすれば、則ち來りて我れを惱まさず』。卽ち答へて言はく『此れ何の難きことかあらん』。彼の大離奢、佛と大衆の所に往き、上の如きの言を說く。時に沓婆摩羅子、佛を去ること遠からずして坐す。時に佛知りて故らに問ひたまはく『沓婆摩羅子、汝彼の離奢の語を聞くや不や。答へて言はく、『聞く、唯佛は之を知りたまふ』。佛、沓婆摩羅子に語りたまはく『汝是くの如きの答を作すべからず、實ならば、當さに實なりと言ふべし、虛ならば、當さに虛なりと言ふべし』。時に沓婆摩羅子、佛語を聞き已りて、坐より起ち、偏へに右の肩を露はし、右膝地に著けて、合掌して佛に白して言さく『我れ生れてより已來、未だ曾て夢中にも婬を犯さず、而も況んや覺めてをや』。佛言はく『善い哉善い哉沓婆摩羅子、此れは是れ好答なり』。爾の時世尊、諸の比丘に告げて言はく『汝等彼の大離奢に問

少くすることを得べし。時に世尊默然として聽可したまふ。時に耆婆童子、佛の聽可したまふことを知り、即ち坐より起ちて、前んで佛足を禮し、佛を遶りて去る。時に世尊、此の因緣を以て比丘僧を集め、而かも爲めに方便隨順して說法したまひ、頭陀端嚴少欲知足にして、出離を樂ふものを讚歎したまひ、諸の比丘に告げたまはく、『諸の比丘に、浴室を作りて洗浴することを聽す』。

る。時に翅毘伽尸王あり、此の處に於て、七歳七月七日に大塔を起し已る。七歳七月七日ために大供養し、二部僧を象蔭の下に坐せしめ、第一飯を供す。時に此處を去ること遠からず。一農夫ありて田を耕す。佛、彼の間に往き、一摶泥を取り來りて此處に置いて偈を說いて言はく。

設ひ百千の瓔珞　皆是れ閻浮檀金なるを以てすとも　一摶泥を以て　佛の爲めに塔を起すの勝れるには如かず」設ひ金百千摶　皆是れ閻浮檀金なるを以てするも　一摶泥を以て　佛の爲めに塔を起すの勝れるには如かず」設ひ金百千擔にして　皆是れ閻浮檀金なるを以てすとも　一摶泥を以て　佛の爲めに塔を起すの勝れるには如かず」設ひ金百千抱にして　皆是れ閻浮檀金なるを以てすとも　一摶泥を以て　佛の爲めに塔を起すの勝れるには如かず」設ひ金百千壁にして　皆是れ閻浮檀金なるを以てすとも　一摶泥を以て　佛の爲めに塔を起すの勝れるには如かず」設ひ金百千巖の　皆是れ閻浮檀金なるを以てすとも　一摶泥を以て　佛の爲めに塔を起すの勝れるには如かず」設ひ百千山の　皆是れ閻浮檀金なるを以てすとも　一摶泥を以て　佛の爲めに塔を起すの勝れるには如かず」。

時に諸の比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、皆一摶泥を以て此處に著け、即ち大塔を成す。時に諸の比丘、屋内の臭きを患ふ。佛言はく『應さに灑掃すべし。若し故臭ければ、香泥を以て泥せよ。若し復臭ければ、應さに屋四角に香を懸くべし』。時に世尊、毘舍離に在しき。時に衆僧、大に飲食の供養を得たり。諸の比丘不節にして遂に患を成す。佛言はく『應さに藥を服すべし。彼れ吐下を須ひば、應さに吐下を與ふべし、彼れ粥を須ひば、粥を與へよ、彼れ野鳥の肉を須ひば、應さに與ふべし』。爾の時耆婆童子、衆僧の病を治む、佛及び僧の爲めに、吐下藥を作り、粥及び野鳥肉羹を作る。供足ること能はず。世尊の所に往き、頭面に足を禮し、却いて一面に住し、世尊に白して言さく『大德、諸の比丘病を得、若し諸の比丘に、浴室を作りて、浴することを聽したまはゞ、病を

若しは房舍の時、若しは浴池の時、衆多の僧集會し、處所迮狹にして相容受せず、彼れ畏愼して、敢て塔下に在りて坐食せず、世尊、塔下に在りて坐することを聽したまはず。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『塔下に坐して食することを聽す。汚穢不淨ならしむべからず』。時に諸の比丘、云何せんを知らず。佛言はく、『不淨の衆物を以て脚邊に聚著し、食し已りて持ちて出づることを聽す』。彼れ死屍を以て塔下を過ぐ。佛言はく、『爾すべからず』。彼れ塔下に於て死人を埋む。佛言はく、『爾すべからず』。彼れ塔下に於て死屍を燒く。佛言はく、『爾すべからず』。彼れ塔の四面に於て、死屍を燒き、臭氣をして入らしむ、護塔神瞋る。佛言はく、『塔の四面に於て、死屍を燒き、臭氣をして入らしむべからず』。彼れ死人の衣、若しは床を持ち、塔下より過ぐ。護塔神瞋る。佛言はく、『爾すべからず、彼れ糞掃衣を著く、比丘畏愼して、敢て糞掃衣を持ちて、塔下より過ぎず。「世尊是くの如きの教あり、死人の衣を持つて塔下より過ぐることを聽さず」と。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『若し淨浣染して、香を以て之を熏ずるは聽す』。彼れ塔下に於て大小便す。佛言はく、『爾すべからず』。彼れ塔下に於て楊枝を嚼む。佛言はく、『爾すべからず』。彼れ塔前に於て楊枝を嚼む。佛言はく、『爾すべからず』。彼れ塔の四邊に於て楊枝を嚼む佛言はく。『爾すべからず』。彼れ塔下に於て涕唾す。佛言はく、『爾すべからず』。彼れ塔前に於て涕唾す。佛言はく、『爾すべからず。彼れ塔前に於て、脚を舒べて坐す。佛言はく、『爾すべからず、若し僧伽藍內の塔は、隅、中間に在り、脚を舒べて坐することを聽す』。爾の時世尊、拘薩羅國に在せり。千二百五十の比丘と人間に遊行す。都子婆羅門の村に往き、一異處に到り、世尊笑ひたまふ。時に阿難、是の念を作さく。「今世尊何の因緣を以て笑ひたまふや、世尊は無因緣を以て笑ひたまはず」。偏へに右肩を露はし、革屣を脫し、右膝地に著け、合掌して佛に白して言さく『世尊は無因緣を以て笑ひたまはず、向きに何の故を以て笑ひたまふや、願はくは之を知らんと欲す』。佛、阿難に告げたまはく、『乃往過去世の時、迦葉佛あり、般涅槃し已

龍牙杙上、若しは頭邊に安んじて眠ることを聽す』。時に諸の優婆塞是の念を作さく、『若し世尊、我等に、世尊の現在に及びて塔を起すことを聽したまはゞ、我れ當さに起立すべし』。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『作ることを聽す』。復何物を以て作るかを知らず。佛言はく、『應さに四方、若しは八角、若しは圓に作るべし』。云何が作らんを知らず。佛言はく、『應さに塼、石、若しは木にて作るべし、一切は上の法の如し、乃至地敷も亦上の如し』。彼れ幢を須ふ。佛言はく、『幢を作ることを聽す。若しは師子幢、若しは龍幢、若しは犎牛幢を作れ』。彼の塔の四邊に籬障なし、牛羊踐蹈閡りなし、應さに籬障を作るべし、上の如し』。時に諸の外道の塔廟、常に飮食供養を作す、諸の優婆塞是くの如きの念を作す『今世尊、我れに上好食を送りて、供養することを聽したまはゞ、我れ當さに作すべし』。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『作すことを聽す。上の如し』。誰か當さに此の食を食すべきかを知らず。佛言はく、『塔の作者應さに食すべし』。時に諸の外道、常に外道の塔廟を莊嚴し、供養す。諸の優婆塞是くの如きの念を作す『若し世尊、我等に、世尊の塔を莊嚴し、供養することを聽したまはゞ我れ當さに作すべし』。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『作すを聽す。上の如し。彼れ世尊の塔内に在りて宿す。佛言はく、『爾すべからず』。彼れ塔を守るが爲めの故に、畏愼して敢て塔内に在りて宿せず。佛言はく、『若し守視の爲めには、内宿を聽す』。彼れ塔内に於て、物を藏す。佛言はく、『爾すべからず。彼れ堅牢の爲めの故に、塔内に於て物を藏せんと欲し、而も畏愼して敢てせず』。佛言はく、『聽す』。彼れ革屣を著けて塔内に入る。佛言はく、『爾すべからず』。彼れ革屣を捉りて塔内に入る。佛言はく、『爾すべからず』。彼れ革屣を著けて、塔を旋りて行く。佛言はく、『爾すべからず』。彼れ富羅を著けて塔内に入る。佛言はく、『爾すべからず』。彼れ富羅を捉りて塔内に入る。佛言はく、『爾すべからず』。彼れ畏愼して、敢て富羅を著けて、塔外を旋りて行かず。佛言はく、『聽す』。彼れ塔下に於て食して汚穢す。佛言はく、『塔下に食すべからず』。時に諸の比丘、塔を旋る時、

繒綵、若しは鉢肆酖嵐衣、若しは頭々羅衣裏に盛るべし。時に王子瞿婆離將軍あり、西方に往いて征討する所あらんと欲し、來りて世尊の鬚髮を索む。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『與ふることを聽す』。彼れ得已りて、云何が安處せんを知らず。佛言はく、『金塔中、若しは銀塔、若しは寶塔、若しは雜寶塔、繒綵、若しは鉢肆酖嵐婆衣、頭々羅衣裏に安んずることを聽す』。云何が持たんを知らず。佛言はく、『象馬車乘、若しは輦轝、若しは頭上、若しは肩上に擔ふことを聽す』。時に王子、世尊の髮を持、所往に去り、征討して勝を得たり。時に彼の王子國に還り、世尊の爲めに髮塔を起す、此れは是れ世尊在世時の塔なり。時に諸の比丘是くの如きの言を作す。『若し世尊、我等に世尊の髮を擔ひて行くことを聽したまはゞ、我等當さに持ち行くべし』。諸の比丘、佛に白す。佛言はく『聽す』。云何が安處せんを知らず。佛言はく、『金塔若しは銀塔、若しは寶塔、若しは雜寶塔、若しは鉢肆酖嵐婆衣、若しは頭々羅衣裏に安著することを聽す』。云何が持ち行かんを知らず。佛言はく、『象馬車乘輦轝、若しは肩上、若しは頭上に擔戴せよ』。彼れ腋下に、世尊の塔を挾む、佛言はく、『爾すべからず』。彼れ反抄衣、纏頸、裹頭、通肩被衣、若しは革屣を著けて、世尊の塔を擔ふ。佛言はく『爾すべからず』、應さに偏へに右肩を露はし、革屣を脱し、若しは頭戴し、若しは肩上に、世尊の塔を擔ひて行くべし』。彼れ世尊の塔を持ち。大小便處に行く。佛言はく、『爾すべからず、應さに清淨に持つべし』。彼れ大小便處を洗はずして、世尊の塔を持つ。佛言はく、『爾すべからず、淨者をして持たしむべし』。彼れ如來の塔を安んじて、不好房中に置き、己れ上好房中に在りて宿す。佛言はく、『爾すべからず、應さに如來の塔を安んじて上好房中に置き、己れは不好房中に在りて宿すべし。』彼れ如來塔を安んじて下房に置き、己れ上房に在りて宿す。佛言はく、『爾すべからず、應さに如來の塔を安んじて上房に在り、己れ下房中に在りて宿すべし』。彼れ如來塔と共に同屋に宿す。佛言はく、『爾すべかず』。彼れ守護堅牢の爲めの故に、而も畏愼して敢て共に宿せず。佛言はく、『杙上、若しは

に擔戴することを聽す、若し傾倒せんと欲せば、應さに擔持すべし』。彼れ自ら伎を作して供養す。彼佛言はく、『爾すべからず』。彼れ畏愼して、敢て白衣をして伎供養を作さしめず。佛言はく、『聽す』。彼れ聲聞塔を拂拭せんと欲す。佛言はく、『應さに多羅樹葉、摩樓樹葉、若しは孔雀の尾を以て拂拭すべし』。彼れ大に華あり、塔基上、若しは欄上、若しは龍牙杙上、若しは嚮中に著け、若しは繩貫して、屋簷の前に懸くることを聽す。若し多く香泥あらば、手像、輪像、魔醯多羅像を作り、若しは藤像*を作り、若しは葡萄蔓像を作り、若しは蓮華像を作ることを聽す。若し故餘あらば、應さに地に泥すべし』。

爾の時世尊、王舍城に在しき。時に世尊を恭敬するが故に、敢て佛のために剃髪する者なし。正しく一小兒あり、無知にして畏るゝ所あらず、佛の爲めに剃髪す。時に小兒を優波離と字づく、佛の爲めに剃髪す。其の父母世尊の前に在り、合掌して白して言さく、『優波離小兒、世尊の爲めに剃髪す、好しとせんや不や』。佛言はく、『善能剃髪なり。乃ち身をして安樂ならしめて、太だ身を曲ぐ』。父母卽ち語りて言はく、『汝太だ身を曲げて、世尊をして安ぜざらしむる莫れ』。復佛に問うて言さく、『小兒の剃髪好きや不や』。佛言はく、『善能剃髪なり而も身太だ直なり』。父母語りて言はく、『汝太だ直身にして、世尊をして安んぜざらしむる莫れ』。復佛に白し言さく、『小兒の剃髪好きや不や』。佛言はく、『善能剃髪なり、而も入息太だ麁なり』。父母語りて言はく、『汝麁に入息し、佛をして安んぜざらしむる莫れ』。復佛に白して言さく、『小兒の剃髪好きや不や』。佛言はく、『善能剃髪なり、而も出息太だ麁なり』。父母語りて言はく、『汝麁に出息して、佛をして安んぜざらしむる莫れ』。時に小兒優波離、入出息盡きて第四禪に入る、爾の時世尊、阿難に告げて言はく、『優波離已に第四禪に入る、汝彼の手中の刀を取れ』。阿難敎を受けて、卽ち刀を取る。是の時阿難、『故盛髮器を持ち、世尊の髮を收む。佛言はく、『故器を以て、如來の髮を盛るべからず、應さに新器を用ひ若しは新衣、若しは新

*三本は籐に作る。

ることを聽す』。彼れ緣上に上り、蓋を安んじ、供養す。佛言はく、『爾すべからず、應さに餘の方便を作して、蹬上して蓋を安んずべし』。彼の塔の露地の、華香燈油幡蓋妓樂供養の具、雨漬風飄日曝塵土坌、及び烏鳥の不淨にて汚す』。佛言はく、『種々の屋覆を作ることを聽す、一切作屋の所須は、應さに與ふべし。若し地に塵あらば泥すべし。若しは黑泥、牛屎泥なり、若し白を須ひんには、石灰泥、白墠土泥を以てせよ』。彼れ洗足器を須ふ。『應さに與ふべし』。石を須ひて通行を作る。佛言はく、『作ることを聽す』。彼れ地敷を須ふ。『與ふることを聽す』。時に外牆障なし、牛馬入りて限りなし。佛言はく、『牆を作ることを聽す。若し門を須ひんには、作ることを聽す』。時に舍利弗、目連の檀越、是くの如きの念を作す『彼の二人存在の時、我れ常に飲食を供養す、今已に涅槃す、若し世尊、我等に上美の飲食を、塔に供養することを聽し給はば、我れ當さに送るべし』。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『供養することを聽す』。何の器を用ひて食を盛るかを知らず。佛言はく、『金銀鉢、寶器、雜寶器を用ふることを聽す』。云何が持ち往かんと知らず。佛言はく、『象馬車乘に載せ、若しは舁ぎ、若しは頭戴し、若しは肩擔することを聽す。時に諸の比丘、自ら伎を作し、若しは貝を吹いて供養す。佛言はく、『爾すべからず。』彼れ畏愼して、敢て白衣をして、伎供養を聽さしめず。佛言はく、『聽す』。彼れ塔を供養する飲食、誰か應さに食すべきかを知らず。佛言はく、『比丘、若しは沙彌、若しは優婆塞、若しは經營作者、應さに食ふべし』。時に舍利弗。目連の檀越是の念を作す『佛我等に、塔を莊嚴し、供養することを聽したまはゞ、我れ當さに作すべし』。佛言はく、『聽す』。彼れ華香瓔珞伎樂幢幡燈油高臺車を須ふ。佛言はく、『作ることを聽す』。彼れ形像を作らんと欲す。佛言はく、『作ることを聽す』。彼れ云何が舍利弗を安ぜんかを知らず。應さに金塔中に、若しは銀塔、若くは寶塔、若しは雜寶塔に安んずべし、若しは繒綿を以て裹み、若しは鉢肆酰嵐婆衣を以て、若しは頭々羅衣を以て裹む。復云何が持ち行かんを知らず。佛言はく、『象馬車乘輦轝に馱載し、若しは肩上、頭上

べきも、而も法を聽かざるや、自今已去、一切蒜を噉ふべからず』。爾の時舍利弗風を病む。醫、蒜を服せしむ。佛言はく、『服することを聽す』。時に比丘あり、背に物を負うて行く。諸の居士、見て皆譏嫌す『沙門釋子猶ほ白衣の如し、背に物を負うて行く』と、皆慢心を生ず。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『背に物を負うて行くべからず』。時に諸の比丘、薪若しは染草、牛屎、𦁤紵を須ふ、自ら擔持せんと欲す。佛言はく、『人なき處は擔ふことを聽す、若し白衣を見れば、應さに下して地に着くべし、若しは肩上に移せ』。時に比丘あり、[一三]伊梨阿若にして衣を着く。諸の居士、見て皆譏嫌して言はく『我が白衣の如く、是くの如くにして衣を着け、物を擔ふ』と皆慢心を生ず』。佛に白す。佛言はく、『是くの如くにして衣を着くべからず、亦背に物を負うて行くべからず』。時に諸の比丘、寺內に於て甃石材木を聚集す。彼れ畏愼して、敢て背負して移徙せず。佛に白す。佛言はく、『寺內の背負を聽す』。時は舍利弗、目連般涅槃し已る。檀越あり、是くの如きの言を作す。『若し世尊、我等に、是れが爲めに塔を起すことを聽したまはゞ、我れ當さに作るべし』。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『作ることを聽す』。彼れ云何が作らんを知らず。佛言はく、『四方に作れ、若しは圓に、若しは八角に作れ』。何物を以て作らんを知らず。佛に白す。佛言はく、『石、甃、若しは木を以て作ることを聽す、已らば應さに泥すべし』。何等の泥を用ひんを知らず。佛言はく、『黑泥、若しは𦾔泥若しは牛屎泥を用ひ、若しは白泥を用ひ、若しは石灰、若しは白墡土を用ふることを聽す』。彼れ塔基を作らんと欲す。佛言はく、『作ることを聽す』。彼れ華香供養せんと欲す。佛言はく、『四邊に欄楯を作り、華香を安んじて上に着くべし』。彼れ幡蓋を上げんと欲す。佛言はく、『幡蓋物を安懸するとを聽す』。彼れ塔に上る。護塔神瞋る。佛言はく、『上るべからず。若し上りて取る所あるべくんば、上ることを聽す』。彼れ欄上に上る。護塔神瞋る。佛言はく、『上るべからず、若し上る取る所あるべきは、上ることを聽す』。彼れ杙上、龍牙上に上る。佛言はく、『爾すべからず、若し上る取る所あるべきは、ために上

【一三】伊梨阿若は、名義標釋には、白衣の物を擔ふ着衣の如しとある、毘尼母經の、六群比丘の泥洹僧を背上に抄し、重きを荷ひ低頭して行くの文を引き、佛の襞抄を禁じ給ふことを言つて居る、若し然らば、これは衣の種類ではなく、つまり尻をからげて行くごとで、之がために身體露現して不體裁なることを、諸居士に笑はれた意の樣である。

時、說戒の時、熱を患ふ。佛言はく、『大扇を作り、若しは轉關扇車を作ることを聽す』。誰か推さんを知らず。佛言はく、『比丘、若しは沙彌、若しは守園人、若しは優婆塞の推すことを聽す』。時に六群比丘、[三]毛㲪を織りて扇を作り、多く細蟲若しは草を殺す。時に諸の居士見て皆譏嫌して言はく、『沙門釋子慚愧あることなし、衆生の命を害し、自ら稱して我れ正法を知るといふ、㲪扇を捉りて衆生の命を害す、是く如くにして、何ぞ正法あらん』。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『是くの如きの㲪扇を畜ふべからず』。時に諸の比丘、蟲、草、塵、露の、身上に墮つるを患ふ。佛言はく、『拂を作ることを聽す』。云何が作らんを知らず、佛言はく、『草若しは樹皮、葉を以て、縷綖を以て作ることを聽す』。若しは緒帛を裁碎して作る。時に比丘あり、尾拂を得たり。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『畜ふることを聽す』。

爾の時世尊、王舍城に在しき。時に優波離、諸の比丘と共に法律を論ず。時に諸の比丘共に來りて戒を聽く。坐處迮狹にして、相容受せず。佛言はく、『相降三歳は、共に木床に坐することを聽す、相降二歳は、共に小繩床に坐することを聽す。新學年少の比丘は、事數の相涉ることを解せず、算子を用ひて記數することを聽す』。彼れ寶を用ひて作る。佛言はく、『寶を用ふべからず、骨牙角銅鐵鉛錫白鑞木を用ひて作ることを聽す』。彼れ地に安置して手を汚す。佛言はく、『地に置くべからず、應さに板上の安んずべし』。彼れ板に安んじ、地に置き已りて、復膝上に安んず、衣を汚す。佛言はく、『爾すべからず、應さに脚を安んじて机を作るべし』。彼れ算子の零落を患ふ。『囊を作りて盛ることを聽す』。繫がず、口より出づ。『繩を以て繫ぐことを聽す』。杙上、龍牙杙上に安んず。

爾の時世尊、祇洹園中に在しき。無數百千衆のために圍遶せられて法を說きたまふ。時に比丘の蒜を噉ふものあり、佛に遠ざかりて住せり。時に世尊、知りて故らに阿難に問ひたまふ、『此の比丘何が故に遠く住する』。阿難言はく、『此の比丘蒜を噉ふ』。佛言はく、『阿難、寧ろ是くの如きの味を食る

【三】㲪は字書に、羽翼の飾ふ貌とある、羽毛のモヤ〳〵と多い形容であらう。音義にも、通俗文に、毛の茂る之を毶㲪といふとある。

恐怖して道を避けて去り、遠からずして、乃ち是れ跋難陀なることを知る。皆共に譏嫌して言はく、『沙門釋子厭足を知らず、慚愧あることなし、自ら稱して、我れ正法を知ると言ふ、是くの如きは、何ぞ正法あらん』。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『爾すべからず、亦是くの如きの杖絡囊を畜ふべからず』。時に老病の比丘、道を行きて地に倒る。佛言はく、『老病は杖を捉ることを聽す』。杖下の頭盡くるを患ふ、『鐏を作ることを聽す』。彼れ寶を用ふ。佛言はく、『寶を用ふべからず、骨牙角白鑞鉛錫を用ひて作ることを聽す。若し頭破るれば、亦是くの如き等の物を用ひて作ることを聽す』。時に六群比丘、空中杖を畜ふ。時に諸の居士、皆共に譏嫌して言はく、『沙門釋子厭足を知らず、慚愧あることなし、自ら我れ正法を知ると稱し、乃ち空中杖を持つこと、王大臣の如し、是くの如きは、何ぞ正法あらん』。時に諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『爾すべからず』。諸の比丘、道に行きて、蛇蠍蜈蚣百足を見る、未離欲の比丘、皆怖れて佛に白す。佛言はく、『錫杖を捉りて搖かすことを聽す、若しは筒に碎石を盛り、搖かして聲を作さしめ、若しは破竹を搖して聲を作さしむ』。時に六群比丘、正大の圓扇を捉る。諸の居士、見て皆譏嫌して言はく、『沙門釋子厭足を知らず、慚愧あることなし、自ら稱して我れ正法を知ると言ふ、大圓扇を捉ること王大臣の如し、是くの如きは何ぞ正法あらん』。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『爾すべからず』。彼れ已成の者を得、疑つて敢て受けず、佛に白す。佛言はく、『受けて塔に與ふることを聽す』。時に諸の比丘、道に在りて行く、熱を患ふ、佛に白す。佛言はく、『樹葉若しは杖、若しは草、十種中の一々の衣を以て、扇を作ることを聽す』。時に六群比丘、皮扇を捉る。佛言はく、『畜ふべからず。六群比丘、縱横の十木に、皮を以て上に縵し、扇を作る』。佛言はく、『畜ふべからず』。時に諸の比丘の扇壞る。佛言はく、『樹皮を以て、若しは葉にて補ひ、若しは皮にて補ふことを聽す、若し墮つれば、綖にて縫ふべし、若し綖斷ずれば、應さに筋綖を以て縫ふべし、若し邊壞るれば、應さに皮を以て纏ふべし』。時に諸の比丘、大小食上、若しは夜集の

【二】鐏は、音義に、說文には、「金銀を以て覆ふ所あり」とあるといふ、蓋し杖の端の減らない樣に、金類で包むのをいふのである。

革屣を脫し、上座の前に至らば、小しく身を曲め、合掌して是くの如きの言を白すべし。「我れ白す所あらんと欲す」。上座應さに答へて言ふべし、「如法如律に說け」と』。時に跋難陀、道に在りて行くに、好大圓蓋を持つ。諸の居士遙に見て、是れ王か若しは大臣かと謂ひ、恐怖して道を避けて去る。彼れ遠からずして諦視し、乃ち是れ跋難陀なることを知る。卽ち皆譏嫌して言はく、『沙門釋子多欲にして厭くことなし、自ら稱して、我れ正法を知るといふ、而も大好圓蓋を持ち、道に在りて行く、猶ほ王大臣の如し、我等をして、恐怖して道を避けしむ、是くの如きは、何の正法かあらん』。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『比丘圓蓋を持つて、道に在りて行くべからず、亦畜ふべからず』。時に諸の比丘、天雨の時、大食上、小食上に往く。『若しは夜集の時、布薩の時、雨、衣を漬し、新染色壞す』。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『護衣の爲めの故に、寺內に在りて、樹皮、若しは葉、若しは竹にて蓋を作ることを聽す』。彼れ蓋竿を須ふ。佛言はく、『作ることを聽す』。彼れ寶を用ひ作る。佛言はく、『寶を用ひて作るべからず、骨牙角白鑞鉛錫木を以て作ることを聽す』。彼れ蓋子を須ふ、佛言はく、『作ることを聽す』。彼れ寶を用ひて作る。佛言はく、『寶を用ひて作るべからず、骨乃至木を用ひて作ることを聽す』。彼れ[九]蓋宏を須ふ。佛言はく、『與ることを聽す』。彼れ寶を用ひて作る。佛言はく、『寶を用ふべからず、骨乃至木を用ひて作ることを聽す』。彼れ覆を作り、頂を蓋はんと欲す。『多羅樹葉摩樓樹葉皮を用ひて覆ふことを聽す、若し四邊の壞るゝを患へば、重疊することを聽す』。彼れ葉竿を須ふ。佛言はく、『作ることを聽す』。彼れ寶を用ひて作る。佛言はく、『寶を用ひて作るべからず、骨牙角乃至木を用ひて作ることを聽す。彼れ蓋竿の長きを作り、門中に入出することを得ず』。佛言はく、『應さに倂脫して作るべし、若し蓋竿の脫するを患へば、應さに孔を作りて、[一〇]揭を安んじ、若しは折り、若しは曲ぐべし。鐵を以て揭頭を作り、鎖を作りて繫ぐべし』。時に跋難陀釋子、盛鉢絡囊の中を、杖頭を貫き、肩に荷うて行く。時に諸の居士見て、是れ王の家人の來るを謂ひ、

【九】宏は、欄なりとしてある、蓋の緣か。

【一〇】揭は、音義に、音は竭、正しくは樑に作るとある、古來の釋には、揭は杙或は栓なりと註して居る。

す。佛言はく、『是くの如きの處に在りて大小便し、人をして疑を生ぜしむべからず、亦池水上に在りて洗ふべからず』。爾の時跋難陀釋子、暮に向つて白衣の家に至り、内に在りて坐し、須臾にして便ち出で、主人に語らずして去る。時に賊、白日共の家を伺ひ、暮に門の開くに遇ひ、便ち入りて共の家を劫奪す。家主問うて言はく、『誰か暮に門を開いて出で去るや』。家人答へて言はく、『是れ跋難陀釋子なり』。時に諸の居士皆譏嫌して言はく、『沙門釋子慚愧あることなし、自ら稱して我れ正法を知るといふ、乃ち賊と共期して、來りて我が家を劫かす、是くの如き、何ぞ正法あらん』。時に諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『暮に向つて、白衣の家に至るべからず』。時に諸の比丘、佛事法事僧事塔事病比丘事の爲めに、若しは檀越暮に逼つて比丘を喚ぶ、比丘疑つて敢て往かず。佛言はく、『是くの如き事あれば、應さに往くべし』。時に跋難陀釋子、意、女人の爲めに說法せんと欲す。彼の女人察知して卽ち語りて言はく、『汝何ぞ自ら說法を爲さゞる』と。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『欲意を以て說法すべからず』。時に六群比丘、女人のために卜占す。佛言はく、『爾すべからず』。時に六群比丘、他と共に物を賭く。佛言はく、『爾すべからず』。彼れ物を得て、便ち取る。佛言はく、『爾すべからず』。六群比丘、共に手を携へて、道に在りて行き、他を撥いて地に倒れしむ。諸の居士見て、皆共に譏嫌して言はく、『沙門釋子慚愧を知らず、厭足あることなし、自ら言ふ我れ正法を知ると、共に手を携へて道に在りて行くこと、王大臣の如し。是くの如き何ぞ正法あらん』。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『爾るべからず』。時に諸の比丘、道路を行く、人あり革屣、盛油華瓶を施す、諸の比丘疑つて敢て受けず。佛言はく、『受くることを聽す』。時に六群比丘、息物を出す。佛に白す。佛言はく、『爾すべからず』。時に六群比丘、他より息物を擧ぐ。佛に白す。佛言はく、『爾すべからず』。時に六群比丘、他と共に鬪諍し、衣を反抄し、衣を頸に纒ひ、頭を裹み、通肩に衣を被、革屣を着け、上座と共に語る。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『爾すべからず』、應さに偏へに右肩を露はし、

【八】賦は、音義に言はく、「賭なり」と、物をかけて、勝負を爭ふことである。「物を得る」とは、賭けて勝ち、得たる所の物を取ることである。

さず、還く咽むことを得。時に祇洹中に鳥あり、鵄鵲あり、聲を作し、諸の坐禪の比丘を亂す。佛言はく、『應さに聲を作し、驚かして去らしむべし、若しは彈弓、打木して去らしめよ』。時に諸の比丘、夜集に布薩處に往き、闇を患ふ。佛言はく、『執炬を聽す。若し坐處復闇ければ、然燈を聽す』。彼れ然燈器を須ふ。『與ふることを聽す』。油を須ふ。燈炷を須ふ。『與ふることを聽す。若し明かならざれば、高く炷を出せ、若し油手を汚さば、箸を作ることを聽す。若し箸の火燒することを患へば、鐵箸を作ることを聽す。若し燈炷の臥すことを患へば、炷の中央に、鐵杜を安んずることを聽す』。若し故明かならざれば、大に炷を作ることを聽す、若し皮故闇ければ、應さに室の四角に燈を安んずべし、若し復明かならざれば、應さに轉輪燈を作るべし、若し故明かならずんば、應さに室の四周に、燈を安んずべし、若しは燈樹を安んじ、若しは瓶を以て水を盛り、油を安んじて上に著け、布裹芥子を以て炷を作り之を然やせ。爾の時毘舍佉無夷羅母、人を遣はして六種の物を送る、獨坐禪床、火爐、燈籠、掃帚、扇斗なり。諸の比丘受けず、佛に白す。佛言はく、『受くることを聽す。餘は斗は受くべからず』。時に比丘あり、勇猛と字づく、婆羅門の出家なり、世尊の所に往き、頭面に足を禮し、却いて一面に坐し、世尊に白して言さく、『大德、此の諸の比丘、衆姓の出家にして、名字も亦異なり、佛の經義を破す、願はくは世尊、我等に世間の好言論を以て、佛經を修理することを聽したまへ』。佛言はく、『汝等癡人、此れは乃ち是に毀損なり』、外道の言論を以て、佛教に雜糅せんと欲す。佛言はく、『國俗言音の所解に隨つて、佛經を誦習することを聽す』。爾の時比丘あり、拘薩羅國に、道にありて行く、一屛處に至り、大小便利せんと欲す。時に女人あり、亦屛處に至り、大小便せんと欲す。此處を去ること遠からず、池水あり、時に彼の比丘、彼の池水に往いて洗ふ、彼の女人も亦、彼の池水上に至りて洗ふ。時に諸の居士見て、是くの如きの言を作す。『此の比丘、彼の間より出で自ら洗ふ、女人も亦爾なり、比丘必ず此の女人を犯す』こ。諸の比丘、聞いて佛に白

し』。諸の比丘、佛に白す。佛言はく『二人同鉢を食すべからず』。時に比丘、一器を共にして飯を盛る。佛言はく『餘器中に分ち、別に食ふべし。若し別器なければ、食時に半ばを留め。彼れに與へて食せしむることを聽す』。若し日時過ぎんと欲すれば、一人一摶を取りて、食し已りて、彼の人に授與し、食を取らしむることを聽す』。時に六群比丘、亞臥して、案上に枕して食す。時に諸の居士見て皆共に譏嫌して言はく『沙門釋子慚愧を知らず、自ら稱して我れ正法を知ると言ふ、是くの如きは何の正法かある、亞臥して食す、王大臣に如似す』。諸の比丘、佛に白す。佛言はく『爾すべからず』。時に諸の上座の老病の比丘、自手にて鉢を捉りて食ふこと能はず』。繩床、木床の角頭に著け、若しは瓶上に安んずることを聽す』。時に六群比丘、繩床、木床の上に於て立つ、床繩斷じて、褥をして破れしむ。諸の比丘、佛に白す。佛言はく『爾すべからず、若し比丘、所取あり、所擧あらんと欲すれば、床梐の上に立つことを聽す』。時に諸の外道、大繩床に、小繩床を作りて畜ふ、六群比丘、外道に法り、是くの如く繩床を畜ふ、諸の比丘、佛に白す。佛言はく『爾すべからず』。迦留陀夷身大なり、浴室中の床小にして受けず、彼れ疑つて、敢て外の大床を取らず、小床を作りて浴す』。佛に白す。佛言はく『浴室の中に、大小の床を安んじて浴することを聽す』。時に六群比丘、白衣の器、耕犂若しは撈を畜ふ。佛に白す。佛言はく『畜ふべからず』。彼れ寶澡罐、澡盤を畜ふ。佛言はく『畜ふべからず』。時に比丘あり、耶波徒と名づく、或は諸の外道、若しは火、若しは日月、若しは不語道、種々の外道の法に禮事す。諸の比丘、佛に白す。佛言はく『餘の種々の外道の法に事ふべからず』。爾の時比丘あり、阿蘭若處に在りて呞食す。餘の比丘語りて言はく『汝非時食を犯す』。彼に言はく『我れ非時食を犯さず、我れ呞するのみ』。諸の比丘、佛に白す。佛言はく『此の比丘適ま牛中より此に來生す、若し是れ爾せざれば、久しく活くることを得ず。若し餘の比丘、是くの如きの病なれば、是の如くにして以て、便ち身に患ひなしと爲す。哯食して出で、未だ口より出

【五】撈は、音義に『說學云く、關中にては磨と名づけ山東にては撈と名づく、棘を編みて之を爲す、以て塊を平かにす』とある。

【六】呞は、音義に『食し已りて、複出して之を嚼むなり』とあり、牛の如く反芻するのである。

【七】哯食は、音義に『吐出也』とある。

て火を出すことを聽す』。

爾の時世尊、舍衛國に在しき、六群比丘、雜蟲水を用ふ。諸の居士見て皆共に譏嫌す『沙門釋子慈心あることなし、衆生の命を斷ず、自ら稱して我れ正法を知るといふ、是くの如きは何ぞ正法あらん』。諸の比丘、佛に白す。佛言はく『雜蟲水を用ふべからず、漉水嚢を作ることを聽す』。云何が作るを知らず。佛言はく『勺形の如く、若しは三角とし、若しは横郭に作り、若しは漉瓶を作る。若しは細蟲の出づるを患ふ。砂を嚢中に安んずることを聽す』。彼れ雜蟲沙を以て、陸地に棄つ。佛言はく『爾すべからず、還た水中に安著することを聽す』。時に二比丘あり、共に鬪ふ、拘薩羅國に在りて行く。一比丘漉水嚢を持ち、水を漉して飮む、其の一伴比丘、從つて嚢を借る、與へず、遂に水を飮むことを得ず、患ひ極まる。諸の比丘、佛に白す。佛言はく『有るものは、應さに與ふべし、比丘、漉水嚢なくして、行くこと乃至半由旬なるべからず、若し無ければ、應さに僧伽梨の角を以て、水を漉すべし』。爾の時世尊、婆祇提國に在しき。時に六群比丘二人、同床に宿す。餘の比丘見て、女人と共に宿すと謂へり、後に起きる時、乃ち女人に非るを知る。諸の比丘、佛に白す。佛言はく『二人同床に宿すべからず』彼れ疑ひ、病人と同床せず。佛言はく『病人と同床に臥すことを聽す』。爾の時世尊婆祇提國に在しき。六群比丘二人被褥を同じくして臥す。餘の比丘見て、女人と共に臥すと謂へり、後に起きる時、方さに女人に非ることを知る。諸の比丘、佛に白す。佛言はく『二人被褥を同じうして臥すべからず』。時に諸の比丘、正さに一敷あり、若しは草、若しは葉なり。佛言はく『此の敷上に、各別に臥氈を敷いて臥すことを聽す』。寒時正さに一被あり『内に各別に襯衣を被、外は通じて覆ふことを聽す』。爾の時世尊、舍衛國に在しき。時に六群比丘、一鉢を同じうして食す。時に諸の居士、見て皆共に譏嫌して言はく『沙門釋子慚愧を知らず、自ら我れ正法を知ると稱す、是くの如きは、何の正法かある、二人一鉢を同じうして食す、猶ほ王大臣の如

鐵乃至竹木を用ひて作ることを聽す』。針の筒口より出づるを患ふ。佛言はく『蓋を安んじて塞ぐべし』。彼れ寶を用ひて作る。佛言はく『寶を用ひて作るべからず、銅鐵乃至竹木を用ひて作ることを聽す。若し針、[四]鉎せば麨中に著くべし。若し故鉎を患へば、隨つて餘物に著け、取りて難ぜざらしめよ』。時に諸の比丘、針筒刀子、納を碎き、縷綖の零落することを患ふ。佛言はく『嚢を作りて盛ることを聽す。若し此の諸物、口より出づれば應さに繩を繫ぐべし。若し手に捉りて護し難ければ、應さに帶を作りて、絡して肩に著くべし』。時に比丘、鐵鉢穿破す。佛言はく『補ふことを聽す、若しは著釘、若しは朱泥、若しは樹膠を以て膠せよ』。蘇摩鉢穿壞す。佛言はく『胡膠を以て塞ぐことを聽す。若しは石灰、若しは白墡土なり』。迦羅黑鉢破る。『應さに鑽にて孔を作り、針を以て縷綴すべし』。彼れ鑽を須ふ。佛言はく『作ることを聽す』。彼れ寶を用ひて作る。佛言はく『寶を用ふべからず、銅鐵を用ふることを聽す。若しは縷綖の斷ずるを患ふ。應さに筋を用ひ、若しは牛馬の尾毛を用ふべし。若しは蟲の筋綖を噉ふを患へば、應さに胡膠を以て上を膠すべし。若しは食若しはく水の內に入るを患へば、亦胡膠を以て之を膠すべし。若し復壞るゝを患へば、鐵鍱を以て鍱せよ』。

爾の時世尊、王舍城に在しき。諸の比丘、阿蘭若處に於て、火珠を以て火を出す、賊あり、珠を以ての故に、來りて比丘を觸惱す。諸の比丘、佛に白す。佛言はく『阿蘭若處にありて、火珠を以て火を出すべからず』。時に諸の比丘、火を須ふ。佛言はく『比丘、阿蘭若處に於て、火術を作して火を出すことを聽す。火母木を須ひて、作すことを聽す、鑽火子を須ひて、作すことを聽す』。彼れ繩を須ふ。『所須の物は、一切與ふることを聽す』。彼れ鑽火具の零落するを患ふ。『嚢を作りて盛ることを聽す』。安處なし、濕ふことを患ふ。『牀下若しは龍牙杙上に懸著するを聽す』。彼れ何物を以て、火を承くるかを知らず。『應さに草、若し糞、芻麻、若しは麻翅耆草を以てし、若しは牛馬の屎を以て火を取るべし』。時に比丘、數々火を鑽り、手を破り痛を患ふ。佛言はく『屛處に於ては、火珠を以

【四】鉎は字書に音「生」とあるが、意味は「鏉巳」とある、鏉は音瘦とある、也鏽は銑上衣なりとある、蓋し錆のことである。

物を以て縫ふかを知らず。佛言はく『鳥毛若しは簪を以て縫ふことを聽す、若し衣細軟にして壞るゝ衣は、針にて縫ふことを聽す』。彼れ寶を以て針を作る。佛言はく『爾すべからず、銅鐵を以て作ることを聽す』。針にて衣を縫ふに指痛を患ふ。佛言はく『揩彼を作ることを聽す』。寶を以て指揩を作る。佛言はく『爾すべからず、銅、鐵、骨、牙、角、鉛、錫、白鑞、胡膠、木を用ひて作るのとを聽す』。彼れ衣を縫ふ時、曲ることを患ふ。繩墨拼して直らせしむることを聽す。彼れ絣縷を須ふ。佛言はく『與ふべし』。彼れ染縷を用ひて衣を絣せんと欲す、石灰、若しは赤赭土、若しは白墠、若しは墨、若しは雌黄を須ふ。一切與ふることを聽す。若し中央不定ならば、應さに尺度を以て量るべし』。彼れ寶を以て尺度を作る。佛言はく『寶を以て作るべからず、銅鐵を以て、乃至木を以て作るべし』。彼れ衣を張りて地に著き、縫塵衣を坌す。佛言はく『泥漿を以て地に灑ぎ已りて張るを聽す』。彼れ衣を縫ふ時、鋮、衣を刺して壞る。佛言はく『爾すべからず』。彼れ賒婆羅草上に於て、衣を敷いて縫ひ、草、衣に著く。佛言はく『爾すべからず』。彼れ衣を、草上、葉上に敷き、草葉を合せて縫ふ。佛言はく『爾すべからず。十種衣中の一々の衣、若しは伊梨延陀、氀羅、氀々羅、毛氈敷上にて縫ふことを聽す』。彼の比丘、繩墨拼綖、尺度、縷綖、針、刀子、補衣物の零落を患ふ。佛言はく『囊を作りて盛ることを聽す』。彼れ衣桄を擧げず、雨漬す。佛言はく『收擧すべし。何の處に擧げんを知らず』。佛言はく『經行堂中、若しは溫室、食堂中に安著するを聽す。張衣の桄、大にして戶受けず、入ることを得ず。應さに外の雨なき處に置け、若し風雨飄漬せば、應さに高く懸くべし』。彼れ衣を補ひ竟り、衣を解いて、餘木を取りて擧げず。佛言はく『擧ぐべし』。何處に安著せんを知らず。佛言はく『閣下若しは床上に安著せよ』。彼れ繩索を擧げず。佛言はく『應さに著衣桄に捲繫して之を擧ぐべし』。時に諸の比丘、針の零落を患ふ。佛言はく『針氈を作ることを聽す』。故零落を患ふ。『筩を作ることを聽す』。彼れ寶を用ひて作る。佛言はく『寶を用ひて作るべからず。銅

【三】揩彼は、縮刷には「彼揩」とある、之を正しとする。「彼の揩」であらう。揩は字書に縫指の揩とあり、日本で言ふ「指抜き」のことで、針を押して刺すための指環の如きものである。

るを知るべし。云何ぞ王の菓を食ひ盡す』。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『菴婆羅菓を食ふべからず』。爾の時、比丘乞食し、菴婆羅菓の汁を得たり。佛言はく、『飮むことを聽す』。彼れ成煮菴婆羅菓を得たり。佛言はく、『食ふことを聽す』。彼れ菴婆羅菓の漿を得たり。佛言はく、『飮むことを聽す。若し未だ酒を成らざるは、非時に飮むことを聽す、酒と成れるは、飮むべからず、若し飮めば法の如く治すべし』。後に異時に於て、菴婆羅菓大に熟す、阿難喜んで此の菓を食ふ。世尊の所に往き、頭面に足を禮し、却いて一面に坐し、佛に白して言さく、『菴婆羅菓大に熟す』と。爾の時世尊、此の因緣を以て比丘僧を集め、諸の比丘の爲めに、隨順說法したまひ、無數に方便して、頭陀端嚴少欲知足にして、智慧あるものを讃嘆したまひ、諸の比丘に告げたまはく、『自今已去、菴婆羅菓を食ふことを聽す』。

爾の時世尊、拘睒彌に在しき。時に六群比丘、拘執を反被して、更る相恐戲す。時に諸の居士、見て共に譏嫌す、『沙門釋子厭足を知らず、自ら我れ正法を知ると稱す、拘執を反被して、更る相恐戲すること、王大臣の如し、是くの如きは、何の正法かあらん』。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『拘執を反被すべからず、亦更る相恐戲すべからず』。時に病比丘、拘執を被、毛內に在り、瘡に着いて痛を患ふ。佛言はく、『裏に襯身衣を着けよ、若し熱を患へんには、應さに反被し、袈裟を以て上を覆ふべし』。時に比丘、衣壞る。佛言はく、『應さに補治すべし』。如何が補治せんを知らず。佛言はく、『若しは綖を以て縫ひ、若しは綖を並べて縫ひ、孔處あれば、物を以て補へ』。彼の孔大なり、小物を以て補ひ、衣をして縮れせしむ。佛言はく、『爾すべからず、應さに孔の大小、廣さ二指に及ぶまでは、補治すべし。若し衣を補ふ時、縮むを患へば、石を以て四角を鎭して補へ。若し故縮まば、四角に杙を竪てゝ之を張れ。若し故縮まば、桄を作りて之を張れ』。云何が作らんを知らず。佛言はく、『應さに木を以て作るべし』。彼れ繩張を須ふ佛言はく、『繩張を與へて、之を縫ふことを聽す』。何

を洗ふべし。若し細末、細泥、若しは葉、若しは華、若しは糞を以て之を洗ひ、取りて膩を去らしめよ』。鉢に星臼孔あり、食中に入り、擿出して鉢を壞す『擿出すべきに隨つて、便ち擿出せよ、餘は出すべからず、苦なし』。彼れ鉢を洗つて乾かざるに便ち擧げ、垢生ず。佛言はく、『爾すべからず、乾かしめ已りて擧ぐべし』。手に鉢を捉り、護持し難し。佛言はく『鉢囊を作りて盛ることを聽す』。囊口を繫がず、鉢出づ。佛言はく『應さに繩にて繫ぐべし』。手に鉢囊を捉る、護持し難し。佛言はく『應さに帶を作りて、肩に絡すべし』。時に比丘、鉢を腋下に挾み、鉢口、脇に向ひ、道に行いて雨に遇ひ、脚跌いて地に倒る、鉢、脇に隱れ、遂に患ひを成す。佛言はく『爾すべからず、應さに鉢口を外に向ふべし』。蘇摩鉢、囊中よく出入し、破るゝことを患ふ。佛言はく『應さに函若しは箱を作りて盛るべし』。彼れ寶を用ひて、函若しは箱を作る。佛言はく『寶を以て作るべからず、應さに舍羅草、若しは竹木を以て作るべし。若し鉢相棖すれば、應さに草、樹葉、若しは十種衣中の一々の衣を以て、障を作りて隔つべし』。若し函箱の口より出づ。佛言はく『蓋を作るべし』。彼れ寶を用ひて蓋を作る。佛言はく『爾すべからず、應さに舍羅草、若しは竹木を用ひて作るべし。若し安處堅からざれば、應さに帶を以て、龍牙杙上に繫ぐべし』。

爾の時、世尊、王舍城に在しき。時に王瓶沙、菴婆羅園に、諸の比丘出入するを聽し、疑難あることなし。時に六群比丘、守園人の所に至りて語りて言はく『我れ菴婆羅菓を須む』と。彼れ即ち與ふ。復更に索む、次ぎに復更に與ふ。是くの如くにして、遂に彼の菓を食ひ盡す。後異時に、王、菴婆羅菓を須む、傍臣に勅して菓を索めしむ。臣即ち勅を受け、守園人の所に至りて菓を索む。彼れ答へて言はく『菓盡く』と。問うて言はく『何が故に盡きたる』。彼れ答へて言はく『沙門釋子食ひ盡す』。彼の大臣即ち譏嫌して言はく『沙門釋子厭足を知らず、求欲するところ多し。自ら言ふ、我れ正法を知ると、是くの如くんば、何の正法かあらん、施す者は厭ふなしと雖、受くる者應さに足

【二】棖は一本棠に作る、棠は音義によるに、「觸るゝなり」とある、蓋し棠を正しとすべし、棖には觸るゝの意なし。

に安んず。佛はく、『爾すべからず』。彼れ一手に兩鉢を捉る。佛言はく、『爾すべからず。指にて中間を隔つるを除く』。彼れ一手に兩鉢を捉り、戸を開く。佛言はく、『爾すべからず。用心するを除く』。彼れ鉢を戸扉の後に安んず。佛言はく、『爾すべからず』。彼れ鉢を戸前に安んず。佛言はく、『爾すべからず』。彼れ鉢を、繩床木床の下に安んず。佛言く、『爾すべからず、須臾の間を除く』。彼れ鉢を、繩床木床の間に安んず。佛言はく『爾すべからず、須臾の間を除く』。彼れ鉢を、繩床木床の角頭に安んず。佛言はく、『爾すべからず、須臾の間を除く』。彼れ立ちて鉢を洗ひ、地に墮して破る。佛言はく、『爾すべからず』。彼れ故らに鉢を失ひ、破らしめて、更に新しき者を作る。佛言はく、『爾すべからず』。彼れ長物を持つて鉢中に着く。佛言はく、『一切の物は、鉢中に着くべからず』。彼れ鉢中に畫いて、蒲桃蔓、蓮華の像を作す。佛言はく、『爾すべからず』。彼れ鉢中に[一]萬字を作す。佛言はく、『爾すべからず』。彼れ鉢に畫いて、已れの名字を作す。佛言はく、『爾すべからず』。彼れ鉢の四邊、若しは口を纏ふ。佛言はく、『爾すべからず』、彼れ都べて鉢を縵纏す。佛言はく、『爾すべからず、應さに兩分を纏ふべし、一分を留めよ、若し星孔ありて多ければ、應さに盡く纏ふべし』。彼れ鉢を安んじて地に着け、熏を壞す。佛言はく、『爾すべからず』、應さに泥糞を以て地に灑ぎて安んずべし。若し故熏を壞すれば、應さに葉上、若しは草上に安着すべし。若し故熏を壞すれば、應さに鉢支を作るべし。若し復熏を壞すれば、物を以て底を縵せよ』、彼れ寶を以て底を縵す。佛言はく、『寶を用ふべからず、應さに白鑞鉛錫を以てすべし』。彼れ墮落を患ふ。佛言はく、『胡膠、若しは蠟膠を以てすべし』。彼れ鉢を洗はずして便ち擧ぐ。餘の比丘見て之を惡む。佛言はく、『爾すべからず、應さに洗つて擧ぐべし』。彼れ澡豆を以てせず、洗膩去らず。佛言はく、『爾すべからず、應さに澡豆若しは土、若しは灰、若しは牛屎、若しは泥を用ひて洗ふべし』。彼れ雜沙牛屎を以て鉢を洗ひ、鉢を壞す。佛言はく、『爾すべからず、應さに器を以て水を盛り、牛屎を潰し、澄して沙を去り、用つて鉢

〔一〕萬字は、卍である。

爾の時世尊、蘇摩國に在りて人間に遊行す、時に信樂の陶師あり、世尊泥處を指授して語つて言はく『此の處の土を取れ、是のく如きの打を作せ、是く如く曬燥せよ、是くの如く泥を作れ、是くの如く調し、是くの如きの鉢を作れ、是くの如し揩摩せよ、是くの如く曬乾し已りて、大堅爐を作り、鉢を安んじて中に置き、蓋を以て上を覆ひ、泥にて塗れ。若しは佉羅陀木を以て、若しは棗木を以て、若しは尸賒婆木、阿摩勒木を以て、四邊に安んじて之を燒け』。彼れ即ち佛の所教の如く、次に隨つて作り、即ち成り、異貴好の蘇摩鉢を以て、諸の比丘に與ふ。比丘受けずして言はく『世尊未だ我等に、是くの如き鉢を畜ふることを聽したまはず』。佛に白す。佛言はく『畜ふることを聽す』。時に世尊、優伽羅村に在しき。時に諸の比丘、優伽羅鉢を得、受けずして言はく『佛未だ我等に、此くの如き鉢を畜ふることを聽したまはず』。佛に白す。佛言はく『畜ふることを聽す』。爾の時世尊優伽賒に在しき、諸の比丘、優伽賒鉢を得たり。受けずして言はく『佛未だ我等に、此くの如き鉢を畜ふることを聽したまはず』。佛に白す。佛言はく『受くることを聽す』。時に世尊、毘舍離に在しき。諸の比丘黒鉢を得たり。受けずして言はく『佛未だ我等に黒鉢を畜ふることを聽したまはず』。佛に白す。佛言はく『畜ふることを聽す』。爾の時世尊、舍衞國に在しき。時に諸の比丘、赤鉢を得たり。受けずして言はく『佛未だ我等に、是くの如きの鉢を畜ふることを聽したまはず』。佛に白す。佛言はく『畜ふることを聽す』。六種の鉢あり、鐵鉢、蘇摩鉢、優伽羅鉢、優伽賒鉢、黒鉢、赤鉢あり、此れ總じて二種の鉢といふ鐵鉢と瓦鉢となり。一斗半を受くるあり、三斗を受くる者あり。此れ應さに受持すべし。彼の鉢を墼の墮ちんと欲する處に着く。佛言はく『爾すべからず』。彼れ鉢を石の墮ちんと欲する處に著く。佛言はく『爾すべからず』。彼れ鉢を棚閣の上に安んず。佛言はく『爾すべからず』。彼れ鉢を道中に安んず。佛言はく『爾すべからず』。彼れ鉢を石上に安んず。佛言はく『爾すべからず』。彼れ鉢を有華樹下に安んず。佛言はく『爾すべからず』。彼れ鉢を不平處

何等か五なる。善なるは便ち說く、不善なるは說かず。如法なれるは便ち說く、不如法なるは說かず。愛言は便ち說く、不愛言は說かず。實を以てするは說く、虛詐を僞さず。利益の故に說く、無利を以てせず。是くの如きの五の法攝言ありて、自ら理を申ぶることを得、咎責を被らず、彼れをして歡喜せしめ、後に悔恨なし』、卽ちを偈を說いて言はく。

善說は近勝なり　法說は非法なし　愛語は眞實の語　利益は損あることなし　善く言を說く者は　已れをして熱惱なからしむ　亦他人を侵さず　是の言を義說と爲す　善く愛言を說けば　彼れの爲めに責められず　說く時不愛なければ　諸惡來集せず　至誠甘露の說は　實語を最上と爲す　眞實なること修法の如くなれば　便ち涅槃に住す　佛の說法したまふべき所は安穩にして涅槃に至る　能く苦際を盡すは此の言最も善說なり。

時に瓶沙王、比丘に鐵鉢を布施す。比丘受けずして言はく『佛未だ我等に、鐵鉢を畜ふることを聽したまはず』。諸の比丘、佛に白す。佛言はく『鐵鉢を畜ふることを聽す』。時に鐵作者ありて出家す、諸の比丘の爲めに、鉢を作らんと欲す。佛に白す。佛言はく『作ることを聽す』。彼れ爐を須ふ。佛言はく『作ることを聽す』。彼れ椎鉗を須ふ。佛言はく『作ることを聽す』。彼れ鞴囊を須ふ。『作ることを聽す』。彼れ錯を須ふ。佛言はく『作ることを聽す』。彼れ鏇器を須ふ。佛言はく『作ることを聽す』。彼れ鏇器の諸物、零落することを患ふ。佛言はく、『囊を作りて盛り、杙上、龍牙杙上に着くることを聽す』。彼れ鉢を畜ふ、熏せずして垢を生じ、臭きを患ふ。佛言はく『熏ずることを聽す』彼れ云何が熏ぜんを知らず『爐若しは釜、若しは瓮を作り、種々の泥を塗り、杏子麻子泥を以て裹むことを聽す。灰を以て地を平げ、熏鉢場を作り、支を安んじ、鉢を以て上に置き、鉢爐、上を覆ひ、灰を以て四邊を壅ぎ、手に按して堅からしめ、若しは薪、若しは牛屎を以て四邊を壅ぎて之を燒く、當さに是くの如きの熏を作すべし』。

丘金鉢を畜ふべからず。此れは是れ白衣の法なり。若し畜ふれば、法の如く治す』。時に王瓶沙、復銀鉢を作り、琉璃鉢を作り、寶鉢を作り、雜寶にて鉢を作り、諸の比丘に施す。比丘受けずして言はく、『佛未だ我等に、是くの如き鉢を畜ふることを聽したまはず』。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『此くの如き等の鉢を畜ふべからず、此れは是れ白衣の法なり、若し畜ふれば、法の如く治す』。爾の時世尊、婆伽提國に在しき。毘舍離跋闍子比丘、金鉢を畜ふ。佛言はく、『畜ふべからず』。彼れ銀鉢、琉璃鉢を畜ふ、寶鉢を畜ふ、雜寶鉢を畜ふ。佛言はく『畜ふべからず。汝等癡人、我が所制を避けて更に餘事を作す、自今已後、一切の寶鉢は畜ふべからず、若し畜ふれば、法の如く治す。』

爾の時世尊、毘舍離に在しき、諸の梨奢、大價の摩尼鉢を得、旃檀末香を以て鉢に滿て、世尊に奉る。『大德、願はくは慈愍の故に、此の摩尼鉢を受けたまへ』。佛言はく、『梨奢、我れ此の鉢を畜ふべからず』。復佛に白して言さく、『願はくは慈愍の故に、旃檀末香を受けたまへ』。世尊卽ち受けたまふ。時に諸の梨奢念じて言はく、『當さに此の鉢を以て、誰にか與ふべき』中に言ふものあり『不蘭迦葉に與へん』或は言ふものあり『末伽羅瞿舍羅、阿夷頭翅舍欽婆羅に與へん、波休迦旃延に與へん、訕若毘羅吒子に與へん、尼犍那耶子に與へん、薩遮尼犍子に與へん』。彼れ卽ち鉢を持つて薩遮尼犍子に與ふ。時に薩遮尼犍子、毘舍離の諸梨奢、大價摩尼鉢を以て、先きに瞿曇沙門に與へて受けず、後に來りて我れに與ふと聞き、彼れ憍慢貢高嫉妬の心を懷き、瞋恚して喜ばず、自ら愼護せず、便ち惡言を作さく「若し汝等をして、諸の梨奢子の舌を截り、鉢に滿さしめば、爾く乃ち當さに受くべし」、彼れ是の念を作さく、「薩遮尼犍子、大に我等の種族を傷毀せんと欲す」と。卽が一石を以て打殺す。彼れ自ら料理して、前の惡言を解かんと欲するも、而も語ることを聽さず、便ち打殺す。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『若し語ることを得ば、事必ず解くを得ん』。佛言はく、『五の法攝言あり、自ら理を申ぶるを得て、咎責を被らず、彼れをして、歡喜せしめて、後に悔恨なし。

て死せしめば、甚だ所以なし、當さに天の甘露を以て、其の身上に灌ぐべし』。即ち之を灌いで、瘡即ち平復すること故の如し』。佛、瓶沙に告げて言はく、『爾の時の利益衆生王とは、豈異人ならんや、即ち今の父王白淨是れなり、時に王の第一夫人とは、今の母摩耶是れなり、時に王惠燈とは、即ち我が身是れなり。我れ前世に於て、閻浮提の無數の人民を教化す。若しは男、若しは女の能言の者は、十善の不殺生乃至不邪見を行ず。是の因緣を以ての故に、足下の千輻輪相の輪郭成就し、光明晃耀して、三千大千の國土を照す』。爾の時大衆、世尊の是くの如きの神力變化を見、皆大に歡喜して未曾有なることを得、厭離心生ず。世尊諸の大衆の、皆大に歡喜し、厭離心生ずるを觀、無數の方便を爲して說法したまひ、無數百千人をして、即ち座上に於て、遠塵離垢して法眼淨を得しむ。此れは是れ世尊第十五日の變化なり。

爾の時世尊、王舍城に在しき。時に王瓶沙、諸の比丘の、宮閣に入出すと聞き、疑難あることなし時に王の安人、屛處に著いて聞き、若し比丘言說する所あれば、便ち來りて我れに語らしむ。彼の重宮閣は貴價の尸賒婆材を以て柱と爲す。諸の比丘見已りて是くの如きの言を作す。乃ち此の貴價材を以て柱と作す。諸の比丘の爲めに、鉢と作さば亦佳からずや。時に彼の屛處の人、聞き已りて、即ち往いて王に白す。王即ち人に勅し、更に新柱を作りて以て易へ、取りて持つて鉢を作り、諸の比丘に施與す。諸の比丘受けずして言はく、『佛未だ我等に、尸賒婆木の鉢を畜ふることを聽したまはず』。時に諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『木鉢を畜ふることを聽さず。此れは是れ外道の法なり若し畜ふれば、法の如く治す』。時に瓶沙王、石鉢を以て、諸の比丘に施す。諸の比丘、受けずして言はく、『佛未だ我等に、石鉢を畜ふることを聽したまはず』。佛に白す。佛言はく、『畜ふべからず、此れは是れ如來法の鉢なり、若し畜ふれば、偸蘭遮を得』時に瓶沙王、金鉢を作りて比丘に施す、比丘受けずして言はく、『世尊未だ、我等に金鉢を畜ふることを聽したまはず』。佛に白す、佛言はく『比

卷の第五十二（第四分の三）

雜揵度の二

時に天帝釋是くの如きの念を作さく、「我れ王をして、世間の常乘に乘ぜしむべからず」。卽ち天象を嚴駕す、象に六牙あり、牙皆麁大なり、門外に置く。時に王惠燈、是くの如きの象駕を見、諸の大臣に問ふ「、此れは是れ誰の象ぞ」。諸臣答へて言はく、「是れ誰の象なるを知らず、此れ必ず是れ王の象ならん、餘人の有に非ず、願はくは王便ち之に乘ずべし」。王卽ち乘ず。王言はく、「去りて彼の人の、我れ國人をして十惡を行ぜしむと言ふ者を、我れに示すべし」。彼れ卽ち王に示す。王問うて言はく、「王惠燈、汝をして十惡を行ぜしむるや」。答へて言はく、「實に爾り」。王復問うて言はく、「方便ありて十善を行ずべきや不や」。答へて言はく、「有り」。問うて言はく、何者か是れなりや。彼れ答へて、「言はく若し菩薩を成就するを得んには、生まながら其の肉を食ひ、其の血を飲み、乃ち十善の不殺生乃至不邪見を行ずることを得ん」。時に王惠燈是くの如きの念を作さく、「我れ無始世已來に於て、衆苦を經歷し、五道に輪轉し、或は截手、截脚、截耳、出眼、截頭を受くるも、竟に益する所なし」と。卽ち利刀を取り、自ら股肉を割き、器を以て血を盛り、彼れに授與し、而かも之に告げて曰く、「男子、汝此の肉血を食飮すべく、十善を行ずべし」。時に彼の男子、王惠燈の威德に堪えず、卽ち沒して現ぜず。忽ち天帝ありて、前に在りて立つ。王に問うて言はく、「王今布施す。一天下二三四天下の爲めにするや、日月、天帝釋、魔王、梵王の爲めにするや」。王答へて言はく、「我が布施は、一天下二三四天下、乃至魔梵王の爲めにせず、我れ是くの如きの意を作す、布施を行じ、無上正眞一切智を求め、未度者を度し、未觧者を觧し、未得涅槃者をして、涅槃を得しめ、生老病死憂悲苦惱是くの如き等の者を度せんと欲す」。時に天帝釋便ち是の念を作さく、「我れ今王惠燈をして、此の瘡を以

く、「有り」。「何者か是れぞ」。答へて言はく、「若し能く閻浮提の、若しは男、若しは女の、能言の者をして、皆十善、不殺生乃至不邪見を行ぜしめば、我れ當さに王と爲るべし」。時に諸の國人、是くの如きの敎を聞き、盡く十善を修行す、不殺生乃至不邪見なり。諸臣即ち王子惠燈の所に往き、白して言さく、「王子知るや不や、閻浮提の人、若しは男、若しは女の、能言の者、皆十善の不殺生乃至不邪見を行ず、今王位に登りて、王の敎令を行ふべし」。王子言はく、「絹を取り來れ」。即ち第一の白絹を授與す。自ら頭上に繫けて是くの如きの言を作す。「是くの如きの時、是くの如きの王あり、善好なりや不や」。諸臣答へて言はく、「甚だ善し」。時に諸臣、王に白して言さく、「王初めて生るゝ時、八萬四千藏あり、自然にして出づ、今取りて王藏に入るべし」。王言はく、「何ぞ藏に入ることを須ひん、即ち彼四交道頭に於て、沙門・婆羅門・貧窮孤老に布施すべし、求索する所の者に隨つて、一切施與せよ」。時に諸の大臣、惠燈王の敎を聞き已りて、即ち八萬四千城に於て、所在の藏に隨ひ、四城門中の四交道頭に於て、沙門・婆羅門・貧窮孤老に布施し、其の索むる所に隨ひ、一切施與す。時に天帝釋便ち是の念を作さく、「王惠燈、八萬四千城に於て、所在の藏に隨ひ、皆四城門中の四交道頭に於て、沙門・婆羅門・貧窮孤老に布施し、其の索むる所に隨ひ、一切施與す、將さに恐らくは、來りて我が座を奪はんとす、我れ今寧ろ、往いて王惠燈を試むべし、無上道不退轉を以ての故に布施すとせんや、退轉を以てすとせんや」。彼れ即ち化して男子と作り、自ら相謂つて言はく、「王惠燈、我等をして十惡を行ぜしむ、殺生乃至邪見なり」。時に諸の大臣皆王所に往き、白して言さく、「王實に國人をして、十惡の殺生乃至邪見を行ぜしむるや」。王答へて言はく、「不、何を以ての故に、我れ先きに是の語あり、我れ王と作らず、乃ち閻浮提人の能言の類、皆十善の、不殺生乃至不邪見を行ぜしむれば、我れ當さに王と作るべしと、是の故に我れに是の語なし、汝等今象乘に嚴駕すべし、我れ自ら行いて、國人を敎化せんと欲す」。

四分律卷第五十二

根莖華葉皆悉く是れ金なり。藏に琉璃ある者、頗梨ある者、赤眞珠あるもの、馬瑙ある者、車渠あるもの、皆亦是くの如し。爾の時の國法、若し兒初めて生るれば、若しは父母爲めに字を作し、若しは沙門婆羅門爲めに字を作す。時に王利益衆生是の念を作さく、「何ぞ沙門婆羅門爲めに字を作すことを須ひんや。此の兒の母の字は惠事なり、我れ今寧ろ兒を字けて惠燈と爲すべし」と。彼れ卽ち字けて惠燈と爲す。時に王、其の兒の爲めに、四種の乳母を置く、一には治身、二には浣衣、三には乳養、四には戲笑なり。治身母は、身形支節を修治す、浣衣母は、衣服を浣濯し、身形を洗浴せんが爲めなり、與乳母は、主として與乳を知り、遊戲母は、若し王子、象馬車に乘じ遊戲する時に當り、華香寶物、種々玩弄の具を與へ、共に嬉戲し、孔雀蓋を持つて後に在り、娛樂の王子に快樂を得しむ。爾の時世尊、師は偈を說いて言はく、

一切は要するに盡に歸す　高き者は會ず墮つべし　生者は死せざるなく　命あれば皆無常なり
衆生は有數に墮す　一切は皆有爲なり　一切諸の世間　老死せざるあることなし　衆生の常法は　生々皆死に歸す　其の所造の業に隨ひ　罪福の果報あり　惡業は地獄に墮つ　善業は天上に生る　高行は善道に生れ　無漏の涅槃を得

時に利益衆生王命終し、王轉轉た大なり、年八九歲に至り、其の母敎へて、諸の伎藝・書畫算數・戲笑歌舞伎樂・象馬騎乘乘車を學ばしむ。射を學びて勇健捷疾に、諸の伎藝に於て、皆悉く綜練す。年十四五の時に至り、諸の群臣、王子の所に至りて白して言さく、「知るや不や、王已に命終したまひ、今次ぎに應さに王位に登り、敎令を施行したまふべし」。王子答へて言はく、「我れ王と爲り、王の敎令を行ふこと能はず、何を以ての故に、我れ前世の時、曾て國王となりて六年を經たり、是の因緣を以て地獄に墮在すること六萬歲なり、是れを以ての故に、今王と爲りて、王の敎令を行ふこと能はず」。諸臣言さく、「頗し方便の、王と作りて王の敎令を行ふを得べきありや不や」。答へて言は

卽ち説法を爲し、乃至法眼淨を得ること上の如し。爾の時摩竭王瓶沙、次ぎの十五日に供を設く、卽ち夜に於て、種々の美食を辨じ、夜過ぎ已りて、明日種々の多くの美飮食を以て、佛及び僧に飯す、幷びに波羅殊提王・優陀延王・梵施王・波斯匿王・末利夫人・長者梨師達多富羅那、一切の大衆皆供養滿足す。食已りて鉢を捨て、王瓶沙更に卑床を取り、佛前に於て坐す。時に世尊加趺坐を壞し、脚を案上に申べ、足、案上に至る時、地六反十八種の震動を爲す。時に世尊、足下の相輪、輪に千輻あり、輪郭成就し、輪相具足し、光明晃曜し、輪より光りを出し、光り三千大千國土を照す。時に摩竭王、世尊足下の輪相是くの如くなるを見、卽ち坐より起ちて、偏へに右の肩を袒ぎ、右膝地に著け、世尊に白して言さく『世尊往昔、何の福德を作してか、此の足下の千輻輪相の光明晃曜として、輪中より光りを出し、光り三千大千の國土を照すや』。爾の時佛、瓶沙王に告げたまはく、『乃往過去世の時、王あり利益衆生と名づく、閻浮提の王と作る。時に閻浮提の國土豐饒にして、人民熾盛快樂なりき。八萬四千の城あり、聚落五十五億あり。時に利益衆生王所住の城を惠光と名づく。東西十二由延、南北七由延なり。其の城廣大にして人民熾盛に、財物無限にして嚴飾快樂なり。王の第一の夫人を惠事と字づく、兒息なし。彼の兒の爲めの故に、種々の諸天、河水、池水の滿善天・寶善天・日月天・帝釋・梵天王・地・水・火・風神・摩醯首羅天子・園神・林神・巷陌神・鬼子母、聚落の諸神に禮事し、處々供養して、子あることを求願す。後に異時に於て、王の第一夫人懷娠す。女人に三種の智慧あり、男子に欲意あること者を知る、得胎の時を知る、從つて得る所の處を知る。時に夫人卽ち王所に往いて白し言さく、「王知るや不や、我れ今懷妊す」。王言はく、「大に善し」、卽ち夫人の爲めに供養を倍增し、最上の飮食衣服醫藥臥具を以てし、一切の所須皆一倍を增す。十月滿じ已りて、一男兒を生む、顏貌端正なり。時に兒の生るゝ日に、八萬四千の諸城、八萬四千の伏藏、自然に涌出し藏に銀あるものは、銀樹涌出し、根莖枝葉是れ白銀なり。藏に金ある者は、金樹涌出し、

神足變化を現じ、一身を多身と爲し、多身を一身と爲し、近く現ずる處に於て、遠く不見の處に於て、若しは近く山障石壁を、身過ぎて無閡なり、空中に遊行すること、鳥の飛翔するが如く、地に出沒すること、若しは水波のごとく、水を履んで行くこと、地に遊歩するが如く、身より烟焔を出すこと、猶ほ大火のごとく、手に日月を捫摸し、身は梵天に至る。時に諸の大衆、世尊の是くの如きの變化を見、皆大に歡喜して未曾有なることを得て、厭離心生ず。世尊即ち說法を爲し、乃至法眼淨を得ること上の如し。此れは是れ世尊第十一日の神足變化なり。第十二日に於て、世尊大衆の中に於て心念說法したまふ『是れ念ずべし、是れ念ずべからず、是れ思惟すべし、是れ思惟すべからず、是れ斷ずべし、是れ修行すべし』と。是の時諸の大衆、世尊の神足變化の是くの如きを見、皆大に歡喜し未曾有なることを得て、厭離心生ず。世尊即ち說法を爲し、乃至法眼淨を得ること上の如し。此れは是れ世尊の第十二日の神足變化なり。第十三日に於て、世尊大衆の爲めに、說法敎授したまふ、說法敎授とは、一切皆熾然なり。云何が一切皆燃熾然なる。眼熾然・色熾然・識熾然・眼觸熾然たり。眼觸因緣して受あり、若しは苦、若しは樂、若しは不苦不樂是れまた熾然なり。誰か熾然なる。貪欲・瞋恚・癡火熾然なり、生老病死憂悲苦惱熾然なり、苦は是れに緣りて生ず、耳鼻舌身意も亦是くの如し、一切皆熾然なり。爾の時大衆、世尊の是くの如く說法敎化したまふを聞き、皆大に歡喜して未曾有なることを得、即ち說法を爲して、乃至法眼淨を得ること上の如し。此れは是れ如來の第十三日の變化なり。第十四日に於て、次供の檀越、一掬の花を以て世尊に授く。世尊嗅ぎ已りて、空中に擲著す、佛の神力を以ての故に、變じて萬四千の華臺の樓閣と爲る。華臺の樓閣中一切皆座あり、佛左右に面す。天帝釋梵・合掌敬禮して、偈を說いて言はく、

丈夫王、大人の最無上を敬禮したてまつる　一切能く知るものなし　世尊所依の禪

爾の時大衆、世尊の神力變化、是くの如きを見て、皆大に歡喜して未曾有なることを得たり。世尊

の生ずるを觀、卽ち說法を爲し、乃至法眼淨を得ること上の如し。第八日の時、諸の居士の外道を信ずる者、使を遣はして、諸の外道を喚ぶ。『汝曹知るや不や、沙門瞿曇、已に神力を現じて、今八日に至る、汝曹何が故に來らざるや』。彼れ來らんと欲するも、而も來ることを得ず。時に世尊、諸の比丘に告げて言はく、『若し不蘭迦葉をして[三]堅鞕皮を以て、其の身を縄縛し、并びに牛之を牽き、皮縄斷じ、身形破壞せしむるも、若し已見を捨てず、而かも論議の爲めの故には、終に我が所に來至すること能はず。乃至尼犍子等も、亦復是くの如し』。時に梵天王、天帝釋に告げて言はく、『諸の外道人自ら言ふ、「世尊と等し」と、而も來りて世尊と、現神力を捔すること能はず、今其の高座を破滅すべし』。時四天王、卽ち風神・雲雨神・雷神を召し、告ぐること是くの如し。『諸の外道自ら言ふ、「世尊と等し」と、而も能く來りて、世尊と神力を捔すること能はず、今其の高座を破壞すべし、散滅して餘なからしめよ』。時に風神等、四天王の敎を𦔳き已りて、卽ち外道の高座を取り、破散し滅せしめて餘なし。時に諸の外道、風雨飄濕を得、卽ち草木の叢林山谷の窟中に入りて、自ら藏竄す。時に露形斯尼外道、波梨子波私婆闍伽あり、大石を以て頸に繫け、自ら深淵に投ず。時に諸の大衆・世尊・神力の變化を見、皆大に歡喜して未曾有なることを得、厭離心生ず。世尊卽ち說法を爲し、乃至法眼淨を得ること上の如し。此れは是れ世尊第八日の變化なり。第九日に於て、世尊須彌頂上に於て、大衆の爲めに說法したまふ、但其の聲のみを聞いて、其の形を見ず。時に諸の大衆、世尊の是くの如きの變化を見、皆大に歡喜して未曾有なることを得、厭離心生ず。世尊卽ち說法を爲し、乃至法眼淨を得ること上の如し。此れは是れ第九日の變化なり。第十日には、世尊、梵天上に於て說法したまふ。時に諸の大衆、但其の聲のみを聞いて、其の形を見ず。時に諸の大衆、世尊の、是くの如きの變化を見、皆大に歡喜して未曾有なることを得、厭離心生ず。世尊卽ち說法を爲し、乃至法眼淨を得ること上の如し。此れは是れ如來第十日の變化なり。第十一日に於て、世尊、大衆の中に於て、

【三】堅鞕は、音義に、牢强とあり、鞕は鞭、或は硬に作るともある。

第二日に現ずる神力變化なり。第三日に於て、樹菓便ち出で、色香味具足す、其の菓搖かざるに、自ら地に落墮して壞せず。比丘・比丘尼・優婆塞・優婆私・諸の大衆皆共に之を食ふ。此の諸の大衆、世尊の是の如きの神力變化を見て、皆大に歡喜し、未曾有なることを得て、厭離心生ず。時に世尊、諸の大衆の未曾有なることを得て、厭離心生ずるを觀、卽ち爲めに說法し、乃至法眼淨を得ること上の如し。此れは是れ世尊第三日に現ずる神力變化なり。爾の時に檀越あり、次供第四日には、世尊に水を授く。時に世尊卽ち一把の水を取り、之を前地に棄つ。佛の神力の故に、卽ち大池と成り、其の水清淨にして諸の塵穢なし、之を飲むも患なし、諸の雜華・優鉢羅・鉢頭摩・拘牟頭・分陀利華、衆鳥の異類・鳧・雁・鴛鴦・龍・龜・魚鼈水性の屬あり、以て莊嚴を爲す。時に諸の大衆、世尊の神力、是くの如きの變化を見て、皆大に歡喜し、未曾有なることを得、厭離心生ず。時に世尊、諸の大衆の、未曾有なることを得、厭離心の生ずるを觀、卽ち說法を爲し、乃至法眼淨を得ること上の如し。爾の時第五日に、其の池の四面より、各一河を出し、直流し曲がらず、其の水清淨にして波浪なし、衆の雜奇華以て莊嚴と爲す。其の流水の聲は、說法の音あり、一切衆行は、皆悉く無常・苦・空なり、一切の諸法は、皆悉く無我、涅槃息滅なりと。時に諸の大衆、世尊の神力、是くの如きの變化を見、皆大に歡喜し、未曾有なることを得て、厭離心生ず。卽ち說法を爲し、乃至法眼淨を得ること上の如し。此れは是れ世尊第五日の變化なり。第六日に於て、世尊諸の大衆を化したまふ、皆一等類にして差降あることなし。時に諸の大衆、世尊の神力變化是くの如きを見、皆大に歡喜し、未曾有なることを得て、厭離心生ず。時に世尊、諸の大象の未曾有なることを得て、厭離心の生ずるを觀、卽ち說法を爲し、乃至法眼淨を得ること上の如し。此れは是れ世尊の第六日變化なり。第七日に於て、世尊、空中に在して、諸の大衆の爲めに說法したまふ、但如來說法の聲のみを聞いて、而も形を見ず。時に諸の大衆、世尊の神力變化是くの如きを見、皆大に歡喜し、未曾有なることを得て、厭離心生ず。時に世尊、諸の大衆の未曾有なることを得、厭離心

まへ』。佛、王に告げて言はく、『止めよ止めよ、我れ自ら時を知る、現ずべきは當さに現ずべし、臘月十五日の中に於て、初一日より十五日に至るまで、如來當さに神力過人法を現ずべし、大王、若し如來の神力過人法を現ずるを觀んと欲せば、便ち來れ』。時に舍衞國に別處あり、其の地平正廣博なり、世尊彼れに往いて座を敷いて坐したまふ。時に梵天王偏へに右の肩を露はし、右膝地に著け、合掌して佛世尊に白して言さく、『我れ當さに世尊の爲めに高座を敷くべし』。佛。梵天に告げたまはく、『且く止めよ、我れ自ら時を知る』。天帝釋・四天王・瓶沙王・波羅斯提王・優陀延王・梵施王・波斯匿王・末利夫人・長者梨師達多富羅那、各々是くの如きの言を作す『我れ當さに、世尊の爲めに高座を敷くべし』。佛告げて言はく、『汝等且らく止めよ、我れ自ら時を知る』。時に諸の居士、外道を信ずる者あり、外道の爲めに、價直百千の座を敷く。佛を信樂し、恭敬し、供養するものあり、次第に一日より十五日に至る。爾の時世尊東面して時を看たまふ。無數百千の諸座あり、自然にして有り、南西北方も亦復是くの如し。中央に自然七寶師子の高座あり、如來上に坐したまふ。時に諸の大衆皆悉く座に就く。時に檀越あり、次供の日に、佛に楊枝を授く、世尊爲めに受け、嚼し已りて背後に棄著す、卽ち大樹を成し、根莖枝葉扶疎として茂盛す。時に諸の大衆、世尊の是くの如きの神力を見て、皆大に歡喜して未曾有なることを得、厭離心生ず。時に世尊、諸の大衆の、未曾有なることを得、厭離心を生ずるを觀、卽ち爲めに無數に方便して種々に說法し、歡喜を得しむ。時に座上に於て、無數百千人、遠塵離垢して法眼淨を得たり。此れは是れ世尊、初日に現ずる神力變化なり。第二日に於て、此の樹、花生じ、色香具足し、樹花散落し、大衆に周遍し、積んで膝に至る、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆私及び餘も大衆、皆此の香氣を嗅ぐ。時に諸の大衆、世尊の、是くの如きの神力變化を見、皆大に歡喜し、未曾有なることを得、厭離心を生ず、卽ち無數の方便を爲し、種々に說法し、歡喜を得しむ。時に座上に於て、無數百千人、遠塵離垢して、法眼淨を得たり。此れは是れ

を現ずべし。是くの如く沙門瞿曇の所現の多少に隨ひ、我れ盡く之に倍せん』。時に梵施王、佛所に往詣し、頭面にて足を禮し、一面に在りて坐し、佛に白して言さく『願はくは世尊、神力過人法を現じたまへ』。佛、王に告げて言はく『止めよ止めよ、我れ自ら時を知る、現ずべきは當さに現ずべし、明日當さに迦維羅衛國を出で去るべし、王の意に隨ふべし』。世尊明日淸旦に便ち去る。爾の時梵施王、卽ち五百の乘車を以て種々の飮食を載せ、世尊の後に從ふ。時に諸の外道、世尊の去りたまふを聞き、便ち是の言を作さく『沙門瞿曇、我れと共に神力過人法を捔すること能はず、我れを捨てゝ去る、梵施王の五百の乘車に飮食を載するは、我等が爲めなり、沙門瞿曇の爲めにはあらず、今當さに其の所至の處に隨ひ、喚んで共に神力過人法を捔すべし』。卽ち眷屬と世尊の後を逐ふ。時に王瓶沙、佛の去りたまふと聞き、八拾四千人と俱なり、波羅殊提王は七萬人と俱なり、優陀延王は六萬人と俱なり、梵施王は五萬人と俱なり、世尊の後に從ふ、釋梵四天王、諸の眷屬無數百千の天人と、世尊の後に從ふ。爾の時世尊、迦維羅衛國より人間に遊行し、舍衛國祇洹園中に至りて住す。時に舍衛國は波斯匿、王たり。時に摩竭國の諸の外道、優禪城の諸の外道、拘睒彌の諸の外道、迦維羅衛の諸の外道、舍衛國の諸の外道、皆王波斯匿の所に往き、頂上に合掌して白して言さく、『願はくば王の常に勝るゝことを。是くの如きの言を作さく、沙門瞿曇、自ら稱して是れ阿羅漢なりと言ふ、我れも亦是れ阿羅漢なり、自ら稱して大神力ありと言ふ、我れも亦大神力あり、自ら稱して大智慧ありと言ふ、我れも大智慧あり、我等摩竭國・優禪城・拘睒彌・迦維羅衛國に於て、共に神力過人法を捔せんと欲す、而も我れと共に神力過人法を捔すること能はず、便ち去る、我等今沙門瞿曇と共に、神力過人法と捔せんと欲す、若し沙門瞿曇一を現ずれば、我れ當さに二を現ずべし、是くの如く其の所現の多少に隨ひ、我れは盡く之に倍せん』。王波斯匿、世尊の所に往き、頭面に足を禮し、却いて一面に坐し、此の因緣を以て具さに世尊に白す『善い哉世尊、願はくは神力過人法を現じた

ふ、我れも亦是れ阿羅漢なり、自ら稱して大神力ありと言ふ、我れも亦大神力あり、彼れ自ら稱して大智慧ありと言ふ、我れも亦大智慧あり、摩竭國、優禪國に於て、共に神力過人法を捔せんことを求む、沙門瞿曇、我れと共に神力過人法を捔すること能はずして去る。我等今、沙門瞿曇と共に、神力過人法を捔せんと欲す、沙門瞿曇一を現ずれば、我れ當さに二を現ずべし、是くの如く彼れの所現の多少に隨ひ、我れは盡く之に倍せん』。時に優陀延王、世尊の所に詣り、頭面に足を禮し、却いて一面に坐し、此の因緣を以て具さに世尊に白す『善い哉世尊、諸の外道と共に、神力過人法を捔すべし』。佛、王に告げて言はく『止みね止みね、我れ自ら時を知る、現ずべくんば當さに現ずべし、明日當さに去りて、王の意に隨ふべし』。明日清旦に便ち去る。時に王優陀延、五百の乘車に、種々の飮食を載せて、世尊の後に隨ふ。時に諸の外道、世尊の去りたまふと聞き、便ち是の言を作さく、『沙門瞿曇、我れと神力過人法を捔すること能はず、便ち去る、優陀延王の五百の乘車に、飮食を載するは、而も我等が爲めにす、彼れの爲めにせず、我等今彼れの所至の處に隨ひ、當さに共に神力過人法を捔すべし』。卽ち世尊の後に隨つて去る。時に瓶沙王は八萬四千人と倶なり、優禪王は七萬人と倶なり、優陀延王は六萬人と倶に、世尊の後に從ひ、釋梵四天王、無數百千の諸天大衆、世尊の後に從へり。爾の時世尊、迦維羅衞國尼拘律園中に往いて住す。時に迦維羅衞王梵施、是れ佛の異母弟なり。摩竭國の諸の外道、優禪の諸の外道、拘睒彌の諸の外道、迦維羅衞國の諸の外道、共に梵施王の所に往き、頂上に合掌し『願はくは王の常に勝るゝことを。梵施王に白し言さく、沙門瞿曇自ら稱して、是れ阿羅漢なりと言ふ、我れも亦是れ阿羅漢なり、自ら大神力ありと稱す、我れも亦大神力あり、自ら大智慧ありと稱す、我れも亦大智慧あり、我れ摩竭國・優禪國・拘睒彌國に於て、沙門瞿曇と、神力過人法を捔す、而も沙門瞿曇、我れと神力過人法を捔すること能はずして、便ち去る、我等今、沙門瞿曇と神力過人法を捔せんと欲す、若し沙門瞿曇一を現ずれば、我れ當さに二

人を從へ、倶に世尊の後に隨ふ。梵天王、釋提桓因、四天王の諸天、無數百千の大衆、世尊の後に隨從す。時に世尊、優禪城に往きたまふ。優禪城の王を、波羅殊提と名づく、摩竭國の諸の外道、優禪城の諸の外道、倶に共に波羅殊提王の所に往き、頂上に合掌して讃して言はく、『願はくは王常に勝るゝことを。沙門瞿曇自ら稱して、是れ阿羅漢なりと言ふ、我れも亦是れ阿羅漢なり、自ら稱して神力ありと言ふ、我れも亦神力あり、自ら稱して大智慧ありと言ふ、我れも亦大智慧あり、我等王舍城中に於て、共に神力過人法を捔せんことを求む、而も沙門瞿曇、我れと神力過人法を捔すること能はず、我等今、共に神力過人法を捔せんと欲す、若し沙門瞿曇一を現ずれば、我れ當さに二を現ずべし、是くの如く沙門瞿曇の所現の多少に隨ひ、我れは盡く之に倍せん』。時に王波羅殊提、卽ち佛所に往き、頭面に足を禮し、却いて一面に坐し、此の因緣を以て、具さに世尊に白す。『善い哉、諸の外道と共に、神力過人法を現ずべし。爾の時世尊、波羅殊提に告げて言はく、『且らく止めよ、我れ自ら時を知る、現ずべくんば現ずべし、明日當さに去り、王の意に隨ふべし』。時に世尊、淸旦優禪より去る。波羅殊提王、五百の乘車に、種々の美食を載せ、世尊の後に從ふ。時に諸の外道、世尊の去りたまふと聞き、是くの如きの言を作す『沙門瞿曇、是れと共に、神力過人法を捔すること能はず、便ち去る、王の五百の乘車に飲食を載するは、我等の爲めにす、彼れが爲めにせず、我れ當さに隨ひ去り、所至の處に到りて、與に共に神力過人法を捔すべし』。彼れ卽ち世尊の後に隨つて去る。時に王瓶沙、世尊の去りたまふと聞き、八萬四千人と倶にせり、波羅殊提王は、七萬人と倶にせり、釋梵四天王の諸天大衆、無數百千の眷屬圍遶して、世尊の後に從ふ。世尊、拘睒彌國の瞿師羅園中に往きて住したまふ。時に優陀延、王たり、摩竭國の諸の外道、優禪國の諸の外道、拘睒彌國の諸の外道、倶に優陀延王の所に往き、頂上に合掌して讃して言はく、『願はくは王常に勝るゝことを。白して是くの如く言す。沙門瞿曇、自ら稱して是れ阿羅漢なりと言

む。時に無數百千の高座、自然にして有り、南西北方亦復是くの如し。時に世尊、大比丘僧千二百五十人、并びに外道と俱に坐せり。時に彼の長者、種々の美食を設け、佛と比丘僧と及び外道とに供養し、一切充足し、食已り、鉢を捨て、更に卑床を取りて、佛前に於て坐す。時に世尊、長者の爲めに、無數に方便して說法敎化し、歡喜を得しむ。長者の爲めに、說法し已りて、坐より去りたまふ。爾の時諸の外道、眷屬を俱に、瓶沙王の所に往き、頂上に合掌して言さく、願はくは王の常に勝ることを。白して言さく『沙門瞿曇自ら是れ阿羅漢なりと言ふ、我れも亦是れ阿羅漢なり、沙門瞿曇自ら神通ありと言ふ、我れも亦神通あり、沙門瞿曇自ら大智慧ありと稱す、我れも亦大智慧あり、我等今沙門瞿曇と共に、勝神力及び過人法を捔せんと欲す、若し瞿曇一を現ずれば、我れ當さに二を現ずべし、是くの如く沙門瞿曇の所現の多少に隨ひ、我れは盡く之に倍せん、大王、我れ今沙門瞿曇と共に、現神力過人法を捔せんと欲す』。時に瓶沙王、佛所に往詣し、頭面に足を禮し、却いて一面に坐し、向きの因緣を以て、具さに世尊に白す。『唯願はくは世尊、外道と現神力及び過人法を捔したまへ』。世尊、王に告げて言はく、『且らく止めよ、我れ自ら時を知る、現ず可くんば、當さに現ずべし、明日當さに去りて、王の所欲に隨ふべし。』世尊明日、大比丘衆と俱に、王舍城より去る。時に瓶沙王、五百の乘車を以て、種々の美食を載せ、世尊の後に從ふ。時に諸の外道、世尊の淸旦に王舍城を出でゝ去りたまふ、時に瓶沙王、五百の乘車を以て、種々の美食を載せ、世尊の後に從ふと聞く。時に諸の外道、世尊の淸旦に、王舍城を出でゝ去りたまふと聞いて、是の言を作す。『沙門瞿曇、我等と共に、神力を捔すること能はず、便ち去ると。王瓶沙の五百の乘車、種々の美食を載するは、我等が爲めにして、彼の瞿曇沙門の爲めにせず、我曹今彼れに隨つて去り、所至の處に到り、喚んで共に神力過人法を捔すべし』。彼れ卽ち世尊の後に隨つて去る。時に王瓶沙、佛の淸旦に、千二百五十の比丘と、王舍城より去りたまふと聞き、王、八萬四千

花を取りて、佛に供養せんと欲する時、手の所取に隨つて、所礙なし、是くの如く、手の所取に隨ひ、乃至醫藥臥具、而も所礙なし。彼れ是くの如きの念を作さく、「未曾有なり、世尊是くの如きの大神力あり」。時に彼の長者、卽ち佛に白し言さく『唯願はくは世尊、大比丘衆と、我が明日の請食を受けたまへ』。爾の時世尊、默然として請を受けたまふ。時に彼の長者、世尊の默然として許可したまふを見て、前んで佛足を禮し、佛を遶りて去り、卽ち其の家に還り、竟夜種々の肥美の飲食を辨じ、明日清旦往いて、時到ると白す。爾の時世尊、衣を著け、鉢を持ち、大比丘僧千二百五十人と俱に、彼の長者の家に往きたまふ。時に世尊、足を動かして行きたまふ處、大神力あり、天は虛空中に在りて、天曼陀羅華・旃檀末香・天憂鉢羅・鉢頭摩・拘牟頭・分陀利華を以て、以て佛の行迹の處に散じ、天の伎樂歌頌を作して佛を讃す。時に彼の長者、世尊に隨從して是の念を作さく、「今此の音聲は、地より出づるとやせん、上より來るとやせん」、仰いで空中を視るに、遙に天曼陀羅華、乃至分陀利華、及び天の伎樂の、空中に住在するを見て、便ち是の念を作さく、「此の音地より出でず、乃ち上より來る」。時に世尊、長者の家に至り、座に就いて坐したまふ。時に諸の外道聞いて、是くの如きの念を作す。「彼の長者、由來我が諸の外道を供養す、今乃ち更に佛及び僧を請じて飲食せしむ、我れ今寧ろ往いて彼の供具をして不足せしむべし」。卽ち眷屬と俱に長者の家に往く。守門人、諸の外道の、眷屬と俱に來るを見、卽ち往いて長者に白して言さく『知るや不や、今諸の外道、眷屬と來る、當さに入るを聽すべきや不や』。長者言はく『入るを聽す莫れ』。佛言はく『長者、入るを聽すべし』。長者、佛に白さく『外道衆多し、此の處窄狹なり、恐らくは容受せず』。佛言はく『但入るを聽せ、相容受するに足る』。長者復言はく『外道衆多くして、坐處窄狹る、飲食限りあり、本千二百五十人の爲めに供を設く、今恐らくは供足らず』。佛、長者に告げたまはく『但入るを聽せ、相容受するに足る、飲食の供足る』。爾の時世尊、神足力を以て、地をして平正廣博る、東西を觀せし

爲は非なり、威儀にあらず、沙門の法にあらず、淨行にあらず、隨順行にあらず、爲すべからざる所なり、云何が白衣の前に於て神足を現ずる、猶ほ婬女の半錢の爲の故に、衆人の前に於て、自ら現ずるが如し、汝も亦是くの如し、弊木鉢の爲めの故に白衣の前に於て、神足を現ず。白衣の前に於て、神足を現ずべからず、若し現ずれば突吉羅なり。比丘、旃檀鉢を現ずべからず、若し畜ふれば、法の如く治す。若し已成の者を得ば、破分して諸の比丘に與へ、眼藥と作すことを聽す』。時に諸の外道、沙門瞿曇、諸の比丘の、白衣の前に於て神足を現ずることを得ずと制したまふ、彼の沙門の所制終に更に犯さずと聞き、我等今寧ろ彼の所に往き、語りて言ふべし『汝沙門瞿曇、自ら阿羅漢を得たりと稱す、我れも亦是れ阿羅羅なり、自ら神通ありと稱せば、我れも亦神通あり、自ら大智慧ありと稱す、我れも亦大智慧あり、今共に過人法の神力を現ずべし。若し沙門瞿曇、一過人法を現ぜば、我れ當さに二を現ずべし、若し二を現ぜば、我れ當さに四を現ずべし、沙門瞿曇、四過人法を現ぜば、我れは當さに八を現ずべし、若し八を現ぜば、我れは當さに十六を現ずべし、若し十六を現ぜば、我れは當さに三十二を現ずべし、若し三十二を現ぜば、我れは當さに六十四を現ずべし、若し所現轉た增さば、我が現ずること、亦轉た一倍せん。時に諸の外道、城街巷の處々にあり、唱へて言はく『沙門瞿曇自ら神力ありと稱す、我れも亦神力あり、自ら大智慧ありと稱す、我れも亦大智慧あり、我等今沙門瞿曇と共に、神力過人法を捔現せんと欲す、若し沙門瞿曇一を現ぜば、我れ當さに二を現ずべし、是くの如く沙門瞿曇所現の多少は、我れ當さに現ずること轉增一倍すべし』。時に王舍城中に一處あり、其の地廣大平博なり。時に彼の長者多く華香瓔珞伎樂幢幡飮食衣服醫藥臥具を持つて、此處に於て、外道の婆伽婆を供養せんと欲す。時に彼の長者、華を取りて、外道を供養せんと欲し、手を器に入るゝに、輙く出すことを得ず、香花瓔珞幢幡伎樂飮食衣服醫藥臥具を取らんと欲するに、所取に隨ひて、手皆器に著いて出すことを得ず。時に彼の長者、

舍城に、沙門婆羅門あり、是れ阿羅漢にして神力ある者は、此の鉢を取り去るべし』。時に[1]富蘭迦葉、長者の所に至りて語りて言はく『我れは是れ阿羅漢なり、大神力あり、此の鉢并びに囊を持ちて我れに與ふべし』。長者語りて言はく『汝若し是れ阿羅漢にして大神力あらば、汝に與へん、汝往いて取るべし』。彼れ取らんと欲す、而も得るに由なし。時に[2]末佉羅瞿耆羅・阿夷頭翅舍欽婆羅・波瞿迦旃延・訕毘羅吒子・尼揵陀若提子等、長者の所に至り、是くの如きの言を作す『我れは是れ阿羅漢にして神力あり、此の鉢と并びに囊を以て我れに與ふべし』。長者言はく『若し汝は是れ阿羅漢にして大神力あらば汝に與へん、汝往いて取るべし』。彼れ取らんと欲し、而も得るに由なし。爾の時賓頭盧・大目連、共に一大石上に在りて坐す。賓頭盧、目連に語るらく『汝は是れ阿羅漢なり、世尊、汝の神足第一を記したまふ、汝往いて取るべし』。目連言はく『我れ未だ曾て、白衣の前に神足を現ぜず、汝も亦是れ阿羅漢にして大神力あり、世尊汝を記して師子吼最も第一なりと爲したまふ、汝往いて取るべし』。時に賓頭盧、目連の語を聞き已りて、即ち石を合せて身を虛空に踊らせ、王舍城を遶ること七匝す、國人皆東西に避け走りて言はく『石墮ちんと欲す』と。時に彼の長者閣堂の上に在り、遙に賓頭盧の虛空の中に在るを見、即ち合掌して禮を作し、是くの如きの言を作す『此の鉢を取れ賓頭盧』と。賓頭盧即ち鉢を取る。長者復言はく『小しく下り住せよ賓頭盧』と。賓頭盧即ち小しく下り住す。時に長者、手中より鉢を取り、美食を盛滿して與ふ。時に賓頭盧鉢を取り已り、還た神足力を以て、虛に乘じて去る。諸の比丘中、少欲知足にして頭陀を行じ、學戒を樂しみ、慚愧を知るものあり、賓頭盧嫌責して言はく『云何ぞ白衣の前に在りて神足を現ずる』。時に諸の比丘、世尊の所に往き、頭面に足を禮し、却いて一面に坐し、此の因緣を以て具さに世尊に白す。世尊爾の時、此の因緣を以て比丘僧を集め、知りて故らに賓頭盧に問ひたまふ『汝、白衣の前に於て、神足を現ずるや』。答へて言はく『實に爾り』。時に世尊、無數に方便して賓頭盧を呵責したまふ。汝の所

【一】富蘭迦葉(Pūraṇa-kāśyapa)。

【二】末佉羅瞿舍羅(Maskaragośāli-putra)・阿夷頭翅舍欽婆羅(Ajitakeśa-kambala)・波瞿迦旃延(Krakuda-kātyāyana)・訕若毘羅吒子(Sañjayavairaṭṭi-putra)・尼犍子若提子(Nirgranthajñāti-putra)以上所謂六師外道。

法を知ると、是くの如きは何の正法かある、露處に洗浴すること、猶ほし白衣の如し。諸の比丘、佛に白す。佛言はく『爾すべからず』。時に比丘あり、是くの如きの意を作す、自ら推して肩臂を打ち、麁好ならしめんと欲す。佛言はく『爾すべからず』。彼れ是くの如きの意を作す、香を以て身に塗り、香好の爲めの故に。佛言はく『爾すべからず』。時に諸の比丘、身の汗臭を患ふ。佛言はく、『刮汗刀を作ることを聽す』。彼れ寶を用ひて作る。佛言はく『寶を用ふべからず、骨牙角銅鐵鉛錫舍羅草竹木を用ひて、作ることを聽す』。時に六群比丘、刮汗刀を作る、頭、剃刀の形に似たり、汗を刮し、幷びに身毛を去らんと欲す。佛言はく『爾すべからず、亦是くの如きの刀を畜ふべからず』。時に病瘡比丘、麁末藥を以て患痛を洗ふ。佛言はく『細末藥、若しは細泥、葉草菓を以て、病に隨ひ、比丘、身に便することを聽す。病者の種々の瘡乃至患汗臭を洗ふことを聽す』。時に六群比丘耳鐺を著く。佛言はく『爾すべからず』。時に六群比丘、耳輪の上に珠を著く。佛言はく『爾すべからず』。六群比丘、耳環を著く。佛言はく『爾すべからず』。六群比丘、多羅葉若しは鉛錫を以て環張を作り、耳孔をして大ならしむ。佛言はく『爾すべからず』。彼の六群比丘、褁耳璫を纒ふ。佛言はく、『爾すべからず』。彼れ鉛錫の腰帶を作る。佛言はく『爾すべからず』。彼れ頸瓔を著く。佛言はく『爾すべからず』。彼れ臂脚釧を著く。佛言はく『爾すべからず』。彼れ指環を著く。佛言はく『爾すべからず』。彼れ五色縷の絡腋を用ひて、腰臂に繫ぐ。佛言はく『爾すべからず』。彼れ指印を著く。佛言はく『爾すべからず』。

　爾の時世尊、王舍城に在しき。時に外道六師あり、弟子と共住す。時に不蘭迦葉、弟子九萬人と倶なり、末伽羅瞿奢羅、弟子八萬人と倶なり、是くの如く轉た減じ、乃至尼犍子は、四萬人と倶なりき。時に王舍城に長者あり、是れ六師の弟子なり、大段の旃檀木を得、卽ち用ひて鉢を作り、寶を以て絡囊を作り之を盛り、中庭に於て高標を竪て、其の上に安著し、唱へて言はく『若し此の王

を出さしむ。佛言はく『爾すべからず』。彼れ彩色を以て爪を染む。佛言はく『爾すべからず』。佛、比丘に語りたまはく『汝曹癡人、我が所制を避けて、更に餘事を作すと。諸の比丘、皮次に爪を剪ることを聽す』。長短幾許に剪るべきかを知らず。佛言はく『極長一麥ばかりに剪るべし』。時に六群比丘、剪刀を以て鬚髮を剪る。佛言はく『爾すべからず』。彼れ剃髮して鬚を剃らず。佛言はく『應さに鬚髮を剃るべし』。彼れ鬚を剃りて髮を剃らず。佛言はく『應さに鬚髮を剃るべし』。彼れ髮を拔く。佛言はく『爾すべからず』。彼れ髭を留む。佛言はく『爾すべからず』。彼れ髭を撚りて翹げしむ。佛言はく『爾すべからず、汝等癡人、我が所制を避けて更に餘事を作す、自今已去、應さに鬚髮盡く剃るべし』。彼の比丘、髮の長さ幾許にして、剃るべきかを知らず。佛言はく『極長は長さ兩指、若し二月に一剃する、此れは是れ極長なり』。時に六群比丘、鬚髮を梳る。佛言はく『爾すべからず』。彼れ油を以て髮に塗る。佛言はく『爾すべからず。六群比丘、眼瞼を畫く。時の諸の居士見て、皆共に譏嫌す、沙門釋子多欲にして厭ふなし、自ら稱して言はく「我れ正法を知ると、是くの如き何ぞ正法あらん、猶ほ白衣のごとし」。諸の比丘、佛に白す。佛言はく『是くの如く眼瞼に畫くべからず』。時に諸の比丘、眼痛を患ふ。佛言はく『種々の藥を著くることを聽す』。時に六群比丘、鏡に面を照し、或は水中に面を照し、或は物を以て壁を摩し、光り出でゝ面を照さしむ。時に諸の居士、見て皆共に譏嫌し『釋子沙門多欲にして厭ふなし、自ら稱して言はく、我れ正法を知ると、是くの如き何ぞ正法あらん、鏡を以て面を照すこと、猶ほ白衣の如し』。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『爾すべからず』。時に比丘、面瘡を患ふ。佛言はく『餘の比丘、藥を著くること聽す、若し獨り一房に在らば、水鏡を以て面照し、藥を著くることを聽す』。彼の比丘、身を治め髮を治む、佛言はく、『爾すべからず』。彼の比丘、身に唾して揩摩す。佛言はく『爾すべからず』。彼れ露處に於て洗浴す。時に諸の居士、見て皆共に譏嫌す。沙門釋子多欲にして厭ふなし、自ら稱す我れ正

難し、『剃刀嚢中に着くることを聽す』。時に比丘、爪長し、佛言はく、『剪ることを聽す。若しは自ら剪り、若しは人をして剪らしむ』。彼れ剪爪刀を須ふ。佛言はく、『作ることを聽す』。彼れ寶を須ひて作る。佛言はく、『寶を用ふべからず、銅鐵を用ふることを聽す。手捉して掌護し難し、筒を作りて盛ることを聽す』。彼れ寶を用ひて筒を作る。佛言はく、『寶を用ふべからず、銅鐵白鑞鉛錫竹木を用ひて作ることを聽す。筒中より出づるを患ふ、應さに蓋を作りて塞ぐべし』。彼れ寶を用ひて蓋を作る。佛言はく、『寶を用ふべからず、銅鐵若しは白鑞、鉛錫竹木を用ふることを聽す。若し趣ち一處に著くれば、零落せんことを患ふ。刀嚢中に著くることを聽す』。爾の時比丘あり、爪長くして、一白衣の家に至る。此の比丘顏貌端正なり。白衣の婦、見已りて、便ち意を彼の比丘に繫し。卽ち比丘に語りて言はく、『我れと共に如是如是の事を作せ』。比丘言はく、『大姉、是の語を作すこと莫れ、我等の法は爾すべからず』。彼の婦女言はく、『若し我れに從はずんば、我れ當さに自ら爪を以て、面皮を爬き破るべきのみ、我が夫還る時、當さに語りて言ふべし、彼の比丘、我れを喚びて如是の事を作す、我れ彼れに從はず、便ち爪爬して、我が身面を破ること是くの如し』。時に比丘聞き已りて、愧懼して、便ろ疾々に其の家を出づ。比丘も亦出づれば、其の夫も亦外より入る。彼の婦卽ち自ら身面を爪爬し、其の夫に語りて言はく、『比丘我れを喚び、如是の事を作す、我れ從はず、便ち我が身面を爬く』。其の夫疾々に比丘を逐ひ、語りて言はく、『汝、我が婦を犯さんと欲す、我が婦從はず、便ち身面を爬くや』。比丘答へて言はく、『居士是の語を作すこと莫れ、我等の法、爾すべからず』。彼れ便ち言はく、『汝云何ぞ爾すべからずと言ふ、汝の爪長きこと是くの如し』。彼れ卽ち比丘を打ち、死に次ぐ。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『長爪を畜ふべからず』。時に六群比丘、爪を剪りて血を出さしむ。佛言はく、『爾すべからず』。彼れ爪を剪りて、半月形の如くならしむ。佛言はく、『爾すべからず』。彼れ爪を磨いて、光りからず』。彼れ爪を剪りて、頭をして尖ならしむ。佛言はく、『爾すべからず』。

鉢あるものは貸與せよ』。時に比丘あり、蛇、毒を吐く鉢中、洗はずして用ひて食す、食し已りて病を得。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『鉢を洗はずして、用ひて食すべからず、洗ひ已りて用ひ食することを聽す』。時に諸の比丘、髮長し、佛言はく、『剃ることを聽す、若しは自ら剃り、若しは人をして剃らしむ。彼れ剃刀を須ふ。作ることを聽す』。彼れ寶を用ひて欛を作る。佛言はく、『寶を用ふべからず、銅鐵を用ふることを聽す。彼れ露に刀を捉る、掌護しがたし』。佛言はく、『刀鞘を作ることを聽す』。彼れ寶を用ひて作る。佛言はく、『寶を用ふべからず、骨牙角銅鐵白鑞鉛錫舍羅草竹木を用ひて作ることを聽す』。彼れ刀鞘を作る、動もすれば、刄を壞することを患ふ。『應さに物を以て障ふべし、若しは毳、若しは劫貝、若しは犬皮なり。若し墮落すれば、應さに縫を以て連綴すべし。若し手捉して掌護し難ければ、應さに囊を作りて盛るべし。若し囊口より出づれば、應さに繩を以て之を繋ぐべし。若し手捉して行き、失はんことを恐る、繩にて繋絡して肩に着けよ』。時に比丘、刀刄卷を用ふ、『手上に磨するを聽す、若し故卷は、應さに石上に磨すべし』。手に石を捉り、失はんことを恐る。『應さに刀囊の中に盛著すべし。若し刀鈍るれば、刀を刮すべし、若しは自ら刮し、人をして刮せしむ』、彼れ刮刀を須ふ。佛言はく。『作ることを聽す』。時に比丘、剃髮し、髮の衣に着くを患ふ。佛言はく。『承髮器を畜ふることを聽す』。云何が作るかを知らず。『竹を織りて作ることを聽す、若しは木を屈して捲と爲し、樹皮以て之を鞔し、若しは十種衣中の一々の衣にて、承髮器を作ることを聽す』。彼れ承髮物を持つて地に着け、用ふる時膝上に著し、泥土、衣を汚す。佛言はく、『爾すべからず、繩を以て懸け、若しは杙上に安んずべし。時に比丘、鼻中の毛長きを患ふ』。佛言はく、『拔くことを聽す。若しは自ら拔き。若しは人をして拔かしむ』。彼れ鑷を用ふ。佛言はく、『作ることを聽す。『彼れ寶を用ひて作る』。佛言はく、『寶を用ひて作るべからず。骨牙角銅鐵白鑞鉛錫を用ひて、作ることを聽す。若し鑷頭の破るゝを患へば、頭に鐵を安んずることを聽す』、手捉して掌護し

彼の營事の比丘、房を取り已り、彼に房を分つ時、次いで好房を得、便ち前房を捨つ。諸の比丘、佛に白す。佛言はく『爾すべからず、應さに上座に從つて更に分つべし、若し人の取る者なければ、應さに與ふべし』。彼の比丘疑ひ、敢て衆僧の戸鉤、鑰、若しは杖、若しは環、若しは杙、若しは角杓、若しは銅杓、若し浴床を捉らず。佛言はく『捉ることを聽す』。彼れ敢て此の住處より、此の諸物を移し、彼の處に至らず。佛言はく『移すことを聽す。五法あり、應さに差して、僧の爲めに分粥すべからず、設ひ差すとも、分つべからず。若し愛あり、恚あり、怖あり、癡あり、已分未分を知らず、是くの如きの五法あり、差して僧の爲めに分粥すべからず、已に差すとも、分つべからず。五法あり、應さに差して、僧の爲めに分粥すべし。不愛と不恚と不怖と不癡と、已分未分を知ると、是くの如きの五法あり、應さに僧の爲めに分粥し、小食を分ち、佉闍尼を分つべし。請會に差し、臥具をを敷く、臥具を分ち、浴衣を分ち、衣を分つ、取るべきは與ふべし、比丘の使を差し、沙彌の使を差すも、一切亦是くの如し。五法あり、僧の爲めに分粥せば、地獄に入ること箭を射るが如し、愛あり、恚あり、怖あり、癡あり、分未分を知らず、是くの如きの五法あり、分粥すれば、地獄に入ること箭を射るが如し。五法あり、分粥すれば、天に生るゝこと箭を射るが如し、不愛・不恚・不怖・不癡・分未分を知る、是くの如きの五法あり、僧の爲めに分粥すれば、天に生るゝこと箭を射るが如し。乃至沙彌使を差す、亦是くの如し』。房舍犍度具足し竟る。

雜犍度の一

爾の時世尊、波羅㮈に在しき。五比丘、佛所に來至し、頭面に足を禮し、却いて一面に坐し、佛に白して言さく『我等應さに何等の鉢をか持つべき』。佛言はく『迦羅鉢、舍羅鉢を持つことを聽す』。時に比丘あり、僧中に入りて鉢なし。佛言はく『比坐與ふることを聽す。若し僧中に、此の二種の

に往いて住すれば、即ち此の處を失ひ、彼れに於て少しく住し已り、亦此の處に還らば、復彼の處を失ふ』。爾の時衆僧の房舍故壞す。異居士ありて言はく、『若し我れに與ふれば、我れ當さに修理すべし』。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『與ふることを聽す。白二羯磨して、應さに是くの如く與ふべし。衆中應さに羯磨に堪能なる者を差し、上の如く、是くの如きの白を作すべし。「大德僧聽け、若し僧時到らば、僧忍聽せよ、僧今此の房を持つて、某甲居士に與へて修治し、某甲比丘に經營することを、白すること是くの如し」。「大德僧聽け、僧今此の房を以て某甲居士に與へて修治し、某甲比丘經營す、誰か諸の長老、僧此の房を持つて、某甲居士に與へて修治し、某甲比丘經營することを忍する者は默然せよ、誰か忍せざるものは說け」。僧已に、某甲居士に房を與へて修治し、某甲比丘經營することを忍し竟る。僧忍して默然する故に、是の事是くの如く持つ』。爾時營事の比丘、未だ房を分たず、便ち出でゝ行く。諸の比丘即ち後に於て房を分つ。彼の營事の比丘還りて問うて言はく、『我が營事房を留むるや不や』。彼れ答へて言はく、『不』。即ち諸の比丘を嫌責して言はく、『我れ未だ房を分たずして出で行く、而も後に於て便ち房を分つ、我れ此に於て益あり、何が故ぞ我れに房を與へざるや』。諸の比丘、分を成すや分を成さゞるやを知らず。佛言はく、『分を成す、應さに還るを待つべし、彼れ亦應さに人に囑して取るべし』。時に營事の比丘、未だ房を分たずして出でゝ行く、餘の比丘に囑して房を取る、而も房の處所を指示せず、彼の比丘營處多し、此の比丘、ために何の房を取らんを知らず、諸の比丘、房を分ち已り、彼れ方さに還りて、諸の比丘に問ふ、『房を分つや未だしや』。答へて言はく、『已に分つ』。『我が爲めに房を取るや不や』。答へて言はく、『不』。彼れ即ち嫌責して言はく、『未だ房を分たず、我れ出でゝ行く、餘の比丘に囑して我が爲めに房を取る、我れ此に於て益あり、而も我がために房を取らず』。諸の比丘、分を成すや、分を成さゞるやを知らず。佛言はく、『分を成す、應さに還るを待つべし、彼れ亦應さに指授して言ふべし、某甲の房を取れと』。

營事の比丘あり、人を遣はして僧に白し、房を索む。彼の比丘、僧中に至り、房を索め已りて、營事の比丘便ち命過す、諸の比丘、此の房、誰に與へんかを知らず。佛言はく、『應さに彼の營事者に與ふべし』。時に營事人、夏安居中に命過す、諸の比丘、此の房、誰に與へんを知らず。佛言はく、『僧に隨へ』。時に比丘あり、房を作つて、未だ覆はず、捨てゝ行く。時客比丘、舊比丘に語りて言はく、『此の房を覆ふべし』。舊比丘答へて言はく『作者は應さに覆ふべし』。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『極大好の重閣房は、六年內に覆ふべし、餘の小を成す者は、事に隨つて宜しきを量れ』。時に一比丘あり房を作る、異比丘ありて覆ふ、彼の二比丘、共に先後を諍ひ、屋を治す。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『先きに作る者、應さに先づ治すべし』。時に二比丘あり、共に房を作る、二人共に前後を諍うて作る。佛言はく『更互に作ることを聽す、上座は先きに在り』。時に營事の比丘、夏安居して所治の房を受け、復餘房を受く。佛言はく『爾すべからず、即ち所住の房に、安居の房を作れ』。

爾の時世尊、拘睒彌に在しき。時に王優塡、跋難陀と親厚なり、王請じて拘睒彌に在りて夏安居す。時に跋難陀、諸を愛け、安居し已り、異處の安居僧あり、大に衣物を得ると聞き、即ち彼の處に往き、少時住し已りて拘睒彌に還る。時に王優塡、聞き已りて譏嫌す。云何が跋難陀、我が請を受けて夏安居し已り、異處の僧あり、大に夏安居衣物を得ると聞き、而も彼れに往いて住し、後に還りて此に來るや。時に諸の比丘聞き、世尊の所に往き、頭面に足を禮し、却いて一面に坐し、此の因緣を以て具さに世尊に白す。世尊爾の時、此の因緣を以て比丘僧を集め、跋難陀釋子を呵責して言はく『云何ぞ請を受けて拘睒彌に在りて夏安居し、異處の僧の、大に夏安居衣物を得るありと聞き、便ち彼れに往いて住し已り、復此に還るや』。無數の方便をもて呵責し已り、諸の比丘に告げたまはく、『若し比丘此の處に安居し、異處の僧の、大に夏安居の衣物を得るありと聞き、而も彼れ

卷の第五十一（第四分の二）

房舍犍度の餘

爾の時世尊、舍衞國に在しき。時に比丘あり、僧地の中に在りて私房を作る。上座の客比丘あり、來り語りて言はく、『起つて上座を避けよ』。彼れ答へて言はく、『起たず』。問うて言はく、『何の故ぞや』答へて言はく、『是れ我が私房なり』。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『應さに語りて起たしむべし、若し起たば善し、若し起さざれば、應さに語りて言ふべし、「僧地を還せ」、更に理あることなし、僧地に入り已るを以てなり』。比丘あり、平かに屋を成す、堅牢ならず。佛言はく、『爾すべからず』。彼れ便ち盡形壽に一房を經營す、屋時に成らず。佛言はく、『爾すべからず。若し極上大好の重閣堂を作らば、十二年經營することを聽す。餘は大小の量の宜しきに隨ふ』。彼の經營人、一切の時、春夏冬に、僧の常營事の房を受く。佛言はく、『爾すべからず、夏三月竟りて、上座に隨つて分つを聽す』。時に比丘あり、通じ僧伽藍を經營す、便ち處々に房分を取る。佛言はく、『爾すべからず、應さに九十日に、一處住を取るべし』。彼の經營人、衆多人の住處に在り、食堂・溫室・經行堂に住し、客比丘をして住處なからしむ。佛言はく、『爾すべからず、若し下堂衆多人の住處ならば、應さに上堂に在りて住すべし、若し上堂衆多人の住處ならば、應さに下堂に在りて住すべし』。彼れ小々の經營、泥壁、若しは補缺、若しは平地を作し、便ち營事者の房を索む。佛言はく、『爾すべからず』。彼れ小房を作り、營事者の房を索む。佛言はく、爾すべからず。若し所作の房に、繩床、木床を受けんには、營事房を與ふることを聽す』。彼れ惡房を作り、便ち營事者の房を索む。佛言はく、『爾すべからず。若し所作の房、莊嚴香薰の所須具足せば、房を與ふることを聽す』。時に營事の比丘あり、房を受け已りて命過す、諸の比丘、此の房誰に屬せんを知らず、佛に白す。佛言はく、『僧に隨へ』。時に

釜・鑊・斧・鑿・燈臺の諸の雜重物は、第二比丘分と作さん。繩床・木床・大褥・小褥・臥具・雜物は、第三比丘分と作さん。餘の林木・竹草・花果葉は、第四比丘分と作さん。時に四比丘卽ち上房を選びて、世尊に留め、餘は上の如く、分ちて四分と爲す。時に世尊、迦尸國より人間に遊行し、羈連に至り、座を敷いて坐したまひ、舍利弗、目連に告げたまはく、『汝往いて、彼の舊比丘に語れ、世尊、五百の比丘と倶に、迦尸國に來る、汝今諸の比丘の爲めに、臥具を敷置すべし。舍利弗、目連、世尊の教を受け已りて、舊比丘の所に往き、教勅したまふ所の如く、臥具を敷かしむ。彼の比丘答へて言はく、『世尊は法主、便ち意に隨つて住止したまふべし、我等先きに已に、上房を選びて世尊に留む。餘は分ちて四分と爲すこと上の如し、客比丘の臥具なし』。時に舍利弗、目連、世尊の所に往き、頭面に足を禮し、却いて一面に坐す。此の因緣を以て、具さに世尊に白す。世尊此の因緣を以て比丘僧を集め、告げて言はく、『此の四分の物は、是れ四方僧物なり、分つべからず、自ら入るべからず、賣買すべからず、亦僧の所賣に非ず、衆多人乃至一人の所賣に非ず、若し彼の僧、衆多人、一人、自ら己れに入れ、若しは分ち、若し賣買せば、自入を成ぜず、分を成せず、賣買を成せず、偸蘭遮を犯す。何等か四方僧物・僧伽藍・僧伽藍物・房・房物、此れは是れ第一分四方僧物なり、分つべからず、自入すべからず、賣買すべからず。若しは僧、若しは衆多人、若しは一人、分つことを得ず。自入することを得ず、賣買するにとを得ず、若しは僧、若しは衆多人、若しは一人、分つことを得ず、自入することを得ず、賣買することを得ず。若しは僧、若しは衆多人、若しは一人、若しは分ち、若しは自入し、若しは賣買するも、分を成ぜず、自入を成ぜず、賣買を成ぜず、偸蘭遮を犯す。第二第三も亦是くの如し。第四分中の、果葉は分つことを聽す、若し花は佛に上る。餘は上の如し。

四分律卷第五十

房舍犍度の初め

羅、世尊の所に往き、頭面に足を禮し、卻いて一面に坐し、佛に白して言さく、『世尊、向きに勅したまふ所、我れ具さに居士の爲めに之を說く。居士我れに答へて言はく、「我れ汝に呵責すべきの事あるを見ず、沙門の法に於て、亦不清淨の若しは口說、若しは身行あることなし」』と。時に世尊、此の因緣を以て比丘衆を集め、告げて言はく、『汝等善く聽け、非法施・非法受・非法住・如法施・如法受・如法住を。云何が非法施・非法受・非法住。或は人あり、自心喜樂して房を作り、一人に施し已りて、彼衆多人に施す、是れを非法施・非法受・非法住と爲す。一人に施し已りて、復以て僧に施すも、亦是くの如し。一人に施し已りて、僧破して二部と爲り、已れの所同の部に施すも、亦是くの如し。一人に施し已りて、異部に施與するも、亦是くの如し。或は人あり、自心喜樂して房を作り、衆多人に施し已りて、復衆僧に施す、是れを非法施・非法受・非法住と爲す。衆多人に施し已りて、僧破して二部と爲り、已れが所同の部に施も、亦是くの如し。衆多人に施し已りて、異部に施與するも亦是くの如し。衆多人に施し已りて一人に施すも、亦是くの如し。房を作りて僧に施し已り、轉じて餘人に施與するも亦是くの如し。房を作り已りて、已れが所同の部に施すも、亦是くの如し。房を作り竟りて、異部に施與するも亦是くの如し。是れを非法施・非法受・非法住と爲す。云何が如法施・如法受・如法住。或は人あり、喜樂して自ら房を作り、一人に施す、是れを如法施・如法受・如法住と爲す。衆多人に施し、僧に施し、二部僧に施すも、亦是くの如し、是れを如法施・如法受・如法住と爲す』。爾の時世尊、迦尸國に於て人間に遊行したまひ、五百の比丘と倶なりき。時に羇連國に、四舊比丘なり、阿混衶・不那婆沙・般陀・橘醯那なり。時に四比丘、世尊の五百人と、倶に人間に遊行し、當さに羇連に來至したまふべしと聞く。世尊に二人の弟子舍利弗、目連あり、此に來至して、恐らくは我等を驅りて、此の住處を出でしめん、我等寧ろ上房を選擇して世尊に與ふべし、餘は分ちて四分と爲し、以て私有と爲さん。僧伽藍・僧伽藍物・房舍・房舍物は、第一比丘と作さん。瓮瓶・瓮・

に鐵鐶鈕を安んぜよ』。時に諸の比丘、冬月脚を洗ひ、冷を患ふ。佛言はく、『應さに澡盤洗脚器を安んじ、屋裏に在りて洗ふべし、洗脚の所須は、應さに與ふべし』。時に比丘、早く起き、油を脚に塗り已りて、聚落に入りて乞食す。女人、足を接して禮す、油汚手にて、比丘の鉢を捉る。餘の比丘、見て之を惡む。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『早起して、油を脚に塗り、聚落に入りて乞食すべからず。諸の比丘、脚劈破すれば、足跟足底に油を塗り、塗りて指奇に至ることを聽す』。時に衆僧、一重房を得たり。佛言はく、『住することを聽す』。

爾の時世尊、摩竭國より曠野城に至る。時に六群比丘、世尊の爲めに、男女の形像の文繡を以て、堂屋を莊挍す。佛言はく、『爾すべからず。餘の雜色の禽獸を用ふる者を聽す』。時に衆僧、兩房一戶の重屋を得たり。佛言はく、『住することを聽す』。爾の時世尊、舍衞國に在せり。爾の時阿難別房を得たり。佛言はく、『畜ふることを聽す』。爾の時羅睺羅、那梨林中に在りて住しき。時に那梨に居士あり、人の勸化するなし、自ら發意して房舍を作り、羅睺羅に施す。時に羅睺羅、此の房に住し已りて、人間に遊行せり。時に彼の居士、羅睺羅の房に在りて住し、已りて人間に遊行すと聞き、便ち房舍を以て衆僧に施せり。爾の時摩竭提より人間に遊行し、那梨林中に至り、座を敷いて坐したまふ。時に羅睺羅、居士の房を以て衆僧に施すと聞き、便ち往いて世尊の所に至り、頭面に足を禮し已りて、却いて一面に坐し、佛に白して言さく、『那梨に居士あり、自ら發意して房を作り、我に施せり。我れ房に於て住し已り、出でゝ人間に遊行す。後居士復房を以て衆僧に施せり。佛、羅睺羅に告げたまはく、『汝彼の居士の所に往いて、語りて言ふことを聽す。汝將さに我れを見て、可呵の事、不清淨非沙門の法の、若しは口說、若しは身行あること無からんとするや』。時に羅睺羅、世尊の敎を受け已りて、居士の所に往き、具さに居士に向つて、如上の語を說く。居士答へて言はく、『我れ汝に呵責すべきの事、非沙門の法の、若しは口說、若しは身行の不清淨あることを見ず』。時に羅睺

行く。若し風雨日曝を患へば、屋覆を作ることを聽す』。

爾の時世尊、拘睒彌に在し、六群比丘、好綵畫嚴飾房中に於て火を然やし、炙煙房を汚し、臥具を汚す。佛言はく『爾すべからず』。時に諸の比丘、冬月寒を患ふ。『露地に火を然やして炙ることを聽す』。露地に坐し、背の冷を患ふ。『外に在りて火を然やし、煙盡きて、炭を持つて屋に入ることを聽す。若し相容受せずんば、應さに別に燃火堂を作るべし』。云何が作るかを知らず。佛言はく『四方に作る、若しは圓、若しは長に作ることを聽す』。彼れ處々に胡竈を安んず。佛言はく『爾すべからず、當さに中に在りて、火爐を安んずべきを聽す』。時に諸の比丘、有輪火爐を得たり。佛言はく、『畜ふることを聽す』。誰か推行すべきかを知らず、佛言はく『沙彌、比丘、若しは守僧伽藍人なり』。彼の比丘、吹火に慣れず、火を吹いて患ひを得たり。佛言はく『筒を作りて吹くことを聽す』。彼れ寶を用ひて筒を作る、佛言はく『寶を用ふべからず、牙・角・骨、若しは銅・鐵・舍羅草の筒、若しは竹・葦、若しは木にて作ることを聽す。若し筒口の焦げんことを患へば、鐵鍱を安んずることを聽す』。竈中の薪火墮つ、『應さに上ぐべし、若し燒手を患へば、鉗を作れ』。彼れ寶を用ひて鉗を作る。佛言はく、『爾すべからず。應さに骨牙角銅鐵木を用ひて作ることを聽す。若し頭燒を患へば、銅鐵鍱を安んずることを聽す』。彼れ火を聚めんと欲し、把推聚を作る。『若し種火を欲せば、應さに火坑を作り、火を安んずべし、若し火滅を恐るれば、灰を以て上を覆へ』。時に諸の比丘、冷水にて面を洗ひ、手脚の冷ゆるを患ふ。佛言はく『煖水にて洗ふを聽す』。云何んが煖むるを知らず。佛言はく、『澡罐に水を盛り、火邊に著け、若し澡罐多くして、若し火邊容れずんば、應さに三揭杖瓶を安んじ、水を盛りて上に著け煖むべし』。瓶入にして火を妨ぐ、『應さに繩懸を作るべし。若し繩燒くれば、筒を以て繩を盛り、若し筒燒くれば、泥を以て泥す』。水を瀉ぐ時、筒折る。佛言はく、『應さに餘器を以て牽いて取るべし』。瀉水瓶中、時に棄水を患ふ、『應さに澍水筒を作るべし。若し懸繩斷ずれば、上

相取與することを聽す』。衣を以て、身を障ふ者は、一切如法なり。浴事を經營するは、作すことを得。若し水少ければ、應さに大に水處を開通すべし。若し水の漏下すること多きを患へんには、應さに邊に至りて、更に小漏處を作るべし』。諸の比丘、露地に浴し、患を得。佛言はく、『別に小浴室を作ることを聽す。若し地泥を患ふるは、甎石若しは木、若しは碎石、若しは沙を安んずべし。若し故泥せんには、應さに決して水を去るべし』。時に諸の比丘、露處に水を溫む、天雨ありて衣を濕す。佛言はく、『溫水屋を作ることを聽す』。時に諸の比丘、薪を露地に安んず、天雨濕す。佛言はく、『安薪屋を作ることを聽す』。時に比丘あり、露地に煮食を看、天雨衣を濕し、淨人の飲食器物を汚す。佛言はく『淨食厨屋を作ることを聽す』。時に比丘、白衣の家にて、飲食を設けんが爲めに請を受く。道路に往いて天雨に遇ひ、衣服を澆濕す。佛言はく、『聚落の間に於て、別に僧伽藍處を安んずることを聽す』。時に諸の比丘、露處に大小便す。婦人ありて之を見る、比丘疾々に起ち、大便竟らず、遂に患を成す。佛言はく、『厠屋を作ることを聽す』。彼れ一大便處を安んず。時に多人立ちて待つ。佛言はく、『衆多處を作ることを聽す。若し戶に當りて見ゆれば、應さに障を作るべし、若し更に相看るは、應さに隔障を作るべし』。彼の上座志病比丘、大小便に起つ時、地に倒る。『邊に在りて欄架を安んずることを聽す』。彼れ處々に在りて大便を拭ふ、或は壁角に在り、或は石上、或は草上に在り。佛言はく、『爾すべからず、別に洗處を作ることを聽す』。彼れ處々に小便し、地を泥汚す。佛言はく、『爾すべがらず、應さに邊の一處に在りて小便すべし、若し故泥汚を患へば、應さに別に小便處を作るべし』。云何が作るかを知らず。佛言はく、『地を掘りて坑を作り、石を安んじて、瓮を以て上に著け、瓮底を開いて漏下し、瓮の兩邊には木を安んずべし。若し氣臭を患へば、蓋を作りて覆へ』。時に諸の比丘露地に經行す、蛇蝎蜈蚣百足あり、未離欲の比丘見て恐怖す。佛言はく、『懸經行處を作ることを聽す』。云何が作るを知らず。佛言はく、『下に柱を竪て、上に板を安んじ、木閣道を

『覆ふことを聽す』。背熱を患ふ、『遮ることを聽す。若し身に汚臭あれば、泥を以て洗ふことを聽す』。彼の比丘疑ふ、敢て香を以て、泥中に著けず。佛言はく、『著くることを聽す』。浴室裏の地、熱きを患ふ、『應さに澆いで冷かならしむべし』。彼れ白衣と共に浴す。『若し佛法僧を稱嘆する者は、浴することを聽す』。時に諸の比丘、衣を以て露地に著く、天雨漬す。佛言はく、『疊んで壁上、龍牙代上、若しは衣架上の著くることを聽す』。彼れ煙の黑く衣を汚すを患ふ、佛言はく、『別に衣屋を作ることを聽す』。彼れ露形にして、露形者の爲めに身を揩す。佛言はく、『爾すべからず』。彼の露形せざる者も、畏愼して疑ふ、敢て露形者の爲めに身を揩せず。佛言はく、『聽す』。彼の露形者、露形者の爲めに剃髮す。佛言はく、『爾すべからず』。彼の不露形者、露形者の爲めに剃髮す。佛言はく、『爾すべからず』。彼れ露形にして楊枝を嚼む。佛言はく、『爾すべからず』。彼れ露形にして、手脚面を洗ふ。佛言はく、『爾すべからず』。彼れ露形にして食す。佛言はく、『爾すべからず』。彼れ露形にして大小便す。佛言はく、『爾すべからず』。彼の露形者、露行者を禮す。佛言はく、『爾すべからず』。彼の露行者、不露形者を禮す。佛言はく、『爾すべからず』。彼れ露形にして道を行く。佛言はく、『爾すべからず』。彼れ露形にして經行す。佛言はく、『爾すべからず』。時に祇洹の浴室、水を去ること遠し。『渠を通じ、井を鑿つことを聽す、上の如し。若し水少ければ、應さに大に渠を作るべし』。彼れ水を汲んで、手痛を患ふ、『楔槹を安んずることを聽す』。水を何處に儲はへんかを知らず。『甕中に著くることを聽す』。天雨を被る時、衣服を澆濫するを患ふ。『井上に屋を安んずることを聽す』。時に比丘、露形にして水を汲む。婦女の來るを見、慚愧して便ち坐す。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『爾すべからず』。時に諸の比丘、泉若しは渠、若しは池水の中に在りて浴す。時に龍女瞋嫌す。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『爾すべからず。四種の覆障浴あり、若しは牆壁障處、若しは樹木草障處、若しは水、身を障へ、若しは衣、身を障ふるあり、彼れ上の三處に在りて洗浴する者は、若し所須あれば、互に

時に祇洹、水を去ること遠し、『渠を作りて水を通ずることを聽す』。渠の壞るゝを患ふ。佛言はく、『草を以て遮ることを聽す、若し草爛壞すれば、復應さに甎石若しくは木を以て遮るべし。若しは復井を作る。井を作るに、所須一切與ふることを聽す。若し井泥を出すの器破るれば、木を以て四邊を壓し、器を持つて中に著くることを聽す。若し故破壞せんには、毛毲囊を以て盛ることを聽す。若し故復破るれば、皮革を以て作ることを聽す。若し繩斷ずれば、皮を以て作ることを聽す』。比丘作るに慣れず、手痛を患ふ。『輪を轉じて牽くことを聽す』。若し輪孔壞すれば、鐵を以て作ることを聽す。若し水還り來りて、井に入ることを患へば、應さに石若しは甎、木を以て、四邊を障ふべし。若し洗處の泥を患ふれば、應さに甎石を安んずべし。若し小兒の、井に墮つるを患へば、應さに木若しは瓦・甎・石を以て、欄遮を作るべし。若し泥器を牽ひて、繩斷じて井に墮つるは、鉤を以て鉤取すべし』。彼れ井索を安んずる處なし。佛言はく、『井邊に近く架を作りて上に著くるを聽す』。時に祇洹に浴室なし。佛言はく、『作ることを聽す』。云何が作らんを知らず。佛言はく、『若しは四方、若しは圓、若しは八角を聽す』。彼れ屋前に在りて作る。佛言はく、『爾すべからず。應さに邊屏處に在りて作るべし』。破れ浴室の冷を患ふ。佛言はく、『戸を作ることを聽す』。煙を患ふ。『上に孔を開くことを聽す』。闇を患ふ、『應さに窓を開くべし』。泥を患ふ、『應さに石、甎、若しは木を以て、浴床を作るべし。』泥の脚を汚すを患ふ。『應さに石甎を以て地を砌すべし。若し木頭に差跌すれば、應さに鑿にて、狗牙を作り、相壓すべし』。時に六群比丘、上座涼を得んと欲すれば、便ち戸を閉ぢ、熱を得んと欲すれば、便ち戸を開く。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『應さに衆增の所欲に隨つて、應さに與ふべし』。彼の六群比丘、先づ浴室に入り、好處に在りて坐す。上座後に來りて入るに處なし。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『次に隨ふ處に、彼の上座を坐せしむべし』、入らざれば其の處空し、佛言はく、『次座の者、應さに坐すべし』。煙、面を熏ず。『物にて面を遮ることを聽す』。頭熱を患ふ、

『我れ此の祇洹園を以て世尊に奉上す、唯願はくは之を受けたまへ』。佛言はく『居士、汝此の祇洹園を以て、佛及び四方僧に奉るべし、何を以ての故に。居士、若し是れ世尊の園ならば、園物・房舍・房舍物・衣・鉢・坐具・針筒は、便ち是の塔廟、一切の諸天・世人・沙門・婆羅門・魔・梵、能く用ふるものなし』。卽ち敎の如く、園を以て、佛及び四方僧に奉る。『唯願はくは世尊、慈愍之を受けたまへ』。爾時世尊、偈を說いて勸喩したまはく、

園果樹を種植し　若しは橋船を設け　曠野に井泉を施し　及び房舍を施す　是くの如きの人等は　晝夜に福增益せん　如法に常に戒を持ちて　後善道に生るゝを得ん。

時に給孤獨食、頭面に足を禮し已りて、却いて一面に坐す。世尊無數に方便し、種々に說法開化して歡喜を得しむ。給孤獨食、法を聞いて歡喜し、已りて足を禮して去る。時に祇洹園に、牛羊來入して禁限あることなし。佛言はく『塹障を掘作せよ。彼の上座老病比丘、行く時度すること能はず。佛言はく『橋を作ることを聽す』。而も云何が作るかを知らず。『應さに板若しは木を以て作るべし』、若しは橋索を安んじて連繫せよ。上座老病比丘橋を度る時、脚跌いて地に倒る。佛言はく『兩邊に索を安んじ、手に捉りて順つて度ることを聽す。若し索を捉りて故地に地に倒るれば、應さに兩邊に欄楯を安んずべし。若し塹牢からざれば、應さに重ねて籬障を作るべし。若し門無ければ、門を作ることを聽す、若し籬堅牢ならざれば、牆を擣くことを聽す、作牆の所須は、一切應さに與ふべし、若し不牢ならば、應さに重樓閣を作るべし』。時に祇陀王子、祇洹の爲めに、大貴價重門を作らんと欲す。佛言はく『作ることを聽す』。時に祇洹園樹不好なり。佛言はく『三種の樹を種うることを聽す』。華樹・果樹・葉樹なり。時に上座の、衆に知識せらるゝ比丘、舍衛に於て食し已り、祇洹に還り熱を患ふ。佛言はく『草若しは樹葉を以て障ふることを聽す。十種衣中の、一々の衣障にて、蔭と作すことを聽す。若し故熱ければ、應さに階道の邊に循つて、三種の樹を種うべし、上の如し』。

れ地に灑ぐ。佛言はく『爾すべからず』。彼の上座老病比丘、數ば起ちて疲極す。佛言はく『唾器を作ることを聽す』。彼れ多人の住處に於て、唾を捨てゝ地に棄つ。佛言はく『爾すべからず』。彼の上座老病比丘、數々起つて唾を棄てゝ疲極す。『器、若しは蠡、若しは劫貝、若しは弊物、若しは綿を以て、拾つて中に著くべし。若し唾走り出でんには、應さに筒を作りて盛るべし』。彼れ寶を用ひて筒を作る。佛言はく『寶を用ひて筒を作るべからず、牙若しは骨、若しは鐵、若しは銅、若しは鉛錫、若しは竿蔗草、若しは竹、若しは葦、若しは木を用ひて、筒を作ることを聽す。唾若し出づれば、應さに蓋を作し塞くべし』。彼れ寶を用ひて塞を作る。佛言はく『寶を用ひて作るべからず、應さに牙骨乃至木を用ひて作るべし。安處なし、應さに縷を以て繫ぎ、床脚の裏に著くべし』。時に比丘、房を分つ。比丘あり、破壞房を得たり、彼れ是くの如きの意を作す、或は我れをして修治せしむと、即ち取らず。佛言はく『應さに受くべし、力の多少に隨ふ、應さに治すべし』。彼れ房を治めんと欲す。佛言はく『治を聽す、一切所須の具應さに供給すべし』。

爾の時世尊、毗舍離より人間に遊行し、跋闍國を經て舍衛國に至る、千二百五十の比丘と倶なりき。時に給孤獨食、世尊の彼れより來りて、舍衛國に至りたまふと聞き、即ち車に乘じて往いて迎ふ。遙に佛の來りたまふを見、即ち車を下り、前んで佛所に詣り、頭面に足を禮し、却いて一面に住す。時に世尊、無數の方便にて、給孤獨食の爲めに、種々に說法開化し、歡喜を得しめたまふ。已りて世尊に白くて言さく『唯願はくは、我が明日の淸食を受けたまひ、祇洹に於て宿したまへ』。世尊默然として之を受けたまふ。時に給孤獨食、佛の請を受けたまふことを知り已り、禮を作して去りて家に還る。即ち其の夜に於て、種々肥美の飲食を辨ず。淸旦往いて時到ると白す。世尊衣を著け、鉢を持ち、食堂に往詣し、座に就いて坐したまふ。給孤獨食、手づから種々の美食を斟るし、佛及び衆僧に供養し、滿足せしむ、捨鉢して、金瓶を持ち、水を授け已りて、佛に白して言さく、

はく、『應さに弊物を以て水中に內れ已りて、四邊を拭ふべし』。作墼の處に草あり。佛言はく、『應さに無草處に在るべし、若し墼燥かざれば、應さに剗りて齊からしむべし。若し反す時草を斷ずるは、無犯なり。墼齊しからざれば、應さに反すべし。若し燥けば、應さに之を積むべし。若し天雨漬さば、應さに上を覆ふべし。若し風吹かば、上覆して、應さに木石を以て上に鎭すべし。若し牛羊畜生の、上覆の草を食ふを患へば、應さに泥を以てすべし。泥上に彼れ戶を須ひば、應さに戶を與ふべし』。彼れ戶邊に於て龍蛇の像を作る。佛言はく、『是くの如きの像を作るべからず、蒲桃蔓、若し蓮華の像を作ることを聽す』。彼れ戶上に於て、華像を作らんと欲す。『作ることを聽す』。彼れ兵馬の像を作る。佛言はく、『作るべからず、應さに紫色、若しは朱、若しは五種色を以てすべし』。彼れ色脫に倚る。佛言はく、『倚るべからず』。彼の上座の老病比丘、及び遠來の比丘、倚らざれば安んぜず。佛言はく、『草葉樹皮十種衣の以てすることを聽す、一々の衣を以て、背後に著けて之に倚るなり』。彼の比丘、晝日多人の處にて、脇を地に著けて眠る。諸の居士、見て皆共に譏嫌して言はく、『沙門釋子自ら覺悟すと稱し、而も自ら晝日、脇を地に著けて眠るや』。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『爾すべからず』。彼の上座の老病、遠來の比丘、晝日眠らずして疲極す。佛言はく、『房內に入り、戶を閉ぢて眠ることを聽す』。彼れ病人を驅遣す。佛言はく、『病人を遣るべからず、亦去るべからず』。彼の六群比丘、病に託して上座を避けず。諸の比丘、佛に白す、佛言はく、『爾すべからず』。彼の病比丘、閣上大房の中に在りて住し、大小便唾す、汚穢臭處不淨なり。佛言はく、『病比丘は、閣上大房の中に在りて住すべからず、應さに小房中に在りて住すべし』。若し別に小房を作らば、彼の病比丘、大小便處に至ること能はず。佛言はく、『近處に在りて坑を鑿ち、大小便處を安んずることを聽す。若し房を出づること能はざれば、屋中に便器を安んずることを聽す』。若しは起つて床を離るゝこと能はず。佛言はく、『床を穿ちて孔を作り、便器を下に著くることを聽す』。彼れ房中に唾し、汚

たず、此れ僧地に非ずど。佛言はく、『爾すべからず、應さに起つべし』。水邊・樹下・石邊・草上・舡上に在りて起たず、上座を避けて言はく。『此れ僧地に非ず』と。佛言はく、『應さに起つべし』。爾の時居士あり、僧の爲めに房を作る、而も人の住するなし、彼れ是くの如きの言を作す、『大富長者は、多く財寶に饒にして、僧の爲めに房を作らば、沙門釋子は、便ち中に在りて住す、我曹は貧窮なり、誰か當さに此に住すべき』。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『衆僧應さに比丘に與ふべし、白二羯磨して、應さに是くの如く與ふべし。衆中羯磨に堪能なるものを若し、上の如く是くの如きの白を作せ。「大德僧聽け、今僧、某甲の房を以て、某甲比丘に與へて料理せしむ。若し僧時到らば、僧忍聽せよ、白すること是くの如し」。「大德僧聽け、此の某甲の房は、某甲比丘に與へて料理せしむ、誰か長老、僧、此の某甲の房を以て、某甲に與へて料理せしむることを忍するものは默然せよ、忍せざるものは說け。僧已に、某甲の房を以て、某甲比丘に與へて、料理せしむることを忍し竟る、僧忍して默然するが故に、是の事是くの如く持つ』。時に諸の比丘、房を作らんと欲す。佛言はく、『聽す』。若し石、樹根、棘刺あらば、應さに却くべし、若し坑渠の處、低下の處あらば、應さに塡平すべし、若し水を慮らば、應さに提障を設くべし、若し地に主あり、或は餘言を致すものあらば、應さに決了分明にすべし。若し大樹株、若し石あらば、應さに堀出すべし、若し出すこと能はずんば、燒去せよ、若し去るべからずんば、燒き已りて、水若しくは苦酒を以て澆げ、若しは石を以て推し、打破して出せ、若し破り難ければ、鐵を以て推し、打破して出せ、若し復出すべからずんば、邊に於て大坑を作り、深く埋めよ。彼れ地を平らげんと欲す、『應さに耕し已りて之を磨平すべし』、誰かまさに平らぐべきかを知らす。佛言はく、『若しは比丘、若しは沙彌、若しは守僧伽藍人、若しは優婆塞なり』。彼れ墼を須ふ『作ることを聽す』。若しは自ら作り、若しは人をして作らしむ』。彼れ墼摸を須ふ。『與ふることを聽す』。若しは泥墼摸に著く。佛言

者は、後受大戒者を禮すべからず。邊罪を犯す、比丘尼を犯すと言ひ、賊心受戒・壞二道・黃門・殺父・殺母・殺阿羅漢・破僧・惡心出佛身血・非人・畜生・二根、若しは被擧、若しは滅擯、若しは應滅擯、一切非法語者は禮すべからず。何等の人か應さに禮すべき。少沙彌尼は、應さに大沙彌尼・沙彌・式叉摩那・比丘尼・比丘を禮すべし。是く如等の人の塔は一切禮すべし。若し少年沙彌は、應さに大沙彌・沙彌尼・式叉摩那、乃至比丘を禮すべし、及び塔は一切禮すべし。小式叉摩那は、應さに大式叉摩那・比丘尼・比丘を禮すべし、及び塔は禮すべし。年少比丘は、應さに大比丘を禮すべし、大比丘の塔も亦禮すべし。一切の諸天・世人・諸魔・梵王・沙門・婆羅門、皆應さに如來世尊を禮したてまつるべし、塔も亦禮したてまつるべし』。世尊既に是の教あり、應さに塔を禮すべしと。彼れ便ち白衣の塔廟を禮す。佛言はく、『白衣の塔廟を禮すべからず』。彼れ既に白衣の塔廟を禮することを得ず、便ち左遶して行く、護塔廟神瞋る。佛言はく、『本所來處に隨つて行け、故らに左遶して行くべからず』。諸の比丘、是くの如きの念を作す、「沙彌は、當さに生年を以て次第を爲すべきや、出家年を以て次第を爲すとやせん」。佛言はく、『應さに生年を以て次第を爲すべし、若し生年しければ、應さに出家の年を以て次第を爲すべし』。彼の比丘先きに至り、後に比丘ありて來る、大なり。一夜便ち前來の比丘を移す。佛言はく、『移すべからず。亦起つべからず、中間に在りて坐することを聽す』。既に中間に在りて坐す、復更に相移動す、衆をして亂鬧せしむ。佛言はく、『後來の者の、下坐に在ることを聽す』。既に下座に在り、乃ち白衣の下座に在り、佛言はく、『爾すべからず』。彼れ亦沙彌の下座にあり、佛言はく、『爾すべからず、應さに大比丘の下座に在るべし』。彼れ後安居[八]に及ばず、大戒を受け、數へて以て歲と爲」。佛言はく、『爾すべからず』。和尙、阿闍梨は、應さに受戒[九]の時節を數へ、是くの如きの教を作すべし。『若しは冬、若しは春、若しは夏、汝若干の日を得、若しは一月、若しは半月、若しは一日、若しは前食、若しは後食、乃至晷影時なり』。六群比丘、白衣の家に在り、上座を見て起

【八】 後安居は五月十六日よりであるから、十六日を最後として、夜分に大戒を受くれば、此の日より後安居に加はることが出來る、十七日は後は、其の安居には加はれない、事を後安居に及ばずといふのである。

【九】 受戒の時節を數ふるとは、冬春夏の何月何日、其の食前、食後、時間は晷影何時?と數ふるのである、坐次は之れで定まるのである。

者なり。或は言ふものあり、一摶食者なり。或は言ふものあり、塚間者なり。或は言ふものあり、露坐者なり。或は言ふものあり、樹下者なり。或は言ふものあり、常坐者なり。或は言ふものあり。隨坐者なり。或は言ふものあり、三衣者なり。或は言ふものあり、能唄者なり。或は言ふものあり、多聞者なり。或は言ふものあり、法師者なり。或は言ふものあり、持律者なり。或は言ふものあり、坐禪者なり。佛、諸の比丘に告げたまはく、汝等善く與ふべきと與ふべからざるとを聽け。乃往過去世の時、三親友あり、象と獼猴と鵽鳥となり、一尼拘律樹に依りて住す。彼れ是の念を作す、「我等共住、恭敬を興さずして、更に相輕慢すべからず、寧ろ年の大小を推して尊卑を次第し、更に相恭敬すべし」。是くの如きの法を作し已りて、林間に依りて共住せん。獼猴、鵽鳥共に象に問うて言はく、「汝事の近遠を憶するや」。象言はく、「我れ小時を憶す」。此の尼拘律樹、我れ行く時我が臍に觸る。象、鵽と獼猴に問うて言はく、「汝事の遠近を憶するや。我れ小時を憶す」、此の尼拘律樹、手を擧くれば、頭に及べり。象と獼猴と鵽に問うて言はく、「汝事の遠近を憶するや」。答へて言はく、我は憶す、雪山王の右面に大尼拘律樹あり、我れ彼れに於て果を食ひて此に來り、便出でゝ卽ち此の樹を生ず。彼れ是の念を作さく、「鵽の生年は我れよりも多し」。時に象は卽ち獼猴を以て頭上に置き、獼猴は鵽を以て肩上に置き、共に人間に遊行し、村より村に至り、城より城に至り、而も說法して言はく、「其れ長老を恭敬するものなれば、是の人能く法に住す、現世に名譽あり、將來善道に生れん」。爾の時鵽是くの如きの法を說く『人皆隨順し、法訓流布す。汝等我が法律の中に於て出家す、應さに更に相恭敬すべし、是くの如くなれば、佛法流布することを得べし。自今已去、長幼に隨つて恭敬し、上重を禮拜し、迎逆問訊すべし』。時に諸の比丘、佛の敎を聞き、諸の比丘、長幼相次して上座を恭敬す。彼れ白衣を禮拜して言はく、『汝生年我れより長ず』。佛言はく、『白衣を禮すべからず、汝等應さに禮すべきあり、應さに禮すべからざるあり。一切の女人は禮すべからず、前受大戒

【七】鵽鳥は、字書には鵽鳩とし、大さ鴿の如く、雌雉に似たりとある。

我れ亦與へず』。給孤獨食言はく、『汝已に決價せり、便ち之を受くべし』。王子言はく、『云何が決價せる』。答へて言はく、『向きに言ふ、金錢を以て[六]側布して地に滿ち、間なからしむとは、豈決價の言にあらずや、天便ち王の昔日の舊制を看るべし』。彼れ即ち王の舊制を看已り、是の言を作す。『便ち決價たり』。即ち語りて言はく、『長者汝の意に隨はん。時に給孤獨食、家に還り、人に勅して多くの金錢を出し、祇陀園中に側布せしむ。餘の少地あり、布金未だ遍からざるに、祇陀見已りて是の念を作す、「此れ常人に非ず、亦常福田に非ず、乃ち給孤獨食をして之を爲さしめ、珍寶を惜まざること是くの如し」。即ち言はく、『長者、汝止めよ、復金を布くこと勿れ、餘地は、我れ自ら世尊に奉上せんと欲す』。給孤獨食言はく、『便ち隨意にすべし』。

爾の時世尊、王舍城より、千二百五十の比丘と倶に、人間に遊行して跋闍國に至り、復轉じて毘舍離に詣る。時に六群比丘、先づ佛の前に往いて房舍を取り、和尙・同和尙・阿闍梨・同阿闍梨の爲めに、知識親厚の爲めの故に。即ち舍利弗、目連と倶に後に至る。佛言はく、『此れは是れ誰の房ぞ』。六群比丘言はく、是れ我が和尙・同和尙・阿闍梨・同阿闍梨・知識親厚の房なり。舍利弗、目連は房宿することを得ず、外埵の上に宿す。舍利弗、目連、夜過ぎ已りて、世尊の所に往き、頭面に足を禮し、却いて一面に住す。世尊知りて故らに問ひたまふ、『舍利弗、目連、起臥安樂なりや不や』。答へて言はく、『安樂なり』。世尊問うて言はく、『何處に在りて宿する』。答へて言はく、『外埵の上に在り』。『何事を以ての故に爾る』。即ち具さに因緣を以て佛に白す。爾の時世尊、此の因緣を以て比丘僧を集めて告げて言はく、『汝等、誰か應さに第一坐・第一水・第一食を受け、起ちて迎逆し、禮拜恭敬し、善言問訊すべしと謂へりや』。或は言ふものあり、大姓の出家者なり。或は言ふものあり、顏貌端正の者なり。或は言ふものあり、阿蘭若者なり。或は言ふものあり、乞食者なり。或は言ふものあり、糞掃衣者なり。或は言ふものあり、餘食法を作して食はさるものなり。或は言ふものあり、一坐食

【六】側布滿地と言へば、既に一定價格と言つて居るので、當時の法律で之を決價とする、一旦決價の言を吐けば、當然賣り渡さなければならない。

獨食の、佛及び僧を明日の施食に請ずるを聞き、卽ち其の所に往いて語つて言はく、『汝寄客に在り、此の衆僧已に多し、汝供設を須ひざるべし、我れ當さに汝が爲めに之を辦ぜん』。彼れ卽ち答へて言はく、『此れ便ち供養を爲し已る、須ひざれ、我れ自ら當さに辦ずべし』。給孤獨食、卽ち其の家に還り、夜、種々の多美の飮食を辦ず。夜過ぎ已りて、淸旦に往いて、時到ると白す。世尊衣を著け、鉢を持ち、千二百五十人の比丘僧と倶に、給孤獨食の家に往き、座に就いて坐したまふ。時に給孤獨食、手づから種々の多美の飮食を斟酌し、佛及び衆僧に供養し、飽滿を得しめ、食已りて鉢を捨て、更に卑床を取り、佛前に於て坐す。時に世尊、無數に方便して、給孤獨食の爲めに、方便して說法開化し、歡喜を得しめ、說法を爲し已りて、坐より起ちて去りたまふ。時に給孤獨食、王舍城より舍衞國に還歸す。彼れ村落城邑に至り、處々に宣令して、是くの如きの言を作す。『空處に於ては園果を種植し、幷びに池井を設け、及び橋船を安んずべし、佛已に出世したまひ、今我が請を受け、舍衞國に於て夏安居したまふ。當さに此の道より舍衞國に至り、汝等をして、福を得ること無量ならしめたまふべし。舍衞國に至り已りて、是くの如きの念を作さく、『今此の處、不近不遠にして、行來游觀するあり、其の地平博にして、晝は衆閙なく、夜は音聲なし、蚊虻蠅蜂毒螫の屬なし、我れ當さに之を買ひて、佛の爲めの故に僧伽藍を立つべし』。卽ち是の念を作さく、『彼の祇陀王子に好園あり、舍衞國に於て不近不遠にして、行來游觀す、其の地平博にして、晝は衆閙なく、夜は音聲なし、亦蚊虻蠅毒螫の屬なし、我れ今寧ろ祇陀王子の所に往き、求索して之を買ふべし』。彼れ卽ち王子の所に往き、白して言はく、『佛已に出世したまふ、天、今知るや不や、已に我が請を受け、舍衞國に於て夏安居したまふ、此の園を以て之を賣るべし、我れ當さに百千金錢を與ふべし』。彼れ言はく、『賣らず』。復更に重ねて白すこと上の如し、『願はくは、我れに園を與へよ、當さに二百三百四百千金錢を與ふべし』。彼れ言はく『汝若し金錢を以て、側布して地に滿ち、間なからしめんとも、

てまつるに、顔貌端正にして、諸根寂靜なり、上第一を得、諸根を調伏し、堅固なること猶し大龍のごとし、亦澄淵の如く、清淨にして無穢なり。見已りて敬心生じ、信敬の心を以て、前んで佛所に詣り、白して言さく『眠るや不や』。世尊答へて言はく『世の安眠の如き、我れは則ち彼れに異なり』。時に即ち偈を說いて言はく、

一切皆安眠す　梵行にして涅槃を得　若し欲を犯さず　諸縛解脫を得　一切の愛已に盡き　熱惱を調伏すれば　息滅して安臥を得　身心倶に寂滅なり。

時に給孤獨食、前んで佛足を禮し、却いて一面に坐す。時に世尊、給孤獨食の爲めに、種々に方便して開化說法し、歡喜を得しめ、即ち坐上に於て、法眼淨を得、法を見、法を得、增上果を得、厭患の心生ず。世尊に白し言さく『我れ今佛法僧に歸依し、佛の優婆塞と作る、自今已去、盡形壽殺生せず、乃至飲酒せず、唯願はくは世尊、衆僧と共に、我が夏安居九十日の請を受けたまへ』。佛言はく『我れ已に王瓶沙の請を受く』と。即ち復白して言さく『願はくは來年の請を受けたまへ』。佛言はく『我れ已に王瓶沙の請を受く』と。復白して言さく『大德、願はくは、後年の請を受けたまへ』。佛報へて言はく『若し是くの如きの處あらん、清淨にして憒閙あることなく、諸の惡獸なく、人を絕したる林は、坐禪することを得べし、如來當さに是くの如き處に於て住すべし』。即ち佛に白して言さく『世尊我れ已に之を知る、自ら當さに時を知るべし、唯願はくは世尊、衆僧と、我が明日の請食を受けたまへ』。時に世尊、默然として請を受けたまふ。給孤獨食坐より起ちて、前んで佛足を禮し、遶り已りて去る。時に王瓶沙、給孤獨食の、佛及び僧の明日食に請ずるを聞き、即ち信を遣はして語りて言はく『汝寄客に在り、此の衆僧既に多く、千二百五十人なり、汝供を設くることを須ひざるべし、我れ當さに汝が爲めに、故らに食を設くべし』。時に即ち人を遣はして王に答へて言はく『此れ便ち供養を爲し已りて、須ひざれ、我れ自ら當さに辦ずべし』。時に摩竭の大長者、給孤

うて言はく、『審に是れ佛か』。答へて言はく、『審に是れ佛なり』。再三問ひ、亦再三答ふ『審に是れ佛なり』と。時に給孤獨食再三問ひ已りて問うて言はく、『佛、何處にか在す、我今往いて問訊したてまつらんと欲す』。長者答へて言はく、『佛今迦蘭陀竹園中に在して住したまふ』。時に給孤獨食、仰いで日を看、是くの如きの念を作す、『今日世尊を見たてまつるは時に非ず、明日乃ち往くべし』。時に給孤獨食卽ち家に還り、佛を念じ、心に在いて眠る。時に異の天神あり、是れ給孤獨食昔日の宗親、慈愍の故に、利益の故に、是くの如きの念を作す、『給孤獨食、汝、世尊を見たてまつらんと欲せば、留難あることなし、而も佛を見たてまつらず、彼れ卽ち神力を以て闇を滅し、忽然として大に明かなり』。時に給孤獨食、明を見て是れ晝日なりと謂ひ、卽ち往いて尸呵城門に趣く。時に彼の門神、給孤獨の、世尊を見たてまつらん欲し、留難あることなきを見『我れ今寧ろ門を開くべし』、卽ち門を開く。時に給孤獨食、尸呵門を出で已る。時に彼の神還た神力を攝め、明曉便ち滅し、忽然として闇冥なり。時に給孤獨食恐怖して心に驚き、毛竪つ、『恐らくは怨家ありて、來りて我れを害せんとするや』。時に彼の門神、給孤獨食の恐怖し心に驚くを見、卽ち慰喩して言はく、『恐怖すること莫れ、恐怖すること莫れ。卽ち偈を說いて言はく、

設ひ馬百匹　及び百の金縷を以てし　馬事百乘あり　童女百人あり　七寶を瓔珞と爲し　雪山の百の白象あり　象皆六牙あり　幷びに大聚金　及び紫磨金沙　王及び王の供具　王所乘の調衆を以てす　是くの如きを以て布施するも　一歩を行くの福の　十六の一をも得ず。

長者但前に行け、前に行けば利益あり』。給孤獨食問ふ『汝は是れ誰ぞ。答へて言はく『我れは是れ伺呵神なり』。彼れ是の念を作す、『未曾有なり、天神乃ち我れを安慰す』。時に給孤獨食、卽ち迦蘭陀竹園中に往く。時に世尊、露地に在りて經行したまふ。遙に給孤獨食の來るを見、坐處に還りて、座を敷いて坐したまふ。諸佛の常法として、圓光身を照せり。時に給孤獨食、遙に世尊を見た

佛言はく、『石、若しは甎、若しは木を以て、兩邊を障ふることを聽す』。若し寺內には、應さに池を作るべし、若し池邊崩決すれば、石、若しは甎、若しは木を以て、四邊を障ふることを聽す。上は應さに屋を作りて覆ふべし。若し池邊、泥を患ふるには、應さに石、若しは甎、若しは板、若しは碎石を安んずべし』。小兒の水に墮つるを患ふ。佛言はく、『欄を作ることを聽す』。彼の[五]池水熱し。佛言はく『瓶盆を聽す。晝日は屋中に入れ、夜は置いて外に在り、若し屋內、泥を患へんには、別に安水屋を作ることを聽す』。若し地泥、脚を汚さば、石、若しは甎、若しは碎石を安んずることを聽す。彼れ水器を須むれば與ふべし。彼れ寶を用ひて器を作る。佛言はく、『寶を用ふべからず。應さに鐵、若しは銅、若しは瓦を用つて作るべし』。彼の水器、安處なし、破壞す。佛言はく、『應さに水屋の中に、別に架を作りて安んずべし』。時に衆僧、貝を得、佛言はく、『畜ふることを聽す』。復安處なし。佛言はく、『水器と共に、一處に安んずることを聽す』。

爾の時世尊、王舍城に在しき。舍衞國に居士あり、須達多と名づく、常に好んで孤獨乞兒に給施す、遂に行ひに因りて名と爲し、給孤獨食と字づく。彼れ王舍城中に於て、田業あり、年々舍衞國より王舍城に至り、田業を按行す。王舍城中に長者あり、是れ其の親厚なり、是の長者自ら堂舍を莊嚴し、佛及び僧を、明日食に請ぜんと欲す。時に給孤獨食、長者の家に往く。彼の長者の常法、若し給孤獨食來る時は、輙ち起つて迎逆し、請うて與に座を敷く。而も此の日亦起迎せず、請うて坐せしめず、但自ら堂舍を莊嚴し、佛及び衆僧の爲めにす。時に給孤獨食既に至り已り、長者に問うて言はく、『堂舍を莊嚴す、何の所作をか欲する、爲めに嫁娶を欲するか、爲めに王を請はんと欲するか、爲めに大祠を設けんと欲するか』。長者報へて言はく、『我れ嫁娶せず、亦王を請はず、我れ大祠を設けんと欲す、佛及び僧千二百五十を請じて倶にす、彼の沙門瞿曇は、是くの如きの大名稱あり、號して如來無所著等正覺明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊と曰ふ』。給孤獨食問

【五】池水熱しとは、用水の爲めの水のことであらう。

に布薩の日、衆僧多く集まる、堂小にして相容受せず。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『大作を聽す』。云何んが作るを知らず。佛言はく、『若しは四方、若しは圓、若しは長く作る、若しは兩房、若しは三坊、若しは四坊作ることを聽す。大堂を作るの所須、一切應さに與ふべし』。時に堂內の人、各一床にして、相容受せず。佛言はく、『若し大は、三臘の者共に一床に坐することを聽す。若し坐故ほ受けずんば、長床、若しは長板を作ることを聽す。若し復受けずんば、應さに草を縛して、座を作るべし』。草を縛して座を作り已りて、便ち衣を破る。佛言はく、『應さに軟草を以て邊を纒ふべし。若し故ほ復受けずんば、應さに泥漿を以て地に灑ぎ、若しは沙を布き、若し草樹葉を地に敷いて、上に坐すべし』。彼れ女人と草上葉上に在り。佛言はく、『爾すべからず』。彼れ女人と共に衣を敷く。佛言はく、『爾すべからず』。彼れ女人と共に、石上に上る。佛言はく、『爾すべからず。若し石に上り、一人にして動く能はざる者は、上ることを聽す』。彼れ女人と共に船に上りて疑ふ。佛言はく、『直ち渡らば、若しは坐し、若しは立ち、若しは臥すことを聽す』。時に諸の比丘、露地に經行す、風雨日曝を患ひ、患を得たり。佛言はく、『經行堂を作ることを聽す』。云何が作るかを知らず。佛言はく、『長行に作ることを聽す、作堂の所須は一切給與せよ』。時に彼の上座、老病羸頓して、經行の時地に倒る。佛言はく、『繩索を兩頭に架け、索に循つて行くことを聽す』。索を捉つて行くに、手軟かして手を破る。佛言はく、『捲若しは竹筒を作り、繩を以て筒に穿ち、手捉して循行することを聽す』。經行の時疲極す、兩頭に床を安んずることを聽す』。時に比丘、脚を天雨に洗ふ、新染衣に雨ふりて、色壞す。佛言はく、『應さに別に洗脚處作るべし』。彼れ水盆を須む、水盆を與ふ。水瓨を須む、水瓨を與ふ、洗脚石を須む、石を與ふ。坐具を須む、坐具を與ふ。彼れ脚を天雨に洗ふ、泥、足を汚し、衣、坐具を汚す。佛言はく、『石若しは甎、若しは木を以て、道を作ることを聽す』。
爾の時耆闍崛山、水を去ること遠し。佛言はく、『渠を作ることを聽す』。作る時渠の崩決を患ふ。

ることを聽す。時に嚮に鬪居なし、賊及び放牛羊人、比丘の衣鉢針筒坐具を取り去る。佛言はく、『鬪居を聽す』。彼の犯戒の比丘、繩を挽いて嚮を開き、比丘の衣鉢針筒坐具を取り去る。佛言はく、『居に横椸を安んずることを聽す』。六群比丘、私に衆僧の臥具を用ふ。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『私に衆僧の臥具を用ふべからず、幖幟を作ることを聽す』。何んが幖幟を作らんかを知らず。佛言はく、『[四]摩醯陀羅像を作り、若しは棬像を作り、若しは蒲桃蔓像を作り、若しは五色を作し、若しは蓮華を作り、若しは名字を作すことを聽す』。時に六群比丘、私物の上に、僧の幖幟を作る。諸の比丘語りて言はく、『長老、世尊は是くの如きの語を作したまはずや。衆僧物を私用することを得ずと』。答へて言はく、『此れは僧物に非ず、是れは我が已有なり』と。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『私の已物の上に、僧の幖幟を作すべからず、私物には、染めて幖幟を作すことを聽す』。彼の六群比丘、方さに幖幟を作す、若しは半月像を作り、若しは圓幖幟を作し、彼れは如日光幖幟を作し、彼れは如麥根幖幟を作し、彼れは如一片薑像を作し、彼れは牛形像幖幟を作す。佛言はく、『爾すべからず、如水滞灑地幖幟を作し、牛屎摶幖幟を作し、輪幖幟を作すことを聽す』。彼れ房中の定臥具を移して、餘處に著く。佛言はく、『移すべからず、應さに名字を作りて言ふべし、「是れ某甲の房臥具」と』。時に比丘あり、小沙彌あり、房中に隔障を安んぜんと欲す。佛言はく、『作ることを聽す』。時に比丘あり、房前の曲障苍を開かんと欲す、佛言はく、『作ることを聽す』。後内房を作らんと欲す、佛言はく、『作ることを聽す』。戸を須む、『作ることを聽す』。壁を須む、『壁を作ることを聽す』。半壁を須む、『作ることを聽す』。大床を作ることを須む、佛言はく、『作ることを聽す』。小床を須む、『作ることを聽す』。繩床を須む、『作ることを聽す』。小繩床を須む、『作ることを聽す』。獨坐床を須む、『作ることを聽す』。板を須む、『板を與ふ』。地敷を須む、『地敷を與ふ』。時に比丘あり、房を作らんと欲し、四邊に簷を出し、上に欄楯を安んず、『作ることを聽す』。一切の作房に、所須は與ふることを聽す』。時

【四】摩醯陀羅（Mahendra）は神名、棬像の棬は、木を曲げた形である。

に六群比丘、高支を作る。佛言はく、『高支を作るべからず、大高は、應さに高さ尺五、若しは一搩手なるべし』。時に比丘あり、衣に堅牢の安處なし。佛言はく、『應さに疊んで頭邊、若しは背後に置いて臥すべし』。轉側して衣上に墮つ。佛言はく、『繩上、若しは龍牙杙上に安んじ、若しは衣架を作りて安んずることを聽す』。彼れの常所著衣、不著衣と一處に在り、常所著衣を取る時亂る。佛言はく、『常所著衣と不著衣と、共に一處に安んずべからず』。彼れ鉢・革屣囊・針筒・油器を持つて、一處に置く。餘の比丘見て之を惡む。佛言はく、『鉢囊、針筒は一處に置き、革屣囊、油器は、共に一處に置け』。時に諸の比丘房裏、闇きを患ふ。佛言はく、『燃燈を聽す、油を須むれば油を與へ、燈炷を須むれば炷を與へ、盛油器を須むれば、器を與ふ』。燈を持つて何處に置くかを知らず。佛言はく、『若しは木床、若しは繩床の角頭、若しは瓶上に著くるを聽す。若し壁龕中に著くれば、蟻子の油を飲むを患ふ、應さに障ふべし。若し燈明かならざれば、應さに炷を出して高からしむべし』。油、手を汚す、『箸を作ることを聽す』、箸を燒くことを患ふ、『鐵にて作ることを聽す』。彼の房に戶なし、堅牢ならず、賊の放牛羊人あり、比丘の衣鉢針筒坐具を取り去る。佛言はく、『戶を作ることを聽す』。戶樞を須む、『作ることを聽す』。若し戶裏の臭氣を患へば、戶扇を穿ちて孔を作り、氣を出すことを聽す』。蛇・蜈蚣の毒蟲の孔より入るを患ふ、『籬板・障子を作ることを聽す』。關鑰なし、賊放牛羊人あり、比丘の衣鉢針筒坐具を取りて持ち去る。佛言はく、『關鑰を作ることを聽す』。何處に在りて安んぜんを知らず。佛言はく、『若しは邊に在き、若しは上に在き、若しは下に在く』。云何が開かんを知らず。佛言はく、『孔を開いて曲排を作り、若しは孔を作ることを聽す。若し闇きを患へば、嚮を開くことを聽す。彼れ嚮に障なし、賊及び放牛羊人、比丘の衣鉢針筒坐具を取る。佛言はく、嚮扇板障を作ることを聽す。云何が作るを知らず。佛言はく、若しは方に作り、若しは圓に作り、若しは象耳形に作る。夜は蝙蝠を患ひ、晝は鵄鳥の入るを患ふ。佛言はく、『籠疏障を織作し、若しは嚮櫺子を作

を爲し、歡喜を得せしめ、長者の爲めに、開化說法已りて、坐より去る。時に瓶沙王、世尊の、衆僧に房舍を作ることを聽したまふと聞き、迦蘭陀竹園に於て、大講堂を作り、王の住殿の如く、一切の所須供給具足せしめんと欲す。佛言はく『作ることを聽す』。時に檀越あり、僧の爲めに樓閣舍を作らんと欲す。佛言はく『作ることを聽す』。時に檀越あり、僧の爲めに〔一〕毘摩那房を作らんと欲す、佛言はく『作ることを聽す』。時に檀越あり、僧の爲めに如象形房を作らんと欲す、佛言はく『作ることを聽す』。檀越あり、僧の爲めに、種々の房を作らんと欲す、佛言はく『作ることを聽す。作房の法に隨ひ、所須の一切を與ふることを聽す』。房を作り竟りて、若し地に塵あらば、應さに泥すべし』。無敷にして臥して病を得、佛言はく『伊梨延陀・毾羅・毾々羅・毛毯・十種衣中の、若し一々の衣を以て、地敷を作ることを聽す。若し故病あらば、床を作ることを聽す。五種の床あり、上の如し』。彼れ床を織らんと欲す、佛言はく『織ることを聽す』。二種の繩、皮繩と髮繩とを除き、餘繩を用ひて作れ、若し繩足らざれば、繩穿床を梐䟱に織るべし』。彼の床、無敷にして臥し、病を得、褥を作ることを聽す』。彼れ何物を以て作らんかを知らず。佛言はく『草にて作り、若しは毳、若しは劫貝にて作り、貯を聽す。若し褥小ならば、應さに張りて縫ひ、床の四邊に著くべし。若し褥緣破裂せば、應さに補治すべし。若し貯、一處に聚まらば、應さに縫〔二〕綖すべし。若し褥、垢膩すれば、當さに重褥を作るべし、若し重膩すれば、應さに臥氈を作りて上を覆ふべし』。時に諸の比丘、枕なし。佛言はく『作ることを聽す』。云何が作らんを知らず。佛言はく『若しは四方、若しは圓、若しは三角なり』。爾の時王舍城の衆僧多く〔三〕舍毳麻を得、諸の比丘敢て受けず。佛言はく『受くることを聽す。用ひて繩・床繩・木床繩を作り、若しは織りて褥の表裏を作り、若しは地敷を作り、若しは繩を作り、若しは褥貯を作れ』。時に諸の比丘、跋磨草の繩を得、床を織る。佛言はく『受くることを聽す』。時に諸の比丘・蛇・蠍・蜈蚣の諸毒蟲、屋に入る、未離欲の比丘見て驚く。佛言はく『支床脚を聽す。時

【一】毘摩那(Vimāna)は九師子のこと、其の形師子の如しと解釋せられて居る。

【二】縫綖の綖は、可洪音義によると、「綖は、衣を縫うて、相着くるなり」とある、つまり紵が一處に寄ったならば、縫うて寄らない樣にすることの樣である。

【三】舍毳(Sāṇa)は、扇那にも作る、一種の麻の類であるといふ。

園及び果樹を施す　橋船は以て人を渡す　曠路は泉井を施す　幷びに房舍を施す者　是くの如きの諸人等　晝夜に福は增益す　持戒樂法の者　此の人善道に生る。

時に王瓶沙、頭面に佛足を禮し、却いて一面に坐す。世尊、王の爲めに、種々に方便說法したまひ、歡喜することを得しむ。王、佛の說法を聞いて歡喜し、坐より起ちて佛を禮して去る。時に諸の比丘、淸旦に耆闍崛山より、王舍城中に來る、大長者あり、見已りて問うて言はく、『大德何處に在りてか宿する』。答へて言はく、『山窟中・水邊・樹下・石邊、若しは草上に在り』。長者問うて言はく、『房舍なきや』。答へて言はく、『無し』。『若し房舍を作らんには、得るや不や』。比丘答へて言はく、『世尊未だ房舍を作ることを聽したまはず』。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『房舍を作ることを聽す』。爾の時長者、佛の比丘に房舍を作ることを聽したまふと聞き、即ち耆闍崛山に於て、六十の別房を作る、一切の所須皆具足せしめ、佛及び僧を、明日の食に請じ、幷びに房舍を施す。即ち其の夜に於て、種々の多美の飲食を辦じ、明日往いて、時到ると白す。世尊淸旦に、衣を著け鉢を持ち、大比丘千二百五十人と倶に、大長者の家に往き、座に就いて坐したまふ。時に長者、手づから種々の多美の飲食を斟酌し、皆飽足せしめ、食已りて、鉢を捨て、金瓶の水を取りて世尊に授け、佛に白して言さく、『我れ耆闍崛山に於て六十の房舍を作り、一切の所須皆具足せしむ。諸德の爲めの故に、大祠の爲めの故に、善道に生ぜんが爲めの故に、今以て佛及び四方僧に奉上す、願はくは爲めに慈愍納受したまへ』。時に世尊、即ち之を受けたまひ、此の勸偸を以て之を勸喩したまふ。

　寒熱を障へんがための故に、　及び諸の惡獸と、　蚊虻諸毒蟲と　亦以て疾病と　暴疾の諸惡風とを障ふ　是くの如く障翳を得　持戒毀缺なく　佛法を勤修し　堅の爲め樂の爲めの故に　禪定分別して觀ず　房舍を衆僧に施すは　世尊第一と說きたまふ。

爾の時王舍城の長者、更に卑床を取り、世尊の前に在りて坐す。世尊無數に方便して、開化說法

卷の第五十（第四分の一）

房舍揵度の初め

爾の時世尊、波羅㮈に在しき。時に五人座より起ち、偏へに右の肩を露はし、右膝地に著け、合掌して白して言さく『世尊、我等當さに、何等の房舍臥具に住すべき』。佛言はく『阿蘭若處、樹下若しは空房、若しは山谷の窟中、若しは露地、若しは草苫草積の邊、若しは林間、若しは塚間、若しは水邊、若しは敷草、若しは葉に在ることを聽す。時に諸の比丘、枕なくして臥して、患を得。佛言はく『用ふることを聽す。石若しは墼、若しは木作、若しは臂を枕にするなり。十種衣中若し一々の衣を用ひて枕を作る』。

爾の時世尊、王舍城に在しき。摩竭王瓶沙是くの如きの念を作す『世尊、若し初めて來所して園に入らば、便ち當さに布施して僧伽藍を作るべし』。時に王舍城に迦蘭陀竹園あり、最も第一と爲す。時に世尊、王の心念を知り、卽ち迦蘭陀竹園に往く。王遙に世尊の來りたまふを見、卽ち自ら象を下り、象上の褥を取り、疊んで四重の敷と爲し已り、佛に白して言はく『願はくは、此の座に坐したまへ』。世尊卽ち座に就いて坐したまふ。時に瓶沙王、金澡瓶を捉り、水を授けて佛に與へ、白して言さく『此の王舍城の迦蘭陀竹園は、最も第一と爲す、今世尊に施し奉る、願はくは慈愍の故に爲めに納受したまへ』。佛、王に告げて言はく『汝今此の園を以て、佛及び四方僧に施せ、何を以ての故に、若し是れ佛の所有ならば、若しは園と園物、若しは房と房物、若しは衣鉢坐具針筒、一切の諸天世人魔王梵・沙門婆羅門の能く用ふるものなし、應さに恭敬すること、塔の如くなるべし』。王卽ち佛に白して言さく『大德、此の迦蘭陀竹園を以て、佛及び四方僧に布施したてまつる、慈愍の故に、我が爲めに納受したまへ』。時に世尊此の偈を說いて、之を勸喩したまふ。

に敷著し、色をして調はざらしむ。佛言はく、『爾すべからず、應さに伊梨延陀・毾羅・毾毾羅、若しは氍氀上に敷著すべし。十種衣の中、一々の衣を取り、地に敷著し、彼の染衣を以て上に著け、若しは繩上に懸著せよ。彼れ繩を須むれは、繩を畜ふることを聽す、鐵を須むれば、作ることを聽す。彼れ衣頭に、紐を安んずることを須むれば、紐を作ることを聽す。若し染汁偏流すれば、應さに倒易すべし』。時に比丘あり、染衣を曬し已りて背向し、染汁を煮る、衣汁偏流す。異比丘あり、先きに與に嫌諍す。之を見て、彼れに語りて知らしめず、衣色遂に壞す。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『爾すべからず、見る者は、應さに爲めに倒易し、若しは語りて知らしむべし』。彼の比丘染衣竟り、釜・禁滿・銅瓶・瓮器・鑊・斧斤・繩・鐵・伊延延陀・毾羅・毾毾羅を擧せず、便ち捨てゝ去る。佛言はく、『爾すべからず、應さに藏擧して、然る後に去るべし、若し餘人索むれば、應さに與ふべし』。彼れ染衣竟り、染處を掃除せず、地をして不淨ならしむ。佛言はく、『爾すべからず、應さに掃除し已りて去るべし。彼れ新衣を著けて地を掃ひ、塵坌をして汚さしむ。佛言はく、『新衣を著くべからず、應さに故き者を著くべし』。若し私衣なければ、應さに僧衣を著くべし、彼れ風に逆らひ、掃塵來りて身に坌す。佛言はく、『爾すべからず、應さに風に順つて掃ふべし。五種の掃地あり、大福德を得ず。逆風と順風とを知らず、地を掃つて跡を滅せず、糞を除かず、掃帚と本處に復せず、是くの如きの五法あり、地を掃ふも大福德を得ず。五法あり大福德を得。逆風と順風とを知る、地を掃つて跡を滅す、糞を除く、掃帚を本處に復す、是くの如きの五法あり、大福德を得。若し上座、下風に在らば、應さに語りて言ふべし、「小しく避けよ、我れ地を掃はんと欲す」と。我れ今諸の比丘の爲めに、染衣法を說く、應さに隨順すべし、若し隨順せざれば、應さに法の如く治すべし』。法犍度、具足し竟る。

四分律卷第四十九

若し天を説くを聞かんと欲すれば、應さに爲めに天を讃嘆すべし、若し過去の父祖を説くを聞かんと欲すれば、應さに爲めに過去の父祖を讃嘆すべし、應さに檀越の爲めに布施を讃嘆し、檀越を讃嘆し、佛法僧を讃嘆すべし。諸の比丘の爲めに食上法を説く、諸の比丘應さに隨順すべし、若し隨順せざれば、法の如く治す』。

爾の時世尊、舍那國に在しき。時に諸の比丘、衣服垢膩す。佛言はく、『鹵土若しは灰、若しは土、若しは牛屎を以て浣へ』。彼れ麁澁の瓷石を用ひて、衣を浣ひ、衣をして壞れしむ。佛言はく、『麁澁の瓷石を用ふべからず、應さに細瓷石を用ふべし、若し色脱すれば、應さに更に染むべし、若しは泥、若しは陀婆樹の皮、若しは婆茶樹の皮、揵陀羅、若しは畢茇、若しは阿摩勒、若しは樹根を以て、若しは茜草を以て染む』。彼れ日中に在りて汁に漬け、用ひて染むるに久しきに耐へず。佛言はく、『爾すべからず、應さに煮るべし』。彼れ何處にて煮るを知らず。佛言はく、『應さに釜を以て煮るべし、若しは禁滿、若しは銅瓶鑊にて煮る』。彼れ煮る時、樹皮片大にして受けず。佛言はく、『應さに斧を以て細斬すべし。若し沸涌すれば、出して木を以て之を按ず』。彼れ熟不熟を知らず。佛言はく、『應さに汁二三滴を取りて、冷水の中に著くべし、若し沈まば熟す、應さに漉して汁を取るべし』。彼れ漉して、何處に著けんを知らず。佛言はく、『漉して瓮中に著けよ、若し汁滓倶に下らば、應さに掃帚を以て遮るべし、若し掃帚弱ければ、應さに木を以て輔くべし』。彼れ汁を漉す時、兼ねて瓮を捉り、疲極す。佛言はく、『爾すべからず、應さに一人瓮を捉り、一人汁を漉すべし。若し熱ければ、鐵熱物を捉れ』。彼れ冷熱を一處に著け、染汁壞す。佛言はく、『爾すべからず、應さに冷熱を別處し、若しは揚げて冷さしめ、然る後に和合すべし』。彼れ染汁の中に就いて染め、染汁壞す。佛言はく、『爾すべからず、應さに少許を取り、餘器の中に別ちて染むべし』。彼れ染め已りて、地に敷著し、色壞す。佛言はく、『爾すべからず』。彼れ便ち草上に敷著し、草をし壞せしむ、彼れ草上の葉上

【一巴】染衣法。

時持ち去つて、之を棄つべし』。彼れ處々に、洗鉢の水を棄て、地をして汚泥ならしむ。佛言はく、『爾すべからず、澡盤を以て承けて、外に棄てよ』。爾時衆多の比丘、六群比丘と、白衣家の內に在り、共に机上に坐食す。一の六群比丘あり、便ち起ちて、比座に語りて知らしめず、機傾いて地に倒る、餘人皆墮ちて形露はる。諸の比丘、佛に白す。佛言はく『爾すべからず、應さに語りて好坐を知らしむべし』。時に比丘あり、食し已りて默然として去る、彼の檀越、食の好不好と、食は足とせんや不足なるやを知らず。諸の居士譏嫌す『諸の外道人すら、皆布施を稱嘆し、檀越を讚美す、而も沙門釋子、食し已りて默然として去り、我等をして、食の好不好と足不足とを知らしめず。諸の比丘、佛に白す。佛言はく『食已りて默然として去るべからず、應さに檀越の爲めに、〔二二〕達嚫を說くべし、乃至爲めに一偈を說け。

若し利の爲めの故に施さば、　此の利必ず得べし。　若し樂の爲めの故に施さば、　後に必ず快樂を得ん。

世尊既に言ふ、應さに達嚫を說くべしと。時に人に皆說く、遂に便ち閙亂す。佛言はく『人々亂說すべからず、應さに上座をして說かしむべし、若し上座說くこと能はざれば、能くする者に語りて說くべし。若し上座語らざれは突吉羅、上座語れども說かざれば、亦突吉羅なり』。彼れ達嚫を說く時、餘の者皆去りて、彼れ安坐す、或は靜處に在りて坐し、或は覆處に在りて坐し、或は女人と共に、有知の男子のあるなき所に在り、說法して五六語を過ぎて〔二三〕媟嬻す。時人皆嫌責し、諸の比丘に語り、佛に白す。佛言はく『達嚫の時、餘の比丘去るべからず、應さに上座を留め、四人相待つべし、餘は去ることを聽す。若し佛法僧事、若しは病比丘事を爲すは、應さに白して知らしめ、然る後に去り、若しは餘の比丘に語りて去るべし。若し檀越、布施を說くを聞かんと欲すれば、應さに布施を稱嘆すべし、若し檀越法を說くを聞かんと欲すれば、應さに爲めに檀越法を讚歎すべし。

〔二二〕達嚫(Dakṣiṇā)は、布施することである、こゝでは、布施を嘆ずる言葉を、達嚫と言つたのである。

〔二三〕媟嬻は、男女互に狎れ合ふことである。

の如し』。時に比丘あり、食上に至りて、鉢なくして食ふ、比座應さに鉢を借すべし。比丘あり、鉢を洗はずして食上に至る、蛇、鉢中に在りて吐く、比丘、用ひ食ひ已りて病を得。佛言はく『鉢を洗はずして、便ち持つて食上に往くべからず、應さに淨洗し已りて、用ひ食ふべし』。時に六群比丘、貪りて恭敬を受くるの故に、後に在りて食上に往き、諸の比丘をして、我等を見せしむれば、當さに起つべしと。諸の比丘、佛に白す。佛言はく『恭敬を貪利し、故に後に在りて食上に往き、諸の比丘をして起たしむべからず。若し來らざれば、比座に坐處を開くことを聽す。若し檀越、上座に果を與ふれば、應さに問うて言ふべし「果淨するや不や」。若し、未だ淨せずと言はゞ、上座應さに語りて淨せしむべし。若し已に淨すれば、問うて言へ「誰の爲めに送り來るや」。若し上座の爲めに送り來らば、隨意に取るべし。若し僧の爲めなりと言はゞ、應さに語りて傳へしめ、遍からしむべし。若し檀越、上座に種々の羹を與ふれば、應さに向うて言ふべし「誰が爲めに送り來れる」。若し上座の爲めなりと言はゞ、隨意に取れ。若し僧の爲めなりと言はゞ「應さに語りて傳へしめ、遍からしむべし』。時に比丘あり、食を得ず、比座爲めに索むることを聽す、若し比座になければ、應さに自ら半を減じて與ふべし』。時に諸の比丘、食を得て便ち食ふ。諸の居士見て皆譏嫌して言はく『沙門釋子慚愧を知らず、厭足あることなし、自ら言ふ、我れ正法を知ると、食を得て便ち食ふ、穀貴く飢餓の時に如似す、是くの如きは、何ぞ正法あらん。佛に白す、佛言はく『爾すべからず、應さに唱へて言ふべし「等しく得て、然る後に食せん」と』。時に六群比丘あり、肘を[二]眶して食し、比座を妨礙す。諸の比丘、佛か白す。佛言はく『肘を眶して食すべからず、應さに肘を斂めて食すべし』。六群比丘、食時大に咳唾し、逆唾、比座の上に墮つ。餘の比丘之を惡み、佛に白す。佛言はく『爾すべからず、應さに徐々に棄唾すべし』。彼れ食する時、若しは餘果、若しは采根狼籍として地を汚す。佛に白す。佛言はく『爾すべからず、所食可棄の物は、應さに聚めて脚邊に着け、去る

【二】眶は元來まぶち、或はまぶたなどゝいふ眼に關係のある字である、こゝでは、斂の字の反對の意味であるから、やはり肘を張ることゝ思はれる、はりしと訓むべきであらう。音義には、眶を拒と作す、これが正しいのであらう。

【一〇】食上法。

與へ、未だ誰に與へず、誰か已に食ひ、誰か未だ食せざるかを知らざらしむ。時に諸の比丘、世尊の所に往き、頭面に禮足して、一面に在りて坐し、此の因緣を以て、具さに世尊に白す。世尊爾の時、此の因緣を以て比丘僧を集め、彼の受請比丘を呵責したまふ。『云何が檀越の請を受け、錯亂し去り、或は已に坐する者あり、方さに坐する者、乃至方さに出でんと欲する者あり、檀越をして、已に誰に與へ、未だ誰に與へず、誰か已に食ひ、誰が食はざるかを知らざらしむるや』。無數の方便を以て呵責し已りて、諸の比丘に告げたまふ。『自今已去、諸比丘の爲めに食上法を制す、諸の比丘、應さに食上法は隨順すべし、應さに是くの如く隨順すべし。若し比丘、往いて請を受けんと欲すれば、應さに衆僧の常小食處、大食處の可見處に往いて住すべし。若し檀越來りて、時到ると白さば、上座應さに前に在りて、象の如く行いて去るべし。若し上座、大小便處に往かば、應さに待つべし』。彼の下座前に在りて行き、並び語り並び行き、或は前し、或は後し、或は衣を反抄し、或は纏頭し、或は裹頭し、或は通肩に披衣し、或は革屣を着く。佛言はく『爾すべからず。應さに偏露右肩にして革屣を脫ぎ、後に在り行くべし』。若しは佛事・法事・僧事を爲すあり、病比丘事あり。佛言はく『應さに上座に白し、前に在りて去るべし』。彼れ命難、梵行難あり、畏愼して敢て問はずして去らず。佛言はく『若し是くの如きの難事あらば、若しは問ひ、若しは問はざるも去ることを聽す』。彼れ食處に往きて、錯亂して聚まり住す。佛言はく『爾すべからず、應さに大に隨つて坐すべし。上座坐し已りて、應さに中座、下座を看るべし、不如法に坐し、不善に身を覆はしむること勿れ、若し不如法に坐し、不善に身を覆ふ者あらば、應さに彈指して覺らしむべし、或は人を遣はして語らしめ、好如法坐を知らしむ。中座坐し已れば、應さに上座、下座を看るべし、不如法に坐し、不善に身を覆はしむること勿れ、若し不如法に坐し、不善に身を覆はざるあらば、應さに彈指して覺らしむべし、若しは人を遣はして語らしめ、好如法坐を知らしむ。下座坐し已るも、亦是く

問ふ、今夜は是れ何時ぞ、彼の比丘答ふること能はずして慚愧す。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『阿蘭若比丘、應さに善く夜の時節を知るべし』。時に賊、阿蘭若に問うて言はく、『此れは是れ何の方ぞ』。阿蘭若答ふる能はずして慚愧す。諸の比丘、佛に白す。佛言はく『阿蘭若比丘、應さに善く方相を知るべし。賊比丘に問ふ『今日は是れ何の星ぞ』。阿蘭若比丘答ふる能はず。『諸の比丘、佛に白す。佛言はく『阿蘭若比丘應さに善く星を知るべし』。彼の阿蘭若比丘、好臥具を敷いて安眠す。時に諸の比丘、佛に白す。佛言はく『阿蘭若比丘爾すべからず。應さに初夜にも後夜にも警心思惟すべし。今阿蘭若比丘の爲めに、阿蘭若法を制す、阿蘭若比丘應さに如法に隨順すべし。若し隨順せざれば、應さに如法に治すべし』。

爾の時世尊、舍衞國に在しき。時に居士あり、衆僧を明日の食に請ず。卽ち其の夜に於て、種々多味の飲食を辨具す。淸旦往いて、時到ると白す。時に諸の比丘、請食を受くる時錯亂し、或は已に坐する者あり、方さに坐するものあり、或は已に食に與る者あり、方に食に與る者あり、或は已に食する者あり、方さに食する者あり、或は已に去る者あり、方さに去らんと欲する者あり、或は已に出づる者あり、方さに出でんと欲するものあり。而も彼の檀越は知らず、誰か已に食する、誰か未だ食せざるを。時に諸の居士譏嫌す、『沙門釋子慚愧を知らず、厭足あることなし、自ら言ふ、我れ正法を知ると、檀越の請を受けて錯亂し去り、或は已に坐し、方さに坐する者あり、或は已に食に與る者あり、方に食に與る者あり、乃至或は已に出づる者あり、方さに出でんと欲する者あり、是くの如き何ぞ正法あらん、我等をして、已に誰に與へ、未だ誰に與へざるか、誰か已に食し、誰か未だ食せざるかを、知らざらしむ』。時に諸の比丘、聞く。少欲知是にして頭陀を行じ、學戒を樂み、慚愧を知るものあり、彼の受請の比丘を嫌責して言はく、『云何が檀越の請を受けて錯亂し去り、或は已に生するもの、方さに坐する者、乃至方さに出でんと欲する者あり、檀越をして、已に誰に

し村を出づれば、還た行道革屣、打露杖を取り、小しく道を下り、鉢を安んじて地に置き、僧伽梨を疊んで、肩上若しは頭上に著け、行く時は、常さに常に善法を思惟すべし。若し人を見れば、應さに先づ問訊善來すべし。彼の阿蘭若比丘常所食處は、應さに往いて、淨掃灑して、水洗器、殘食器を具すべし、復應さに床座・洗脚石・水器・拭脚巾を具すべし。若し餘の阿蘭若ありて來るを見ば、應さに起ちて遠く迎逆し、爲めに鉢を取りて鉢床鉢支の頭上に著くべし。衣を取りて舒張して看、賊塵坌泥の汚れ、鳥糞の汚れあらしむること勿れ、應さに拭ふべきは便ち拭へ、應さに採むべきは便ち採み、應さに抖擻すべきは便ち抖擻し、若しは浣ひ、浣ひ已らば應さに絞りて水を去り、曬して繩床、木床の上に著くべし』。彼れ應さに阿蘭若比丘に坐を與へ、水を與へ、洗足石、拭脚巾を與ふべし。革屣を持つて左邊に安んじ、泥汚水漬あらしむる勿れ、若し泥汚あらば、應さに移すべし。彼れ阿蘭若比丘の爲めに、洗足已らば、應さに水器、洗足石の諸物持つて、本處に還復すべし。彼れ應さに澡豆にて手を淨洗し、已りて淨潔に別に殘食を留むべし。若し賊來らば、應さに與ふべし。水を授けて彼の阿蘭若比丘に與へ、次ぎに食を授けて彼れに與へ、食時には應さに看て所須を供給すべし。若し酪漿、淸酪漿、若しは苦酒、若しは鹽、若しは菜あらば、應さに與ふべし。若し熱ければ扇ぐべし、水を須むれば與ふべし。若し日時過ぎんと欲すれば、應さに倶に食すべし。阿蘭若比丘食し已らば、應さに爲めに鉢を取り、洗手を與ふべし。自ら食し已りて餘食あらば、應さに人若しは非人に與へ、若し無草地、無蟲水中に著くべし』。殘食を盛る器を洗ひ、床座・洗足石・水器の諸物を本處に復し、應さに食處を掃除すべし。彼れ食鉢を以て糞を除く、餘の比丘見て、皆之を惡む。佛言はく『鉢を以て糞を除くべからず、應さに澡盤若し掃帚を用ふべし、鉢は淨潔に持つべし。若し賊の來るあらば、應さに語るべし。此れは是れ水、是れは洗足物、此れは是れ食なり、汝等の爲めの故に、別に留めて淨潔なり、若し食はんと欲すれば、便ち食せよ』。時に賊、阿蘭若に

子慚愧を知らず、厭足あることとなし、自ら言ふ我れ正法を知ると、道に在りて住するに當り、男子女人をして道を避けしむ、是くの如きは、何ぞ正法あらん』。諸の比丘、佛に白す。佛言はく『阿蘭若比丘は、道に當りて住すべからず』。世尊既に、道に在りて住すべからずと言ふ、彼れ屛處に在りて住す。佛言はく『爾すべからず、應さに見處に在りて住すべし』。彼れ阿蘭若比丘、他食を持つて出づ、便ち前んで迎へ取る。諸の居士見て皆共に譏嫌して言はく『沙門釋子慚愧を知らず、厭足あることなし、自ら言ふ我れ正法を知ると、是くの如きは、何の正法あらん、急に前んで食を取る、穀の貴きに如似す』。諸の比丘、佛に白す。佛言はく『阿蘭若比丘は、前んで食を取るべからず』。若し是れ女人にして、若し妊娠し、若しは兒を抱き、若しは天雨あり、若しは兩手に物を捉り、若しは地に泥水あり、比丘を喚ぶ、比丘疑つて敢て前まず、佛言はく『若し喚ばゞ往くべし』。阿蘭若比丘、飯若しは乾飯・麨・魚・肉を得て幷びに一處に著く。餘の比丘見て之を惡む。佛言はく『爾すべからず、一處に雜ゆるに、若し是れ一鉢ならば、應さに物を以て隔つべし、若しは樹葉皮、若しは鍵鎡なり。若しは次鉢、若しは小鉢は、麨應さに手巾に裹むべし』。彼の阿蘭若比丘、大家に往いて乞食す。諸の居士見て皆譏嫌す『沙門釋子慚愧を知らず、厭足あることとなし、自ら言ふ我れ正法を知ると、乃ち大家を選びて乞食す、穀の貴きに如似す、是くの如きは、何の正法あらん』。諸の比丘、佛に白す。佛言はく『大家を選んで乞食すべからず、若し次第に乞はゞ、選に應ずることを得ず』。彼の阿蘭若比丘、強えて乞食し、要らず得て乃ち去る。時に諸の居士見て共に譏嫌す『沙門釋子慚愧を知らず、厭足あることとなし、自ら言ふ我れ正法を知ると、強えて人に從つて乞ひ、要らず得て乃ち去る、穀の貴きに如似す、是くの如きは何ぞ正法あらん』。諸の比丘、佛に白す。佛言はく『爾すべからず、若し得べきを知らば、應さに待つべし。彼れ食を得る時、是くの如きの念を作す『此れは賊の爲めにす、此れは自ら食すと。出づる時は、當さに第一門相、乃至糞聚相を看るべし。若

ず、爲すべからざる所なり、云何ぞ縱墮にして、阿蘭若處に在りて住して、水器を具せず、乃至餘食を留めざる』。無類の方便を以て、阿蘭比丘を呵責し已りて諸の比丘に告げたまふ。『自今已去、阿蘭若比丘の爲めに法を制す、應さに阿蘭若法に隨順すべし、比丘應さに是くの如く隨順すべし。若し阿蘭若比丘、村に入りて乞食せんに、淸旦手を淨洗し、衣架に至り已りて、一手に衣を擧げ、一手に衣を挽いて取り、舒張抖擻して看、蛇蟲あらしむること勿れ、然る後に、腰帶、僧祇支を著け、欝多羅僧を舒張抖擻して看、僧伽梨を疊んで、頭上若しは肩上に著け、鉢を淨洗して絡囊中に著け、若しは手巾に裹み、若しは鉢囊に盛り已りて、襯身衣、洗足革屣、氈被を擧げ、道路行革屣、打露杖を取る。彼れ應さに戶鑰を持ち、房を出で、還りて戶を閉ぢ、推して堅牢なるや不やを看るべし。若し堅牢ならざれば、應さに更に安居すべし。若し堅牢ならば、應さに繩を推して內に著け、四顧して看るべし。若し人の見るなければ、應さに戶鈎を藏擧すべし。若し人の見るあらば、堅牢ならざるも、應さに持ちて去り、若しは更に堅牢の處に著くべし。道に在りて行かば、應さに常に善法を思惟すべし。若し人を見ば、應さに先づ問訊して善來と言ふべし。若し聚落に至らんと欲すれば、小しく道を下りて、鉢を安んじて地に置き、僧伽黎を取り、舒張抖擻して看、然る後に著く。若し村邊に賣器處あり、若しは屋あり、若しは作人あらば、應さに道行革屣を脫し、打露杖を之に寄すべし。彼れ村に入る時は、應さに巷相、若しは空相處・市相、若しは門相、若しは糞聚相を看るべし。白衣の家に入りては、應さに第一門相、乃至第七門相を看るべし』。爾の時阿蘭若比丘、他の舍內に至る、風吹いて衣肩を墮つ。彼れ女人に向つて、衣を正す。佛言はく、『女人に向つて衣を正すべからず、應さに壁に向ふべし』。彼の阿蘭若比丘、右手に鉢を捉り、左手に杖を捉り、時に形露はる。佛言はく、『爾すべからず、應さに右手に杖を捉り、左手に鉢を持つべし』。彼の阿蘭若比丘、道に當りて住し、男子女人をして道を避けしむ。諸の居士見て皆共に譏嫌す。『沙門釋

【九】阿蘭若法。

しは塩、若し菜あらば、應さに與ふべし。若し熱ければ、爲めに扇ぐべし。水を須むれば與ふべし。若し日時過ぎんと欲すれば、應さに倶に食ふべし。乞食比丘食し已らば、應さに爲めに鉢を取り、洗手を與ふべし。自ら食して餘食あらば、應さに人若しは非人に與へ、若しは無草地、若しは無蟲水中に著け、殘食を盛る器を洗ひ、故處に復すべし。應さに床坐・洗足石・水器を還復すべし』。諸物を故處に復し、食處を掃除し、彼れ食鉢を以て除糞す。餘の比丘を見て皆之を惡む。佛言はく、『鉢を以て除糞すべからず、應さに澡盤を用ひて掃帚すべし。鉢は淨潔に持つべし』。時に衆多の比丘あり、共に一處に食す、妊娠狗あり、食を看て食することを得ず、飢を以ての故に遂に子を墮す。比丘、佛に白す。佛言はく、『食時に若しは人、若しは非人は、食乃至一搏を與ふべし。我れ今乞食比丘の爲めに法を制す、應さに隨順すべし、若し隨順せざれば、應さに法の如く治すべし』。

爾の時世尊王舍城に在しき。時に阿蘭若比丘、窳墮して都べて所具なし、水器、洗足物を具せず、亦殘食を留めず。此の住處を去ること遠からずして、衆多の賊の過ぐるあり、時に一賊あり、餘賊に語りて言はく、『沙門釋子常に此の法あり、水器、洗足物を具す、亦餘食を留む、我等彼れに往くべし、若し食を得れば。共に之を食ふべし』。時に賊彼れに至りて問うて言はく、『汝水ありや不や』。答へて言はく、『無し。洗足の物ありや不や』。答へて言はく、『無し』『餘食ありや不や』。答へて言はく『無し』。財語りて言はく、『汝阿蘭若處に在りて住す、水、洗足器を見せず、餘食あることなし。卽ち打ち、死に次がしむ。諸の比丘聞く、其の中に少欲知足にして頭陀を行じ、學戒を樂み、慚愧を知る者あり、彼の阿蘭若比丘を嫌責して言はく、『汝窳墮し、云何ぞ阿蘭若處に住し、而も水器を具せず、乃至餘食を留めざる』。時に諸の比丘、世尊の所に至り、頭面に足を禮し、却いて一面に坐し、此の因緣を以て、具さに世尊に白す。世尊爾の時、此の因緣を以て比丘を集め、彼の阿蘭若比丘を呵責したまふ。『汝の所爲は非なり、威儀に非ず、沙門の法に非ず、淨行に非ず、隨順行に非

丘、大家に往いて乞食す。居士見て譏嫌して言はく『沙門釋子厭足を知らず、自ら言ふ我れ正法を知ると、乃ち大家に至りて乞食す、穀の貴きに如似す、是くの如くにして、何の正法かある』。諸の比丘、佛に白す。佛言はく『大家を選んで乞食すべからず、若し次第に乞はゞ、選に應ずるを得ず』。彼の乞食比丘、强えて乞ひ、要らず得て乃ち去る。諸の居士見て皆譏嫌す、『沙門釋子慚愧を知らず、厭足あることなし、自ら言ふ我れ正法を知ると、强えて人に從つて乞ひ、要らず得て乃ち去る、穀の貴きに如似す、是くの如くにして、何ぞ正法あらん』。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『爾すべからず、若し得べきを知らば應さに待つべし』。彼れ出づる時、當さに第一の門相乃至糞聚相を看るべし、若し村を出づるには、還りて道行革屣を取りて著け、道を下りて、鉢を安んじて地に置き、僧伽梨を疊んで、肩上若しは頭上に著け、行く時は常に善法を思惟すべし。若し人を見れば、應さに先づ問訊し、善來すべし。彼の乞食比丘、常所食處は、應さに往いて、淨掃灑し、水器、殘食器を具すべし。復應さに床座・洗脚石・水器・拭脚巾を具すべし。若し餘の乞食比丘ありて來るを見ば、應さに起ちて遠く迎逆し、爲めに鉢を取り、若しは鉢床、鉢支の頭上にあるふべし。衣を取りて舒張して看、膩塵坌泥の汚れ、鳥糞の汚れあらしむること勿れ、若し是くの如きの汚れあらば、應さに拭ふべきは、當さに拭ふべし、應さに揉むべきは、便ち揉み、應さに抖擻すべきは、便ち抖擻し應さに浣ふべきは、當さに洗ふべし、浣ひ已らば應さに絞りて水を去り、曬して繩床木床の上に著くべし。彼れ應さに乞食比丘に坐を與へ、水器を與へ、水を與へ、洗足石、拭足巾を與ふべし。革屣を持つて左邊に安んじ、看て泥水をして、汚漬せしむること勿れ、若し水漬あらば、應さに移すべし。彼れ乞食比丘の爲めに、足を洗ひ已らば、應さに水器、洗足石の諸物を持つて、本處に還復すべし。彼れ應さに澡豆にて手を淨洗し已り、水を授けて、彼の乞食比丘に與ふべし。次きに食を授けて彼れに與へ、食時には、應さに看て所須を供給すべし。若し酪漿、淸酪漿、若しは苦酒、若

人を見れば、問訊して善來と言ふべし。若し聚落に至らんと欲すれば、小しく道を下り、鉢を安んじて地に置き、僧伽梨を取り、舒張抖擻して看、然る後に著く。村邊若し賣器の處あり、若しは屋あり、若しは作人あらば、應さに通行革屣を脫して之に寄すべし。彼れ村に入る時は、應さに巷相を看、定處を看、市相・門相・糞聚を看るべし。白衣の家に入らば、應さに第一に門相、乃至第七門を看るべし』。爾の時乞食比丘、他の舍內に至る、風、衣を吹いて、肩より墮つ、彼れ女人に向つて衣を正す。佛言はく、『女人に向つて衣を正すべからず、應さに壁に向ふべし』。彼の乞食比丘、右手に鉢を捉り、左手に杖を捉る、時に形露はる。佛言はく、『爾すべからず、應さに右手に杖を捉り、左手に鉢を捉るべし』。彼の乞食比丘、道に當りて住し、男子女人をして道を避けしむ。諸の居士見て皆譏嫌して言はく、沙門釋子慚愧を知らず、厭足あることなし、自ら言ふ、我れ正法を知ると、道に至りて住するに當り、男子女人をして、皆道を避けしむ、是くの如きは、何の正法かある』。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『乞食比丘、道に當りて住すべからず』。世尊旣に言ふ、道に在りて住すべからずと。彼れ屏處に在りて住す。佛言はく、『爾すべからず、應さに見處に在りて住すべし』。彼の乞食比丘、他食を持つて出づ、便ち前んで迎へ取る。諸の居士、見て皆譏嫌して言はく、『沙門釋子厭足を知らず、自ら言ふ我れ正法を知ると、是くの如きは何ぞ正法あらん、急に前んで食を取る、穀の貴きに如似す』。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『乞食比丘、前んで食を取るべからず。若し是れ女人の、若しは病あり、若しは姙娠し、若しは兒を抱く、若し天雨あり、若しは兩手に物を捉る、若しは地に泥水あり、比丘を喚ぶ、比丘疑ひて敢て前んで取らず。佛言はく、『喚ばゞ往くべし』。乞食比丘、飯・乾飯・麨・魚肉を得、幷びに一處に著く。餘の比丘見て之を惡む。佛言はく、『爾すべからず、一處に雜著するに、若し是れ一鉢ならば、應さに物を以て隔つべし、若しは樹葉・皮、若しは鍵鎡なり。若し次鉢、若し小鉢ならば、麨は手中に裹むべし』。彼の乞食比

愧懼し、即ち疾々に屋より還り出づ。比丘適ま出づるに、其の夫便ち屋に入る。其の婦の、露形仰臥し、不淨の身を汚すを見、見已りて是くの如きの念を作す。「我が婦露形にして仰臥し、不淨身を汚す、彼の比丘屋より疾々にして出づ、必ず我が婦を犯す」と。即ち往いて追うて問うて言はく、『汝我が婦を犯して、便ち走るや』。比丘言はく、『居士、是くの如きの言を作すこと莫れ、我等是くの如き事を作すべからず』。居士言はく、『汝我が屋より出づ、云何が作さゞる。彼に即ち比丘を打つ、次いで死す』。時に諸の比丘聞く、中に少欲知足にして頭陀を行じ、學戒を樂み、慚愧を知る者あり、彼の乞食比丘を嫌責す、『云何ぞ乞食比丘、年少にして解せざる所多し、門相を看ずして、乃ち他の女人の眠屋に入る』。時に諸の比丘、世尊の所に往き、頭面に足を禮し、却いて一面に坐し、此の因緣を以て具さに世尊に白す。世尊爾の時、此の因緣を以て比丘僧を集め、乞食比丘を呵責したまふ。『汝の所爲は非なり、威儀に非ず、沙門の法に非ず、淨行に非ず、隨順行に非ず、爲すべからざる所なり、云何ぞ乞食比丘、年少にして解せざる所多く、門相を看ずして、乃ち他の女人の臥屋に入る』。無數の方便を以て呵責し已りて諸の比丘に告げたまふ、『自今已去、[八] 乞食比丘の爲めに法を制す、乞食比丘、應さに是くの如く隨順すべし。若し乞食比丘、村に入りて乞食せんに、淸旦に手を淨洗し、衣架の邊に至り、一手は衣を擧げ、一手は挽いて取り、舒張抖擻して看、蛇蟲あらしむること勿れ、然る後に腰帶、僧祇支を著け、欝多羅僧も舒張抖擻して看、僧伽梨を疊んで、頭上若しは肩上に著け、鉢を淨洗して洛囊中、若しは手巾裏に著け、若しは鉢嚢に盛り、襯身衣、洗足革屣、氈被を擧げ、道路行革屣を取る。彼れ應さに戶鑰を持つて房を出で去り、戶を閉ぢて推し看るべし。若し堅牢ならざれば、應さに更に安居すべし。若し堅牢ならば、應さに繩を推して內に著け、然る後に四顧して看るべし。若し人の見るなければ、戶鉤を藏擧し、若し人の見るあらば、不堅牢なるも持ち去るべし、若しは更に堅牢處に著く。道に在りて行く、應さに常に善法を思惟すべし。若し

【八】 乞食比丘法。

草を用ふるに抖擻せず、厠草に糞を著けて便ち棄つ。餘の比丘見て之を惡む。佛言はく、『爾すべからず』。彼れ已用未用の厠草を以て、一處に雜ゆ、取る時手を汚す。佛言はく、『應さに別處にすべし』。彼れ厠草を用ひ已りて、便ち起ちて形露はる。佛言はく、『爾すべからず、應さに徐ろに起ちて、漸く衣を下すべし』。彼れ洗處に至り、應さに彈指して、彼の若しは人、若しは非人をして知らしむべし。彼れ洗處に至らば、應さに先づ看るべし、若し蛇、百足の毒蟲あらば、應さに驅出すべし』。彼れ先づ衣を褰げて後に蹲し、形露はる。佛言はく、『爾すべからず』。彼れ水器の中に就いて洗ふ。餘の比丘尼を惡む。佛言はく・『爾すべからず』。彼れ水を用ひて洗ふ時聲あり、餘の比丘聞いて之を惡む。佛言はく、『爾すべからず』。彼れ水を用ひて盡く。佛言はく、『爾すべからず、應さに留めて、乃至一人洗ふに足るべし』。彼れ洗ひ已りて、身上の水を却けず、衣を汚し身を汚す。佛言はく、『爾すべからず。應さに水を去るべし、若しは手を以て、若しは葉を以て、若しは弊物にて拭へ。若し手臭ければ、應さに洗ふべし、若しは鹵土、若しは灰、若しは泥、若しは牛を以てすべし。若し故臭ければ、應さに石を以て揩し、若しは土緊、若し澡豆を以てすべし』。彼れ下衣せずして便ち起ち、形露はる、佛言はく、『爾すべからず、應さに漸く衣を下して起つべし。彼れ洗器を見るに、空しくして水を著けず。佛言はく、『見る者便ち水を着くべし』。彼れ厠前にありて、經を受け、經を誦し、經行し、作衣す、餘の比丘の大小便を妨ぐ。佛言はく、『爾すべからず』。彼れ厠邊に在りて、誦經・受經・經行・作衣す、餘の比丘見て之を惡む。佛言はく。『爾すべからず』。彼れ厠に上りて、糞掃あるを見て除かず。佛言はく、『見る者は除くべし。我れ今諸の比丘の爲めに、大小便法を說く、諸の比丘應さに隨順すべし、若し隨順せざれば、應さに法の如く治すべし』。

爾時世尊舍衛國に在しき。異の乞食比丘あり、年少にして解せざる所多し、門相を看ずして便ち入る。女人あり、屋中に眠る。其の女人露形にして仰眠し、不淨出でゝ女根を汚す。彼の比丘見て

る所なり。汝云何ぞ婆羅門出家比丘、多く汚れを惡み、自ら大便を惡み、利廁草を用ひて身を傷り、膿血出で、身を汚し衣を汚し、臥具を汚し、床を汚すや』。無數の方便を以て呵責し已りて、諸の比丘に告げたまはく、『自今已去、比丘の爲めに便廁法[六]を制す、諸の比丘、應さに此の法に隨順すべし、應さに是くの如く隨順すべし。久しく大小便を忍ぶべからず。若し去る時は、廁草を捉る。』彼の下座、上座の前に至りて去る、或は並び語り、並び行く、或は前に在り、後に在り、衣を反抄し、或は纒頸し、或は裹頭し、或は革屣を著く』。佛言はく『爾すべからず。若し前に在りて去る者は、前に在ることを聽す、彼れ廁外に至りて、應さに彈指し、若しは謦咳すべし、若し人非人あらば知らしむ』。彼れ廁坊裏に至らば、若しは杙、若しは龍牙杙、若しは衣架、衣屋、若しは水邊、若しは樹、若しは石、若しは草に、應さに衣を安んじて上に著くべし。若し雨漬を畏るれば、應さに無雨處に著くべし。若し風飄雨漬衣は、衣を著くることを聽す。手に堅く捉りて、廁の兩邊に觸れさらしめ、堅く脚を安んじて廁に上り、先づ若し蛇蠍蜈蚣百足あるを看れば驅出す』。彼れ未だ蹲せずして、便ち衣を擧げ形露はる。佛言はく『爾すべからず。應さに並びに蹲して、漸く衣を擧ぐべし、蹲し已りて當さに看るべし、前脚をして兩邊に近づかしめ、大小便をして洟唾をして、廁孔を汚さしむること勿れ』。彼れ高聲に大鳴[七]す、餘の比丘聞いて之を惡む。佛言はく『爾すべからず』。彼の大便の時、覺えず卒鳴し、疑ひあり。佛言はく『不犯なり』。彼れ廁上にありて楊枝を嚼み、若しは眠り、若しは入定す。佛言はく『爾すべからず』。彼れ疑ひて、敢て上水廁中に在りて大小便せず。佛言はく『無犯なり』。彼れ廁草を用ひて身を拭はずして便ち起つ、身を汚し、衣を汚し、坐具を汚す。佛言はく『廁草を用ひて然る後に起つことを聽す』。世尊是くの如きの教あり、廁草を用ふることを聽したまふ、彼れ長廁草を用ふ。佛言はく『長廁草を用ふべからず、極長一搩手』。彼れ叉寄廁草の雜葉を用ひ、若しは樹皮を用ひ、草の牛屎摶を用ふ。佛言はく『爾すべからず、極短長四指』。彼れ廁

【六】便廁法。

【七】大鳴は放屁の大なるもの。

して持ち去るべし』。彼れ器を洗はずして水を過ごす。佛言はく、『應さに淨洗すべし』。彼れ飲み已りて器を洗はず、過ぎて餘人に與ふ、餘の比丘之を惡む。佛言はく、『應さに洗つて然る後に與ふべし』。彼れ水を與ふる時、並びに語る、口中に涕唾あり、水中に墮つ。佛言はく、『並びに語るべからず、若し所語あらば、面を迴らして語るべし』。彼れ器を洗はずして便ち擧ぐ、餘の比丘見て皆之を惡む。佛言はく、『爾すべからず。彼れ應さに問ふべし。「大長老幾歲ぞ」。若し若干歲と言はゞ、應さに語りて言ふべし、此れは是れ房、此れは是れ繩床・木床・褥・枕・氈被・地敷、此れは是れ唾器、此れは是れ小便器、此れは是れ大便處、此れは是れ小便處、此れは是れ淨處、此れは是れ不淨處、此れは是れ佛塔、此れは是れ聲聞塔、此れは是れ第一上座の房、此れは是れ第二、第三、第四上座の房、此れは是れ衆僧大食處・小食處・夜集處・布薩處・僧差食、乃至次ぎに某處に到る、某甲檀越明日僧を請ず、小食大食を與ふ。某甲の家は、僧與めに覆鉢羯磨を作す。某甲の家は、僧與めに學家羯磨を作す。某甲處の狗は惡し。某甲處は好し、某甲處は惡し」。我れ今舊比丘の爲めに法を制す、舊比丘應さに隨順すべし、若し隨順せざれば、應さに法の如く治すべし』。

　爾の時世尊王舍城に在しき。時に舍衞に婆羅門の出家比丘あり、多く汚れを惡み、自ら大小便を惡み、利廁草を用ひて、身を傷り、瘡を作し、膿血出で、身を汚し、衣を汚し、臥具を汚し、床を汚す。諸の比丘問ふ、『長老何の患ふる所ぞ』。卽ち具さに因緣を說く。時に諸の比丘聞く。中に少欲知足にして頭陀を行じ、學戒を樂しみ、慚愧を知る者あり、婆羅門出家比丘を嫌責して言はく、『云何が多く汚れを惡み、自ら大便を惡み、利廁草を用ひて身を傷り、膿血出でゝ身を汚し、衣を汚し、臥具を汚し、床を汚すや』。諸の比丘、世尊の所に往き、頭面に足を禮し、却いて一面に坐し、此の事を以て具さに世尊に白す。世尊爾の時、此の因緣を以て比丘僧を集め、彼の比丘を呵責して言はく、『汝の所爲は非なり、威儀に非ず、沙門の法に非ず、淨行に非ず、隨順行に非ず、爲すべからざ

器を具すべし。應さに問ふべし、何處か大行處、何處か小行處、何處か淨地、何處か不淨地、何者か佛塔、何者か聲聞塔、何者か是れ第一上座の房、何者か是れ第二、第三、第四上座の房なる。彼れ先づ應さに佛塔を禮し、復聲聞塔を禮し、四上座次に隨つて禮すべし』。彼れ捉膝禮す『捉膝禮すべからず』。彼れ反抄衣し、纒頭し、裹頭し、通肩に衣を披、革屣を着けて禮を作す。佛言はく『一切爾すべからず。自今已去、偏へて右肩を露はし、革屣を脱し、右膝地に着け、兩脚を捉りて、是くの如く言す。「大德、我禮す。」若し四上座房内に在りて思惟せんには、應さに坐次に隨つて房を禮すべし。彼れ應さに問ふべし「。何處か是れ衆僧大食の處、小食の處、夜集の處、說戒の處、何者か是れ僧差食・檀越送食・月八日食・十五日食・月初日食・檀越請食なる、次ぎに何處に至る」。復問ふ「明日は、何の檀越請、衆僧の小食大食ありや、何の檀越あり、僧爲めに覆鉢を作すや、誰が家は是れ學家ぞ。何處の狗か惡しき、何處は是れ好人、何處は是れ惡人ぞ」。自今已去、我れ客比丘の爲めに法を制す、客比丘應さに隨順すべし、若し隨順せざれば、應さに法の如く治すべし。自今已去、舊比丘の爲めに法を制す、舊比丘應さに隨順すべし。應さに是くの如きの隨順を作すべし。舊比丘、客比丘の來るありと聞かば、應さに外に出でゝ迎へ、爲めに衣鉢を捉るべし。若し溫室重閣經行處あらば、中に安置し、客比丘に坐を與へ、洗足水・水器・拭足巾を與へ、爲めに革屣を捉りて左面に著け、泥水をして汚さしむること莫れ。若し泥水汚さば、應さに餘處に移著すべし。彼れ客比丘の爲めに洗足已れば、應さに還りて洗足具を收め、本處に還すべし。應さに問ふべし、長老、水を飮まんと欲するや不や。若し飮むと言はゞ、彼れ應さに瓶を持ちて、爲めに水を取るべし。彼れ手を洗はずして瓶を特つ、餘の比丘之を惡む、應さに兩臂にて瓶を抱くべし。若し衣角を以て耳に鉤し、水邊に至りて手を淨洗せんに、若し是れ池水流水は、應さに手にて上を撥除し、下の淨水を取るべし』。彼れ水を擔んで日中に行く、水熱す。佛言はく『應さに若しは草、若しは樹葉を以て覆ひ、蔭を作

問うて言ふべし『我れは若干歳なり、許の如きの房ありや不や』。答へて言はく『有り。復應さに問ふべし、此の房に人の住するありや、人の住するなきや。若し人の住するなしと言はゞ、應さに問ふべし、臥具ありや無しや。若し有りと言はゞ、應さに問ふべし、被ありや被なきや。若し有りと言はゞ、應さに問ふべし、利ありや利なきや。若し利ありと言はゞ、應さに問ふべし、器物ありや器物なきや。若し有りと言はゞ、復問ふ、房衣ありや房衣なきや。若し有りと言はゞ、復應さに問ふべし、福饒ありや福饒なきや。若し有りと言はゞ、若し取らんと欲せば、應さに語りて言ふべし、我れ當さに取るべし。彼れ應さに房所に至り、戸を排すべし。若し鬪ありて閉ぢんには、應さに開くべし。彼れ戸を開き已りて、手に戸の兩頰を捉り、頭を內れて房中を看、蛇、諸毒蟲あらしむる勿れ、若し有らば、應さに驅出すべし。彼れ戸に入りて、床褥臥具枕を出し、地敷氈被は、若しは木上、若しは板上なり。地敷は應さに表裏を識るべし。房を淨掃し、糞土を除き、應さに先づ可棄處を看て便ち棄つべし。若し針線刀子、若しは衣架、若し壁、破壞し若しは鼠孔あらば、應さに泥にて便ち泥すべし。若し地平ならざれば、應さに平治すべし、泥漿にて灑塗して淨ならしめ、地敷を取りて抖擻し、曝曬して持つて房に入る。若し先敷好ならずんば、應さに更に好を敷くべし。若し先敷好ならば、還て本の如くに敷く。床の支物を取りて、淨拭治して持つて入る。應さに床を淨掃し、抖擻して持つて房に入り、支上に安着すべし。臥具枕氈被を取り、淨抖擻敷は、繩床の上に着く』。彼の常着衣、不着衣、並びに一處に置き、常所着衣を取り、餘衣亂る。佛言はく『常所着衣は、應さに一處を別つべし』。彼れ鉢囊・革屣囊・針筒・盛油器を以て、並びに一處に着く、餘の比丘之を惡む。佛言はく『爾すべからず、應さに各々別處にすべし。應さに先づ屋內に入りては、戸[五]橝の高下を看、然る後に閉づべし』。彼れ房を出でては、壁の四面に、塵土あることなきや不やを看る『若し有らば、應さに掃灑し除去すべし。應さに机を取りて淨洗すべし。應さに淨水瓶、洗瓶、飲水

【五】橝或は、居に作る、戸牡と解し、動を止む所以と說明されてる、戸を閉ぢて動かぬ様にする戸の棧であらう。

比丘寺内に入らんと欲せば、應さに知るべし、佛塔、若しは聲聞塔、若しは上座あることを。應さに革屣を脱ぎて手提すべし、彼れ革屣を抖擻せず、便ち捉れば手を汚す。佛言はく、『抖擻せずして便ち捉るべからず、應さに抖擻すべし』。世尊既に抖擻せよと言ふ、彼れ便ち樹を着けて抖擻す、樹神嫌責す。『樹を着けて革屣を抖擻すべからず、應さに石を着けて抖擻し、若しは木頭、若しは籬、若しは兩革屣相抖擻すべし。彼れ應さに門中に至り、手に門を排すべし、若し關鑰あらば應さに開くべし、若し開く能はざれば、應さに徐ろに打ちて、内人をして開かしむべし、若し聞かざれば、應さに大に打つべし、若し開かざれば、應さに衣鉢を持ちて、第二比丘に與へて捉らしめ、下籬牆處に至り、牆を踰えて入り、門を開くべし』。時に彼れ塔邊に於て、左を行過す、護塔神瞋る。佛言はく、『左を行過すべからず、應さに右を塔を遶りて過ぐべし。彼れ寺内に至り、若しは杙、若し龍牙杙、若しは衣架、若しは渠水の邊、若しは樹、若しは石、若し草あれば、衣鉢を安んじて上に着け、洗脚處に至りて洗脚し、若し水なければ問うて言はく、「何處に水ある」、彼の言に隨ひ、水ある處に便ち往いて取り、應さに問うて言ふべし、「蟲ありや、蟲なきや」、若し蟲ありと言はゞ、若し是れ大蟲は、水に觸れて去らば、便ち瓶を持つて水を取れ』。彼れ手を洗はずして、瓶を捉りて水を取る、餘の比丘皆之を惡む。佛言はく、『手を洗はずして瓶を捉るべからず。兩臂に瓶腹を抱き、若しは衣角を以て耳を穿つことを聽す。彼れ水所に至り、應さに手を淨洗し、器に盛滿する水にて脚を洗ふべし』。彼れ洗脚の手を以て、便ち水を捉る、餘の比丘見て之を惡む。佛言はく、『爾すべからず、應さに一手にて水を捉り、一手にて脚を洗ふべし。彼れ先きに右脚を洗ひ、後に左脚を洗ふ。佛言はく、應さに先づ左脚を洗ひ、後に右脚を洗ふべし』。彼れ革屣を拭はず、便ち着けて衣を汚す。佛言はく、『拭はずして、便ち着くべからず、應さに拭ひ已りて着くべし』。彼れ漉して脚水を去らず、便ち着く、革屣爛壞す。佛言はく、『爾すべからず、應さに漉して脚水を去りて、革屣を着くべし』。彼れ應さに

さに往くべし、若し往かざれば、法の如く治すべし。三比丘、一比丘尼を喚ばゞ、應さに往くべし、若し往かざれば法の如く治すべし。三比丘、二比丘尼、三比丘尼、若しは僧を喚ばゞ、應さに往くべし、若し往かざれば、法の如く治すべし。僧、一比丘尼を喚ばゞ、應さに往くべし、若し往かざれば、法の如く治すべし。僧、二比丘尼、三比丘尼、若しは僧を喚ばゞ、應さに往くべし、若し往かざれば、法の如く治すべし』。時に六群比丘聞いて、是くの如きの言を作す『我等比丘尼を喚ばんと欲すれば、便ち當さに喚ぶべし、作すあらんと欲すれば、便ち當さに作すべし。何を以ての故に。世尊是くの如き語あり、一比丘、比丘尼を喚ばゞ、應さに往くべし、若し往かざれば法の如く治すべし、乃至僧も亦是くの如し。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『應さに前人に相望むべし、往く可からず、往くべからず』。尼犍度具足し竟る。

[3]法犍度第十八

爾の時世尊、舍衛國に在しき。時に客比丘あり、舊比丘に問はずして、便ち空房に入る、蛇其の上に墮つ。便ち大聲に蛇、蛇と云ふ。邊傍の比丘、聞いて問うて言はく『汝何が故に大聲するや。』即ち爲めに因縁を説く。諸の比丘聞く、其の中に少欲知足にして頭陀を行じ、學戒を樂しみ、慚愧を知るものあり、客比丘を嫌責し已り、世尊の所に往いて、頭面に足を禮して、一面に在りて住す。此の因縁を以て、具さに世尊に白す。世尊爾の時、此の因縁を以て、比丘僧を集め、客比丘を呵責し、『汝の所爲は非なり、威儀に非ず、沙門の法に非ず、淨行に非ず、隨順行に非ず、爲すべからざる所なり、云何が舊比丘に語り知らしめずして、空房の中に入り、蛇其の上に墮つるや、蛇々と言ふ』。無數の方便を以て、呵責し已りて諸の比丘に告ぐ『自今已去、客比丘の爲めに、[4]客比丘を制するの法を聽す、彼の客比丘應さに隨順すべし、客比丘の法、應さに是くの如く隨順を作すべし。「若し客

【三】法犍度第十八。

【四】客比丘法。

孔中に嚮つて看るべからず』。爾の時世尊、王舍城に在しき。時に阿難、大比丘僧五百人と倶なりき、摩竭提に至りて、人間に遊行せり。時に阿難六十の弟子あり、皆是れ年少にして、戒を還捨せんと欲す。時に阿難、王舍城に至る。摩訶迦葉遙に阿難の來るを見、語りて言はく『此の衆失はんと欲す、汝年少にして足るを知らず』。阿難言はく『大德、我頭白髮已に現はる、云何ぞ迦葉の所に於て、猶ほ年少を免れざるや』。迦葉報へて言はく『汝年少比丘と倶にし、善く諸根を閉ぢず、食足るを知らず、初夜後夜勤修すること能はず、遍く諸衆に至りて、但行いて穀をる破、汝の衆當さに失ふべし、汝の年少の比丘足るを知らず』。偷蘭難陀比丘尼、彼れの語を聞いて、瞋恚して喜ばず、是くの如きの言を作す『摩訶迦葉は是れ故外道なり、何が故に數ば阿難を罵りて言はく「是れ年少」と、彼れをして悅ばざらしむるや』。時に摩訶迦葉、阿難に語りて言はく『汝是の比丘尼の、瞋恚して是くの如く、我れを罵ることを作すを看よ。阿難、唯世尊を除きたてまつりて、我れ佛法の外に、更に餘事の尊あることを憶せず』と。阿難言はく『大德、女人の無知に懺悔す』。迦葉再三是くの如く語り、阿難亦再三是くの如く懺悔すと言ふ。夜過ぎ已りて、迦葉淸旦、衣を著け鉢を持ち、王舍城に至りて乞食す。時に偷蘭難陀比丘尼、見て之に唾す。時に諸の比丘尼聞く。中に少欲知足にして頭陀を行じ、學戒を樂み、慚愧を知る者あり、偷蘭難陀を嫌責して言はく『云何が乃ち大德迦葉に唾する。』比丘尼、諸の比丘に白す。比丘、佛に白す。佛爾の時此の事を以て比丘僧を集め、偷蘭難陀比丘尼を呵責して言はく『汝云何が乃ち大德迦葉に唾する』『世尊無數の方便を以て呵責し已り、諸の比丘に告げたまふ『喚び來りて謫罰することを聽す。若し一比丘、一比丘尼を喚ばゞ、應さに往くべし、若し往かざれば、法の如く治すべし。若し一比丘、二比丘尼、三比丘尼、若しは僧を喚ばゞ、應さに往くべし、若し往かざれば、法の如く治すべし。二比丘、一比丘尼を喚ばゞ、應さに往くべし、若し往かざれば、法の如く治すべし。二比丘、二比丘尼、若しは三比丘尼、若しは僧を喚ばゞ、應

尼、華樹下經行處に至る。賊あり、將ひ去りて婬弄す。彼れ疑ひあり、此の因緣を以て佛に白す。佛問うて言はく、『難陀、汝樂を覺ゆるや不や』。答へて言はく、『熱鐵を體に入るゝに如以す』。佛言はく『無犯なり』。比丘尼、獨り是くの如き理行處に至るべからず』。爾の時蓮華色比丘尼、阿蘭若處に經行す。此の比丘尼顏貌端正なり、年少婆羅門あり、見て繫心して彼れに在り、即ち捉へて犯さんと欲す。比丘尼言はく、『我れに於て當さに某處に往くべし』と、彼れ即ち放つ。蓮華色比丘尼彼處に至る、即ち屎を以て身に塗る、彼の婆羅門、瞋りて石を以て頭を打つ、兩眼脫出す。蓮華色憶せず、神足あり、後に乃ち知る、即ち神足力を以て、飛んで佛所に往き、頭面に足を禮し已りて、却いて一面に住す。佛言はく、『此の比丘尼信樂す、眼當さに還復すべし』。即ち言の如く、還復して故の如し、彼の比丘尼疑ひあり。佛言はく、『無犯なり、比丘尼は阿蘭若處に至るべからず』。時に比丘尼、破戒して娠めるあり、懸厠の上に在り、大小便と墮胎して厠中に在り、除糞の人之を見て、譏嫌し罵詈して言はく、『比丘尼は慚愧あることとなし、淨行を修せず、外に自ら稱して言はく、我れ正法を知ると、是くの如き何ぞ正法あらん、云何が墮胎して厠中に在る、賊女婬女に如何して異なることなし』。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『比丘尼は、懸厠上に在りて、大小便すべからず』。彼の比丘尼疑ひあり、敢て水上厠に在りて、大小便せず。佛言はく、『聽す』と。時に比丘尼結跏趺坐す、血不淨出づ、脚跟指奇間を汚す。乞食を行ずる時、蟲草、脚に著く。諸の居士見て皆嗤笑す。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『比丘尼は、結跏趺坐すべからず』。彼れ疑つて、敢て半伽趺坐せず、佛言はく、『半坐を聽す』。爾時世尊、舍彌國に在しき。六群比丘尼あり、白衣家の內に在り、孔中に嚮つて看る。時に諸の居士、見已りて共に譏嫌して言はく、『比丘尼は慚愧あることとなし、外に自ら稱して言はく、我れ正法を知ると、是くの如きは、何ぞ正法あらん、云何が他家に在りて、孔中に嚮つて看るや、賊女、婬女に如何して異ならず』。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『比丘尼は、白衣の家に在りて、

解かんことを乞ふ、若し僧時到らば僧忍聽せよ、僧今爲めに不禮羯磨を解く、白すること是くの如し』。「大姉僧聽け、此の迦留陀夷、比丘尼僧爲めに不禮羯磨を作す、比丘尼僧に隨順して、敢て違逆せず、比丘尼僧に從つて、不禮羯磨を解かんことを忍する者は默せよ、誰か忍せざる者は說け」。僧已に忍し、迦留陀夷の爲めに、不禮羯磨を解き竟る。僧忍して默然するが故に、是の事是くの如く持つ』。時に六群比丘、比丘尼の住處に至る、六群比丘尼と共に共住し、更る相調弄し、或は共に唄ひ、或は共に哭し、或は共に戲笑し、諸の坐禪の比丘尼を亂す。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『彼れを遮することを聽す』。一切遮して比丘尼住處に入ることを聽さず。佛言はく、『一切遮すべからず、應さに亂鬧處に隨つて遮すべし。若し都べて住處を亂さば、應さに一切遮すべし』。時に六群比丘尼、比丘僧の住處に來至し、六群比丘と共に、更る相調弄し、或は共に唄ひ、或は共に哭し、或は共に戲笑す。佛に白す。佛言はく、『彼れを遮することを聽す』。便ち一切遮す。佛言はく、『一切遮すべからず、應さに亂鬧處に隨つて遮すべし。若し都べて住處を亂さば、應さに一切遮すべし』。時に六群比丘沙彌、比丘尼の住處に來至し、六群比丘尼、式叉摩那と共に、共に住して更る相調弄し、或は共に唄ひ、或は共に哭し、共に戲笑し、諸の坐禪の比丘尼を亂す。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『喚び來りて謫罸することを聽す。若し改めざれば、應さに彼の沙彌、和尚、阿闍梨の爲めに、不禮羯磨を作すべし』。時に六群比丘尼沙彌尼式叉摩那、寺内に來至し、六群比丘沙彌と共に共住し、更る相調弄し、或は共に唄ひ、共に哭し、或は共に戲笑して、諸の坐禪の比丘を亂す。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『應さに喚び來りて謫罸すべし、若し改めざれば、應さに沙彌尼、和尚、阿闍梨の爲めに、捨教授羯磨を作すべし』。時に比丘尼の住處を去ること遠からず、渠流ありて通水す。比丘尼、道を以て、下る在り、流れを承けて樂を覺ゆ。疑ひあり、諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『波羅夷を犯さず、偷蘭遮を犯す、比丘尼、道を以て水流を承くべからず』。時に難陀比丘

嚴り、孔雀の毛蓋を持つ、豈更に餘事の此れに勝るものあらんや。若しは女人も亦是くの如し。勸喩とは、語りて言はく、「大姉、汝尙年少なり、腋下にてめて毛あり、何ぞ便ち爾かく自ら毀ちて、梵行を修することを爲すを須ひん、如かず、時に及んで五欲自ら樂み、須らく老時を待ちて、乃ち梵行を修すべし』。時に年少の比丘尼、便ち厭離の心を生じて、佛法を樂まず。時に諸の比丘尼聞き、少欲知足にして頭陀を行じ、學戒を樂み、慚愧を知る者あり、迦留陀夷を嫌責して言はく、『云何ぞ比丘尼を打罵し、乃至詭語勸喩するや。時に諸の比丘尼、諸の比丘に白す。諸の比丘、佛に白す。佛爾の時比丘僧を集め、無數の方便を以て迦留陀夷を呵責したまふ、云何ぞ比丘尼を罵打し、乃至詭語勸喩する。時に世尊、無數に方便呵責し已りて、諸の比丘に告げたまはく『比丘尼僧、迦留陀夷の爲めに、不爲禮白二羯磨を作すことを聽す、應さに是くの如く作すべし。衆中應さに羯磨を作すに堪能なるものを差すべし、上の如く是くの如き白を作すべし「大姉僧聽け、此の迦留陀夷、比丘尼を罵打し、乃至詭語勸喩す、若し僧時到らば僧忍聽せよ、迦留陀夷の爲めに、不禮羯磨を作すことを、白すこと是くの如し」。「大姉僧聽け、此の迦留陀夷、比丘尼を罵打し、乃至詭語勸喩す、今僧爲めに不禮羯磨を作す、誰か諸の大姉、僧迦留陀夷の爲めに、不禮羯磨を作すことを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」。僧已に忍し、迦留陀夷の爲めに不禮羯磨を作し竟る、僧忍して默然するが故に、是の事是くの如く持つ』。爾の時迦留陀夷、比丘尼僧に隨順して、敢て違逆せず、比丘尼僧に從つて、不禮羯磨を解かんことを求む。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『若し比丘尼僧に隨順して、敢て違逆せず、比丘尼僧に從つて、不禮羯磨を解かんことを乞はゞ、比丘尼僧、應さに解かんが爲めに、白二羯磨を作すべし、應さに是くの如く解くべし。衆中應さに作羯磨に堪能ふる者を差すべし、上の如く、是くの如く白すべし。「大姉僧聽け、此の迦留陀夷、比丘尼僧爲めに不禮羯磨を作す、比丘尼僧に隨順し、敢て違逆せず、今比丘尼僧に從つて、不禮羯磨を

ある處に在りて、人間に遊行す。時に諸賊伴、見已りて是くの如きの言を作す、『此の比丘尼は、是れ王波斯匿の敬愛する所、我等寧ろ妻りて之を弄すべし』。時に諸居士、見已りて皆共に譏嫌す。『比丘尼は慚愧あることなし、外に自ら稱して言はく、我れ正法を知ると、是くの如き何ぞ正法あらん、云何ぞ乃ち疑惑恐怖ある處に在りて、人間に遊行する、賊女婬女に如似して異なることなし』。諸の比丘、佛に白す。佛言はく『比丘尼、邊國有疑惑恐怖處に在りて、人間に遊行すべからず』。爾の時比丘尼、阿蘭若住處あり、比丘に聚落住處あり、共に貿易せんと欲し、佛に白す。佛言はく、『貿易することを聽す』。時に比丘尼に、阿蘭若住處あり、居士に聚落間住處あり、共に貿易せんと欲し、佛に白す。佛言はく、『淨人をして貿易せしむることを聽す』。爾の時二居士あり、住處を諍ふ。彼の一居士、比丘尼僧に布施し、尼僧即ち受く。彼の一居士即ち譏嫌して言はく、『此の比丘尼慚愧を知らず、多く受けて厭ふことなし、外に自ら稱して言はく、我れ正法を知ると、今如何ぞ正法あらん、他共に諍ふ住處を、而も便ち之を受く、施主は厭ふなしと雖、受者は當さに足るを知るべし』。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『共に諍ふ住處は受くべからず。爾の時摩訶波闍波提比丘尼、王園中に比丘尼の住處あり、中に於て夏安居せんと欲す、畏愼して敢てせず、「世尊敎あり、比丘尼は、阿蘭若處に於て住すべからず」と、然も王園中の比丘尼住處は牢固なり。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『王園中の比丘尼住處を除き、餘の阿蘭若處は住すべからず』。時に比丘尼あり、敎授處に往かず、佛に白す。佛言はく、『應さに往くべし』。時に比丘尼あり、佛法僧事あり、病比丘の所須あり、佛に白す。佛言はく、『與欲し去ることを聽す』。時に迦留陀夷、比丘尼を罵打す、若しは唾、若しは華擲、水灑、若しは麁語、詭語を說き、勸喩す。罵とは、汝の道をして破壞、腐爛燒せしむ、驢と通ずと。打とは、若しは手、若しは杖、若しは石を以てす。麁語とは、二道の若しは好、若しは惡を說く。詭語とは、若しは男子、淨洗浴し、好香を以て身に塗り、鬚髮を梳治し、好華鬘を著け、瓔珞身を

夫出で行いて在らず、餘人の邊に於て娠むことを得たり、彼れ自ら墮胎し已り、往いて常教化の比丘尼に語りて言はく『我が夫行いて在らず、餘人の邊に於て娠むことを得たり、我れ已に墮す、汝、我が爲めに之を棄つべし』。答へて言はく『爾すべし』。彼の比丘尼、即ち一鉢を以て盛り、一鉢は上を覆に、絡囊中に著け、持つて道に在りて行く。時に舍衛の長者、常に是くの如きの願を作す『若し先づ出家人と食せざれば、我れ終に食せず』と、要らず先づ與へて、然る後に食す。彼の長者、清旦事ありて餘處に往かんと欲す、即ち人を遣はして語りて言はく『汝路行街巷に往き、出家人を見ば將ひ來れ』。時に使人教を受け已り、即ち往いて外に出でて求覓す。比丘尼を見て語りて言はく、『阿姨來れ、汝に食を與へん』。比丘尼言はく『止めよ止めよ、便ち爲めに我れを供養し已る』と。彼れ言はく『爾せず、但來れ、我れ當さに食を與ふべし』。比丘尼言はく『止めよ止めよ、須ひず』。彼の使即ち强えて比丘尼を將ひて家內に至る。家內の使人言はく『鉢を過し來れ、汝に食を與へん』。彼の比丘尼言はく『止めよ止めよ、便ち供養を爲し已る』。復言はく『鉢を出せ、當さに汝に食を與ふべし』。彼れ復言はく『須ひず』と。即ち强えて奪つて鉢を取り、鉢中を見れば新墮胎あり、長者見已りて譏嫌して言はく『比丘尼慚愧を知らず、梵行を修せず、外に自ら稱して言はく、我れ正法を知ると、是くの如きは何ぞ正法あらん、自ら墮胎して之を棄つ、賊女婬女に如似して異なることなし』。諸の比丘、佛に白す。佛言く、『白衣の家に死者あらんに、比丘尼は爲めに棄つべからず。若し比丘尼村內に在り、乞食比丘を見ば、應さに鉢を出して之を示すべし』。時に白衣あり、病み來りて比丘尼の住處に至る、須らく瞻視すべし。佛に白す佛。言はく、『方便を作して之を遣はすことを聽す、若し是れ信樂して、佛法僧を讚嘆する者は、比丘尼に隨つて、能く作すべき者は、瞻視せしめよ』。彼れ後命過す、彼の比丘尼、畏愼して敢て棄てず、佛に白す。佛言はく、住處淨の爲めの故に、之を棄つることを聽す』。爾の時王波斯匿、邊國反亂し、人民散亂す。時に六群比丘尼、彼れ疑惑恐怖

と、是くの如き何の正法かあらん、是くの如き處に在りて立ちて住す。婬女に如似す。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『比丘尼は、是くの如き處に在りて立ちて住すべからず』。時に六群比丘尼、牙骨を以て身を揩摩し、光澤を作す、比丘、佛に白す。佛言はく、『爾すべからず』。六群比丘尼、細末藥を以て、身の光澤を揩摩す、佛言はく『爾すべからず』。彼の身毛を摩して卷かしむ、佛言はく、『爾すべからず』。彼れ身毛を剪る、佛言はく、『爾すべからず』。彼の比丘尼、衣を持つて腰に纒ひ、細好ならしめんと欲す。佛言はく、『爾すべからず』。彼の比丘尼、女人の衣を著く、佛言はく、『著くべからず』。彼の比丘尼、男子の衣を著く、佛言はく、『著くべからず。比丘尼には、比丘尼の衣を著くることを聽す』。比丘尼、多衣を以て體に纒ひ、廣好ならしめんと欲す。佛言はく、『爾すべからず』。彼れ好く衣を著けず、身をして現ぜしめんと欲す、佛言はく。『爾すべからず』。彼の腰帶の頭に[一]鳥緝を作す、佛言はく、『爾すべからず』。彼れ蔓陀羅腰[二]帶を作す、佛言はく、『爾すべからず』。彼れ鞞樓腰帶を畜ふ、佛言はく、『畜ふべからず』。彼れ婆腰帶を畜ふ、佛言はく、『畜ふべからず』。彼れ散線帶を腰に繫く、佛言はく、『比丘尼は、編織して帶を作り、腰を遶ること一周するを聽す、若し圓織は、再周することを聽す』。比丘尼、女人の浴處に至りて浴す、時に賊女、婬女あり、比丘尼に語りて言はく、『汝等年少、腋下始めて毛あり、何ぞ便ち梵行を修することを得ん、汝今時に及んで欲樂を行ずべし、後悔するも何ぞ及ばん、老時に梵行を修すべし、是くの如くにして、始終失ふけん』。時に年少の比丘尼聞いて、便ち心に厭離を生じ、佛法を樂まず。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『比丘尼、女人の浴處に在りて浴すべからず』。彼の比丘尼、白衣男子の邊に在りて浴す、諸の居士、見て皆共に譏嫌して言はく、『此の比丘尼慚愧あることなし、梵行を修せず、自ら稱す我れ正法を知ると、云何が白衣男子の邊に在りて浴する、賊女婬女の如く異なることなし、是くの如き、何の正法かある』。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『比丘尼は、白衣男子の邊に在りて浴すべからず』。時に婦女あり、

【一】 鳥緝は、帶の端を鳥の形に結ぶ意味であらう。
【二】 帶の種類を舉ぐるも、詳なることは不明である、要するに、皆裝飾的であるものを斥くるのである、蔓陀羅は、巴利語の(mandala)鞞樓は、(sabala)であらうか。蔓陀羅は結び方であり、鞞樓と婆は、織物の名であり、鞞樓は雜と譯し、雜色の織物であらう。散線帶は、細い紐を幾重にも腰に卷くのであらうか。

卷の第四十九（三分の十三）

比丘尼揵度の下

爾の時世尊波羅㮈に在しき。時に世穀貴く、人民飢餓して、乞求得難し。諸の比丘尼、食を受け已りて、故食あり、諸の比丘尼是くの如き念を作す、「我等の此の食、比丘に與ふることを得るや不や」。佛言はく、『與ふることを得』。復念ずらく、「比丘の爲めに、食を授くることを得るや不や」。佛言はく、『授くることを得』。『我等の宿食、比丘に與へて、淨とせんや不や』。佛言はく、『淨なり』。時に諸の比丘、食を受け已りて餘食あり、念じて言はく、「我等の此の食、比丘尼に與ふることを得るや不や」。佛言はく、『與ふることを得』。『比丘尼の爲めに、食を授くることを得るや不や』。佛言はく、『授與することを得』。時に宿食あり、念じて言はく、「比丘尼に與へて淨なりや不や」。佛言はく、『淨なり』。爾の時比丘尼、阿練若處に至りて住す。後に異時に、阿練若處に、事の起るあり。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『比丘尼阿練若處に在りて住すべからず』。時に比丘尼あり、白衣家の內に在りて住す、他の夫主あり、婦と共に鳴口し、身體を捫摸し、乳を捉捺す。年少の比丘尼見已りて、便ち佛法を厭離するの心を生ず。諸の比丘尼、諸の比丘に白し、諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『比丘尼の爲めに、別住處を作ることを聽す。彼の比丘尼、便ち別住處に在り、技を作し、他を敎へて作さしむ。佛言はく、『住處に在りて技を作すべからず』。比丘尼、別住處に在り、酒を酤る、佛言はく、『別住處に在りて酒を酤るべからず』。彼の比丘尼、婬女を安んじて住處に在り、佛言はく、『爾すべからず』。彼れ爲めに、香華莊身の具を具す、佛言はく、『爾すべからず』。時に六群比丘尼、巷陌の四衢道頭、市中糞掃聚邊に在りて、立ちて住す、諸の居士見て、皆共に譏嫌し、呵罵して言はく、『此の比丘尼、慚愧あることなく、淨行あることなし、外自ら稱して言はく、我れ正法を知る

佛言はく、『比丘尼は、貯繩床、木床の上の座に在るべからず』。彼の僧伽藍の中に、教授を求め、或は請を受け、或は法を聽く、坐處なし。佛言はく、『若しは石上に坐し、若しは塹上に在り坐し、若しは枕木頭上に在り坐し、若しは草上、樹葉上に坐し、若しは梁上に坐することを聽す』。比丘尼苦を忍ばず、遂に便ち病を得。佛言はく、『應さに比丘尼に語りて言ふべし、「若し能く坐具を愛護せば、便ち坐を與へよ」と』。

四分律卷第四十八

く、『前人に相望めて、坐すべければ便ち坐すべし』。時に諸の比丘尼、比丘と共に道に在り行く。前に在りて行き、或は並び語り、並び行く。或は前に在り、或は後に在り。或は衣を反抄し、或は纏頸し、或は覆頭し、或は通肩に衣を披、或は革屣を著く。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『爾すべからず、應さに偏露右肩にして革屣を脱ぎ、比丘の後に在るべし』。時に諸の比丘尼、佛法僧の事あり、病比丘所須の事ありて、敢て前に在り去らず。佛言はく、比丘に白し已りて、便ち去ることを聽す。彼れに命難あり、梵行難あり、畏愼して敢てせず、問はずして便ち去る。佛言はく『若し是くの如きの難事あらば、若しは問ひ、若し問はずして去るを聽す』。時に比丘尼あり、道に在り行く、比丘を見て道を避けず。佛言はく『道を避くべし』。時に比丘尼あり、道に在りて行く、比丘あるを見て道を避く、天雨ふり、脚跌いて地に倒れ、病を得たり。諸の比丘、佛に白す。佛言く、『是くの如きの因緣あらば、比丘尼小しく身を曲げ、合掌して言ふべし、「大德我れを恕せよ、道迮し」と』。爾の時に檀越あり、二部僧を請ず、先きに比丘尼に食を與へ、後に比丘に食を與ふ。佛に白す。佛言はく『先きに比丘尼僧に食を與ふべからず、先きに比丘僧に與へ、然る後に比丘尼僧に與ふべし』。爾の時檀越二部僧を請ず、彼れ是くの如く念ず『佛に教あり、應さに先きに比丘僧に食を與へ、然る後に比丘尼僧に食を與ふべし』と。彼れ便ち先きに比丘僧に食を與へ竟り、日時已に過ぐ、佛に白す。佛言はく『若し時過ぎんと欲せば、應さに一時に與ふべし』。爾の時居士あり、比丘尼僧を請じ、明日食を與へんと。彼れ夜半に於て、種々の肥善の食を辦具し已り、晨旦往いて時到ると白す。時に諸の比丘尼、淸旦に衣を著け、鉢を持ちて、往いて其の家に詣る。彼此の年歲大小を問ふ頃に、日時便ち過ぐ。諸の比丘、佛に白す。佛言はく『若し時過ぐれば上座の八比丘尼次第に坐し、餘は隨つて坐することを聽す』。時に諸の比丘尼、來りて比丘僧伽藍の中に至る。佛言はく、『床坐を與ふることを聽す』。比丘尼の月水出で、貯縄・床・木床・臥具を汚して起ちて去る。諸の比丘、佛に白す。

一切比丘を呵すべからざるや』。佛言はく、『比丘尼は、一切比丘を呵することを得ず、比丘尼は、比丘を罵るべからず、比丘を呵責することを得ず、若しは破見、破戒、破戒儀を誹謗すべからず、是くの如く呵すべからず。瞿曇彌、若し增上戒・增上心・增上智の學問誦經を持つことを敎ふ、是くの如き事は、應さに呵すべし』。時に諸の比丘尼髮長し、佛言はく、『剃ることを聽す』。若し自ら剃る時に、年少の剃髮師あり、年少の比丘尼の爲めに剃髮す、細滑を覺えて欲意起り、比丘尼を犯さんと欲す。比丘尼便ち高聲して言はく、『爾すること莫れ、爾すること莫れ』。餘の比丘尼聞いて問うて言はく、『何が故に爾すること莫れ、爾すること莫れと高聲するや』。彼れ卽ち具さに爲めに之を說く。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『剃髮の時は、共伴を聽す、若し倶に欲意あらば、剃らしむべからず』。彼れ男子をして、鼻中の毛を除かしむ。佛言はく、『男子をして、鼻中の毛を除かしむべからず』。彼れ男子にして、爪を剪らしむ。佛言はく、『男子をして、爪を剪らしむべからず』。時に比丘尼、白衣家の內に在り、比丘あり來りて乞食す。彼の比丘尼敢て語らず、何を以ての故に、比丘、是れ比丘尼の敎化食と謂はんを恐るればなり。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『主人に語りて、知らしむることを聽す、但し讃歎すること莫れ』。時に比丘尼あり、白衣家の內に在り、比丘ありて來れども起たず。佛に白す。佛言はく、『起つべし。若し比丘尼、一坐食し、若しは餘食法をなして食はず、若しは病あり、若しは足食已らば、是くの如きの語を作すことを聽す。「大德、我れ是くの如きの因緣あり、故に起たず」と』。時に比丘尼あり、白衣の家にて比丘に問はずして便ち坐す。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『比丘尼、白衣の家に在りて、比丘に問はずして便ち坐すべからず』。爾の時六群比丘、淸旦に衣を著け、鉢を持ち、白衣の家に至る。白衣家の內に、常敎化の比丘尼あり、彼れ比丘の來るを見、便ち起ちて問うて言はく、『大德、我れ坐せんや』。比丘言はく、『坐すること莫れ』。彼の比丘尼、欒を習うて久しく立つに堪へず、卽ち地に倒れて病を得。諸の比丘、佛に白す。佛言は

して情多し。佛言はく、『月水不出者に大戒を授くべからず』。彼れ無乳者に大戒を授く、佛言はく、『無乳者に大戒を授くべからず』。彼れ一乳者に大戒を授く、佛言はく、『一乳者に大戒を授くべからず』。彼れ二道爛壞者に大戒を授く、佛言はく、『二道爛壞者に大戒を授くべからず』。彼れ二道爛臭者に大戒を授く、佛言はく、『二道爛臭者に大戒を授くべからず』。時に諸の比丘、一處の聚まりて、共に法毘尼を誦す。諸の比丘尼是くの如きの念を作す、「我等も亦當さに法毘尼を誦すべきや不や」。佛言はく、『誦すべし』。誰の間に受誦せんを知らず。佛言はく、『應さに比丘の間に在りて受誦すべし』。諸の比丘是くの如きの念を作さく、「我等は、比丘尼と偈句を誦すべきや不や」。佛言はく、『誦することを聽す』。前に在りて、彼れをして羞慚せしむ。佛言はく、『比丘の背後に在り、座を敷いて誦すべし、若し十種衣中、一々の衣は、障を作ることを聽す』。時に六群比丘尼、小々の因緣を以て、瞋恚して喜ばず、佛法僧を捨てゝ言はく、『獨り沙門釋子種のみありて、梵行を修すべきにあらず、更に餘の沙門婆羅門あり、我れ今亦彼れに於て梵行を修すべし』。時に諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『若し比丘尼瞋恚して戒を捨つるも、捨戒を成ぜず』。時に六群比丘尼蠱道を作し、他をして作さしむ。佛言はく、『爾すべからず』。六群比丘、六群比丘尼の爲めに羯磨を作す、彼の比丘尼、言教に隨順して、敢て違逆せず、解羯磨を乞ふ、彼れ肯て解かず。時に諸の居士、見已りて是くの如きの言を作す、『彼れ意に隨はざるが故に、便ち是くの如きの語を作す。と』諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『比丘は比丘尼のために羯磨を作すべからず』。時に諸の比丘尼、與めに羯磨を作す。佛言はく、『比丘尼は、比丘尼のために羯磨を作すべからず、若し知らざれば、比丘の邊に羯磨を誦し已りて、然る後に羯磨を作すべし』。爾の時比丘あり、休道せんと欲す、摩訶波闍波提比丘尼、知りて疑ひ敢て與めに說法して呵せず、『世尊に是くの如きの敎あり、比丘尼は比丘を呵することを得ず』と。時に摩訶波闍波提比丘尼、世尊の所に往き、頭面に足を禮し、却いて一面に住し、佛に白して言さく、『比丘尼は、

を禮し、右膝地に着け、合掌して是くの如きの白を作すべし。「大德僧聽け、此の某甲比丘尼は、某甲に從つて、大戒を受くることを求む、此の某甲、今僧に從つて、大戒を受けんことを乞ふ、和尙尼は某甲なり、願はくは僧我れを拔濟せよ、慈愍の故に」。是くの如く、第二第三も說く。比丘僧應さに問ふべし、「彼れの字は何等ぞ、和尙尼は是れ誰ぞ、已に學戒するや未だしや、淸淨なるや不や」。若し答へて、已に學戒して淸淨なりと言はゞ、復應さに伴比丘尼に問ふべし、「已に學戒して淸淨なりや未だしや」。若し答へて、「已に學戒して淸淨なり」と言はゞ、衆中應さに羯磨に堪能なるとのを差し、上の如く應さに白を作すべし。「大德僧聽け、此の某甲比丘尼、和尙尼某甲に從つて、大戒を受けんことを求む、此の某甲、僧に從つて大戒を受けんことを乞ふ、和尙尼は某甲なり、某甲已に學戒淸淨にして、年歲已に滿ち、衣鉢具足す、若し僧時到らば僧忍聽せよ、某甲のために、大戒を受くることを、和尙尼は某甲なり、白すること是くの如し」。「大德僧聽け、此の某甲、和尙尼某甲に從つて、大戒を受けんことを求め、此の某甲、今僧に從つて、大戒を受けんことを乞ふ、和尙尼は某甲なり、某甲已に學戒淸淨にして、年歲已に滿ち、衣鉢具足す、僧今某甲のために、大戒を受けしむ、和尙尼は某甲なり、誰か長老、僧、某甲の與めに大戒を受けしめ、和尙尼は某甲なることを忍するものは默然せよ、誰か忍せざるものは說け」。是れ初羯磨なり、第二第三亦是くの如く說く。僧已に某甲のために大戒を受けしめ、和尙尼は某甲なることを忍し竟る、僧忍して默然するが故に、是の事是くの如く持つ。彼の使、應さに比丘尼寺內に還り、語りて言ふべし。「大妹、汝已に大戒を受け竟る、世尊に是くの如きの敎あり、使を遣はして受戒することを聽す」と』。彼れ便ち小々顏貌を以て、便ち遣使受戒す。佛言はく、『小々の顏貌を以て、便ち遣使受戒すべからず』。彼れ常血出者に大戒を授く、血身を汚し、臥具を汚す。佛言はく、『血出者に大戒を授くべからず』。世尊に是くの如きの敎あり、血出者に大戒を授くべからずと。彼れ便ち月水不出者に大戒を授く、彼れ放逸に

一切如法の敎勅は違逆することを得ず、應さに學問し誦經し、勤めて方便を求め、佛法の中に於て、須陀洹果・斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果を得べし、汝始めて發心出家す、功唐捐ならず、果報斷ぜず、餘の未だ知らざる所は、當さに和尚、阿闍梨に問ふべし』。受戒人をして、前に在りて去らしむ。

爾時白四羯磨して大戒を受くる者、舍夷拘梨の比丘尼を擧す『世尊に是くの如きの言あり、「大戒を受くるに、應さに白四羯磨すべし」、我曹は戒を得たり、汝等は戒を得ず』と。時に摩訶波闍波提比丘尼、之を聞いて心に疑ふ。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『摩訶闍波提比丘尼、及び舍夷の諸比丘尼にも、亦戒を得たり』。爾の時立ちて戒を乞ふ者あり、白衣あり、見て卽ち言はく、『此の中に在りて立つは、男子を求めんと欲するなり』。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『立ちて戒を乞ふべからず、長跪して戒を乞ふべし』。時に蹲して戒を乞ふあり、卽ち地に倒れて形露はる、羞慚して戒を乞ふこと能はず。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『餘の比丘尼、應さに代りて白を爲すべし』。時に舍夷拘梨の諸の比丘尼、將さに大戒を受けんと欲する者、僧伽藍に詣り、道路に賊に遇ひ、比丘尼を毀犯す。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『遣使して受戒を爲すことを聽す。一比丘尼の淸淨無難の者は、僧白二羯磨を作し。作使を差すことを聽す。衆中羯磨に堪能なる者を差し、上の如く是の如きの白を作すべし。「大姉僧聽け、若し僧時到らば、僧忍聽せよ、今僧某甲比丘尼を差して使と作し、某甲比丘尼の爲めに、比丘僧に從つて、大戒を受けんことを乞ふ、白すること是くの如し」。「大姉僧聽け、僧今某甲比丘尼を差して使と作し、某甲比丘尼の爲めに、比丘僧に從つて、大戒を受けんことを乞ふ、誰か諸の大姉、僧某甲比丘尼を差して使と作し、某甲比丘尼の爲めに、比丘僧中に從つて、大戒を受けんことを乞ふを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」。僧已に某甲比丘尼を差して、使と作すことを忍し竟る、僧忍し默然するが故に、是の事是くの如く持つ。獨行にして獲なければ、應さに一二三比丘尼を差して、共に去るべし。受使の比丘尼は、應さに比丘僧中に至り、僧の足

女に非ず、他の重罪を覆藏するが故に。是の中盡形壽犯すことを得ず。「能く持つや不や」、答へて言はく「能くす」と被擧比丘の語に隨ふことを得ず、乃至沙彌なり。若し比丘尼、比丘の僧の爲めに擧せらるゝを知り、如法に、如毘尼に、如佛所教に、威儀を犯して未だ懺悔せず、共住を作さず、便ち彼の比丘に隨順す。諸の比丘尼、此の比丘尼を諫めて言はく、「大姉、彼の比丘、僧の爲めに擧せらる、如法、如毘尼、如佛所教に、威儀を犯して未だ懺悔せず、共住を作さず、彼の比丘の語に隨順すること莫れ」。諸の比丘尼、此の比丘尼を諫むる時、堅持して捨てず、諸の比丘尼應さに乃至三諫すべし、此の事を捨つるが故に。乃至三諫して捨つれば善し、捨てざれば比丘尼に非ず、釋種女に非ず、隨擧を犯す。是の中盡形壽犯すことを得ず、「能く持つや不や」、答へて言はく「能くす」と。

善女人諦かに聽け、如來無所着等正覺[六]四依法を説きたまふ。比丘尼此の出家に依りて、大戒を受く、是れ比丘尼の法なり。是の中盡形壽「能く持つや不や」。答へて言はく「能くす」と。糞掃衣に依りて出家して大戒を受く、是れ比丘尼の法なり、是の中盡形壽「能く持つや不や」、答へて言はく「能くす」と。若し長利檀越の施衣、割截衣を得ば、應さに受くべし。乞食に依りて、出家して大戒を受く、是れ比丘尼の法なり、是の中盡形壽、「能く持つや不や」、答へて言はく、「能くす」と。若し長利を得くる、若し僧の差食、若しは檀越送食・月八日食・十五日食・月初日食、若しくは衆僧常食・檀越淸食應さに受くべし。樹下に依りて坐し、出家して大戒を受くるは、是に比丘尼の法なり、是の中盡形壽「能く持つや不や」。答へて言はく「能くす」と。若し長利の別房、尖頭屋の小房、石室の兩房一戸を受くれば、應さに受くべし。腐爛藥に依りて、出家して大戒と受くるは、是れ比丘尼の法なり、是の中盡形壽「能く持つや不や」、答へて言はく「能くす」と。若し長利の酥・油・蜜・石蜜を得ば、應さに受くべし。汝已に受戒し竟る、白四羯磨如法成就し、處所を得、和尚如法・阿闍梨如法・二部の僧具足す、當さに能く教法を受くべし、應さに勸化して福を作し、塔を作し、佛法僧を供養すべし、和尚、阿闍梨の

【六】四依法。

を教へて斫らしめ、若しは自ら破り、人を教へて破らしめ、若しは燒き、若しは埋め、若しは色を壞するは、比丘尼に非ず、釋種女に非ず、是の中、盡形壽犯すことを得ず、「能く持つや不や」、答へて言はく「能くす」と。衆生の命を斷ずることを得ず、乃至蟻子なり。若し比丘尼、自手にて人命を斷じ、刀を持つて人に授與し、死を教へ、死を讃し、死を勸め、人に非藥を與へ、若し墮胎し、厭禱呪術し、若しは自ら方便を作し、人を教へて作さしむるは、彼れ比丘尼に非ず、釋種女に非ず、是の中盡形壽犯すことを得ず、「能く持つや不や」。答へて言はく「能くす」と。妄語乃至戲笑を作すことを得ず。若し比丘尼、眞實ならず、己有に非ざるに、自ら稱して上人法を得たり、禪を得、解脫、三昧、正受を得、須陀洹果、乃至阿羅漢果を得、天來り、龍來り、鬼神來りて、「我れを供養す」と言はゞ、彼れ比丘尼に非ず、釋種女に非ず、是の中盡形壽犯すことを得ず、「能く持つや不や」、答へて言はく「能くす」と。能相觸れ、乃至畜生と共にすることを得ず。若し比丘尼、染汚心にて、染汚心の男子と身相觸れ、腋已下膝已上、若しは摩し、若しは捺し、逆摩し順摩し、若しは牽き、若しは推し、若しは擧げ、若しは下げ、若は提り、若しは急に捺すは、彼れ比丘尼に非ず、釋種女に非ず、是の中盡形壽犯すことを得ず。「能く持つや不や」、答へて言はく「能くす」と。[五]八事を犯し、乃至畜生と共にすることを得ず。若し比丘尼、染汚心ありて、染汚心の男子と、手を捉り、衣を捉り、屛處に至りて住し、若しは共に屛處に立ちて語り、若しは共に行き、若しは身相近づき、若し共に期す、此の八事を犯すは、彼れ比丘尼に非ず、釋種女に非ず、是の中盡形壽犯すことを得ず、「能く持つや不や」、答へて言はく「能くす」と。他の重罪、乃至突吉羅惡說を覆藏すべからず。若し比丘尼、比丘尼の波羅夷を犯すを知り、自ら擧せず、亦僧に白さず、人に語りて知らしめず、後に異時に於て、此の比丘尼、若しは休道し、若しは滅擯し、若しは遮して僧事を共にせず、若しは外道にに入る。彼れ是くの如きの言を作す、「我れ先きに、此の人の如是如是の罪を犯すを知る」と。彼れ比丘尼に非ず、釋種

【五】八事。

して是くの如きの言を作す、「大德僧聽け、我れ某甲、和尚尼某甲に從ひ、大戒を受けんことを求む、我れ某甲、今僧に從つて、大戒を受けんことを乞ふ、和尚尼は某甲なり、願はくは我れを拔濟せよ、慈愍の故に」。是くの如く第二第三も說く。（此の中の無間、上の問洪の如し。）問ひ已りて、應さに問うて言ふべし、「汝學戒未だしや、汝淸淨なりや不や」。若し答へて、已に學戒淸淨なりと言はゞ、應さに餘の比丘尼に問ふべし。「已に學戒せりや未だしや。淸淨なりや不や」。若し已に學戒淸淨なりと言はゞ、卽ち應さに白を作すべし。「大德僧聽け、此の某甲、和尚尼某甲に從づて、大戒を受けんことを求む、此の某甲、今僧に從つて大戒を受けんことを乞ふ、和尚尼は某甲なり、某甲所說淸淨にして諸の難事なし、年已に滿ち、衣鉢具足し、已に學戒して淸淨なり、若し時到らば僧忍聽せよ、僧今某甲の爲めに大戒を受けしむ、和尚尼某甲なり、白すること是くの如し」。「大德僧聽け、此の某甲、和尚尼某甲に從つて、大戒を受くることを求む、此の某甲、今僧に從つて大戒を受けんことを乞ふ、和尚尼は某甲なり、某甲所說淸淨にして、諸の難事なし、年已に滿ち、衣鉢具足し、已に學戒して淸淨なり、僧今某甲の爲めに大戒を受けしむ、和尚尼は某甲なり、誰か長老、僧某甲のために、大戒を受けしめ、和尚尼は某甲なることを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」。是れ初羯磨なり、第二第三も亦是くの如く說く。僧已に忍して、某甲の爲めに大戒を受けしめ竟る、和尚尼は某甲なり、僧忍して默然するが故に、是の事是くの如く持つ。

善女人諦かに聽け、如來無所著等正覺、[四]八波羅夷法を說きたまふ、若し比丘尼犯す者は、比丘尼に非ず、釋種女に非ず。不淨行を作して、婬欲の法を行ずることを得ず、若し比丘尼、不淨行を作し、婬欲の法を行じ、乃至畜生と共にするは、比丘尼に非ず、釋種女に非ず、汝是の中、盡形壽犯すことを得ず、「能く持つや不や」、答へて言はく「能くす」と。偸盜することを得ず、乃至草葉なり。若し比丘、人の五錢、若しは過五錢を取り、若しは自ら取り、人を敎へて取らしめ、若しは自ら斫り、人

【四】 八波羅夷法。

くの如きの言を白す、「大姉僧聽け、我れ某甲、和尚尼某甲に從つて、大戒を受けんことを求む、我れ某甲、今僧に從つて大戒を受けんことを乞ふ、和尚尼は某甲なり、衆僧我れを拔濟せよ、慈愍の故に」。是くの如く第二、第三も說く。是の中戒師應さに白を作すべし。「大姉僧聽け、此の某甲、和尚尼某甲に從つて大戒を受けんことを求む、此の某甲、今僧に從つて大戒を受けんことを乞ふ、和尚尼は某甲なり、若し僧時到らば、僧忍聽せよ、我れ諸難事を問ふ、白すること是くの如し」。「汝諦かに聽け、今は是れ眞誠の時なり、實語の時なり、我れ今汝に問ふ、有らば當さに有りと言ふべし、無ければ當さに無しと言ふべし、汝の字は何等ぞ、和尚の字は誰ぞ、年二十に滿つるや不や、衣鉢具するや不や、父母若しくは夫主、汝に聽すや不や、汝、人の債を負ふに非るや不や、汝、婢に非るや不や、汝は是れ女人なりや不や、女人に是くの如きの諸病あり、癩・白癩・癰・疽・乾痟・癲狂・二根・二道合道・大小便常漏・大小便涕唾常出なり、汝是くの如きの諸病ありや不や」。答へて言はく、「無し」。應さに白を作すべし。「大姉僧聽け、此の某甲、今和尚尼某甲に從つて、大戒を受けんことを求む、此の某甲、今僧に從つて大戒を受けんことを乞ふ、和尚尼は某甲なり、某甲所說淸淨にして、諸の難事なし、年二十に滿ち、衣鉢具足す、若し僧時到らば、僧忍聽せよ、某甲の爲めに大戒を受けしむることを、和尚は某甲なり、白すること是くの如し」。「大姉僧聽け、此の某甲、和尚尼某甲に從つて、大戒を受くることを求む、此の某甲今衆僧に從つて、大戒を受けんことを乞ふ、和尚尼は某甲なり、某甲所說淸淨にして、諸の難事なし、年二十に滿ち、衣鉢具足す、僧今某甲に大戒を授く、和尚尼は某甲なり、誰か諸の大姉、僧某甲に大戒を授け、和尚尼は某甲なることを忍するものは默然せよ、誰か忍せざるものは說け」。是れ初羯磨竟る、第二第三も亦是くの如く說く。僧已に忍し、某甲の與めに大戒を受けしめ竟る、和尚尼は某甲なり、僧忍して默然するが故に、是の事是くの如く持つ。彼の受戒者、比丘僧と倶に、比丘僧中に至り、僧足を禮し已り、右膝地に著け、合掌

尼の過食の爲めに、自ら食を取りて食するを除く。

應さに和尚を求めて、是くの如きの言を作すべし。「大姉、我れ某甲、今阿姨を求めて和尚と爲す、願はくは阿姨、我が爲めに和尚と作れ、我れ阿姨に依るが故に、大戒を受くることを得」。是くの如く第二第三も說く。和尚應さに答へて言ふべし、「爾るべし」と。若し式叉摩那學戒已り、若しは年二十に滿ち、若しは十二に滿つれば、應さに與めに大戒を受くべし。白四羯磨して、應さに是くの如く戒を與ふべし。受戒人と將に、聞處を離れて見處に著き、是の中に戒師、應さに教授師を差すべし。「大姉僧聽け、此の某甲、和尚尼某甲に從ひ、大戒を受けんことを求む、若し僧時到らば、僧忍聽せよ、某甲を教授師と爲すことを、白すること是くの如し」。教授者は、應さに受戒人の所に至りて、語りて言ふべし。「汝此の安陀會・欝多羅僧・僧伽梨、此の僧竭支・覆肩衣、此れは是れ鉢、此れは是れ汝の衣鉢なりや不や。諦かに聽け、今は是れ眞誠の時なり、我れ今汝に問ふ、有らば卽ち有りと言へ、無ければ當さに無しと答ふべし。汝の字は何等ぞ、和尚の字は誰ぞ、年二十に滿つるや不や、衣鉢具するや不や、父母若しは夫主、爲めに汝に聽すや不や、人の債を負はざるや不や、婢に非ざるや不や、是れ女人なりや不や、女人に是くの如きの諸病あり、癩・白癩・癰・疽・乾痟・癲狂・二根・二道合道・大小便常漏・大小便涕唾常出なり、汝是くの如きの諸病ありや不や」。若し答へて無しと言はゞ、應さに語りて言ふべし、我が向者の所問の如き、僧中にて、亦當さに是くの如く汝に問ふべし、汝當さに是くの如きの答を作すべし。彼の教授師問ひ已りて、應さに還りて僧中に至るべし。常の威儀の如く、舒手して比丘尼に及ぶ處に立ち、應さに白を作すべし、「大姉僧聽け、此の某甲、和尚尼某甲に從ひ、大戒を受けんことを求む、若し僧時到らば僧忍聽せよ、我れ已に教授し竟り、來らしむることを聽す、白すること是くの如し」。彼れ應さに語りて來れと言ふべし。來り已りて應さに爲めに鉢を捉るべし。教へて比丘尼僧の足を禮せしめ、戒師の前に在りて、胡跪合掌して、是

け、如來無所著等正覺、六法を說きたまふ、不淨行を犯して、婬欲の法を行ずることを得ず。若し式叉摩那、婬欲の法を行ずれば式叉摩那にあらず、釋種女にあらず。染汚心の男子と共に、身相摩觸すれば戒を犯す、應さに更に戒を與ふべし、是の中盡形壽犯すことを得ず。若し能く持たば、答へて能くすと言へ。偸盜することを得ず、乃至草葉なり。若し式叉摩那、人の五錢若しは過五錢を取り、若しは自ら取り、人を教へて取らしめ、若しは自ら斫り、人を教へて斫らしめ、若しは自ら破り、人を教へて破らしめ、若しは燒き、若しは埋め、若しは色を壞するは式叉摩那に非ず、釋種女に非ず。若し減五錢を取らば戒を犯す、應さに更に戒を與ふべし、是の中盡形壽犯すことを得ず、若し能くせば、答へて能くすと言ふ。故らに衆生の命を斷ずることを得ず、乃至蟻子なり。若し式叉摩那、故らに自手にて人命を斷じ、刀を求むれば授與し、死を教へ、死を勸め、死を讚し、若しは人に非藥を與へ、若しは人胎を墮し、厭禱呪術し、自ら作し、人に教へて作さしむるは式叉摩那に非ず、釋種女に非ず。若し畜生の不能變化の者の命を斷ずれば戒を犯す、應さに更に戒を與ふべし、是の中盡形壽犯すことを得ず。若し能くせば、答へて能くすと言へ。妄語乃至戲笑することを得ず。若し式叉摩那、眞實ならず、所有なくして、自ら稱して上人法を得たりと言ひ、禪を得たり、解脫を得たり、定を得たり、正受を得たり、須陀洹果乃至阿羅漢果を得たり、天來り、龍來り、鬼神來りて我れを供養すと言はゞ、是れ式叉摩那に非ず、釋種女に非ず。若し衆中に於て、故らに妄語を作さば戒を犯す、應さに更に戒を與ふべし、是の中盡形壽犯すことを得ず。若し能くせば、答へて能くすと言へ。非時食することを得ず。若し式叉摩那非時に食すれば戒を犯す、應さに更に戒を與ふべし、是の中盡形壽犯すことを得ず。若し能くせば、答へて能くすと言ふ。飮酒することを得ず。若し式叉摩那酒を飮めば戒を犯す、應さに更に戒を與ふべし、是の中盡形壽犯すことを得ず、若し能くせば、答へて能くすと言ふ。式叉摩那、[三]一切比丘尼戒の中に於て、應さに學すべし、比丘

【三】受具作法。

彌尼の戒なり、若し能く持たば、答へて能くすと言ふ。盡形壽華鬘を著け、香油を身に塗ることを得ず、是れ沙彌尼の戒なり、若し能く持たば、答へて能くすと言ふ。盡形壽歌舞倡伎することを得ず、亦往いて觀ることを得ず、是れ沙彌尼の戒なり、若し能く持たば、答へて能くすと言ふ。盡形壽高廣大床上に坐することを得ず、是れ沙彌尼の戒なり、若し能く持たは、答へて能くすと言へ。盡形壽非時食することを得ず、是れ沙彌尼の戒なり、若し能く持たば、答へて能くすと言へ。盡形壽生像金銀寶物を捉持することを得ず、是れ沙彌尼の戒なり、若し能く持たば、答へて能くすと言へ。是くの如く沙彌の十戒、盡形壽犯すべからず。童女十八の者は、二年中戒を學し、年二十に滿ちて、比丘尼僧中に大戒を受く。若年十歳の、曾て出適する者は、二年學戒、十二に滿ちて受戒を與ふ、應さに是くの如く與ふべし。二歳學戒の沙彌尼は、應さに比丘僧中に往き、偏へに右肩を露はし、革屣を脱し、比丘尼の僧足を禮し、右膝地に著け、合掌して是くの如きの言を白すべし。「大姉僧聽け、我が某甲沙彌尼、僧に從つて二歳學戒を乞ふ、和尚尼は某甲なり、願はくは僧慈愍の故に、我れに二歳學戒を與へよ」、是くの如く第二第三も說く。應さに沙彌尼と將に、離聞所に往き、見處に著け已り、衆中應さに羯磨を作すに堪能なる者を差すべし、上の如く應さに白を作すべし。「大姉僧聽け、此の某甲沙彌尼、今僧に從つて二歳學戒を乞ふ、和尚尼は某甲なり、若し僧時到らば僧忍聽せよ、某甲沙彌尼に二歳學戒を與ふることを、和尚尼は某甲なり、白すること是くの如し」。「大姉僧聽け、此の某甲沙彌尼、今僧に從つて、二歳學戒を乞ふ、和尚尼は某甲なり、僧今某甲沙彌尼に二歳學戒を與ふ、和尚尼某甲なり、誰か諸大姉忍せよ、僧、沙彌尼某甲に、二歳學戒を與ふることを、和尚尼某甲の者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」。是れ初羯磨なり、是くの如く第二、第三も說く。僧已に忍す、某甲沙彌尼に、二歳學戒を與ふることを、和尚尼某甲竟る。僧忍して默然するが故に、是の事是くの如く持つ。應さに是くの如くにして、[二]六法を與ふべし。某甲諦かに聽

【三】 二歳學戒の六法。

女人佛法に於て出家せされば、佛法當さに久住五百歳なることを得べし』。阿難之を聞いて樂まず、心に悔恨を懷き、憂惱涕泣して涙を流し、前んで佛足を禮し、遶り已りて去る。時に餘の女人の受戒せんと欲する者あり、彼の比丘尼、將に佛所に往き、中道にして賊に遇ふ、賊卽ち將に毀辱戲弄す。諸の比丘尼、諸比丘に語る、諸の比丘佛に白す。佛言はく、『自今已去、彼の比丘尼は、卽ち出家を與へ、大戒を受くることを聽す。應さに是くの如く出家を與ふべし。若し比丘尼寺內に在りて剃髮せんと欲せば、應さに僧に白すべし。若し一一に語りて知らしめ、然る後に剃髮し、應さに是くの如きの白を作すべし。「大姉僧聽け、此の某甲は、某甲に從つて剃髮を求めんと欲す、若し僧、時到らば僧忍聽し、某甲の爲めに剃髮せよ、白すること是くの如し」。應さに是くの如きの白を作し已りて剃髮を爲すべし。若し比丘尼寺內に在りて出家せんと欲せば、若しは僧に白し、若しは一一に語りて知らしめ、應さに是くの如きの白を作すべし。「大姉僧聽け、此の某甲は、某甲に從つて出家を求む、若し僧時到らば、僧忍聽し、某甲に出家を與へよ、白すること是くの如し」。應さに是くの如きの白を作し已りて出家を與ふべし。應さに是くの如く出家を作すべし。出家を敎ふる者は、與めに袈裟を著け已りて、右膝地に著け、合掌して是くの如きの言を作す。「我が阿姨某甲」。佛法僧に歸依す、我れ今佛に隨つて出家す、和尙は某甲、如來無所著等正覺は、是れ我が世尊なり。第二第三亦是くの如く說く。「我が阿姨某甲、佛法僧に歸依し竟る。我れ今佛に從つて出家し已る、和尙は某甲、如來無所著等正覺は、是れ我が世尊なり」。是くの如く第二第三說き已りて、應さに戒を授くべし。盡形壽殺生せず、是れ沙彌尼の戒なり、若し能く持たば、答へ能くすと言ふ。盡形壽偷盜することを得ず、是れ沙彌尼の戒なり、若し能く持たば、答へて能くすと言ふ。盡形壽婬することを得ず、是れ沙彌尼の戒なり、若し能く持たば、答へて能くすと言ふ。盡形壽妄語することを得ず、是れ沙彌尼の戒なり、若し能く持たば、答へて能くすと言ふ。盡形壽飮酒することを得ず、是れ沙

月摩那埵を行ずべし、此の法應さに尊重し、恭敬し、讃嘆すべし、盡形壽過ぐることを得ず。比丘尼は、半月僧に從つて教授を乞へ、此の法應さに尊重し、恭敬し、讃嘆すべし、盡形壽過ぐることを得ず。比丘尼は、無比丘の處に在りて、夏安居すべからず、此の法應さに尊重し、恭敬し、讃嘆すべし、盡形壽過ぐることを得ず。比丘尼僧安居竟らば、應さに比丘僧中に、三事自恣、見聞疑を求むべし、此の法應さに尊重し、恭敬し、讃嘆すべし、盡形壽過ぐることを得ず。是くの如く阿難、我れ今此の八不可過法を說く、若し女人能く行ずる者は、即ち是れ受戒せん、譬へば人あり、大水の上に於て、橋梁を安んじて渡るが如し。是くの如く阿難、我れ今女人の爲めに、此の八不可過法を說く、若し能く行ずる者は、即ち是れ受戒せん』。爾の時阿難、世尊の教を聞き已りて、即ち摩訶波闍波提の所に往いて語りて言はく『女人佛法の中に在りて、出家して大戒を受くることを得、世尊、女人の爲めに、八不可過法を制したまふ、若し能く行ずる者は、即ち是れ受戒せん』と、即ち爲めに八事を說くこと上の如し。摩訶波闍波提言はく『若し世尊、女人の爲めに、此の八不可過法を說きたまはゞ、我れ及び五百の舍夷人、當さに共に頂受すべし。阿難、譬へば男子女人の年少の淨潔の莊嚴の如し、若し人ありて、與に頭を洗沐し、已りて堂上に止まらんに、優鉢羅華鬘・阿希物多華鬘・瞻婆華鬘・蘇曼那華鬘・婆師華鬘を持つて彼れに授與せん。彼れ即ち之を受けて、頭上に繫邕せん。是くの如く阿難、世尊、女人の爲めに八不可過法を說きたまふ、我れ及び五百の舍夷女人、當さに共に頂受すべし』。時に阿難即ち世尊の所に往き、頭面に足を禮し已り、却いて一面に住し、佛に白して言さく『世尊女人の爲めに、八不可過法を說きたまふに、摩訶波闍波提等、聞き已りて頂受す。譬へば男子女人の年少にして、淨潔に莊嚴するが如し、若し人あり、頭を洗沐し已りて、堂上に止まらんに、諸の華鬘を以て彼に授與せば、彼れ即ち兩手に之を受け、頭上に繫邕せん。是くの如く阿難、摩訶波闍波提及び五百の女人受戒することを得』と。佛、阿難に告げたまはく『若し

くの如し』。佛、阿難に告げたまはく、『若し人あり、他によりて佛法僧を信ぜば、此の恩は報じ難し、衣食床臥具醫藥の、能く恩を報ずる所にあらず、我れ出世して摩訶波闍波提をして、佛法僧を信樂せしむるも亦是くの如し』。佛、阿難に語りたまはく、『若し人あり、他に因りて佛法僧に歸依することを得、五戒を受持し、苦を知り、集を知り、盡を知り、道を知り、苦集尼道に於て狐疑あることなく、若し須陀洹果を得て、諸の惡趣を斷じ、決定して正道に入ることを得、生死に七返して便ち苦際を盡す。阿難、是くの如き人は、恩報ずべきこと難し、衣食床臥具醫藥の、能く恩を報ずる所に非ず。我れ出世して、摩訶波闍波提をして、三自歸を受けしめ、乃至決定して正道に入ることを得しむる亦是くの如し』。阿難、佛に白さく、『女人佛法の中に於て、出家受戒し、須陀洹果乃至阿羅漢果を得べきや不や』。佛、阿難に告げたまはく、『得べし』。阿難、佛に白さく、『若し女人、佛法の中に於て、出家して大戒を受くれば、須陀洹果乃至阿羅漢果を得んには、願はくは佛、出家して大戒を受くることを聽したまへ』。佛、阿難に告げたまはく、『今女人の爲めに、[一]八盡形壽不可過法を制す、若し能く行ずれば、卽ち是れ戒を受く。何等をか八なる。百歲の比丘尼と雖、新受戒の比丘を見ば、應さに起ちて迎逆し、禮拜し、與めに淨座を敷き、請うて坐せしむべし。此くの如きの法、應さに尊重し、恭敬し、讃嘆すべし、盡形壽過ぐることを得ず。阿難、比丘尼は、比丘を罵詈し、呵責すべからず、誹謗して、破戒破見破威儀と言ふべからず、此の法應さに尊重し、恭敬し、讃嘆すべし、盡形壽過ぐることを得ず。阿難、比丘尼は、比丘の爲めに、擧を作し、憶念を作し、自言を作すべからず、他の覓罪を遮し、說戒を遮し、自恣を遮すべからず。比丘尼は比丘を呵すべからず、比丘は應さに比丘尼を呵すべし。此の法應さに尊重し、恭敬し、讃嘆すべし、盡形壽過ぐることを得ず。式叉摩那は、學戒已れば、比丘僧に從つて、大戒を受くることを乞へ、此の法應さに尊重し、恭敬し、讃嘆すべし、盡形壽過ぐることを得ず。比丘尼僧殘罪を犯さば、應さに二部僧中に在りて、半

【一】八盡形壽不可過法。

世尊の教を聞き已りて、前んで佛足を禮し、遶り已りて去る。爾の時世尊、釋翅瘦より、千二百五十の弟子と人間に遊行す。拘薩羅國に往き、拘薩羅より還りて、舍衛國祇洹精舍に至る。時に摩訶波闍波提、佛の祇洹精舍に在すと聞き、五百の舍夷女人と俱に、共に剃髮して袈裟を被、舍衛國祇洹精舍に往き、門外に在りて立ち、步涉して脚を破り、塵土身を坌し、涕泣して涙を流す。

爾の時阿難、見已りて卽ち往いて問うて言はく、『瞿曇彌、何が故に舍夷の五百女人と、剃髮して袈裟を被、步涉して脚を破り、塵土身に坌し、此に在りて涕泣し、涙を流して立つや』。彼れ卽ち答へて言はく、『我等女人、佛法の中に於て、出家して大戒を受くることを得ず』。阿難語りて言はく、『且らく止めよ、我れ汝の爲めに、佛所に往いて求請せん』。爾の時阿難、卽ち世尊の所に至り、頭面に足を禮し、却いて一面に住し、佛に白し言さく、『善い哉世尊、願はくは女人の、佛法の中に在りて、出家して大戒を受くることを聽したまへ』。佛、阿難に告げたまはく、『且らく止めよ、女人をして、佛法の中に於て出家し、大戒を受けしめんと欲すること莫れ。何を以ての故に。若し女人、佛法の中に在りて、出家して大戒を受くれば、則ち佛法をして久しからざらしむ。譬へば阿難、長者の家あらんに、男と少女と多からんには、則ち其の家衰微するが如し。是くの如く阿難、若し女人佛法の中に在りて、出家して大戒を受けんには、則ち佛法をして久しからざらしむ。又好稻田の、而かも霜雹を被いて、卽時に破壞せんが如し。是くの如く阿難、若し女人佛法の中に在りて、出家して大戒を受けんには、卽ち佛法をして久しからざらしむ。阿難、佛に白して言さく、『摩訶波闍波提は、佛に於て大恩あり、佛母命過して世尊を乳養し、長大ならしむ』。佛、阿難に語りたまはく、『是くの如し是くの如し、我れに於て大恩あり、我が母命過して、乳養して長大ならしむ、我れ亦摩訶波闍波提に於て大恩あり、若し人他に因りて佛法僧を知るを得ば、此の恩は報じ難し、衣食床臥具醫藥の、能く恩を報ずる所に非ず、我れ出世して、摩訶波闍波提をして、佛法僧を知らしむるも、亦是

法に自言治を與ふと爲す』。優波離復問ふ、『云何が如法自言治なる』。佛言はく、『若し比丘波羅夷を犯し、彼れ擧を作さず、憶念を作さず、彼れ自ら言ふ、「波羅夷を犯す」と。諸の比丘、卽ち爲めに波羅夷罪治を作す。是れを如法に自言治を與ふと爲す。乃至惡說も亦是くの如し。優波離、是の中の比丘波羅夷を犯す、彼れ擧を作し、憶念を作す。彼れ自ら言ふ、「波羅夷を犯す」と『諸の比丘、卽ち與めに波羅夷治を作す。是れを如法に自言治を與ふと爲す。乃至惡說も亦是くの如し。優波離、是れを如法に自言治を與ふと爲す』。

時に比丘あり、餘の比丘に語りて言はく『我れ不淨行を犯す、休道せんと欲す』と。彼の比丘語りて言はく、『宜しく是の時を知るべし』。彼の比丘去る。優波離遠からずして經行す。優波離聞いて彼の比丘の所に至り、問うて言はく『何の論說する所ぞ』。彼れ言はく『我れ不淨行を犯す、休道せんと欲す』。問うて言はく『汝誰の邊に犯す』。答へて言はく『故二と倶にす』。問うて言はく『故二何處に在る』。答へて言はく、「憂禪國に在り』。問うて言はく、『汝彼れに往くや』。答へて言はく『往かず』。『彼れ來るや』。答へて言はく『來らず』。問うて言はく。『汝云何が犯す』。答へて言はく、『我れ夢中に於て犯す』。優波離言はく、『汝去れ、乃至突吉羅をも犯さず』。滅諍犍度具足し竟る。

比丘尼犍度第十七

爾の時世尊、釋翅瘦尼拘律園に在しき。時に摩訶波闍波提、五百の舍夷女人と倶なりき。世尊の所に詣り、頭面に足を禮し、却いて一面に住し、佛に白して言さく、『善い哉世尊、願はくは女人の、佛法の中に於て、出家して道を爲すことを得るを聽したまへ』。佛言はく、『且らく止めよ瞿曇彌、是の言を作すこと莫れ、「女人をして、出家して道を爲さしめんと欲す」と。何を以ての故に。瞿曇彌、若し女人、佛法の中に於て出家して道を爲さば、佛法をして久しからさらしむ。爾時摩訶波闍波提

殘罪治を作す。優波離、是れを非法に自言治を與ふと爲す。乃至自ら言ふ「小惡說を犯す」と、亦是くの如し。優波離、是の中の比丘僧殘を犯さず、彼れ擧を作さず、憶念を作さず、彼の比丘自ら言ふ、「波羅夷を犯すと。「諸の比丘、與めに波羅夷罪治を作す。優波離、是れを非法自言治と爲す。優波離、是の中の比丘、僧殘を犯さず、諸の比丘、擧を作さず、憶念を作さず、彼の比丘自ら言ふ、「僧殘を犯す」と。諸の比丘、與めに僧殘法治を作す、是れを非法に自言治を與ふと爲す。是の中の比丘僧殘を犯さず、自ら言ふ、「波逸提を犯す」と。乃至惡說も亦是くの如し。是の中の比丘、波逸提を犯さず、自ら言ふ、「波羅夷乃至惡說犯す」と、亦是くの如し。是の中の比丘、波羅提提舍尼を犯さず、自ら言ふ、「波羅夷乃至惡說を犯す」と、亦是くの如し。偷蘭遮乃至惡說も亦是くの如し。突吉羅乃至惡說も亦是くの如し。惡說(を犯さず)、自ら波羅夷を犯すと言ふより、還つて惡說に至るも亦是くの如し。優波離、是の中の比丘、波羅夷を犯さず、彼れ擧を作し、憶念を作す、便ち自ら言ふ、「波羅夷を犯す」と、諸の比丘、即ち與めに波羅夷法治を作す。是れを非法に、自言治を作すと爲す、乃至自ら惡說を犯すと言ふ、九句互に頭を作すこと、亦上の如し。優波離、是の中の比丘波羅夷を犯す、彼れ擧を作さず、憶念を作さず、自ら言ふ、「僧殘を犯す」と。諸の比丘、即ち與へて僧殘治を作す。是れを非法自言治と爲す。乃至自ら言ふ「惡說を犯す」と、亦是くの如し。是の中の比丘僧殘と犯す、彼の比丘擧を作さず、憶念を作さず、便ち自ら言ふ、「波羅夷を犯す」と。諸の比丘、即ち與めに波羅夷罪治を作す。是れを非法に自言治を與ふと爲す。是の中の比丘僧殘を犯す、彼の比丘擧を作さず、憶念を作さず、便ち自ら言ふ、「波逸提を犯す」と。諸の比丘、即ち與めに波逸提罪治を作す。是れを非法に自言治を與ふと爲す。乃至自ら言ふ、「惡說を犯す」と。互に頭を作すこと亦是くの如し。優波離、是の中の比丘、波羅夷を犯す、彼の比丘、擧を作し、憶念を作す、便ち言ふ、「僧殘を犯す」と。諸の比丘、即ち與めに僧殘罪治を作す、乃至惡說、互に句を作すこと亦是くの如し。是れを優波離、非

座より起ちて、偏へに右の肩を露はし、右膝地に著け、合掌して是くの如きの言を作す。「諸の長老、我等の此の諍事は、多く衆罪を犯す、沙門の法に非ず、言に齊限なく、出入行來威儀に順はず、若し我等此の事を尋求せんには、恐らくは罪をして深重ならしめん、如法に、如毘尼に、如佛所敎に、諍事滅することを得ず、諸の比丘をして住止安樂ならざらしめん。若し長老忍せば、我れ今諸の長老の爲めに、如草覆地を作して、此の罪を懺悔せん」。第二衆中も亦是くの如く說く。阿難、彼の諸の比丘、應さに白して、如草覆地懺を作すべし。是くの如く白せよ。「大德僧聽け、若し僧時到らば、僧忍聽せよ、僧今此の諍事に、草覆地懺悔を作す、白すること是くの如し」。應さに是くの如きの白を作すべし。已に如草覆地懺悔を作す。阿難、是の一衆の中に、智惠堪能の者あり、座より起ちて、偏へに右の肩を露はし、有膝地に著け、合掌して是くの如きの白を作す。「諸の長老、我れ今此の諸の諍事、已に犯す所の罪、重罪の遮不至白衣家羯磨を除いて、若し諸の長老聽さば、諸の長老及び己れの爲めに、草覆地懺を作さん」。第二衆亦應さに是くの如きの說を作すべし。若し是くの如く諍事滅することを作さば、是れを阿難、犯諍は二滅を以て滅す、現在毘尼と草覆地となり、自言治を用ひずと爲す。現前の義は上の如し。云何が草覆地。罪名罪種を稱說せず、懺悔する者是れなり。若し諍事滅し已りて後、更に發起せば上の如し」。

阿難又問ふ『事諍は幾滅を以て滅するや』。佛言はく『一切の滅を以て滅す、所犯に隨ふ』。爾の時長老優波離、座より起ちて、偏へに右の肩を露はし、右膝地に著け、佛に白して言さく『自言治を作すは、一切如法なりや不や』。佛、優波離に語りたまはく『自言治は、一切如法ならず、是の中の比丘、波羅夷を犯さず、彼れ擧を作さず、憶念を作さず、自ら言ふ「波羅夷を犯す」と、諸の比丘即ち與めに波羅夷罪治を作す。優波離、是れを非法自言治と爲す。優婆離、是の中の比丘、波羅夷を犯さず、彼れ擧を作さず、憶念を作さず、彼れ自ら言ふ「僧殘を犯す」と。諸の比丘、即ち與めに僧

右膝地に著け、合掌して罪名を說き、罪種を說き、是くの如き言を作せ、懺法は上の如し。受懺者は、應さに先づ彼の第二比丘に問ふべし。「若し長老、我れに某甲比丘の懺を受くることを聽さば、我れ當さに受くべし」。彼の第二應さに言ふべし、「爾るべしと」。若し三比丘の邊に在りて懺せんと欲するも、亦是くの如し。若し僧中に在りて懺せんと欲せば、應さに僧中に往き、偏へに右の肩を露はし、革屣を脫ぎ、僧の足を禮し已りて、右膝地に著け、合掌して是くの如きの言を白す、「大德僧聽け、彼の某甲比丘は某甲の罪を犯す、今僧に從つて懺悔す」。是くの如く三たび說く。受懺者應さに白を作し、然る後に彼の懺を受くべし、應さに是くの如きの白を作すべし。「大德僧聽け、彼の某甲比丘、某甲の罪を犯す、今僧に從つて懺悔す、若し僧時到らば、僧忍聽せよ、某甲比丘の懺を受く、白すること是くの如し」。應さに是くの如き白を作し、已りて受懺すべし。受懺者は、應さに語りて言ふべし。「自ら汝の心を責め、厭離を生ずべし」。彼れ應さに答へて言ふべし、「爾り」。若し是くの如くにして、諍事の滅を作さば、是れを阿難、犯諍は二滅を以て滅す、現前毘尼と自言治となり、如草覆地を用ひずと爲す。是の中の現前とは、法と毘尼と、乃至界とは上の如し。是の中云何が自言。罪名を說き、罪種を說き、懺悔する者是れなり。云何が治する。自ら汝の心を責め、厭離の心を生ずとは是れなり。如法に諍事滅し已りて、後更に發起せば上の如し』。阿難又問ふ。『大德、頗し犯諍の二滅を以て滅し、現前毘尼と草覆地となり、自言治を用ひざるありや』。佛言はく、『有り』。又問ふ、『何者か是れなりや』。答へて言はく、『若し比丘諍事あり、是の中の比丘、多く衆罪を犯し、沙門の法に非ず、言に齊限なく、出入行來威儀に順はず。彼れ是くの如きの念を作す。『我等の此の諍事、多く衆罪を犯し、沙門の法に非ず、言に齊限なく、出入行來威儀に順はず、我等若し自ら共に此の事を尋求せんには恐らくは罪をして深重ならしめん、如法に、如毘尼に、如佛所教に諍事滅することを得ず、諸の比丘をして住止安樂ならさらしめん。阿難、彼の一衆の中に、智慧堪能の比丘あり、

言を不淨と非法と別衆なりと、是れを、五の非法に罪處所を與ふと爲す。次ぎに五句の如法あり、上に反す、事是れ更に異なるなきが故に出さず。若し是くの如くにして諍事滅すれば、是れを覓諍は、二滅を以て滅す、現前毘尼と罪處所となり、憶念毘尼と不癡毘尼とを用ひずと爲す。是の中の現前は上の如し。云何が罪處所、彼の比丘の此の罪、與へて擧を作し、憶念を作す者是れなり。彼の比丘、若し諍事如法に滅し已りて、後更に發起すれば、波逸提を得ること上の如し』。

阿難復問ふ『犯諍は幾滅を以て滅する』。佛阿難に告げたまはく『犯諍は三滅を以て滅す、現前毘尼と、自言治と、草覆地となり』。阿難復問ふ『頗し犯諍の、二滅を以て滅す、現前毘尼と自言治となり、草覆地を用ひざるありや』。佛言はく『有り』。問うて言はく『何者か是れなりや』。佛、阿難に告げたまはく『若し比丘罪を犯し、若し一比丘の前に在りて懺せんと欲せば、應さに一清淨比丘の所に至り、偏へに右の肩を露はし、若し上座ならば足を禮し、右膝地に著け、合掌して罪名を說き、罪種を說き、是くの如きの言を作すべし「長老一心に念ず、我が某甲比丘、某甲の罪を犯す、今長老に從つて懺悔す、敢て覆藏せず、懺悔すれば則ち安樂なり、懺悔せざれば安樂ならず、犯すことを憶念して發露す、知りて覆藏せず、長老、我が清淨戒身を憶し、清淨布薩を具せしめたまへ」。是くの如く、第二第三も說く、彼れ應さに語りて言ふべし「自ら汝の心を責め、應さに厭離を生ずべし」。答へて言はく「爾り」。若し是くの如く諍事の滅を作さば、阿難、犯諍は二滅を以て滅す、現前毘尼と自言治なり、如草覆地を用ひずと爲す。是の中の現前とは、法と毘尼とは上の如し。人現前とは、懺悔を受くる者是れなり。是の中云何が自言なりや。罪名を說き、罪種を說くとは、懺悔是れなり。云何が治する、汝の心を責め、厭離を生ぜしむるなり。若し諍事滅し已り、後更に發起すればば波逸提なり。受欲を除き已り、餘は上の如し。若し二比丘の邊に在りて懺悔せんと欲すれば、應さに彼の二清淨比丘の所に至り、偏へに右の肩を露はすべし、若し上座ならば、足を禮し已りて、

門の法に非ず」。諸の比丘言はく、「重罪の波羅夷・僧殘・偸蘭遮を犯す」。諸の比丘即ち問うて言はく、「汝、重罪の波羅夷乃至偸蘭遮を犯すことを憶するや不や」。答へて言はく」、我れ癡狂の時に、多く衆罪を犯す、沙門の法に非ず、是れ我が故作に非ず、是れ癡狂の故のみ、諸の長老、數ば難詰して我に問ふこと莫れ」。而も諸の比丘、故難詰して止まず。彼れ僧に從つて不癡毘尼を乞ふ。僧若し不癡毘尼を與ふれば、是れを非法と爲す。此れは是れ初句、次ぎに第二句亦上に同じ、正さに以て言ふ、我れ衆罪を犯すことを憶す、人の夢中の所作の如きのみ。次ぎに第三句も亦同じ、正さに以て言ふ、我れ衆罪を犯すことを憶す、人の高山より地に墮ち、少片の物を攬るが如し、我れも亦是くの如し。是れを三の非法に不癡毘尼を與ふと爲す。この如法に不癡毘尼を與ふるあり。即ち三句に反するは、是れ如法なり。五の非法に不癡毘尼を與ふるあり。五の如法に不癡毘尼を與ふるとは、上の如し。若し是くの如くにして諍事滅すれば、是れを阿難、覓諍は二滅を以て滅す、現前毘尼・不癡毘尼なり、憶念毘尼・罪處所を用ひずと爲す。是の中現前は上の如し。云何が不癡毘尼、彼の比丘の此の罪、更に擧すべからず、憶念を作すべからざる者是れなり。彼の比丘、如法に諍事滅し已り、後更に發起せば、波逸提を得ること上の如し』。阿難又問ふ、『頗し覓諍の二滅を以て滅し、現前毘尼、罪處所の、憶念毘尼・不癡毘尼を用ひさるありや』。佛言はく、『有り』。問うて言はく、『何者か是れなりや』。『若し比丘論議を好み、外道と論ずる時に切難を得んに、便ち前後の言語相違せん。若し衆僧中に在りて問ふ時に、亦前後の言語相違せん。衆中に故らに妄語す。阿難、僧應さに此の比丘に、罪處所を與ふべし、白四羯磨上の如し。三の非法に、罪處所毘尼を與ふるあり、擧を作さず、憶念を作さず、自言を作さず、是れを三と爲す。復三あり、無犯と、不可懺罪を犯すと、若しは犯罪已りて懺するとなり。復三あり、不擧と非法と別衆、不作憶念と非法と別衆。不作自言と非法と別衆。不犯と非法と別衆、犯不可懺罪と非法と別衆、犯罪已りて懺すると非法と別衆。不現前と非法と別衆なり。復三の如法の罪處所を與ふるあり。即ち上に反す、事更に異ならず、故に是の如法を出さず。是れを三の如法に罪處所を與ふと爲す。四の非法に罪處所を與ふるあり。不現前と不作自

す。諸の比丘亦言はく、「重罪の波羅夷・僧殘・偸蘭遮を犯す」。問うて言はく、「汝、重罪を犯すことを憶するや不や」。答へて言はく、「我れ重罪の波羅夷・僧殘・偸蘭遮を犯すことを憶せず、我れ小罪を犯すことを憶す」、已に如法に懺悔せり、諸の長老、數ば難詰して我れに問ふこと莫れ」。而も諸の比丘、故難詰して止まず。彼れ僧に從つて憶念毘尼を乞ふ。若し僧、憶念毘尼を與ふれば非法なり。是れを三種の非法憶念毘尼を與ふと爲す。三種の如法に憶念毘尼を與ふるあり。即ち上の三句に反するは、是れ如法に憶念毘尼を與ふるなり。五の不如法に憶念毘尼を與ふるあり、不現前・不自言・不清淨・非法・別衆、是れを五の非法に憶念毘尼を與ふと爲す。五の如法に憶念毘尼を與ふるあり、現前・自言・清淨・法・和合、是れを五の如法に憶念毘尼を與ふと爲す。若し是くの如くすれば、諍事滅す。是れを阿難、覓諍は二滅を以て滅す、現前毘尼、憶念毘尼なり、不癡毘尼、罪處所を用ひずと爲す。是の中云何が現前、法と毘尼と人と僧界と上の如し、是の中云何が憶念毘尼。彼の比丘此の罪更に擧すべからず。憶念を作すべからず。若し比丘、如法に諍事滅し已りて、後更に發起すれば、波逸提を得ること上の如し』。

阿難復問ふ『頗し覓諍の二滅を以て滅し、現前毘尼・不癡毘尼は、憶念毘尼・罪處所を用ひざるありや』。佛、阿難に告げたまはく、『有り』。問うて言はく、『何者か是れなりや』。佛、阿難に告げたまはく、『是の中に比丘あり、癲狂心亂して多く衆罪を犯す、後に還りて心を得ん。諸の比丘皆言はく、『汝、重罪の波羅夷・僧殘・偸蘭遮を犯すことを憶するや不や』。彼れ重罪を犯すことを憶せず。答へて言はく、『我れ重罪の波羅夷乃至偸蘭遮を犯さず、我れ癲狂心亂の時、多く衆罪を犯す、此れ故作に非ず、是れ我が癲狂の故のみ、諸の長老、數ば難詰して、我れに問ふこと莫れ』。而も諸の比丘、故難詰して止まず。彼れ是くの如きの念を作す、「我れ當さに云何がすべき」、諸の比丘に白す。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、「僧に、此の比丘に不癡毘尼を與ふることを聽す、白四羯磨上の如し。三の非法に不癡毘尼を與ふるあり、若し比丘、癡ならずして、而も詐りて癡と作し、多く衆罪を犯し、沙

卷の第四十八（三分の十二）

滅諍揵度の二

爾の時阿難、座より起ちて、偏へに右の肩を袒ぎ、右膝を地に著け、合掌して佛に白し言さく、『覓諍は幾滅を以て滅するや』。佛、阿難に告げたまはく、『覓諍は四滅を以て滅す。現前毘尼・憶念毘尼・不癡毘尼・罪處所毘尼なり』。阿難復問ふ、『頗し覓諍の、二滅を以て滅し、不癡毘尼・罪處所毘尼を以て、滅せざるありや』。佛、阿難に告げたまはく、『有り』。又問ふ、『何者か是れなりや』。佛、阿難に告げたまはく、『若し比丘、重罪の波羅夷・僧殘・偸蘭遮を犯さず、而かも諸の比丘語りて言はく、「汝波羅夷・僧殘・偸蘭遮を犯することを憶するや不や」。彼憶せず、卽ち答へて言はく、「我れ波羅夷。乃至偸蘭遮を犯すことを憶せず、長老、數ば難詰して、我れに問ふこと莫れ」。而も彼の比丘、故難詰して止まず。阿難、僧應さに此の比丘に憶念毘尼を與ふべし、白四羯磨すること上の如し。三非法ありて、憶念毘尼を與ふ。若し比丘、重罪の波羅夷・僧殘・偸蘭遮を犯す。諸の比丘言はく、「重罪の波羅夷・僧殘・偸蘭遮を犯す」。彼の比丘語りて言はく、「汝重罪の波羅夷・僧殘・偸蘭遮を犯す」。彼の比丘語りて言はく、「汝重罪の波羅夷、乃至偸蘭遮を犯すや不や」。答へて言はく、「我れ犯すことを憶せず、長老數ば難詰して我れに問ふこと莫れ」。而も彼の比丘・故難詰して止まず。彼れ僧に從つて憶念毘尼を乞ふ、若し僧與めに憶念毘尼を作さば非法なり。若し比丘、重罪の波羅夷・僧殘・偸蘭遮を犯す。諸の比丘亦言はく、「重罪の波羅夷・僧殘・偸蘭遮を犯す」。問うて言はく、「汝重罪の波羅夷、乃至偸蘭遮を犯すを憶するや不や」。答へて言はく、「我れ重罪の波羅夷、乃至偸蘭遮を犯すことを憶念せず、我れ小罪を犯すことを憶す、當さに如法に懺悔すべし、諸の長老數は難詰して、我れに問ふこと莫れ」。而も諸の比丘、故難詰して止まず。彼れ僧に從つて憶念毘尼を乞ふ、僧若し憶念毘尼を與ふれば非法なり。若し比丘、重罪の波羅夷・僧殘・偸蘭遮を犯

巻の第五十四（四分の五）……一四八
集法毘尼五百人……〔一三七六—一三八四〕……一四八
七百集法毘尼……〔一三八四—一三九三〕……一五六
巻の第五十五（四分の六）……一六六
調部の一……〔一二九四—一三一六〕……一六六
巻の第五十六（四分の七）……一八九
調部の二……〔一三一七—一三四二〕……一八九
巻の第五十七（四分の八）……二一四
調部の三……〔一三四二—一三五四〕……二一四
毘尼増一の一……〔一三五四—一三六五〕……二二六
巻の第五十八（四分の九）……二三八
毘尼増一の二……〔一三六六—一三八九〕……二三八
巻の第五十九（四分の十）……二六三
毘尼増一の三……〔一三九〇—一四〇五〕……二六三
巻の第六十（分四の十一）……二八二
毘尼増一の四……〔一四〇六—一四二五〕……二八二

目次

（本丁）　（通頁）

四分律（自第四十八巻至第六十巻）……（一一二九—一四二五）……一

卷の第四十八（三分の十二）……一

滅諍犍度の二……（一一二九—一一三六）……一

比丘尼犍度第十七……（一一三六—一一五三）……八

卷の第四十九（三分の十三）……九

比丘尼犍度の下……（一一五四—一一六二）……二六

法犍度第十八（三分の十四）……（一一六二—一一八一）……三四

卷の第五十（四分の一）……五四

房舎犍度の初……（一一八二—一二〇五）……五四

卷の第五十一（四分の二）……七八

房舎犍度の餘……（一二〇六—一二二四）……七八

雜犍度の一……（一二二九—一二三七）……八一

卷の第五十二（四分の三）……一〇〇

雜犍度の二……（一二三八—一二五二）……一〇〇

卷の第五十三（四分の四）……一二五

雜犍度の三……（一二五二—一二七五）……一二五

律部四

境野黄洋譯

國譯一切經

大東出版社藏版